羽曳野市内遺跡調査報告書－平成22年度－

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書　72

2013

羽曳野市教育委員会

羽曳野市内遺跡調査報告書－平成22年度－

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書　72

2013

羽曳野市教育委員会

序

大阪府の東南部に位置する羽曳野市は、金剛、葛城の山並みを仰ぎ、石川がゆるやかに流れる、水と緑に恵まれた自然豊かなところです。このような自然環境は太古の昔から人々の暮らしや文化を育み、数多くの歴史的遺産として今日に受け継がれています。本市ではこれら豊かな自然や歴史的遺産を活かし、「人と時をつなぐ　安心・健康　躍動都市　はびきの」を市の将来像と定め、まちづくりを進めています。

本書では、平成22年度の原因者事業における発掘調査の成果を報告します。古市遺跡では、中世の鍛冶関連遺物、古墳時代の子持ち勾玉が出土しました。中世の遺跡として周知されていた郡戸東遺跡からは古墳時代中期の遺物が出土し５世紀から生活が営まれていたことがわかりました。また、西浦十二遺跡、尺度満山散布地が新たに発見されました。

調査の実施にあたり、土地所有者をはじめとする関係者の方々、関係機関のご協力を賜りましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも本市がすすめる文化財行政に一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成２５年３月

羽曳野市教育委員会

教育長　藤田　博誠

例　　言

1．本書は、平成22年度に羽曳野市教育委員会が計画、実施した羽曳野市内における発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、本市教育委員会　社会教育課　世界遺産登録準備室　参事　吉澤則男　　課長代理武村英治、係長　河内一浩を担当者として、平成22年４月１日に着手し平成23年３月31日まで実施した調査の報告を掲載した。

3．調査の実施及び本書の作成にあたっては次の方々の参加を得た。（敬称略・順不同）

（調査員）河野詠子・野田宏美

（補助員）寿村美紗・

（作業員）大屋英子・小林晴美・

4．調査において協力を頂いたのは次の通り。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）申請者及び関係諸氏・古市小学校・羽曳野中学校・大阪府教育委員会・河上邦彦・山本彰・宮野淳一・三好孝一・菊井佳弥・浜口和弘・藤田徹也・上田睦・十河良和

5．土層・遺物の色調については、『新版標準土色帖』（1987年版　農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色調監修）を使用し、肉眼による観察である。

6．方位は基本的に座標北を使用したが、一部磁北（M.N）を示すものがある。レベル高については、T.P（東京湾標準潮位）値による。

7．遺構写真は担当者の手によるが、古市遺跡の遺構写真及び遺物写真は阿南辰秀・伊藤慎司氏にお願いした。

8．遺構名表記を便宜的に行うため、柵・塀・柱列（SA）、建物（SB）、溝（SD）、井戸（SE）、土壙（SK）、柱穴（SP）、素掘り溝（SS）、その他の遺構（SX）に分けた。

9．本書Ⅰ部～Ⅲ部の執筆は本市教育委員会　社会教育課歴史文化推進室　主幹河内一浩が、本書Ⅲ部の執筆は本市教育委員会　社会教育課歴史文化推進室　課長補佐井原　稔が行い、河内が編集した。

目　　次

Ⅰ部　文化財保護年報 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
古市遺跡群発掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
普及・啓発活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
文化財保護審議会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
国指定文化財管理費補助事業他 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
史跡管理 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
緊急雇用創出 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
世界遺産登録推進 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
新規遺跡発見 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
発掘調査一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
試掘調査一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
立会調査一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
市内遺跡分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

Ⅱ部　調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
塚穴古墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
誉田白鳥遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
五十村古墳群 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
尺度遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
平下遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
栄町遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
郡戸東遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
西浦十二遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
尺度満山散布地 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
古市遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
古市遺跡・白鳥神社古墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89

Ⅲ部　資料紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105
寄贈遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
誉田御廟山古墳出土の笠形木製品と蓋形埴輪 ・・・・・・・・・・・・・・ 113

図　　版
抄　　録

挿図目次

図１　杜本神社　隼人石拓本 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
図２　平成22年度新規発見遺跡位置と範囲 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
図３　市内遺跡分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
図４　平成22年度調査成果遺跡地位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図５　塚穴古墳位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
図６　塚穴古墳調査配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
図７　塚穴古墳調査区断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図８　塚穴古墳出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図９　誉田白鳥遺跡調査位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図10　誉田白鳥遺跡調査区配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図11　誉田白鳥遺跡出土埴輪実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図12　五十村古墳群分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
図13　尺度遺跡遺構平面図と土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図14　尺度遺跡出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図15　平下遺跡調査位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
図16　平下遺跡遺物出土地点と遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
図17　栄町遺跡調査位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
図18　栄町遺跡調査区配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図19　栄町遺跡遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
図20　栄町遺跡出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
図21　郡戸東遺跡調査位置と調査区配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
図22　郡戸東遺跡遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
図23　郡戸東遺跡出土遺物実測図（一） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
図24　郡戸東遺跡出土遺物実測図（二） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
図25　西浦十二遺跡調査位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
図26　西浦十二遺跡調査区配置図と土層断面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
図27　西浦十二遺跡出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
図28　尺度地内土器出土地点 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
図29　尺度満山散布地出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
図30　古市遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
図31　古市遺跡調査区配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
図32　古市遺跡調査区断面土層図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・56･57
図33　古市遺跡ＳＤ０２土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
図34　古市遺跡ＳＤ０２変遷図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
図35　古市遺跡上面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
図36　古市遺跡ＳＤ０１・ＳＤ０４土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
図37　古市遺跡下面遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

図38　古市遺跡ＳＤ０２出土鍛冶関連遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
図39　古市遺跡ＳＤ０２出土土師皿分類 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
図40　古市遺跡の出土遺物実測図（ＳＤ０２） ・・・・・・・・・・・・・・・71
図41　古市遺跡ＳＤ０２・ＳＤ０３・ＳＤ０４出土遺物実測図 ・・・・・・・・73
図42　古市遺跡ＳＤ０１出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
図43　古市遺跡整地層内、柱穴出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・77
図44　古市遺跡ＳＤ０５出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
図45　古市遺跡ＳＤ０５出土子持ち勾玉・勾玉・石製模造品実測図 ・・・・・・80
図46　羽曳野市内出土子持ち勾玉 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
図47　古市遺跡出土埴輪実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
図48　古市遺跡出土瓦実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
図49　遺跡内調査位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
図50　調査位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
図51　出土遺物１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
図52　出土遺物２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
図53　出土遺物３ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
図54　出土遺物４ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
図55　出土遺物５ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
図56　出土遺物６ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
図57　出土遺物７ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
図58　出土遺物８ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
図59　出土遺物９ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
図60　出土遺物10 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
図61　善正寺跡周辺遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
図62　寄贈品１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
図63　寄贈品２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
図64　誉田御廟山古墳内濠出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114

表

表１　平成22年度届出件数及び調査件数一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・３
表２　発掘調査一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
表３　試掘調査一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
表４　立会調査一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
表５　郡戸東遺跡柱穴一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
表６　古市遺跡中世跡柱穴一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
表７　古市遺跡古代柱穴一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
表８　子持勾玉出土地名表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82

写真

写真１　ガイドブック『古市古墳群を歩く』とウォーキングマップ ・・・・・5
写真２　五十村古墳群５号墳写真 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
写真３　尺度遺跡遺構検出状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
写真４　尺度満山散布地立会風景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
写真５　古市遺跡包含層遺物出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
写真６　古市遺跡柱穴遺物出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
写真７　城不動坂古墳の盾持ち埴輪 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
写真８　古市遺跡出土形象埴輪 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
写真９　野中寺出土梵字瓦 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
写真10　古市遺跡昭和61年度調査区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88

図版

図版一　　塚穴古墳遺構
図版二　　誉田白鳥遺跡遺物・尺度遺跡遺物
図版三　　栄町遺跡遺構
図版四　　栄町遺跡遺物
図版五　　尺度満山散布地遺物
図版六　　郡戸東遺跡遺構
図版七　　郡戸東遺跡遺物（一）
図版八　　郡戸東遺跡遺物（二）
図版九　　古市遺跡遺構（一）
図版一〇　古市遺跡遺構（二）
図版一一　古市遺跡遺構（三）
図版一二　古市遺跡遺構（四）
図版一三　古市遺跡遺物（一）
図版一四　古市遺跡遺物（二）
図版一五　古市遺跡遺物（三）
図版一六　古市遺跡遺物（四）
図版一七　古市遺跡遺物（五）
図版一八　古市遺跡・白鳥神社古墳　井戸３出土遺物（一）
図版一九　古市遺跡・白鳥神社古墳　井戸３出土遺物（二）
図版二〇　はびき山出土遺物（寄贈品）

Ⅰ部
文化財保護年報

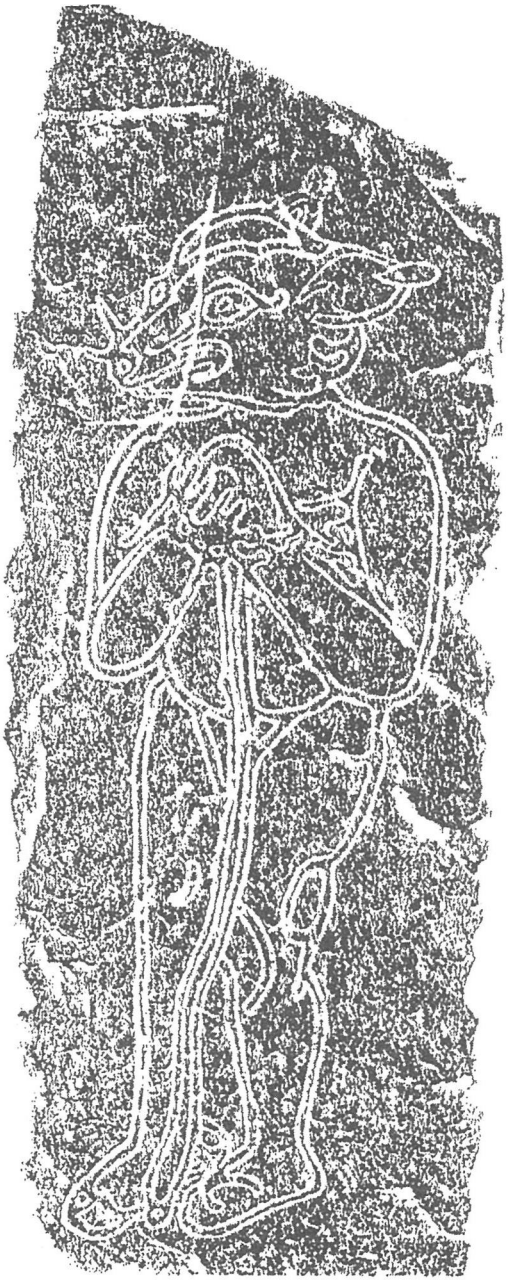


図1　杜本神社　隼人石拓本

平成22年度に実施した羽曳野市教育委員会生涯教育室社会教育課世界遺産登録準備室の事業概要について各項目別に報告する。

【古市遺跡群発掘調査】

本年度おける文化財保護法に基づく発掘届出及び通知と周知の遺跡外における試掘依頼書の受理は、表１の通りの件数があった。これにより各申請者と協議・調整を図り、国庫補助対象事業である個人住宅の建替えに伴う発掘調査を30件行った。この内、平成22年４月１日から平成22年９月30日までの間に実施した調査の成果については『古市遺跡群ＸＸＸⅡ』に報告し、平成22年10月１日から平成23年３月31日までの間に実施した調査の成果については『古市遺跡群ＸＸＸⅢ』に報告した。

『古市遺跡群ＸＸＸⅡ』の報告から特筆できる２件の調査成果を紹介しておこう。

①古市鳥飼遺跡は、本市南古市１丁目で新規発見の遺跡である。溝状の落ち込から中世から弥生時代、縄文時代の遺物が出土した。縄文土器は自然流路より中期中葉から後期前葉の深鉢が確認できた。

②城不動坂古墳では、幅1.8ｍの直線的な周溝の検出により前方後円墳が復元された。今回の調査では前方部の南側周溝にあたり、円筒埴輪が多く出土した。その製作方法から６世紀中ごろに位置づけられる。

『古市遺跡群ＸＸＸⅢ』の報告からも特筆すべき２件の調査成果を紹介しておこう。

①誉田白鳥遺跡では、平成12年度に確認した白鳥２号墳の南西周濠が確認され、円筒埴輪、形象埴輪の出土が報じられている。前回調査で復原した直径16ｍの円墳を裏付けする結果となり、出土した石見型埴輪も前回と異なるタイプの破片を確認した。

②峯ヶ塚古墳では、前方部南西端の確認調査で第12次調査となる。新池より墳丘裾を確認し、周濠埋土から円筒埴輪の出土が報告されている。過去の周濠調査で検出した濠底のレベルより高く地山を削り出しているところから渡り土手の可能性が高い施設とした。

その他の開発行為に伴う発掘調査17件、立会い調査は24件を実施した。また、遺跡範囲外における試掘調査は30件実施した。

なお、調査成果については表２～４の一覧表に提示し、特筆できる誉田白鳥遺跡、郡戸東遺跡、塚穴古墳、尺度遺跡、栄町遺跡、古市遺跡、平下遺跡、五十村古墳群については第２部の報告のとおりである。

表1　平成22年度　届出件数及び調査件数一覧表

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計(件)
発掘届出	発掘調査	6	7	3	3	1	4	4	5	4	2	2	7	48
	(調査)	5	7	3	3	4	0	3	4	0	3	3	7	42
	工事立会	10	19	13	14	14	14	16	5	8	7	8	10	138
	(調査)	4	6	14	5	10	6	6	1	2	1	2	2	59
	慎重工事	10	8	13	11	15	7	11	14	9	5	2	4	109
	小計	26	34	29	28	30	25	31	24	21	14	12	21	295
	(調査)	9	13	17	8	14	6	9	5	2	4	5	9	101
試掘依頼書		5	4	3	5	2	5	4	4	2	3	2	0	39
(調査)		3	3	2	1	3	1	3	3	1	1	0	2	23
合計		31	38	32	33	32	30	35	28	23	17	14	21	334
(調査)		12	16	19	9	17	7	12	8	3	5	5	11	124

【普及・啓発活動】

①出土遺物の公開・展示

陵南の森総合センターに併設されている歴史資料室では、平成21年度に実施した調査の成果展示を実施した。峯ケ塚古墳、城不動坂古墳、塚穴古墳、壺井丸山古墳の出土遺物を中心に調査風景や遺物出土状況の写真パネルの展示にて判り易い展示に努めた。城不動坂古墳の盾持人物埴輪を展示した。

古市遺跡出土の子持勾玉の速報展を９月１日から10月31日まで実施した。市内から４点出土しているが、河原城遺跡出土の子持ち勾玉については所蔵先の大阪府文化財センターから借用し、市内出土の子持ち勾玉が一同に展示することになった。

平成22年９月に新規発見した古市鳥飼遺跡の縄文土器を11月１日から12月26日まで速報展で紹介した。併せて、羽曳野市教育委員会が所蔵している縄文土器も参考資料として展示をおこなった。

②現地説明会

史跡古市古墳群峯ケ塚古墳の前方部南西部の発掘調査成果を平成23年３月５日に公開し、約５００名の見学者の参加があった。公開にあたり参加者には説明会のパンフレットを配布するとともに現地で埴輪などの出土遺物を展示した。

③国登録文化財畑田住宅の公開事業

平成22年５月23日に絵画フォーラムと11月14日に畑田家住宅の一般公開とともに教育フォーラムを実施した。平成23年３月20日に第13回畑田塾を開催した。

④小学校『出張授業』

小学校の歴史授業や総合学習の中で市内から出土した遺物を教室へ持参し、実物の土器や埴輪を直接触れる授業を行った。実施した学校は埴生南小学校、古市小学校、西浦東小学校、高鷲南小学校、古市南小学校の５校である。

⑤中学校『労働体験』

中学生による労働体験の一つとして社会教育課世界遺産登録準備室の作業を経験してもらった。室内では土器の洗浄や接合作業、現場では発掘作業などを行った。

【文化財保護審議会】

平成19年度から継続審議中であった駒ヶ谷所在の杜本神社にある「隼人石」などの石造物が平成22年５月25日、市指定の候補物件として答申された。平成22年９月１日付けで市指定有形文化財に「阿闍梨覚峰関係資料」として指定を受けた。

指定内容は、有形文化財　歴史資料（第１号）９点（子（隼人）画像線刻石1対、日谷稚宮銘石、日谷稚宮祓之旧蹟銘石、永手之墓銘石、伝楠木正成塔、伝清少納言塔、師霊銘石、師霊銘石櫃、付伝清少納言塔供花石、藤原永手銘石、伝楠木正成塔献花石である。

【国指定文化財管理費補助事業・国宝重要文化財等保存整備費補助事業及び文化財保持者助成事業】

①誉田八幡宮と吉村家住宅に対して防災設備の保守点検を実施した。

②市内の文化財保持者（８件－野中寺・西琳寺・長円寺・壺井八幡宮・誉田八幡宮・法泉寺・吉村家住宅・畑田家住宅）への助成、史跡清掃業務等の環境管理を行った。

【史跡管理】

①翠鳥園遺跡公園の管理及び誉田史跡公園（薄田隼人正兼相の墓）の植栽管理。

②国の指定史跡地の維持管理及び除草、清掃。

③史跡誉田白鳥埴輪製作公園の目隠し塀の改修。

【緊急雇用創出】

史跡地等環境適正化整備事業（市内８ケ所の史跡地で樹木の伐採・剪定）・文化財調査成果デジタル化整理事業（過去の調査成果をデータ化して地図システムへ統合）・文化財写真資料デジタル化整理事業（現場写真や報告書作成に供する遺物写真の恒久的な保存とデータベースを作成）及び古墳周辺環境調査事業（古墳周辺の家屋や緑地帯などの土地利用を調査し地図システムに統合）を緊急雇用創出基金事業で実施し、1,953名の雇用創出に努めた。

【世界遺産登録推進】

百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録有識者会議及び百舌鳥・古市古墳群登録推進府市合同会議を開催した。

百舌鳥・古市古墳群が11月22日に国内暫定一覧表に記載された。さらに、本登録に向けて市民の気運を醸成すため、ウォーク等の普及・啓発事業を行った。

藤井寺市との古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議では、古墳群を詳しく解説したガイドブック「古市古墳群を歩く」やウォーキングマップを作成し一層の啓発を図った。

写真1　ガイドブック『古市古墳群を歩く』とウオーキングマップ

【新規遺跡発見】

平成22年度に実施した遺跡範囲外における試掘調査において遺物・遺構の発見があり、遺跡として以下の4遺跡を新規遺跡として周知された。なお、各遺跡の詳細については、古市鳥飼遺跡は『古市遺跡群』ＸＸＸⅡにおいて、西浦十二遺跡と尺度満山散布地の2遺跡は本報告書に掲載した。

なお、羽曳野中学校散布地については、来年度に実施される工事の立会調査時の資料と併せ、平成23年度に報告する予定である。

西浦十ニ遺跡	西浦2丁目1968	(図2－①)
古市鳥飼遺跡	羽曳野市南古市	(図2－②)
羽曳野中学校散布地	伊賀5丁目42	(図2－③)
尺度満山散布地	尺度字満山	(図2－④)

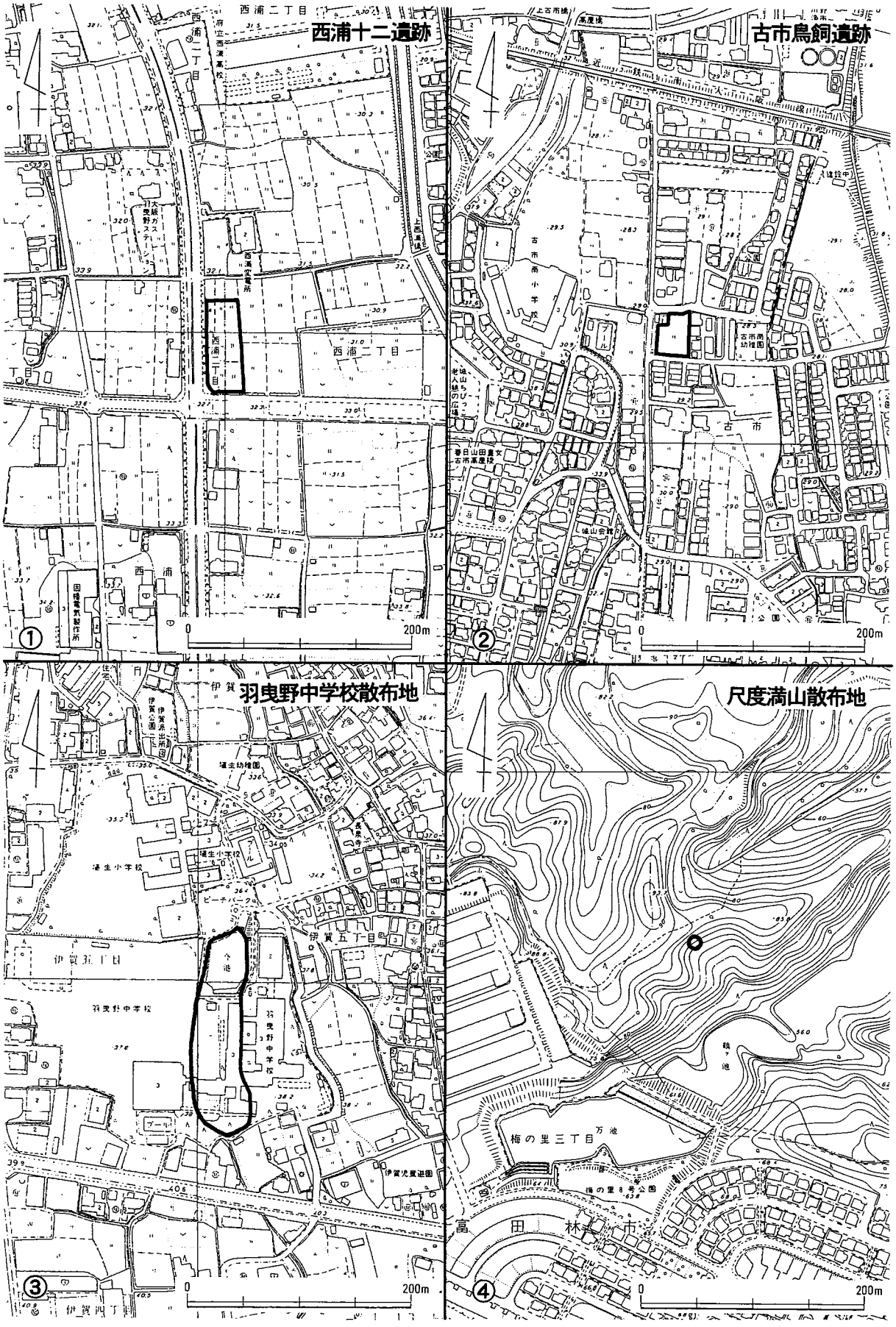


図2　平成22年度新規発見遺跡位置と範囲

発掘調査

表2　発掘調査一覧

通番	遺跡名	調査期間	申請地	申請者	工事の目的	担当者	調査面積	調査概要
1	誉田白鳥遺跡	22.4.30	白鳥3丁目241−1	個人	共同住宅	河内一浩	6	本書掲載
2	郡戸東遺跡	22.6.7〜22.6.9	郡戸339−1の一部、400−7の一部	事業者	宅地造成	河内一浩	86	本書掲載
3	壺井八幡宮境内	22.6.21	壺井字別宮498-2の一部	個人	集会所	河内一浩	8	申請地に横断する形で1m幅のトレンチ設定。現地表面30cmで地山を検出。西寄りで幅約1.5mの溝を確認。溝から瓦器が出土した。東側は包含層、遺構は検出できなかった。
4	郡戸東遺跡	22.7.20	郡戸401−4	事業者	分譲住宅	河内一浩	4.9	申請地内に南北方向の調査区（幅0.8m）を1本設定した。重機により掘削を実施したところ、現地表面下20cmで地山を検出した。遺構・遺物確認されなかった。
5	郡戸東遺跡	22.7.20	郡戸401−9	事業者	分譲住宅	河内一浩	8	申請地に東西の調査区（幅0.8m）を設定し重機で掘り下げる。現地表面下20cmで地山を検出。遺構・遺物は確認できなかった。周辺より20cm低く、造成工事の際に削平されたと思われる。
6	郡戸東遺跡	22.7.20	郡戸401−10	事業者	分譲住宅	河内一浩	5.6	申請地に東西の調査区（幅0.8m）を設定し、重機で掘り下げ。現地表面下20cmで地山を検出した。遺構・遺物は検出されず。周辺より20cm低く、造成工事の際に掘削されたと思われる。
7	恵我之荘遺跡	22.7.22	恵我之荘2丁目47−13	個人	診療所	河内一浩	8	申請地の建物部分に南北方向の調査区（1m×8m）を設定し、重機で基礎深度まで掘り下げた。結果、現地表下0.9mまで宅地造成土であることが判明。基礎は造成土内におさまる。
8	野々上遺跡	22.8.10〜22.8.11	野々上3丁目6−3、−4、7−1、8−7	事業者	店舗	河内一浩	25	基礎部分の多くは既存建物の撹乱で、現地表面下1.1mで黄褐色の地山を確認した。遺構も検出できなかったが、建物部分の調査区では現地表面下0.9mから1mの深さで灰褐色土（土器片）を確認した。
9	恵我之荘遺跡	22.8.23	恵我之荘4丁目45-1、103-1、104、101-1	事業者	宅地造成	吉澤則男	6.4	申請地内に調査区2ヶ所を設定し、重機掘削の後に断面及び平面を人力で精査した。現地表面下約0.5mまでは造成盛土、以下に旧耕作土、青灰色粘質土を挟み、約1m下で黄橙色粘土の地山面となり、遺構及び遺物包含層は認められなかった。
10	塚穴古墳	22.10.5〜22.10.18	はびきの3丁目296−3の一部	宗教法人	宗教施設	河内一浩	50	本書掲載
11	城山遺跡	22.10.22	古市1494、1495−3、−4、−5	個人	共同住宅	河内一浩	2	浄化槽設定範囲に1m×2mの調査区を設け、重機により掘削を実施した。現地表面から50cmまで駐車場の造成盛土で、その下に旧耕土、流路堆積層が観察された。遺物なし。
12	伊賀南遺跡	22.11.4	伊賀4丁目184−1の一部	事業者	店舗	河内一浩	6	建物・浄化槽部分を重機による掘削を実施した。現地表面下1.5mまで駐車場の造成土で、その下に旧耕土（厚さ25cm）を確認した。耕土の下は黄褐色粘質土（地山）であった。
13	尺度遺跡	22.11.24〜22.11.25	西浦1080-1、-3、1083-1、-4	個人	店舗	河内一浩	5	申請建物及びよう壁部分に調査区を計4ケ所を設定、重機で掘削。耕土の下50cmで遺構を検出。耕土下90cmで黄褐色砂質土（地山）を確認。厚さ40cmの褐灰色粘質土から出土遺物なし。
14	蔵之内東遺跡	22.11.12	蔵之内545番	事業者	宅地造成	河内一浩	6	現地表面下40cmで遺物包含層（灰白色砂質土）を確認した。50cm前後で地山に至り、遺構を検出した。
15	栄町遺跡	22.12.7〜22.12.15	栄町691−1	事業者	店舗	河内一浩	58	本書掲載
16	明教寺跡	22.12.13	島泉2丁目266の一部、267	事業者	宅地造成	河内一浩	4.5	道路部分に2ヶ所（1.5m×1.5m）の調査区を設け、重機による掘削。20cmの耕土の下に黄褐色粘質土（50cm）、灰色粘土層を確認したが、地山を検出できなかった。
17	古市遺跡	22.4.19〜22.6.23	古市1丁目2−5	羽曳野市	学校	河内一浩	156	本書掲載

試掘調査

表3　試掘調査一覧

通番	遺跡名	調査期間	申請地	申請者	工事の目的	担当者	調査面積	調査概要
1		22.4.13～22.4.14	尺度383番1	事業者	携帯基地局	河内一浩	4.4	無線塔の基礎掘削の立会を実施した。現地表面3m近く掘り下げたが造成の盛土であった。
2		22.4.14	埴生野1142、1143-2	宗教法人	墓地霊園	河内一浩	100	よう壁の基礎掘削の立会を実施した。旧表土（厚さ15cm）の下は直ぐ地山（黄褐色砂質土）であった。遺構・遺物なし。
3		22.4.19	誉田1772-1、-2、-10、-11	福祉法人	知的障害者施設	河内一浩	12	掘削部分の立会を実施。現地表面下約2mまで造成の盛土であった。工事に支障なし。
4		22.4.23～22.4.27	尺度190-1	個人	店舗	河内一浩	15.8	本書掲載　（尺度遺跡）
5		22.6.24	広瀬292番3の一部	個人	共同住宅	河内一浩	130	基礎掘削に立会。現地表下0.3mまで宅地造成土。
6		22.6.30	碓井3丁目466-1	事業者	電話通信	河内一浩	9	縦坑部分の立会いを実施。現地表面下50cmまで造成盛土。10cmの旧耕土の下には粗砂・シルト層を確認した。石川の分の立会いで現地表面下2.2mまで造成土であることを確認した。
7		22.7.6	樫山167-3及び167-10の一部	個人	共同住宅	河内一浩	17	基礎掘削に立会。現地表下0.4mまで宅地造成土。遺物なし。
8		22.7.29～22.7.30	西浦2丁目1868、1869-1、1870-1、1872-1	事業者	店舗	河内一浩	10	本書掲載　（西浦十二遺跡）
9		22.8.4～22.8.16	野66-2、-5	福祉法人	老人福祉施設	吉澤則男	400	境界擁壁部分の試掘と建物部分掘削後の立会いを実施した。試掘で当該地は阿湯戸池を埋め立てた造成地であることが判明した。建物部分の立会いで現地表面下2.2mまで造成土であることを確認した。
10		22.8.17	西浦1丁目2226番	事業者	店舗	河内一浩	3	申請地の北側寄りに南北トレンチを設定し、重機で掘り下げた。現地表面下1.1mで黄褐色砂質土の地山厚さ20cmの地盤改良の層を確認。基礎は撹乱土の収まる。を検出。地山の上に厚さ20cmの地盤改良の層を確認。基礎は撹乱土の収まる。
11		22.9.1～22.9.10	南古市1丁目1357の一部	事業者	宅地造成	河内一浩	85	開発道路部分に5m×17mの調査区を設定した。調査区東側で弥生時代・古墳時から中世の遺物の堆積層を確認した。南北方向に溝状遺構を検出、弥生土器が出土。調査区西側で縄文土器が落ち込みから出土した。（古市鳥飼遺跡　「古市遺跡群ＸＸＸⅡ」所収）
12		22.9.3	南古市3丁目18-1の一部、19、20、50、及び水路	個人	介護施設	河内一浩	6	施設部分にトレンチ1本設定し基礎掘削深度まで重機で掘削した。20cmの耕作土以下は粘質土と砂との互層で、1.7mまで3層の粘質土を確認した。土壌化層と遺物は確認できなかった。
13		22.10.13	川向85-1	福祉法人	社会福祉施設	河内一浩	40	基礎掘削時に立会いを実施した。現地表面下40cmまで造成盛土であることを確認した。基礎は盛土中におさまる。遺物なし。
14		22.10.15	はびきの4丁目300-13	事業者	宅地造成	河内一浩	80	開発道路部分（幅4m、長さ20m、深さ1m）の掘削時に立会い。表土のしたはすぐ地山（黄褐色粘質土）で、東から西へ傾斜地形。遺物なし。新たな遺跡は確認できなっかた。
15		22.11.2	学園前3丁目167-1、167-3～-6の各一部	学校法人	大学校舎	河内一浩	200	基礎掘削時の立会いを実施した。現地表面下3mまで旧校舎の基礎の撹乱を確認した。その下は黄褐色のシルト質層であった。遺物無し。
16		22.11.5	学園前1丁目1番3号	福祉法人	福祉施設	河内一浩	6	申請建物の北側に1.5m×4mの調査区を設定し、重機で掘削を実施した。現地表面から1.4mまで造成盛土であることを確認。その下は黄褐色砂質土（地山）である。
17		22.11.30	河原城1076-3、-4の各一部	個人	倉庫	河内一浩	16	基礎掘削時の立会を実施した。厚さ20cmの表土（黒褐色土）の下はにぶい黄褐色砂質土（近代瓦・陶器が含む）を確認した。基礎は表土内に納まる。
18		23.1.6	埴生野1026、河原城451	事業者	電柱建柱	河内一浩	4	電柱埋設部分（4ケ所）の立会を実施した。表土直下は黄色砂質土の地山であった。調査範囲での遺構・遺物なし。
19		23.1.6	駒ヶ谷1463	事業者	工場	河内一浩	60	基礎掘削時に立会を実施した。工事予定地は工場造成地の盛土であった。遺構・遺物は確認できなった。
20		23.1.14	誉田5丁目5-5	事業者	店舗	河内一浩	540	舗装工事の立会。現状確認。掘削を伴わないため、支障なし。

通番	遺跡名	調査期間	申請地	申請者	工事の目的	担当者	調査面積	調査概要
21		23.2.1	南恵我之荘4丁目257-11、-12、-13、-14	事業者	宅地造成	河内一浩	6	申請地は盛土によって造成される計画で、掘削深度が深いマンホール部分を掘削したが、埋管はすべて盛土に収まることを確認した。遺構。遺物は確認できなかった。
22		23.2.2～23.2.22	尺度388-1、382-2、-3の一部	事業者	店舗	河内一浩	90	よう壁基礎掘削時に立合い。掘削範囲はすべて造成時の盛土であった。
23		23.2.16	野21-1、20-3	事業者	倉庫	河内一浩	10	基礎掘削工事時に立合いを実施した。現地表面下1.6mまで造成の盛土であった。掘削は、地形から想定される谷地形の堆積層に至らなかった。遺物なし。
24		23.2.22	誉田7丁目834-1	個人	店舗	河内一浩	21	ベタ基礎掘削時に立合いを実施した。掘削は造成の盛土におさまる。遺物なし。
25		23.2.25	西浦3丁目1994-1、1995-5、-6	個人	学校	河内一浩	5	建物部分に東西方向の試掘トレンチを設定し、重機で掘り下げた。結果、1mの造成盛土の下に20cmの旧耕土、80cmの青灰色粘砂質土、その下で灰色の砂層を確認した。遺物の出土はなし。
26		22.6.28	羽曳が丘6丁目8-1（羽曳が丘小学校）	羽曳野市	学校	河内一浩	62	耐震補強工事に伴う掘削部分の2地点を立会いした。A地点は30cmまで掘削ですべて埋立土。B地点は60cmまで掘削ですべて埋立土。掘削範囲においては支障なし
27		22.7.12	はびきの6丁目6-1（埴生南小学校）	羽曳野市	学校	河内一浩	12	耐震補強工事に伴う掘削部分の立会い調査。現地表面下40cmまで埋立の土であることを確認。遺物無し。掘削範囲においては支障なし。
28		23.2.15	伊賀5丁目42-1（羽曳野中学校）	羽曳野市	公園	河内一浩	120	耐震工事にともなう掘削部分の立会いを実施した。東壁面で現地表面50cmまで校地造成土で、その下に黄褐色の砂礫土を確認した。遺物包含層や遺構を確認できなかった。
29		22.12.16～23.1.31	軽里2丁目地内	羽曳野市	管理棟	河内一浩	27	建物基礎部分に調査区を3ヶ所設定し、重機掘削の後に断面及び平面を人力で精査した。その結果、現地表面下約1.1～1.4mは公園の造成盛土で、以下に旧耕作土・床土を挟んで橙灰色粘土の地山面に至り、遺物包含層及び遺構は認められなかった。
30		23.2.15	伊賀5丁目42番地の1（羽曳野中学校内）	羽曳野市	幼稚園園舎移転改築	河内一浩	52	現地表面1.5m下で深さ1.5mの南北方向の谷地形を確認した。最下層から古墳時代後期から終末期の須恵器、土師器が出土した。出土量の多さと磨滅がないため近隣に集落の存在が想定される。

工事立会

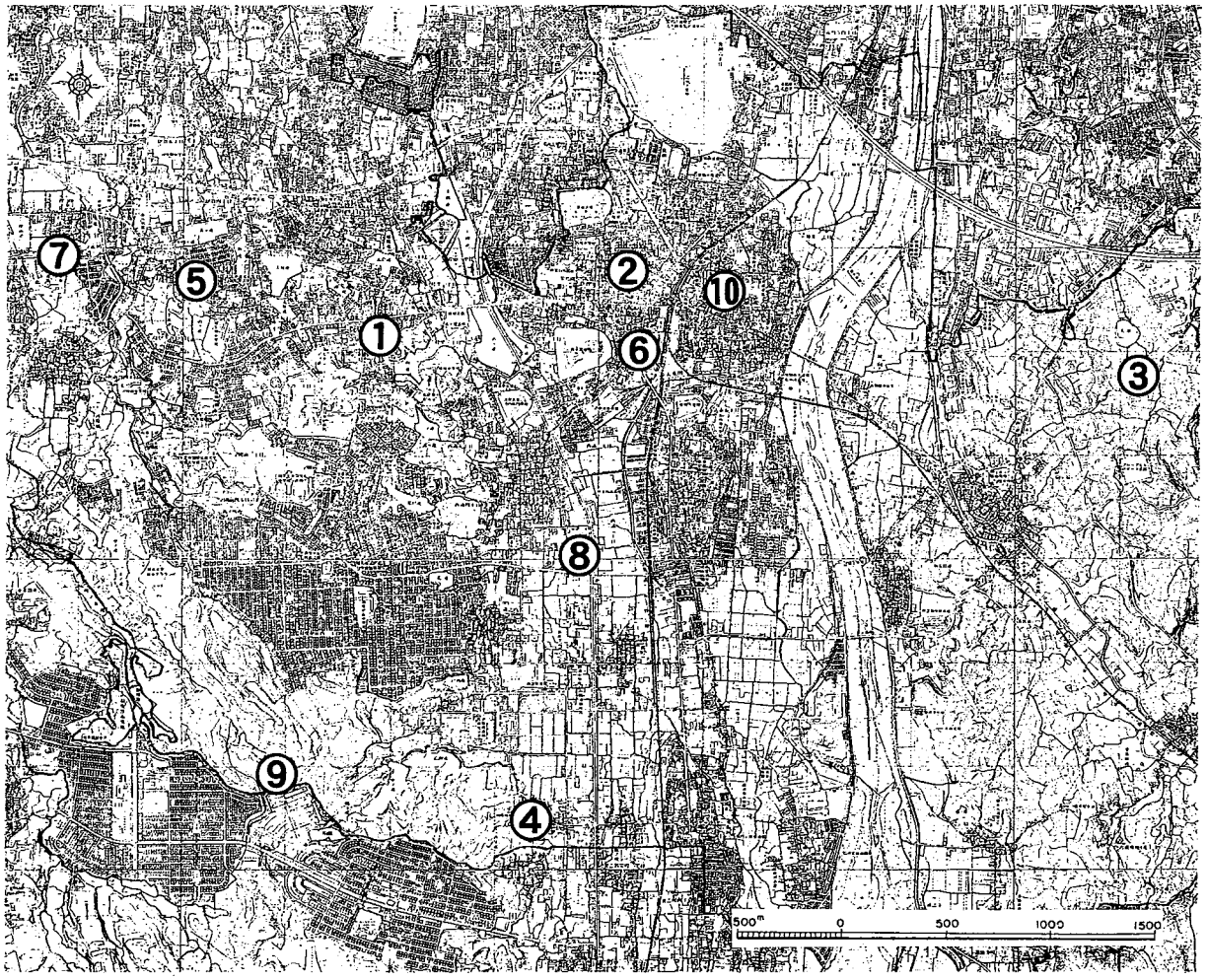
表4　立会調査一覧

通番	遺跡名	調査期間	申請地	申請者	工事の目的	担当者	調査面積	調査概要
1	前の山古墳	22.11.12	軽里3丁目5-5～8-2	事業者	ガス	河内一浩	6	ガス管埋設工事時の立会いを実施した。A地点以外は撹乱。A地点では現地表面下45cmで地山を検出し、外堤を区画する溝を確認した。円筒埴輪が出土している。
2	恵我之荘遺跡	22.4.7	恵我之荘4丁目141-4	事業者	分譲住宅	武村英治	0	基礎掘削時に立会をおこなう。　基礎は現地表面より約20cmで遺構・遺物には影響ない。
3	恵我之荘遺跡	22.5.17	恵我之荘2丁目90-5、-	事業者	分譲住宅	河内一浩	8	基礎掘削時の立ち会いあを実施した。現地表面下30cmの掘削の所見では遺構、遺物を検出できなかった。
4	恵我之荘遺跡	22.5.19	恵我之荘3丁目36-6	医療法人	事務所	武村英治	0	基礎掘削時に立会調査を行う。　表土より約30cm掘り下げており、アスファルト及び表土層内におさまる。
5	平下遺跡	22.5.25～22.5.28	はびきの5丁目428、429、430-1の各一部	個人	宅地造成	河内一浩	50	本書掲載
6	野々上遺跡	22.6.2	野々上3丁目482-9	個人	分譲住宅	井原稔	0	申請地内の掘削に立会する。現地表面から40cm掘り下げるが、上層20cmは盛土、下層は地山であった。遺構・遺物は確認できなかった。
7	古市大溝	22.6.15	野々上1丁目152-119、-120	事業者	分譲住宅	河内一浩	1	建物基礎は新たに造成される盛土内に収まることを現地で確認。盛土のためのよう壁部分を1m四方を重機掘削した。30cmの盛土の下に20cmの旧表土。その下に黄灰色粘土層を確認。遺物なし。
8	郡戸東遺跡	22.8.17	郡戸401-6	事業者	分譲住宅	河内一浩	18	建物基礎掘削に立会。現地表下0.3mまで宅地造成土。その下に淡灰色砂質土が厚さ10cm、褐色粗砂（地山か）に至る。建物北東部で瓦器を包蔵する遺構を検出し、損壊を生じる部分の調査を終えた。

通番	遺跡名	調査期間	申請地	申請者	工事の目的	担当者	調査面積	調査概要
9	郡戸遺跡	22.9.1	郡戸59−1、60−1	事業者	産廃物施設	河内一浩	25	塀に基礎掘削の立会いを実施した。1.5mまで造成のための盛土であり、基礎工事に際しては支障なし。 遺物なし。
10	古市遺跡	22.9.15	古市1丁目1−2	事業者	鉄道	河内一浩	5	エレベター設置ピット掘削時の立会いを実施した。土層が確認できた現地表面下1.7mから2.5mはにぶい褐色土（レンガ・針金を含む）であった。砂利、砂層は確認できなかった。
11	野々上遺跡	22.9.22	野々上3丁目7−1	個人	看板塔	河内一浩	16	看板基礎掘削時の立会いを実施した。現地表面より1.5mまで造成土（コンクリート・レンガが混入）であった。
12	駒ケ谷遺跡	22.10.1〜 22.10.15	壷井588番地甲の一部	事業者	駐車場	吉澤則男	0	土砂搬出に伴う重機掘削の際に立会いし、掘削断面の観察を行う。表土（約0.2）の下は全て山土（白橙色砂及び橙色粘質土）で、約9mの掘削範囲では遺構及び遺物包含層は認められなかった。
13	五十村古墳群	22.10.18	誉田1801番13	事業者	電話通信	河内一浩	16	本書掲載
14	高屋遺跡	22.11.12	古市7丁目1111−1、 1110−1	福祉法人	保育所	河内一浩	2.6	埋管掘削時に立会いを実施した。現地表面下0.7m〜1mまで造成時の盛土であった。建物の基礎は造成盛土におさまるので支障なし。遺物なし。
15	誉田白鳥遺跡	23.2.24	白鳥3丁目252−9	事業者	分譲住宅	河内一浩	20	基礎掘削時に立会を実施した。掘削深度45cmの範囲は造成盛土であった。遺物なし。
16	はざみ山遺跡	23.3.15	野々上1丁目150−60	事業者	分譲住宅	河内一浩	40	基礎掘削時に立会を実施。現地表面下40cmの掘削したがすべて造成盛土であった。遺物なし。
17	恵我之荘遺跡	23.3.30	恵我之荘2丁目90−6	事業者	分譲住宅	河内一浩	40	基礎掘削時に立会を実施した。10cmの造成盛土の下に20cmの耕土、近世遺物を含む灰色砂質土が10cm、その下で褐灰色土（古墳時代の遺物包含）を確認した。工事に支障なし。
18	駒ケ谷遺跡	22.7.5	駒ヶ谷344−1	羽曳野市	学校	武村英治	0	耐震補強工事に伴う掘削部分の立会を行う。現地表面より約50cm掘削しており、すべて埋立土遺構・遺物は無かった見られず、工事において支障はない。
19	明教寺跡	22.7.5	島泉2丁目1−19	羽曳野市	学校	武村英治	0	耐震補強工事に伴う掘削部分の立会いを行った。A地点・B地点共に70cmまで掘削ですべて埋立土遺構・遺物は見られず、工事において支障なし。
20	高屋城跡	22.7.5〜 22.8.5	古市5丁目14−38	羽曳野市	学校	河内一浩	8	校舎耐震工事の立会いを実施した。校舎基礎脇の掘削で現地表面下0.4mまで校舎建設時の埋め戻し土であった。
21	島泉南遺跡	22.7.12	島泉9丁目15−4	羽曳野市	学校	河内一浩	8	耐震補強工事に伴う掘削部分の立会い調査。確認した。そのほかは掘削なし。現地表面下40cmまで埋立の土であることを確認。遺物無し。掘削範囲においては支障なし。
22	大塚山古墳	22.7.14〜 22.8.4	南恵我之荘7丁目8−35	羽曳野市	学校	河内一浩	30	耐震補強と仮設校舎基礎掘削時の立会を実施した。仮校舎基礎掘削部分で現地表下0.5mまで学校造成土を確認した。そのほかは掘削なし。
23	尺度遺跡	22.7.27	西浦1050	羽曳野市	学校	河内一浩	6	校舎耐震補強工事の掘削時に立会いを実施。掘削箇所は校舎南端の1ヶ所のみであった。校舎床面から50〜70cmまでの掘削であったが撹乱土（工事の埋土）であった。遺物もなし。
24	誉田白鳥遺跡	22.8.3	白鳥3丁目8−17	羽曳野市	学校	河内一浩	6	申請地内の仮設校舎渡り廊下の基礎掘削に立会。現地表下0.5mまで運動場の造成土を確認した。
25	古市遺跡	22.8.25〜 22.10.8	古市3丁目1番地先	羽曳野市	水道	河内一浩	20	縦坑部分の掘削時の立会いを実施した。現地表面下1.3mまで撹乱を受け、地山を確認した。地下6mで青灰色粘土が見られた。遺物無し。
26	尺度満山遺跡	23.3.30	尺度字満山	個人	開墾	河内一浩		本書掲載

図3　市内遺跡分布図

Ⅱ部
調査成果報告



① 塚穴古墳　② 誉田白鳥遺跡　③ 五十村古墳群　④ 尺度遺跡　⑤ 平下遺跡
⑥ 栄町遺跡　⑦ 郡戸東遺跡　⑧ 西浦十二遺跡　⑨ 尺度満山散布地　⑩古市遺跡

塚穴古墳

塚穴古墳の概略

羽曳野市はびきの３丁目５の所在の塚穴古墳は、江戸時代（18世紀後半）には来目皇子の墓と考察された古墳の一つである。江戸時代の末に金剛輪寺（現在の羽曳野市駒ヶ谷杜本神社境内）で住職を務めた阿闍梨覚峰により、寛政10年（1798）に刊行した『埴生崗之古墳』の中で図とともに被葬者像を結論つけている。また、『河内名所図会』（秋山籬島著　享和元年（1801）刊行）にも紹介されている。

墳丘は来目皇子墓として治定され宮内庁が管理している。宮内庁が平成20年に塚穴古墳の墳丘測量を実施している。平成21年には埋葬施設の紹介と墳丘の外部施設について報告をしている。

羽曳野市教育委員会では古墳周辺の調査で外辺の施設の存在が確認し、報告している。

過去の調査研究により一辺50mを超える方墳で掘割や外堤をもつ。埋葬施設の南向きの横穴式石室から築造時期は７世紀代第２四半期と考えられる。

調査の契機と経過

羽曳野市はびきの３丁目296－３の一部で宗教施設の建築による埋蔵文化財発掘の届出が平成22年７月28日付けで申請があり、同日これを受理した（羽教生社2235号）。

申請地は図５のトーンの部分で、当地は平成21年に調査を実施した塚穴古墳の外堤にあたる。発掘調査は平成22年10月５日から同月18日まで実施した。調査は、機会掘削後、人力に精査したところ、想定とおりに古墳造営に伴なう地業の痕跡を検出するに至った。

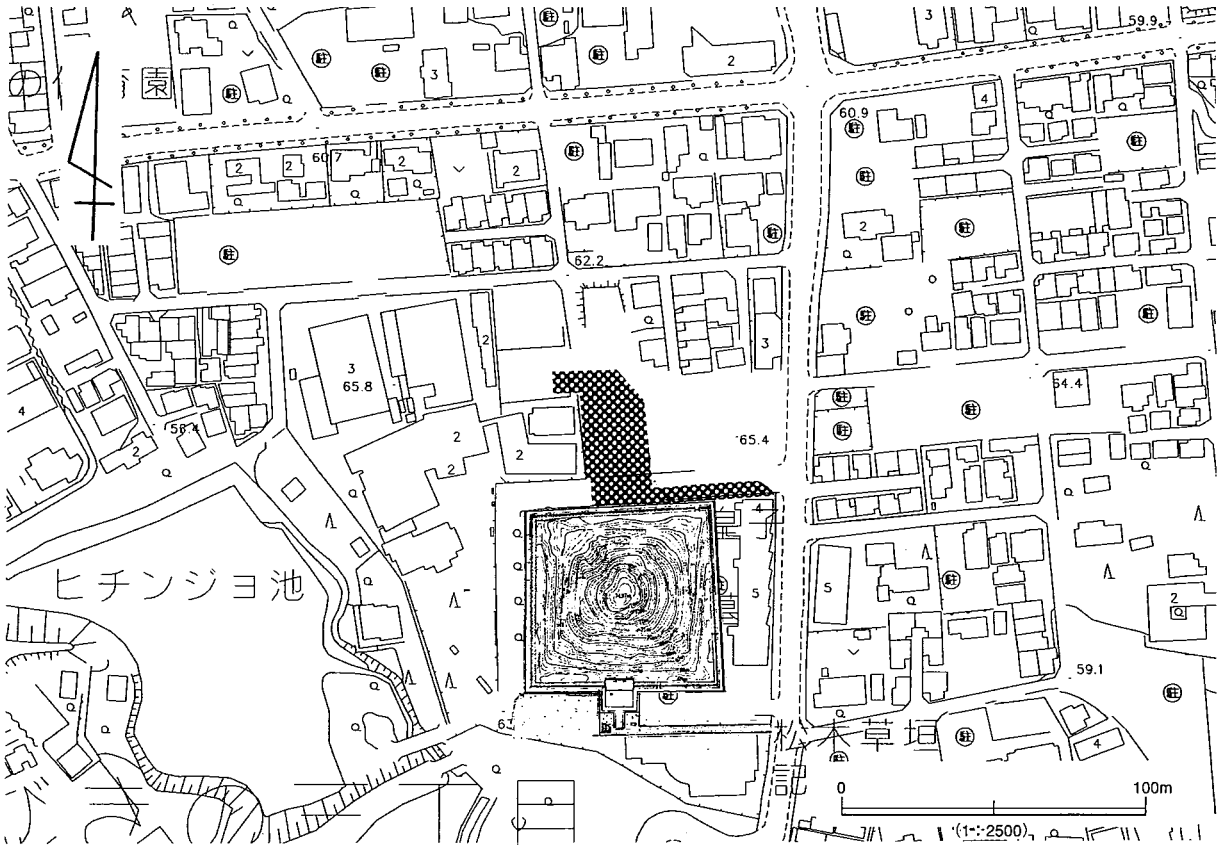


図5　塚穴古墳調査位置図

基本層序と遺構

塚穴古墳の墳丘裾から北へ約７ｍに位置する今回の調査地は、平成21年に駐車場の造成によって削平されて本来の地形を大きく改変を受けている。本体の地形は、現地表面より２ｍほど高い造成段が見られた。

申請建物の基礎掘削部分に沿って南北の調査区を基本とし、東西の土層を確認するため建物北辺にも調査区を設定することにした。図６のように東側の調査区をⅠ区、北側をⅡＡ区、西側をⅡＢ区と呼称する。

調査地の基本層序は、地表面のバラスを除去すると調査区に北東部で検出した谷地形を埋め立てる造成時の埋土が確認された。地山は黄褐色の粘質土であった。古墳築造に伴う造成埋土は、大阪層群のシルトや砂を用い、その盛土作業は前年度の調査でも確認されているように墳丘に向かって入り込む支谷を埋め立てている。以下、調査区の断面の所見を述べたい。

Ⅰ区は、調査区の北三分の一附近で図版一の⑤のとおり南から北へ傾斜する谷の境界を確認した。基礎掘削の深度の関係により調査区北端から南へ2.8mは谷地形の傾斜を追いかけることができなかった。

西壁の断面で検出した地山の傾斜角度は15°を測る。図７の左の調査区断面図は、Ⅰ区西壁の図である。造成は、図版一の⑥を見てわかるように地形的に高い墳丘側から土砂を投入して積む作業と埋める作業が同時に進められている。支谷を埋めながら外堤の幅を拡大する意味をもっているようである。埋め立ての土砂は、ａ赤褐色シルトとｂ砂礫土であり、前者は叩き締めるのには好都合の土砂といえる。

ⅡＡ区では、西から東へ傾斜する谷地形を確認し、調査区断面から読み取れる地山の傾斜角度は25°を測る。図７の右の調査区断面図は、ⅡＡ区の北壁の図である。

造成は、図版一の③で見てわかるように本調査区でも地形の高い墳丘側から土砂を投入して埋める作業が進められている。盛土作業の後半、支谷を埋めながら外堤の幅を拡大する意味をもっているようである。埋め立ては、Ⅰ区で観察された同じ土砂と用いていた。

ⅡＢ区の西壁は地山であった。特記すべき点はないので断面図はここでは割愛した。図版一の①や②に観察からここより北に向かって入る旧地形の谷の東縁であることがわかった。したがって平成21年に設定した調査区９、10で復原された旧地形は、本調査区の北西角から東辺北側の三分の一で地山と盛土の境界が検出された。

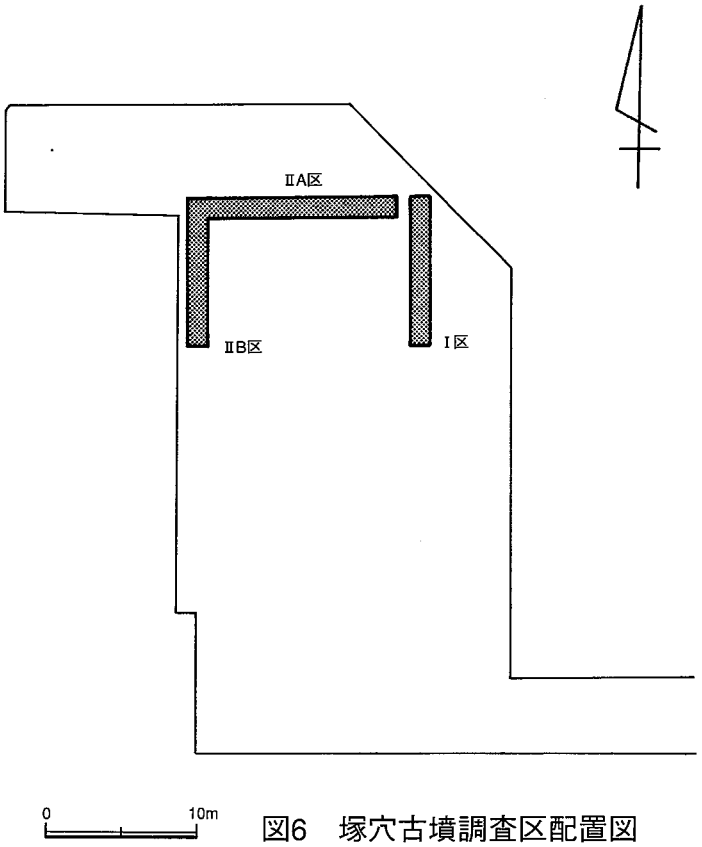


図6　塚穴古墳調査区配置図

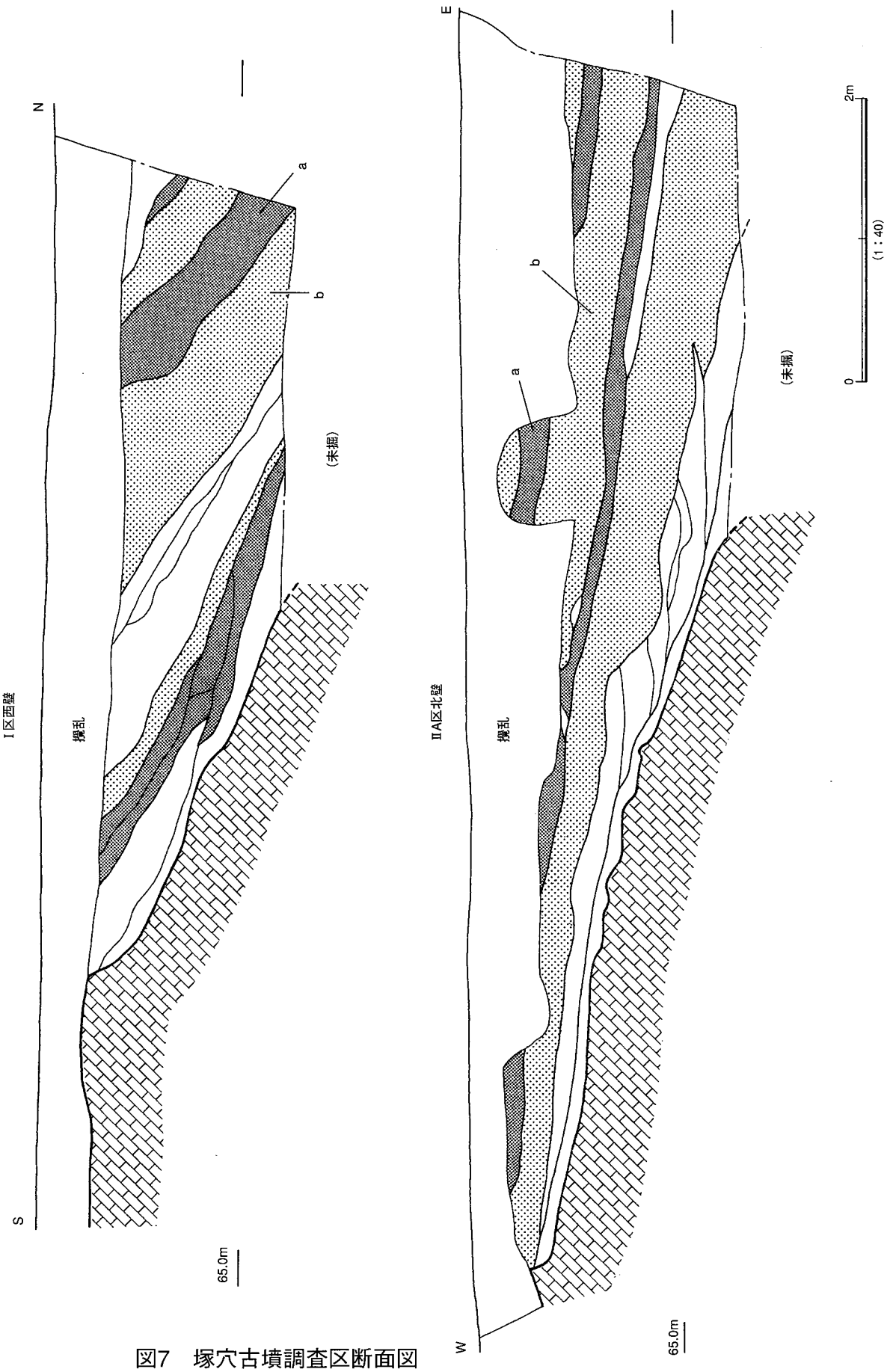


図7　塚穴古墳調査区断面図

遺物

今回調査で４点の須恵器片が出土し、図８に提示した。以下、須恵器片の概略を記す。

１は、甕の胴部片である。３cm×５cm大で外面はタタキのあとカキ目を施し、内面は青海波タタキが観察される。厚さ0.8cmで、カーブを呈する。２も甕の胴部片である。破片の厚みは0.5cmで５cm四方の大きさで、平たい。３は、壺口縁端部の小片である。上方へ肥厚する端面で、下部は垂下するものと推測される。４は、蓋杯の天井部片である。

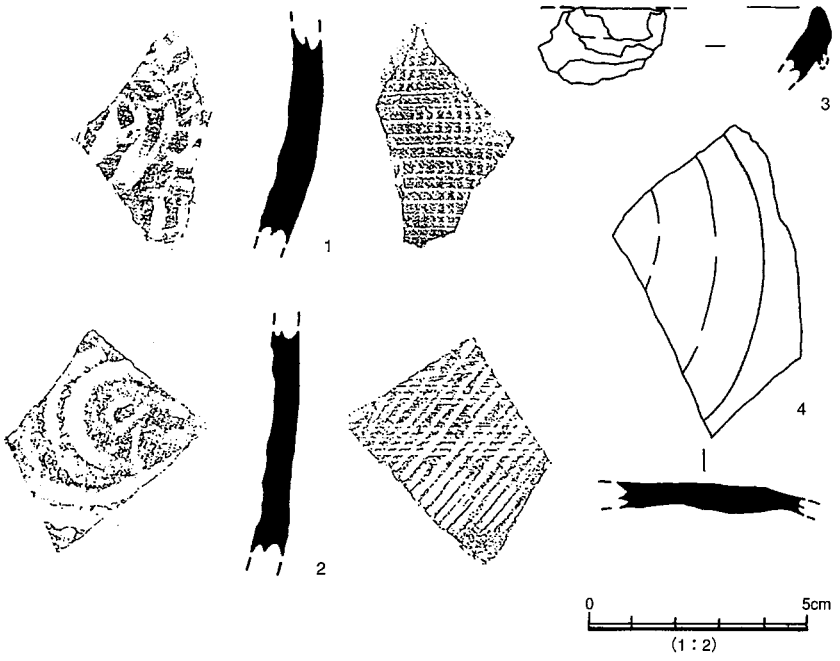


図8　塚穴古墳出土遺物実測図

まとめ

今回の調査は北外堤にあたる。その成果は、平成21年に実施した調査の追従を示すものであった。すなわち、北外堤においての二つの盛土作業は、①外堤の高さを増す作業と②支谷を埋め立てる作業で、今回は後者の作業を確認した。

検出した谷はⅠ区の北半分、ⅡＡ区で観察され、申請建物の北東部のみ旧地形が観察された。造成は、地形的に高い墳丘側から土砂を投入して積む作業と埋める作業が同時に進められている。

飛鳥時代の古墳の外周構造や築造技術、造墓思想を考える上で、注目すべき古墳の一つであり、今後の調査の進展が期待される。

参考文献

岩井武俊1913「南河内地方旅中の見聞（下）」『歴史地理』19－６
松葉好太郎1925「来目皇子（用明天皇皇子）埴生崗上墓」『陵墓誌』
大阪府1934『大阪府史蹟名勝天然紀念仏調査報告書　第五輯』
山本彰1993「来目皇子墓」『天皇陵総覧』
西光慎治2004「埴生崗之古墳實見記」『堀田敬一先生古稀記念献呈論文集』
羽曳野市教育委員会2007『古市遺跡群ＸＸⅧ』
書陵部陵墓課2009「来目皇子　埴生崗上墓の墳丘外形調査報告」『書陵部紀要　第60号』
羽曳野市教育委員会2009『羽曳野市内遺跡調査報告書―平成18年度―』
羽曳野市教育委員会『羽曳野市内遺跡調査報告書―平成21年度―』

誉田白鳥遺跡

誉田白鳥遺跡の概略

遺跡の発見は、大正の末から昭和の初めに当時の誉田村（現白鳥３丁目）で大阪電気鉄道株式会社が開発を行った白鳥園住宅の造成地から埴輪が出土したことによる。その後、「誉田西土師遺跡」と仮称されていた。遺跡の重要性を高めたのは、昭和44年に発見された埴輪窯の存在である。国道170号線改修工事で窯体の一部が露出し、大阪府教育委員会が調査を実施した。誉田白鳥遺跡の第１次調査である。調査は、昭和55年より羽曳野市教育委員会が大阪府教育委員会に変わって継続している。

埴輪の生産遺跡であるが、大阪府教育委員会の調査で検出した奈良時代の掘建柱建物が古市郡衙である可能性も指摘されている。その後は公的機関を示すような建物配列や遺物の発見はなかったが、羽曳野市教育委員会の調査で一辺１ｍを超える掘立柱建物の掘方を検出している（図９－③）。一般の集落と少し異なるような遺跡である可能性も考えられる（羽曳野市内遺跡平成18年度）

調査の契機と経過

申請地は、白鳥３丁目２４１番地１に位置する（図９－①）。地形分類では低位段丘に属し、標高は30ｍ前後を測る。南へ約100ｍには大乗川の氾濫原が拡がりその高低は１ｍである。

申請地の北西部は西馬塚古墳の位置し、大阪府教育委員会が埴輪製作工房や掘立柱建物を検出した地点に近い。さらに申請地の南60ｍの地点で大溝が検出され（図９－②）、当該地まで溝が掘削されている可能性が高いため、平成22年４月30日に試掘調査を実施した。調査は重機による掘削を行った後、人力によって掘り下げる方法で実施した。

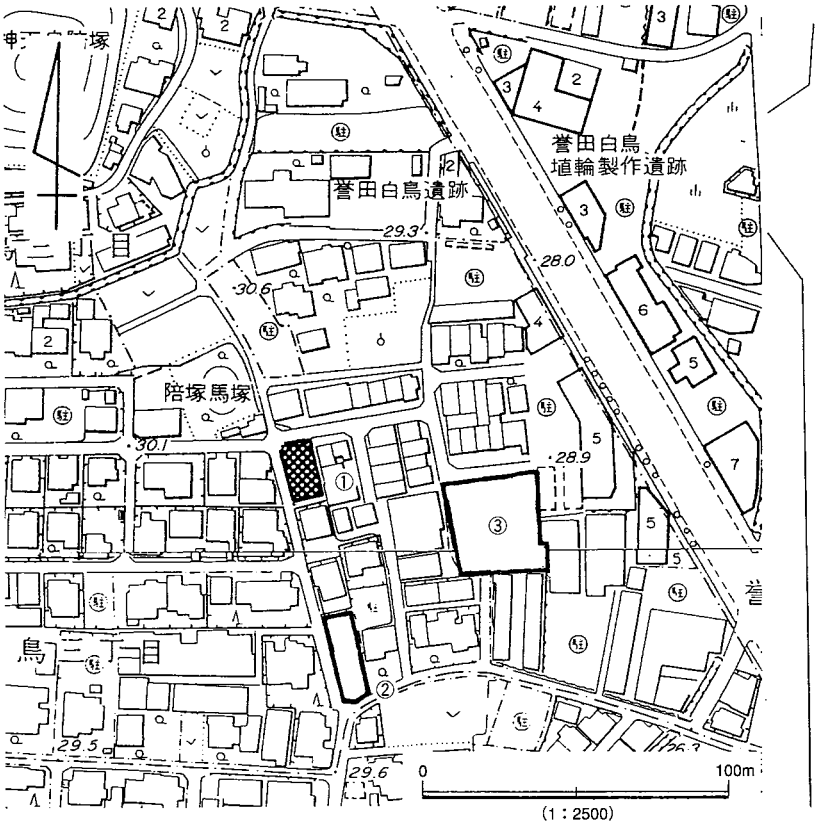


図9　誉田白鳥遺跡調査位置図

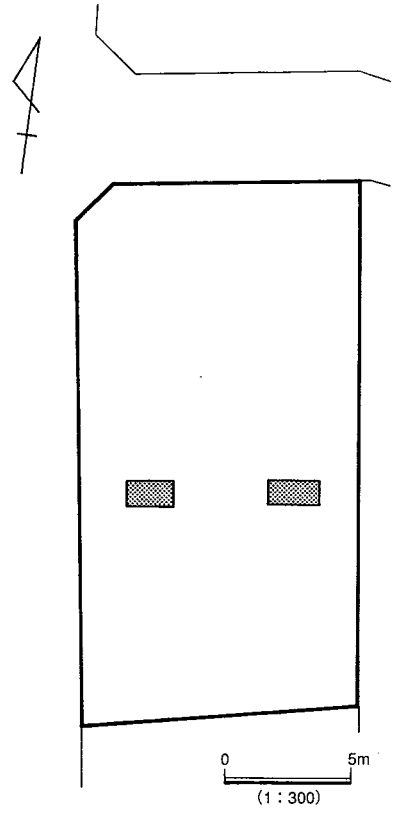


図10　誉田白鳥遺跡調査区配置図

基本層序と遺構

本調査区の基本層序は、現地表下50cmまでは宅地造成土で、その下に旧耕土を確認した。旧耕土は20cmの厚さで、その下に埴輪を含む灰褐色土の遺物包含層を確認した。層の厚さは40cmで、その下に青灰色粘土、灰褐色粘質土が堆積する。協議により基礎掘削の深度が支障のない深さに対応させて現地で保存することにした。

旧耕土の上の造成盛土は、周辺より50cm低い地形を示している。耕土の下の灰褐色土は、ブロックと埴輪片が出土してことから整地土の可能性が高いと思われる。だとすれば、大溝の痕跡としての窪地を埋めて田を造成したと理解したい。造成にあたり近隣する西馬塚古墳の墳丘から採土したと考える方が理解しやすい。

今回の調査で地山を確認できなかった。整地土と考えた灰褐色土より下は堆積層と考えられることから、調査区全体が南北方向の溝である可能性が高い。

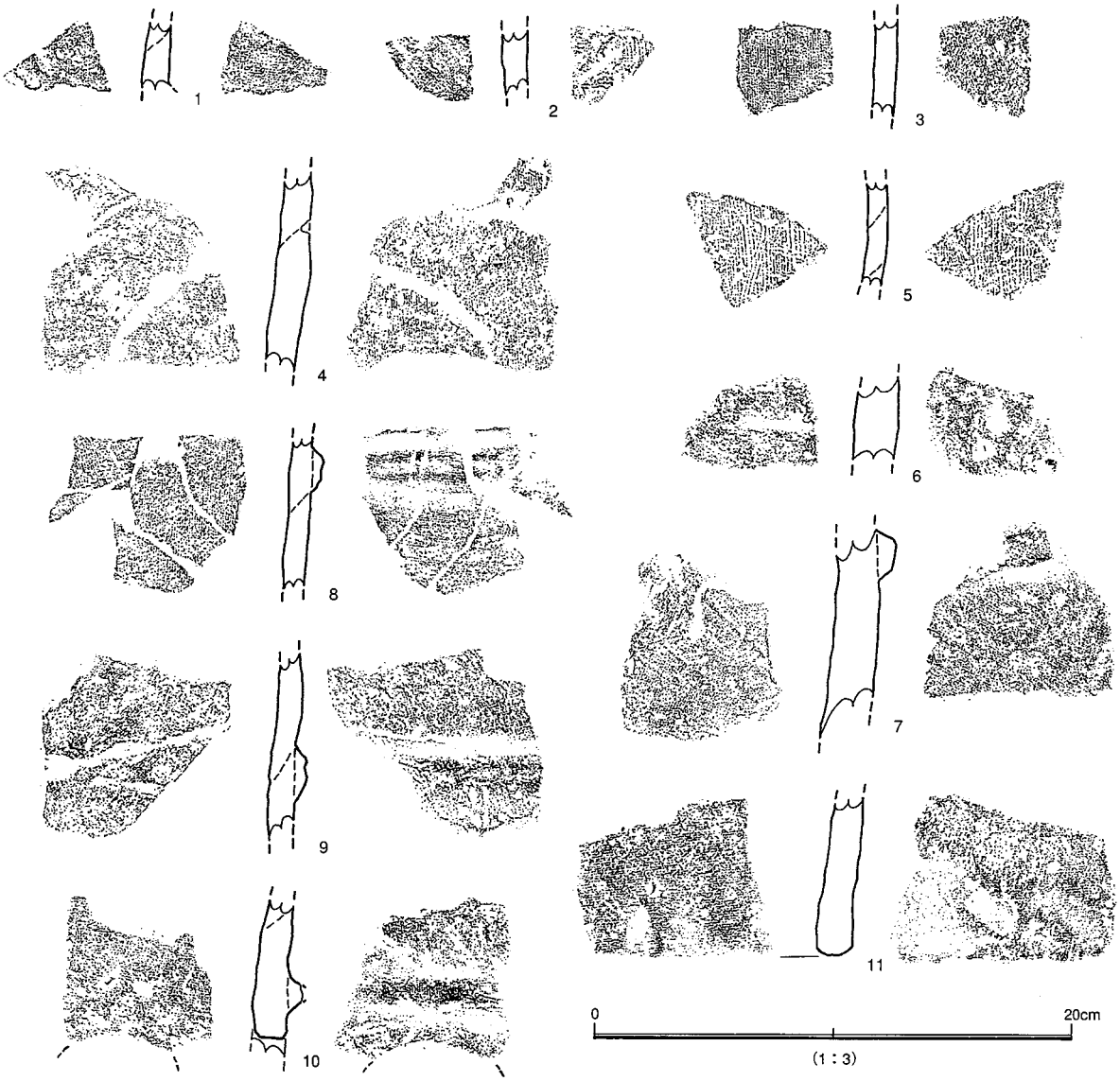


図11　誉田白鳥遺跡出土埴輪実測図

遺物

出土遺物は図11に示した埴輪片が認められた。埴輪片は円筒形に限られ、灰褐色土から出土している。色調から赤褐色系１、６、７、８、９、10と黄橙色系２、３、４、５、11に分けることができる。

７、８、９、10の４片に突帯が見られる。この内10の突帯直下に円形スカシが穿かれている。口縁部の破片は見当たらない。11は底部の破片で、底部調整は観察されない。８はヨコハケ調整が施されているが種別の確定には至らなかった。

無黒斑の土師質で、ヨコハケが見られる特徴から川西編年のⅣ期にあたる。

まとめ

現地表面から２ｍ掘削しても地山が検出できなかったことや周辺の調査成果から今回の調査地点は、南北の大溝と考えた。しかしながら、調査した範囲が狭いため幅員、深さを検証することができなかった。地形図から復原できる幅員は最大７ｍで、昭和45年に大阪府教育委員会が調査を実施した253区の大溝につながると考えている。ちなみに、検出された大溝の規模は上端幅7.1m、下端幅で4.6ｍ、深さ1.1ｍで、その性格を大阪府教育委員会が確認した掘立柱建物群の西区画溝と考えられている。

誉田白鳥遺跡の性格を考える上で興味深い。今後周辺の調査成果を待ちたい。

次に、当該地の北西に西馬塚古墳が隣接し、同古墳の周濠の南東角にあたっている。このとから南北の大溝と西馬塚古墳の堀との関係も今回の調査課題であった。調査区で観察された断面の土層堆積からは平成14年の調査で確認した周濠の堆積状況とまったくことなる。造成土の下で旧耕土が確認され、そのレベルは周辺より0.5m程度低かったことがわかる。西馬塚古墳の東周濠は、大溝の流路を復原すると重なる位置にある。仮に西馬塚古墳の周濠を切って大溝を掘削したと考えると中位段丘を二分する区画溝の性格が再浮かびあがる。

大阪府教育委員会1973「誉田白鳥遺跡第７次調査の結果」『大阪府教育委員会月報』第25巻第２号
野上丈助1973「誉田白鳥遺跡の調査と遺跡の性格」『考古学研究』19－３

五十村（いぶら）古墳群

五十村古墳群の位置

五十村古墳群は、羽曳野市誉田、駒ヶ谷に所在する古墳時代後期群集墳である。学史で有名な飛鳥千塚の北方に位置し、鉢伏山より複雑に派生する丘陵尾根上に立地する。

昭和46年に大阪府教育委員会が実施した分布調査で大池の東側に5基、グレープヒルの北側に4基が確認されている。墳丘が現認できた9基で構成されるとした。

昭和47年に大規模農道の事前調査で元興寺文化財研究所が分布調査を実施されている。さらに、昭和53年に大阪文化財センターが南河内道路に関する第3回埋蔵文化財予察調査で大池の東に5基確認されている古墳の内、東西端の2基は土取りで消滅を確認し、マウンド状の高まりを1ケ所ヵ確認した。

また、五十村古墳群の分布範囲内にあたる駒ヶ谷959－乙、1059－甲乙において、羽曳野市教育委員会の平成5年10月の調査で2基の横穴式石室をもつ古墳を新規発見した。小字から「キレト1号墳・同2号墳」名付けられ、出土した遺物により築造時期は、6世紀後半から7世紀初頭と考えられている。

調査の契機と経過

平成22年8月10日に羽曳野市誉田1801番13において通信施設の工事に伴なう文化財の届け出が提出された。同日これを受理した（羽教生社2257号）。

これに基づき、平成22年10月8日に工事の立会を実施した。現地表面下2ｍまで造成盛土であることが確認された。

同調査地点は五十村古墳群の分布範囲の北側に位置し、南50ｍには五十村Ｈ－8号墳が位置する。

層序と遺構

現地表面下2ｍまで造成盛土であった。基礎の強度のためそれ以上の掘削を断念したので地山を確認できてない。

出土遺物

今回の立会では遺物の出土は認められなかった。

まとめ

今回の調査では工事による遺跡の損壊は生じないことが確認された。しかしながら、調査地周辺は造成による採掘が進んでいる状況である。古墳の現状を確認したので以下報告するものである。

大阪府教育委員会1971『近飛鳥遺跡分布調査概要』
大阪府教育委員会1972『近飛鳥遺跡分布調査概要Ⅱ』
元興寺仏教民俗資料研究所1972『南河内広域営農団地農道整備に伴う分布調査』
大阪文化財センター1978『南河内道路に関する第3回埋蔵文化財予察調査報告書』
羽曳野市教育委員会2003「五十村古墳群」『羽曳野市内遺跡調査報告書平成5年度』

【追記】

現況観察と保存状況

H－4号墳

消滅。報告では、墳丘は完存し円墳と考えられる。現状は果樹園。墳丘径18m。昭和52年の分布調査で確認できず。

H－5号墳

墳丘が半壊。円墳。径17m。横穴式石室。全長7.5m、玄室と考えられるところの上部の幅は1.26m、石室半壊。南南東に開口。土砂が流入し、羨道及び玄室は不明。天井石と左右側壁のみが露出している。内部は保存が良好の可能性あり。

H－6号墳

墳丘が半壊。径16mの円墳である。横穴式石室が半壊であるが残る。石室幅1.12m。南東に開口する。葡萄畑により土砂が取られ側壁と考えられる石が付近に散在する。天井石が抜き取られ石室は床部ぐらいが残存か。

H－7号墳

墳丘は完存で、直径13mの円墳である。掘割が観察される。

H－8号墳

昭和46年には墳丘は完存。昭和52年の分布調査で確認できず。消滅。

写真2　五十村5号墳（昭和56年撮影）

図12　五十村古墳群の分布図

尺度遺跡

位置と環境

尺度遺跡は、標高70ｍの尾根上に立地する300ｍの範囲に広がる弥生時代後期の高地性集落として捉えられてきた。1900年前半ころからの土砂採取りによって内容については不明瞭の遺跡であった。かつて出土した土器も詳しいことは不明である。

尺度遺跡が立地する丘陵の東裾部で1971年に⑲元興寺仏教民俗資料研究所が分布調査を実施している。標高35から40ｍの水田域に遺物の散布が確認された。東西700、南北600の範囲が「尺度地区散布地」とされた。調査歴は、1974年に同研究所が確認調査を実施し、竪穴住居を確認している。なお、同地点は1961年に大阪大学国史研究室が大阪府立農林センターの建設に先立って試掘調査を実施した地点に近い。農林センター散布地に該当する。

1975年には⑲文化財センターが分布調査をおこない、尺度地区遺物散布地の範囲がさらに広がることが確認された。

その後、南阪奈道路建設予定が本格化し、1996年⑲大阪府文化財調査研究センターが行った道路建設に先立つ確認調査で低地部分についての初めて遺構の存在が確認された。これらの調査が行われることにあたって尺度地区遺物散布地を含めて尺度遺跡と呼称されることとなった。1996年から2000年にかけて数次の調査で弥生時代の終わりから古墳時代の建物群が検出され、居館の可能性も指摘されている。

調査の契機と経過

尺度190－１において、飲食店の建設にかかる「土木工事等による試掘調査依頼書」が提出され、平成22年２月５日付けでこれを受理した（羽教生社第2410号）。申請地は文化財分布図による包蔵地外ではあるが、北40ｍのところに尺度遺跡の周知範囲の南端にあたり、過去の調査成果から遺跡の南限が広がる可能性あり大いに調査成果が期待できた。

依頼書に基づき試掘調査を平成22年４月23日に実施した。重機により浄化槽にあたる地点を掘削すると耕土を除去すると須恵器や土師器の破片を多く出土する遺物包含層を確認し、地山面で遺構が検出される結果となった。当該地における工事は、構造物は盛土の上に建てる計画であるが、浄化槽については掘削深度が深く現状計画では遺構に損壊を生じる結果となった。そこで、協議をしたところ浄化槽部分の16.1㎡について試掘調査翌日の４月24日から開始して同月27日に作業を終了した。

なお、平成22年４月27日付けで土地所有者から遺跡発見の届け出（第96条１項）を提出され、４月28日に収受した（第2068号）。羽曳野市教育委員会から大阪府教育委員会へ尺度遺跡（羽曳野市遺跡番号60）の拡張とした。平成22年５月17日に大阪府教育委員会から羽曳野市教育委員会へ「遺跡の発見について」通知（教委文第11－３号）、教育長から土地所有者へ「遺跡の発見について」伝達（羽教生社第2114号）を平成22年５月21日付けで伝達をおこなった。

基本層序と遺構

調査地の現況は水田で、標高　mである。厚さ20cmの耕土を除去すると、床土の下に厚さ10cmの褐灰色粘質土が堆積し、須恵器片等の遺物が包蔵していた。その下が黄褐色粘質土の地山面になる。

遺構は溝（ＳＤ０１）や土坑（ＳＫ０１、ＳＫ０２）が確認された。すべて地山面での検出であった。

ＳＤ０１は東西方向で幅60cm、深さ７cm。灰白色（10YR７／１）砂質土。遺物が出土しなかったが、切っている土坑からは中世の遺物が出土しているので、中世以降となる。

ＳＫ０１は、調査区中央で検出された方形プランの土坑である。南側がＳＤ０１に切られ、検出面で東西１m、南北は0.2m以上となる。

ＳＫ０２は、調査区に北東隅で検出した方形土坑で、検出規模は南北0.4m、東西1.1mである。

出土遺物

今回の調査では総じて遺物量が多くない。できる限りの小片をピックアップして実測を行い図14と図版二に提示した。なお、出土遺構は１と６はＳＫ０１から出土した。３と10はＳＫ０２から出土した。２・４・５・７～９・11・12は包含層である。以下、概略を記す。

１は、瓦器椀の口縁部の小片で。その端部は丸く仕上げられている。２は、瓦器椀片で。断面は三角形を呈する高台をもつ。内面見込みは、表面磨滅のためミガキな観察が不可であった。本資料は火中により表面に吸着した炭素が喪失している。１・２とも和泉系であろう。だとすれば13世紀代に比定されよう。３は、土師器の甕である。破片は非常に小さいが口縁部端部と思われる。４は、土師器甕で、外面に指ナデがあることから肩から頸部にかけての破片と考えられる。５は、土師質の羽釜で鍔部分の破片である。胎土や色調から中世の遺物と思われる。６は、須恵器の壷で、内外面、ナデによって仕上げられていることから胴部の下半部と推定している。７も、須恵器の壷である。内外面ナデ調整が観察される。大きくカーブする一面には灰かぶりが観察されることから長頸壺胴部の肩のあたりの破片と推測される。８は、須恵器の杯Ｂで、口縁部が欠損する。高台はしっかりした台形で、やや外側にひらく。底部外面の調整は省略され、粘土紐の巻き上げ痕跡が観察される。９は、須恵器の小片であるが、杯蓋の口縁部にあたり端部内面の段や口縁外面の稜線は認められない。10から12は、須恵器蓋杯の身である。11の杯の焼成は甘く灰白色を呈する。多くの白色砂が観察される胎土をもつ。12の杯Ｂは口縁端部と底部は欠損するものの全体な形状を窺える資料である。

以上、遺物からは古墳時代後期と奈良時代、そして鎌倉時代の終わりごろの三時期に、日常雑器が多いことから一般の集落遺跡の生活痕跡が見て取れる。

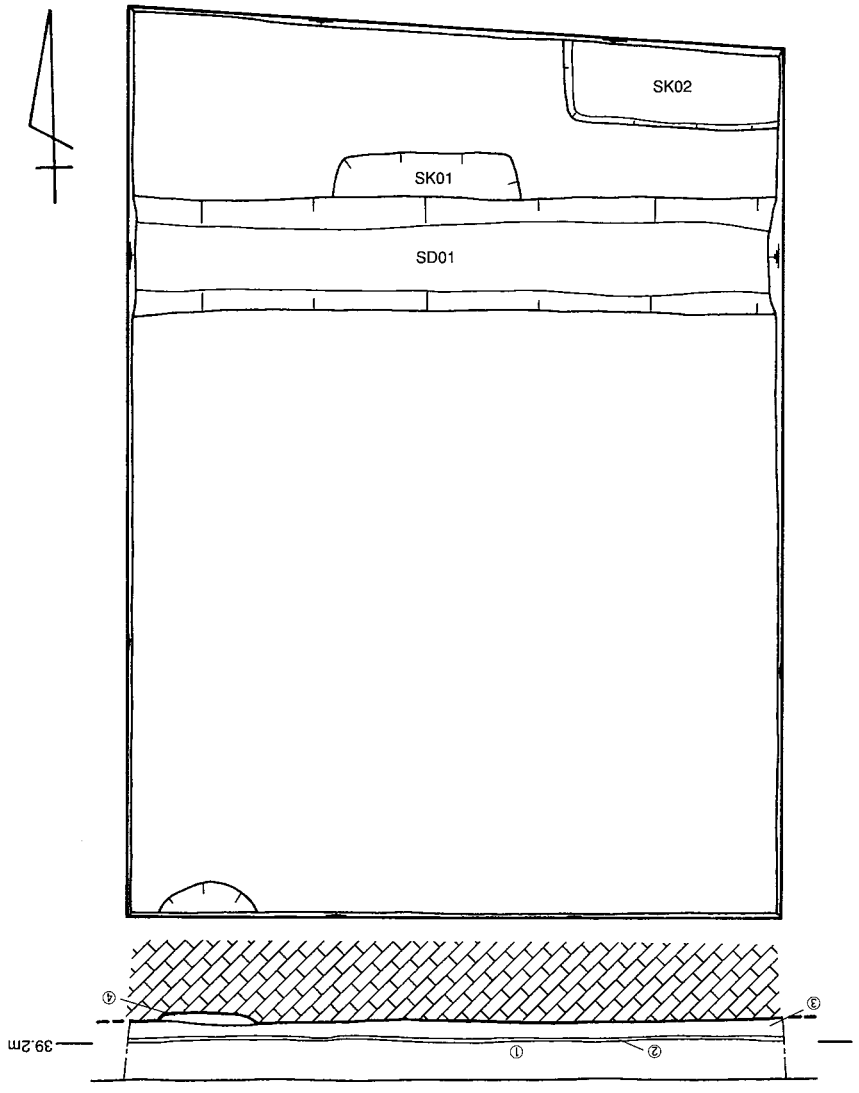


図13　尺度遺跡遺構平面図と土層断面図

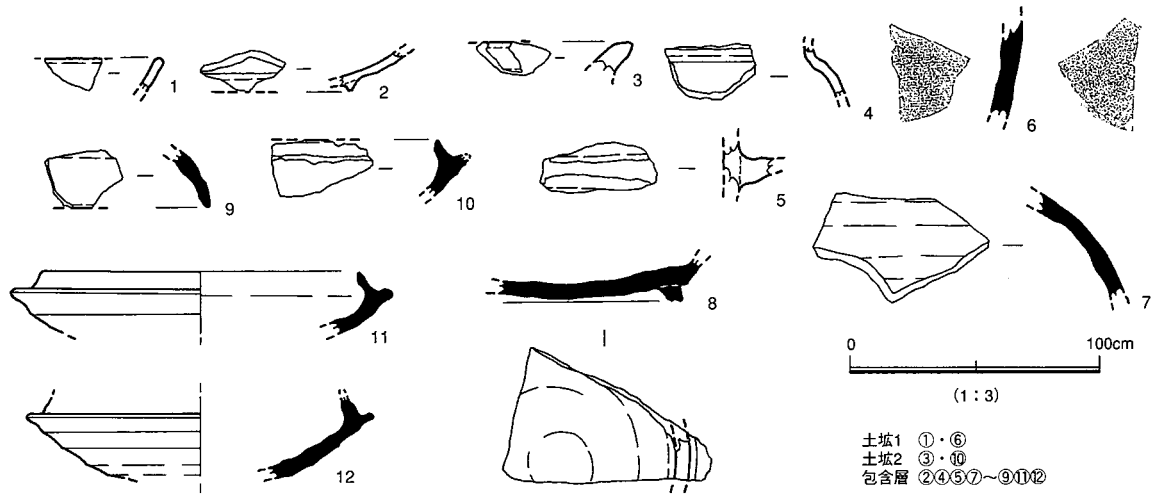


図14　尺度遺跡出土遺物実測図

調査成果

今回の調査成果は、以下の５点があげられよう。

１．尺度遺跡の周知範囲が50m南へ拡張となった。

２．包含層の遺物から古墳時代後期と奈良時代の生活痕跡が窺える。

３．地形分類は氾濫原とされているが、遺構が検出されたことから居住していたこと明らかとなった。確認できた遺構は出土遺物から鎌倉時代の土坑である。

４．隣接する地点で出土する弥生時代から古墳時代前期の遺物は今回出土しなかった。

写真3　尺度遺跡遺構検出状況

平下遺跡

平下遺跡の概略

平下遺跡は、羽曳野市はびきの５丁目に所在する奈良時代の集落跡として周知されている。

遺跡の発見は、昭和53年５月に大阪府教育委員会によって実施された宅地造成の事前調査による。その報告書は未刊であるが、現場図面から調査区の東端で幅１～1.2mの南北溝が検出されている。また、東西1.5m、南北17.5mの楕円形の土坑、掘立柱建物などを検出されているが、詳細は明らかでない。

平成４年には羽曳野市教育委員会が発掘調査を実施している。成果は、８世紀代の須恵器、土師器が大量に出土する土坑が検出されているが、その性格は不明である。

平下遺跡は調査例が少ないために遺跡の性格を明らかにできていないのが現状である。

調査の契機と経過

今回の調査地は、羽曳野市はびきの５丁目428、429、430－１の各一部で現況は東から西へ緩やかに傾斜する畑地である。申請は、平成22年５月25日に提出され、同日これを受理した（羽教生社2121号）。届出書に基づき同日、立会を実施した。

結果、図16の左、ＢからＤの３ヶ所で土層を確認したところ、耕作土の下はすぐ地山であった。申請地の西側部分でよう壁工事による掘削が行われ、延長35mの範囲を断面観察することになった。図16の左、Ａ－Ａ´部分である。掘削断面を観察したところ耕土と地山に間層を確認でき、さらに遺物が採集できた。土層図を作成と申請地内の遺物収集に努めた。

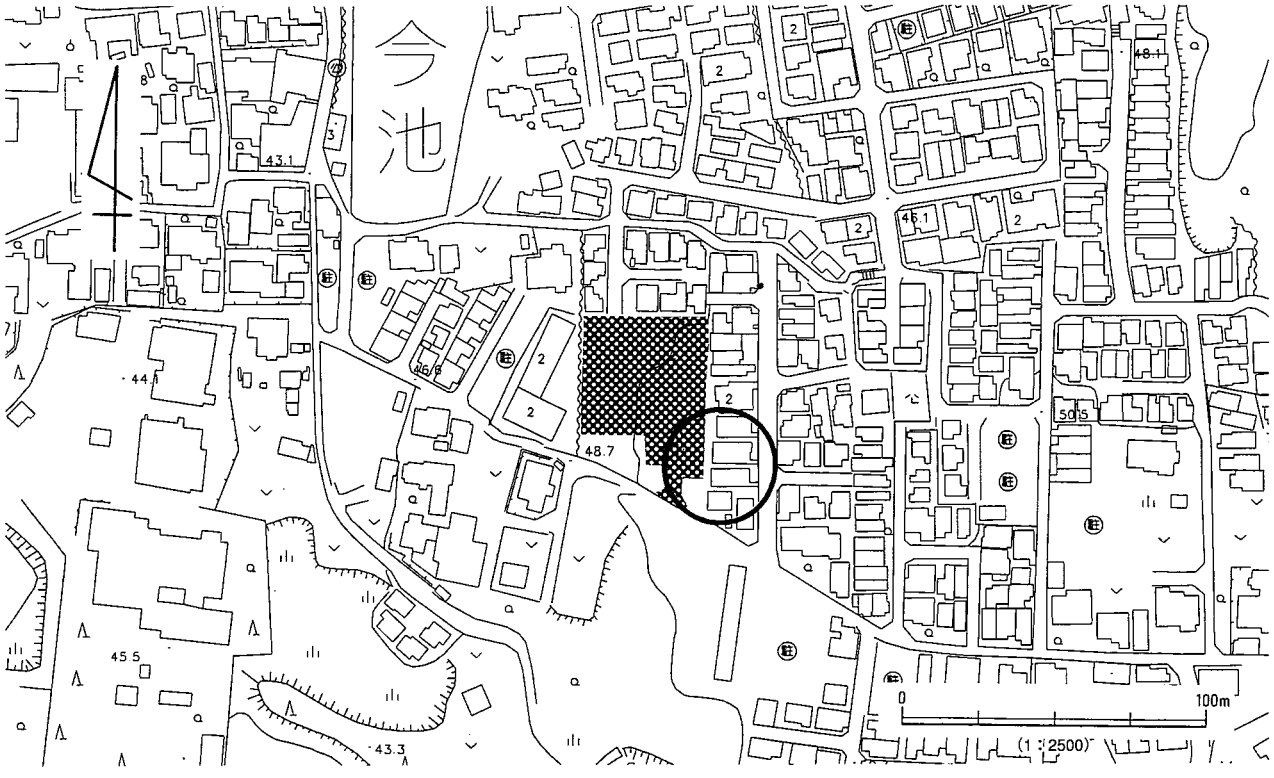


図15　平下遺跡調査位置図

基本層序と遺構

申請地の基本層序は、耕土の下がすぐ赤褐色粘土の地山であったが、申請地の西側において図16の右上に提示した土層を確認した。16の左、A－A′の部分である。層序は、厚さ10cmの表土の下に鈍い黄褐色土が厚さ10cmでほぼ水平堆積していた。その下が地山であった。なお、鈍い黄褐色土からは奈良時代の遺物が2点出土した。

遺構は、工事による掘削面や断面において確認できなかった。遺構が検出できなかった理由として、遺物包含層が西端でわずかに存在したことや申請地に包含層が確認できなかったことから耕作による開墾で削平された可能性が高い。

なお、図16左のEから須恵器が1点表採された。畑の耕作土に混入していた遺物である。

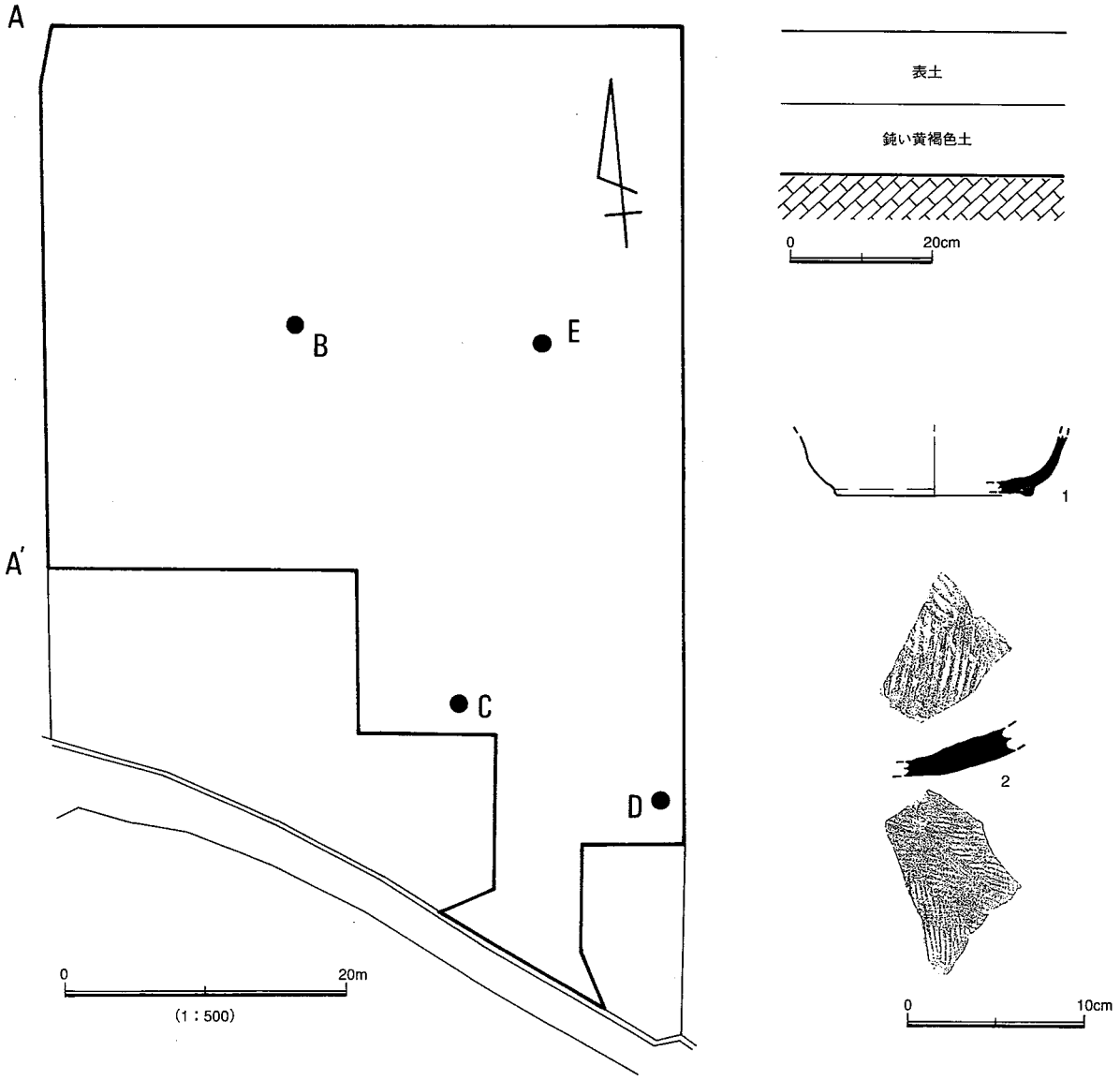


図16　平下遺跡遺物出土地点・断面図と出土遺物実測図

遺物

出土遺物は、須恵器片と土師器片があった。このうち須恵器は図化しえたが、西側端の鈍い黄褐色土から出土した土師器片は5㎝程度の破片であったため図化できなかった。土師器片はカーブが観察されることから椀と思われ、外面に黒斑がある。

図化できた須恵器の内1点は、鈍い黄褐色土から出土したもので図16右下の1に提示した。1は、杯Bであるが生焼けで、淡灰色の色調を呈する。底径10.8㎝、残存高3.4㎝を測る。

図16右下の2の須恵器は、造成された地点からの採集品である。2は、甕の胴部で底部付近の破片と思われる。外面に平行タタキが、内面に青海波文に圧痕が残っている。

まとめ

今回の立会掘調査を実施したところ、よう壁工事で掘削された断面から奈良時代の遺物が数点された。遺物が包含されていた鈍い黄褐色土は、畑地開墾の際に削平が逃れた部分と判断した。鈍い黄褐色土については、遺構の埋土か包含層か現状では明らかにできなかった。したがって、申請地全体には包含層が無く、遺構の検出も極めて難しい状況とはんだんした。

なお、遺跡分布図では調査区の一部は“雨ケ池北古墳”として周知されている。

雨ケ池北古墳については『大阪府文化財地名表』(2001)には小石室、長持形石棺、埴輪、全壊とある。

参考文献

羽曳野市教育委員会2011「平下遺跡」『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成4年度』

栄町遺跡

栄町遺跡の概略

栄町遺跡は、昭和56年に大阪府教育委員会が店舗建設の事前試掘による調査で発見された遺跡で、溝や古墳の周溝などが検出されている。

その後、大阪府教育委員会や羽曳野市教育委員会が実施した調査によって東西200m、南北300mが遺跡の範囲と周知されている。標高31mから33mの中位段丘上に立地し、過去の調査で古墳時代から室町時代にかけての遺構、遺物が確認されている。

大阪府教育委員会の調査で古墳（墳形不明）の周濠が確認され、羽曳野市教育委員会が実施した過去の調査においても埴輪片が出土する地点が散見されることから段丘上に複数基の小型古墳が存在していたことが推測される。古墳の規模を確定できるような資料は発見されていない。

平成９年の調査においても円筒埴輪や形象埴輪が多く出土したが、ここでは古墳の痕跡は認められなかった。飛鳥時代の土塁や掘立柱建物が発見されていることからこの頃に大きな土地改変で墳丘が削平された可能性も考えられよう。同時期の土器棺墓も複数検出されている。

中世の遺構は、高屋城と関連する15世紀の堀である。箱型を呈する堀は幅３m、深さ１mで、堀は人為的に埋め戻されていた。この埋土を観察したところかつて堀に平行して造られた土塁を切り崩した土砂であることが判明した。

今回の調査地（図17のスクリーントーン）は栄町遺跡のほぼ中央に位置し、東隣を平成６年（市内遺跡６年）に、南隣を平成９年（古市ＸＩＸ）に発掘が実施されている。その成果は、前者が５世紀中葉頃の須恵器が伴なう集石遺構が検出され、削平された墳丘の残骸と報告されている。遺物の中には黒斑が有する鰭付円筒埴輪の破片も含まれていた。後者では、６世紀後半の須恵器片が出土する土坑が検出されている。以上のことから当該地まで遺構が広がる可能性が高いと思われた。

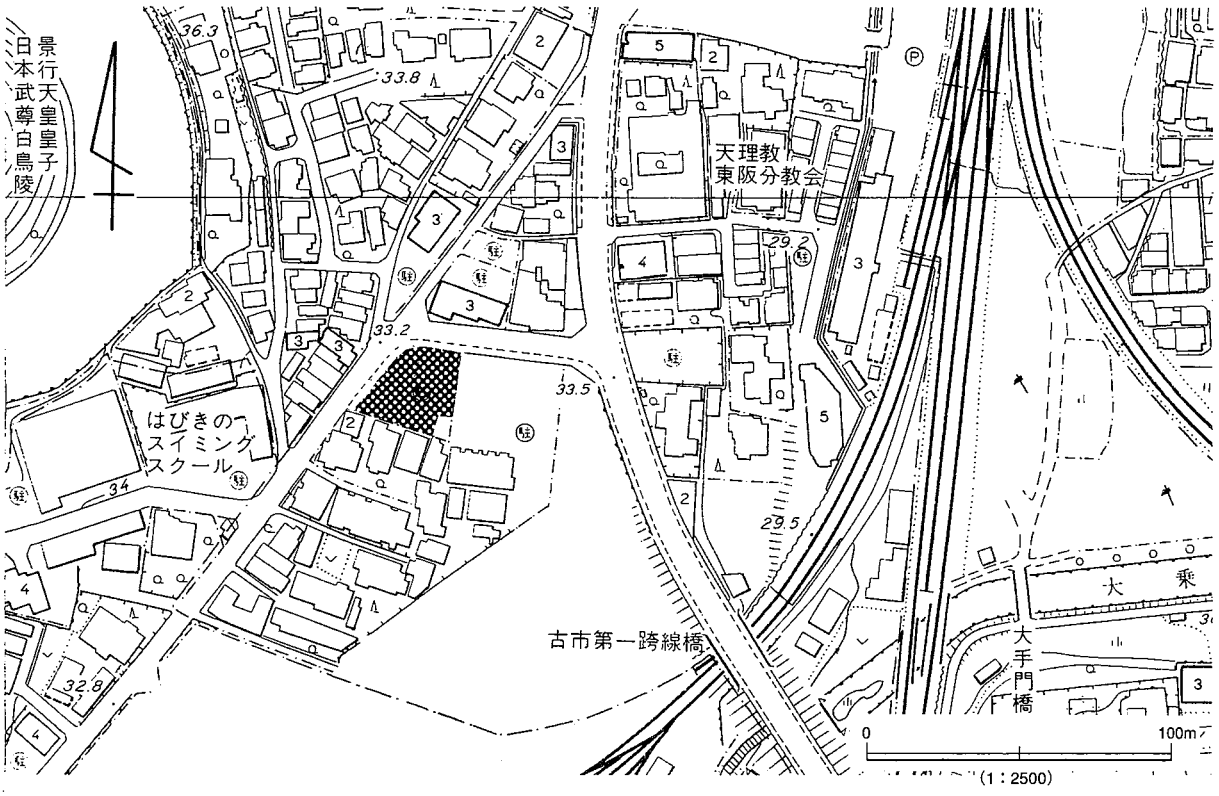


図17　栄町遺跡調査位置図

調査の契機と経過

今回申請のあった羽曳野市栄町691は、栄町遺跡のほぼ中央で立地的には高い場所に位置する。調査前は、駐車場でアスファルト舗装をしていない路地状態であった。

平成22年10月18日に申請があり、同日これを受理した（羽教生社2369号）。届出書に基づいて同年10月22日に試掘を実施した。調査の結果、表土の直下に包含層があり、遺構の存在も高いので基礎部分の調査を実施することとなった。申請地の南側は地山が比較的高い。遺構が削平されている可能性もあった。

調査区は、建物部分１区とサイン支柱部分の２区の２ケ所である（図18）。１区は基礎布掘り部分のみの調査で、北西部は工事車両の通行にあたり調査は見送った。

基本層序と遺構

図19に土層の模式図を提示した。

よう壁部分では、表土（10cm）の下がにぶい黄褐色土が厚さ10cmにわたり堆積していた。層からは古墳時代の遺物が出土する。地山は赤褐色粘土であった。

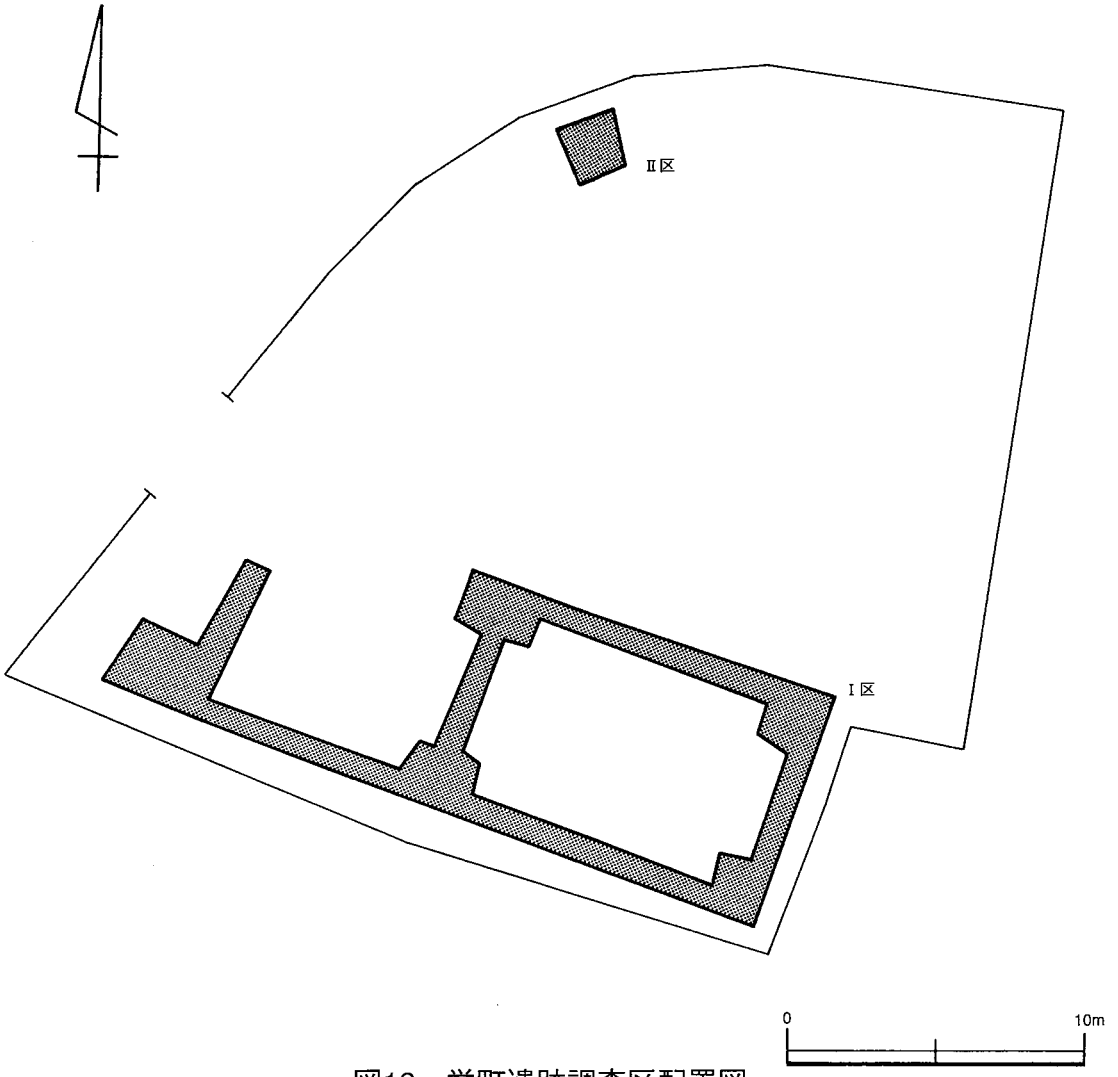


図18　栄町遺跡調査区配置図

遺構

調査区１では遺構面が２面確認できた。上面の遺構が黄褐色土で、下面の遺構が地山で検出できた。

上面の遺構には５条の素掘り溝や東西溝のＳＤ０１のほか柱穴状の円形遺構がある。

素掘り溝ＳＳ０１からＳＳ０５は、調査区を南北に縦断し、溝の心々は1.2～1.5ｍを測る。素掘り溝は便宜上、東からＳＳ０１、ＳＳ０２…と呼称した。規模は、ＳＳ０１が幅0.28ｍ、深さ0.1ｍ。ＳＳ０２は幅0.28ｍ、深さ0.25ｍ。ＳＳ０３が幅さ0.35ｍ、深さ0.13ｍ。ＳＳ０４は幅0.3ｍ、深さ0.3ｍ。ＳＳ０５は幅0.3ｍ、深さ0.33ｍであった。おおむね0.3ｍ前後の幅員を提示できる。確認した長さは８ｍ。溝の断面はＵ字形で底が平らである。埋土は灰黄褐色土の単層である。

ＳＤ０１は、調査区の南西側で検出したやや北に振る東西方向の溝である。北肩を検出し、最大幅0.22㎝を測り、南肩は調査区の南へ広がる。深さ0.5ｍで、埋土は褐色土の単層である。ＳＤ０３を切った状況で検出され、ＳＸ０１を切り込んで掘削されていた。また、素掘り溝と関係は、主軸の角度や遺構埋土が異なるので両者に時期差が存在すると推察できるが、その新旧については本調査区の所見からは断定できなかった。

柱穴状の円形遺構は、調査区東南隅で検出された直径0.15～0.4ｍの深さ0.1～0.4ｍの遺構で柱の痕跡は確認できなかった。遺物も出土せず、狭い調査区から全体の広がりを確認できなかった。

下面の遺構は、溝３条と西方へ下降する落ち込みを確認した。

ＳＤ０１は査区の南西で検出された東西溝である。北側肩のみの検出のため幅員は不明であるが、検出最大幅は1.1ｍである。深さの最大で0.5ｍ、埋土は褐色土の単層である。

ＳＤ０２は、調査区の中央から西寄りで検出された南北溝である。幅1.6ｍ、深さ0.3ｍでＳＤ０１と重複する本来は0.6ｍ程度の深さを有する緩やかな傾斜をもつ。幅も２ｍ程度の溝の可能性がある。灰黄褐色土の埋土である。

ＳＤ０３は、調査区の西寄りで検出された南北溝である。幅0.8ｍで、深さ0.55ｍで断面がＵ字を呈する。埋土はにぶい黄褐色土である。

以上､検出した溝は切り合い関係から新しい順にＳＤ０１→ＳＤ０２・ＳＤ０３→ＳＸ０１となる。

今回確認した遺構のうち最も古いと考えられるＳＸ０１は、調査区の中央から東寄りで検出した落ち込みである。東から西へ傾斜する緩やかな肩は、検出深度は0.6ｍを測る。埋土は暗褐色土の単層であった。調査区の西側の断面土層を観察すると、暗褐色土が確認できることからＳＸ０１の東西幅は11ｍに及ぶことが判断できる。さらに発掘を見送った調査地の北西角は、基礎工事に際して立会を実施したおり掘削壁面に暗褐色土が観察された。このことからＳＸ０１の落ちは西側に広範囲に広がる。落ち込みの底は平らであった。落ち込みの性格につては不明である。

調査区２では、調査面積の制約があり上面の遺構は検出されていない。また、調査区１で確認できた素掘り溝も確認できなかった。

下面の遺構については、現地表面下１ｍで地山が検出され、レベル的には下面の遺構の底部と考えられる。したがって、厚さ70㎝の暗褐色土は遺構埋土であろう。土質や土色は調査区１で検出したＳＸ０１に近い。ただし、感覚的ではあるが調査区１のＳＸ０１と遺物の出土量を比べると、調査区２の方が多く少し違和感を覚える。出土した土器は、大きい目の破片が少なく、形状が明らかにできない小さい破片や高杯の脚部、ミニュチュア高杯が出土している。

調査区２の底面に幅0.55ｍの溝状遺構が調査区西側に接して検出されている。深さ0.2ｍの底が平らな断面形状を呈する。埋土は暗褐色土と土質、土色が同じであった。水が流水あるいは滞水を示す層は見いだせなかった。溝状遺構の主軸は北西－南東で、調査区１で検出したＳＸ０１の肩と直行する位置関係にある。調査区２から遺構の性格を明らかにできなかったので、溝状遺構とした。

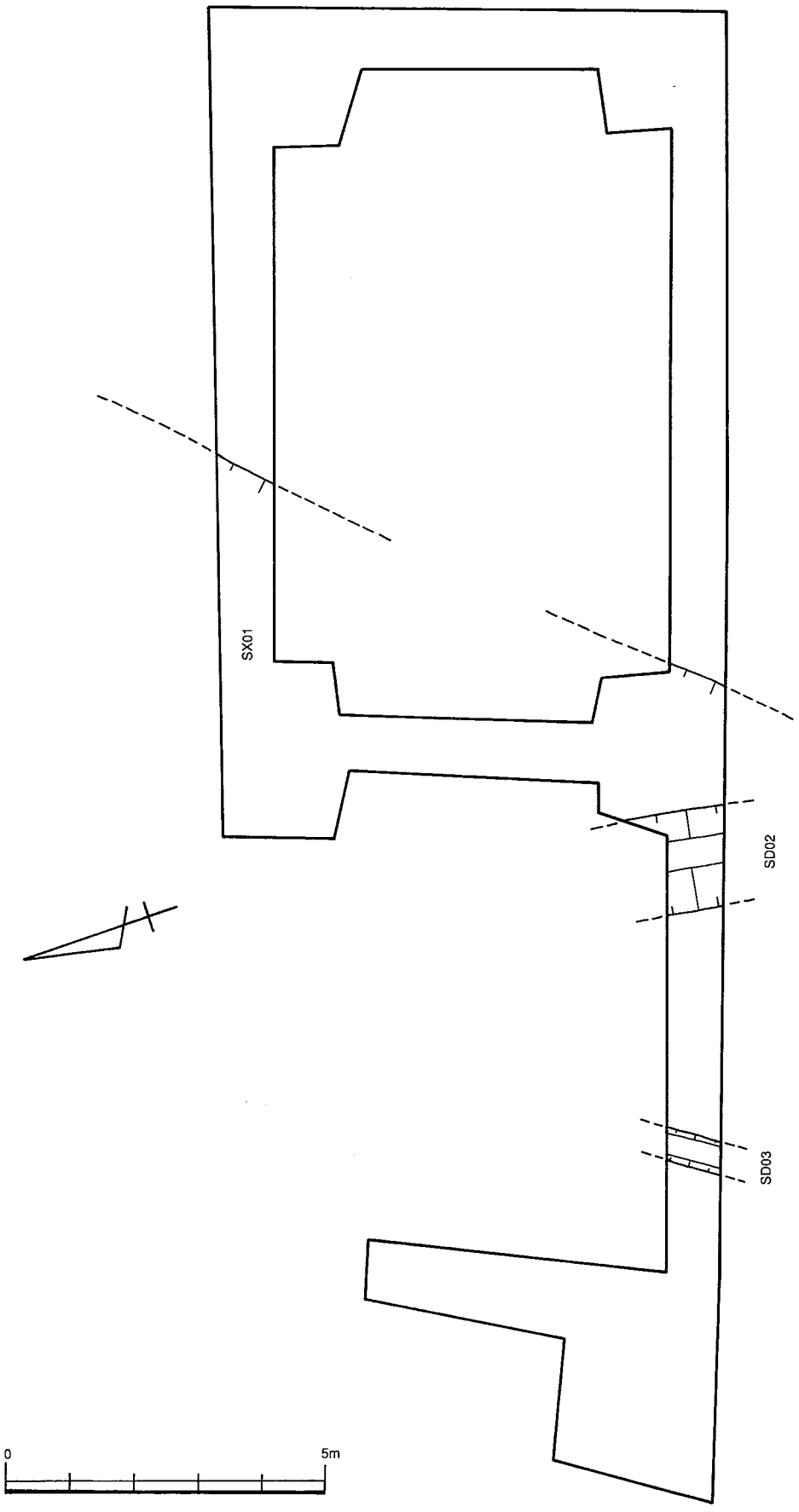


図19　栄町遺跡遺構平面図

遺物

今回の調査では、古墳時代前期から中期の円筒埴輪や形象埴輪、古墳時代から飛鳥時代の土器が出土している。

図20－１は、須恵器の杯身である。口径12.8cm、器高3.1cm。立上がりは短く内傾する。陶邑古窯址群のＴＫ10型式に該当する。調査区１のＳＸ０１出土である。

図20－２は、土師器の坏Ｃである。口径16.8cm、器高6.0cmを測る。口縁端部をやや上方に外反させる。外面はヘラミガキで底部はヘラケズリ。内面２段の放射状文。飛鳥Ⅲ期と考えられる。

図20－３・４は、ミニチュア高杯である。４は完形で杯部口径8.9cm、底径6.5cm、器高12.2cmを測る。脚の内面には布目が残る。３は脚のみで杯部口縁部と脚部端は欠損する。

図20－５は、高杯の脚部で、杯部は欠損する。残存高7.9cm、脚部径9.0cmの法量である。脚部の先端の残存状況から杯部の接合方法はソケット挿入式である。

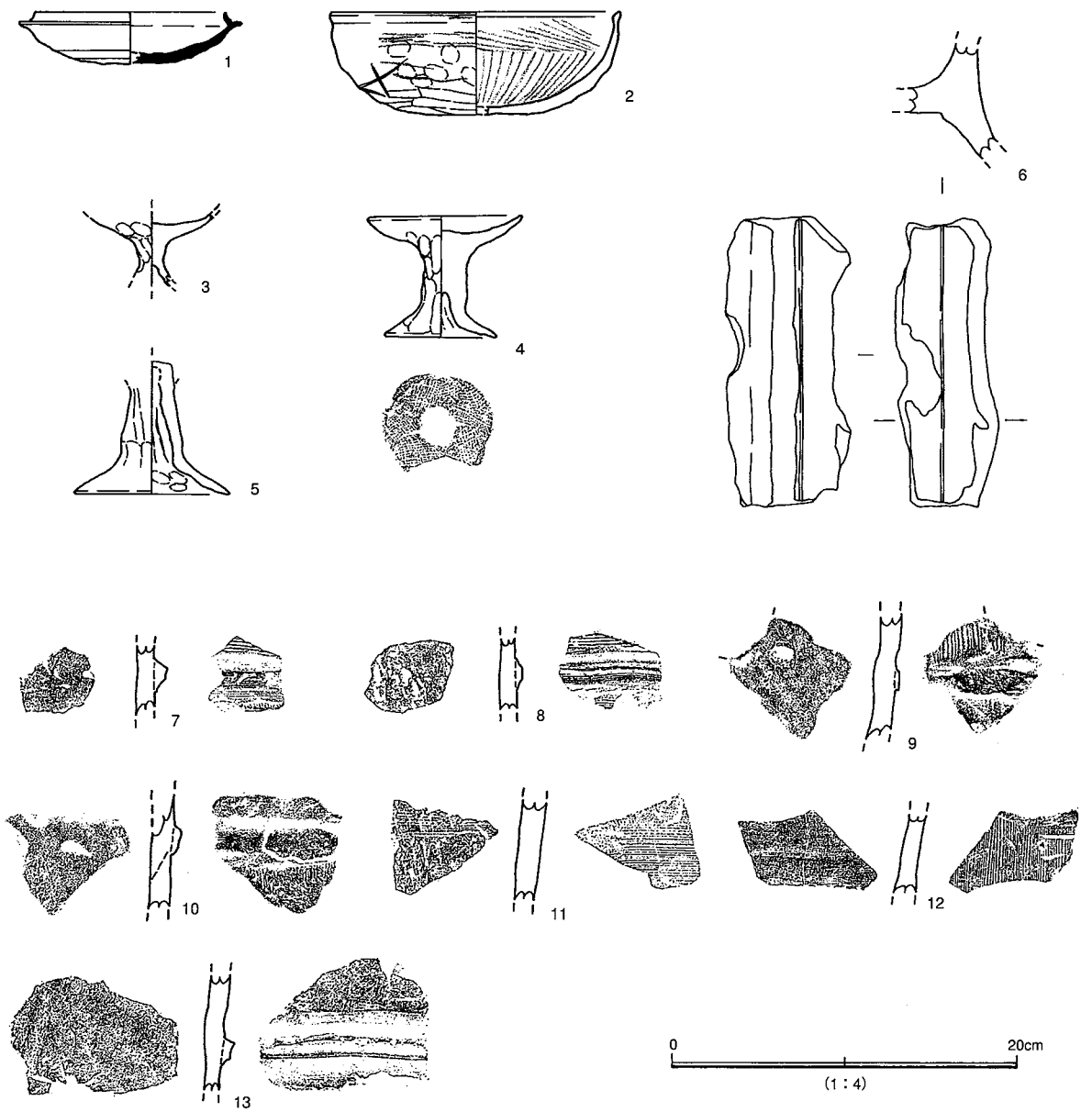


図20　栄町遺跡出土遺物実測図

埴輪は実測可能な８点を抽出した。

６は、縦17cm、横６cm大の形象埴輪の破片で、特徴的な段差の表現から鰭付盾形埴輪と考える。類例資料は、羽曳野市内では五手治古墳をはじめ西山古墳や茶山遺跡で確認されている。古墳時代前期の属し、今回の調査地では確認できなかった鰭付円筒埴輪に共伴する。栄町遺跡内に未確認の前期古墳が存在する可能性を示唆する資料と言える。

７～13は無黒斑の円筒埴輪である。突帯を含む胴部片は７、８、９、10、13である。突帯は台形とやや扁平な形状を呈する。９の破片には円形スカシ孔が観察される。

出土した円筒埴輪は外面調整から川西編年のⅣ期とⅤ期に考えられる。

まとめ

今回の発掘調査では古代から古墳時代の遺物が出土する大きな落ち込みが検出された。その性格については断定ができなかった。

第１調査区と第２調査区で確認した暗褐色土は落ち込みの埋土とするとかなり広範囲となり、今後の調査進展に期待したい。

郡戸東遺跡

位置と環境

郡戸東遺跡は、昭和62年に羽曳野市教育委員会が実施した郡戸字堂筋442番の開発に伴う試掘調査によって新規発見された遺跡である（古市遺跡群Ⅸ）。過去の調査では溝や土坑などが確認され、出土遺物には13世紀から14世紀に属する瓦器などが出土することから中世の集落跡と考えられる。

遺跡は羽曳野丘陵の西麓を流れる東除川左岸の中流域の低位段丘上に立地する。現状は水田であり、宅地化に伴なう調査は遺跡の範囲はもとより、範囲外に及ぶことがあった。そのため、平成２年に遺跡の拡張により東西300m、南北350mの範囲が周知されている。

遺跡範囲の拡張により、出土する遺物にも変化が現れ出した。平成21年の調査で中世遺物に混じり６世紀代の須恵器杯身が出土した（羽曳野市内遺跡調査報告書－平成20年度－）。中世の集落遺跡と考えられていた郡戸東遺跡の生活の営みは、古墳時代に遡ることが判ってきた。

平成22年４月に今回調査区の北側で個人住宅からＴＫ208型式の把手付椀と12世紀の瓦器が出土し、従来知られている集落の時期を古くさかのぼる資料が出土したことになる（古市遺跡群ＸＸＸⅡ）。

調査の契機と経過

郡戸339－１の一部、400－７の一部における宅地造成に係る埋蔵文化財発掘届書が提出され、平成22年４月19日付けで受理した（羽教生社第2044号）。

申請地は文化財分布図による郡戸東遺跡の南半にあたり、地形的には低位段丘の東縁にあたる。また、平成21年に当該地の北隣で多くの中世遺物とともに古墳時代中期の須恵器が出土した調査区がある。今回の調査区に中世遺物の包含層が南へ広がっている可能性が高く、須恵器などの古墳時代の遺物出土も期待するところであった。

協議により平成22年４月26日を届出に基づき試掘調査を実施することとなった。調査は掘削深度が深くなる道路部分に１ｍ×３ｍの南北トレンチ３ケ所を予定し、掘削は重機により地山面まで掘り下げることになった。

調査の結果、耕土を除去すると須恵器や土師器の破片が出土する遺物包含層を確認し、地山面で遺構が検出される結果となった。試掘成果から計画道路における埋管工事は、検出した遺構に損傷が生じるため掘削予定箇所の調査を実施の方向で協議に入った。

協議の結果、道路の埋管部分付近に調査区を設定することと耕作土は調査に入る前に搬出することを取り決めた。また、一部よう壁工事も平行して実施することとなった。したがって調査は耕作土の搬出が終わる５月末以降、よう壁工事についても立会を実施した。そして発掘調査は覚書交換ののち６月７日に入った。試掘成果に基づき、申請地の東寄りに幅２ｍ、長さ43mの南北方向の調査区を設定し、重機による掘削を実施した。

ところが、調査の開始２日目に申請地の範囲外で須恵器の甕や土師器片が耕土搬出後の露頭した床土に散布しているのが確認された（図21の右図Ａ）。調査地は、南北に長い1枚の水田であるため調査区外の耕作土も除去されていた。したがって宅地造成の工事による損壊が生じないため現状のまま保存することにした。ところが、調査と並行して進行していたよう壁工事の工事車両により土器片の破損が進行し始めた。そこで露出している遺物については採集することとなった。

調査は同月９日まで実施し、工事の進行上で埋め戻し作業をせずに終了した。

基本層序と遺構

調査区の基本層序は、耕土、床土の下に厚さ５～10cmのにぶい黄橙色粘質土がありその下が地山（明黄褐色粘質土）であった。にぶい黄橙色粘質土は瓦器、須恵器、土師器の破片を含む包含層である。

遺構は地山面で検出した。調査区の北寄りと中央で東西溝が２条検出された。調査区の北寄りではさらに土坑と柱穴が確認された。柱穴は南寄りでも確認できたが、調査区中央では空白になる。

溝は、２条でいずれもの東西方向で、北をＳＤ０１、南をＳＤ０２とした。

ＳＤ０１は、断面形態が逆かまぼこ形で幅50～60cm、深さ10cmの法量をもつ。埋土は白灰色粘質土の単層で、溝底のレベルから南西方向に流れる。出土遺物は、須恵器の杯とハソウの２点以外は出土しなかった。

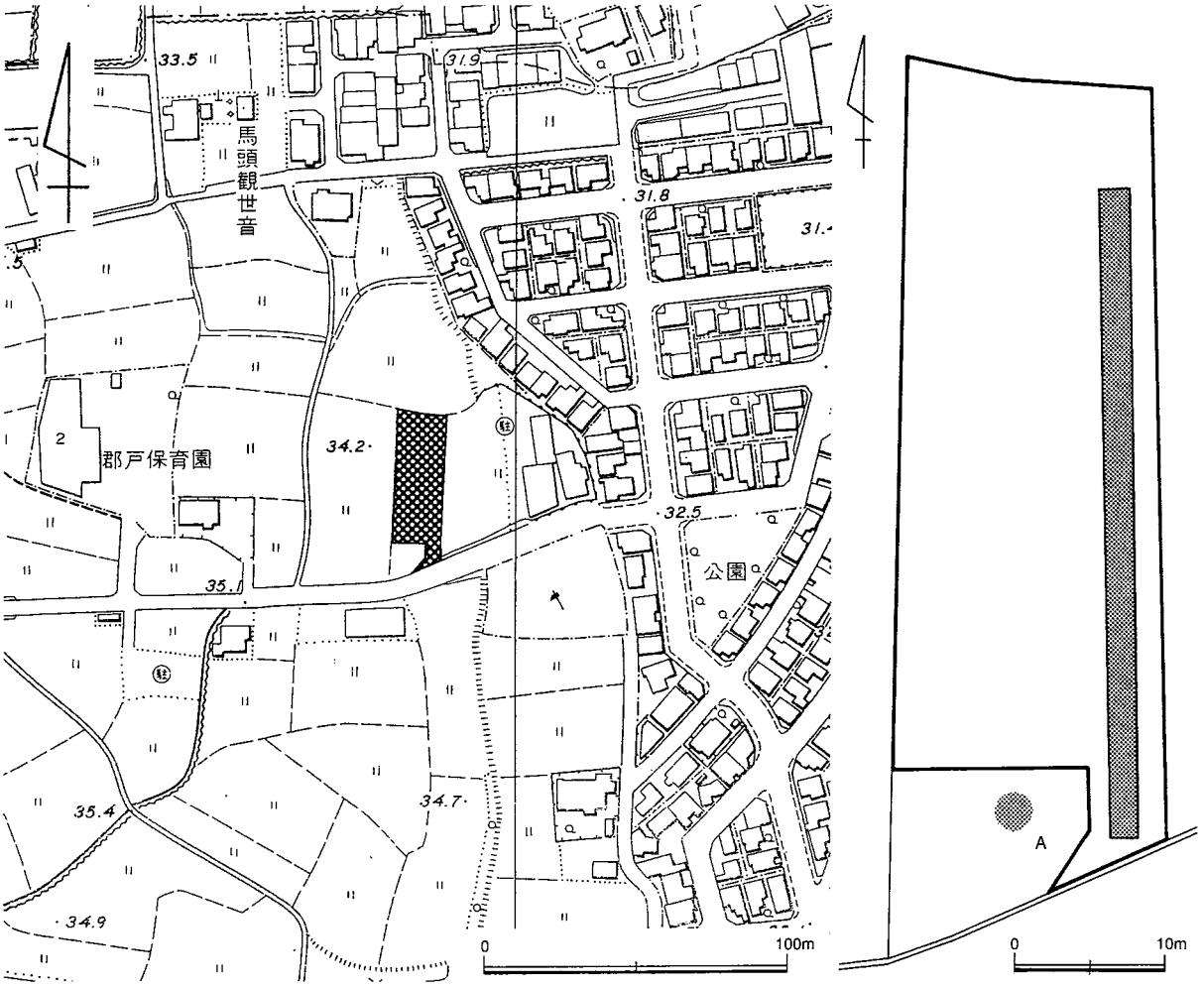


図21　郡戸東遺跡の調査位置と調査区配置図

ＳＤ０２は、断面形態が逆かまぼこ形を呈し、幅0.8m、深さ0.15mの法量を測る。埋土は明褐灰色粘質土の単層であった。溝底のレベルから北東へ流れる。遺物の出土を確認できなかった。

ＳＫ０１は、調査区の北端から南２ｍで南北幅1.2m、検出長さ1.25mである。深さ0.75mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の単層であった。古墳時代の須恵器が出土した。

柱穴は総数21基検出され、平面形態は方形、円形あるいは楕円形であった。その大きさにバラつきが認められる。柱穴埋土は褐灰色粘質土が主であったが、その他の埋土は、形状や法量とともに表５にまとめた。

表5　柱穴一覧表

柱穴番号	掘り方形状(法量)	土　色(深さ)	出土遺物	調査時No.
1	楕円形(22×34)			
2	楕円形(28×35)			
3	隅丸方形(57)			
4	円形(48)	灰白色粘質土(29.5)	須恵器(1)・土師器(1)	pit1
5	長方形(35×48)		土師器(3)	pit2
6	円形(25)	27		
7	方形(35)			
8	楕円形(33×45)	16	土師器(3)	pit3
9	楕円形(22×30)			
10	円形(18)			
11	方形(26)			
12	円形(23)			
13	円形(27)			
14	円形(21)	26	黒色土器(1)	pit4
15	円形(18)			
16	円形(26)	22	須恵器(1)・土師器(4)	pit5
17	楕円形(18×21)			
18	隅丸方形(40×42)	8	須恵器(2)・土師器(4)	pit6
19	方形(74×82)			
20	方形(57)			
21	楕円形(20×25)			

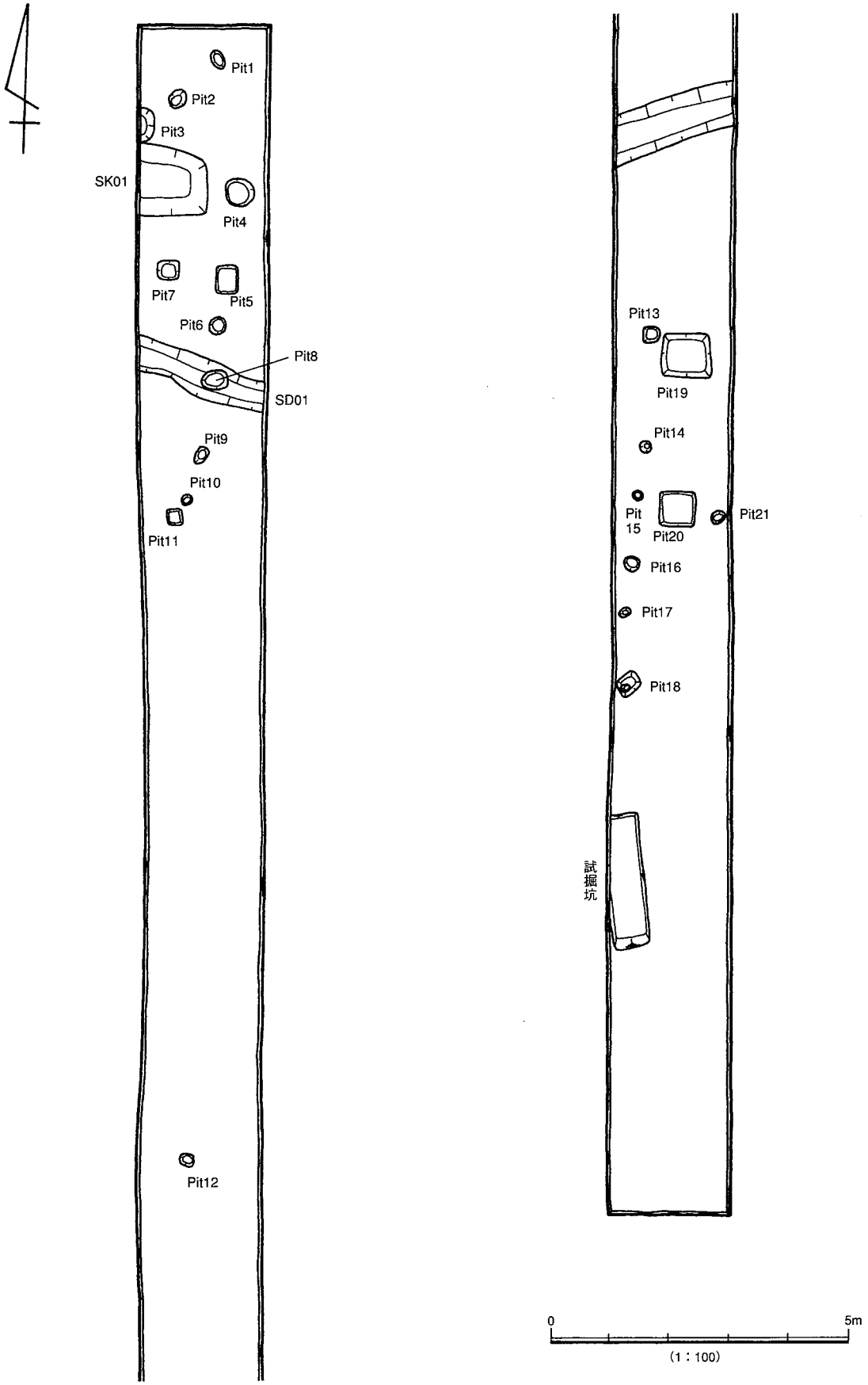


図22　郡戸東遺跡遺構平面図

出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、須恵器や土師器、黒色土器を確認している。これらの遺物は、検出した遺構の他、包含層（にぶい黄褐色粘質土）から出土しているが、調査区の北端より南へ５ｍの範囲に集中する傾向にある。その出土した数量は、今回の調査で最多の92片（須恵器21片、土師器71片）である。今回図化しなかった包含層出土の遺物の中から代表的な資料を図版八の下に提示した。

33は、土師器の碗である。口縁部片で、内外面にナデ調整を施している。古代末に帰属する高台が付く椀と思われる。34は須恵器の長頸壺である。頸部付近の破片で口縁端部は欠損する。35は土師器の甕である。「く」の字状に折れる口縁部は、端部を平坦に撫でる。36は、東播系の捏鉢である。口縁端部の形状から第Ⅱ期第２段階の13世紀前半に比定される。37は、瓦器片である。口縁端部が僅かに遺存する椀部は深い形態を示す。内外面にミガキが見られ、13世紀代の和泉系瓦器と思われる。今回の遺物の出土傾向として総じて中世の遺物が少ないことも指摘できる。38は平瓦片である。凸面に縄目が見られる。焼成は須恵質に近い。奈良時代末葉であろうか。39は竈である。突帯が剥がれている。40は、円筒埴輪の破片である。破片は8.1cm×6.7cmの大きさで。突帯を含む胴部にあたる。外面調整がタテハケで終了すること、突帯の断面が扁平で貼り付けが粗雑であることから川西編年のＶ期にあたり、６世紀前半に位置付けされる。

31は、平面プランが不明瞭な遺構から出土した黒色土器の口縁端部である。Ｂ類と思われ、柱穴14から出土した黒色土器と近い製作年代が考えられる。

ＳＤ０１のからは図23－１の蓋杯と同図２のハソウが出土した。杯蓋は、全体の二分の一が欠損するが、口径13.0cm、器高9.4cmの法量を呈する。口縁端部に段をもち、天井部はやや平坦である。色調は灰白色を呈する。ハソウは完形に近く、口径10.5cm、器高9.9cmの法量をもつ。色調は青灰色を呈する。胴部は上位に最大胴径をもち、丸い肩部分の直径は10.0cmを測る。波状文と列点文を上下に付している。いずれも陶邑編年のＴＫ２０８型式に該当する。

３は、ＳＫ０１から出土した須恵器壷である。口縁部と底部付近を欠損する。最大胴径を上位にもつ。頸部の直径10.6cm、肩部の直径は21.2cmで、残存高10.5cmを測る。外面は縦方向の叩きを施した後にカキメで消している。内面は青海波が残る。頸部付近の内外面はヨコナデが見られる。色調は青灰色を呈する。破片は４分の１が残る。

４は、須恵器壷で、調査区北端の遺構面直上で出土した。包含層を人力で掘削している際に発見し周囲を精査したが遺構を確認することができなかった。口縁部は欠損する。丸味をもつ胴部に平底に高台をもつ。底径4.3cmの法量を測る。

柱穴の遺物は、検出できた21カ所のうち遺物が出土したのは６カ所であった。遺物は、小片のため図化できなかったが柱穴の帰属時期を判定するために遺物の概要を参考までに表５に提示しておいた。この表中で器形が判明するのは図版八の32で掲載した柱穴14の黒色土器だけである。口縁端部のみが遺存する椀である。11世紀代と考えられる。

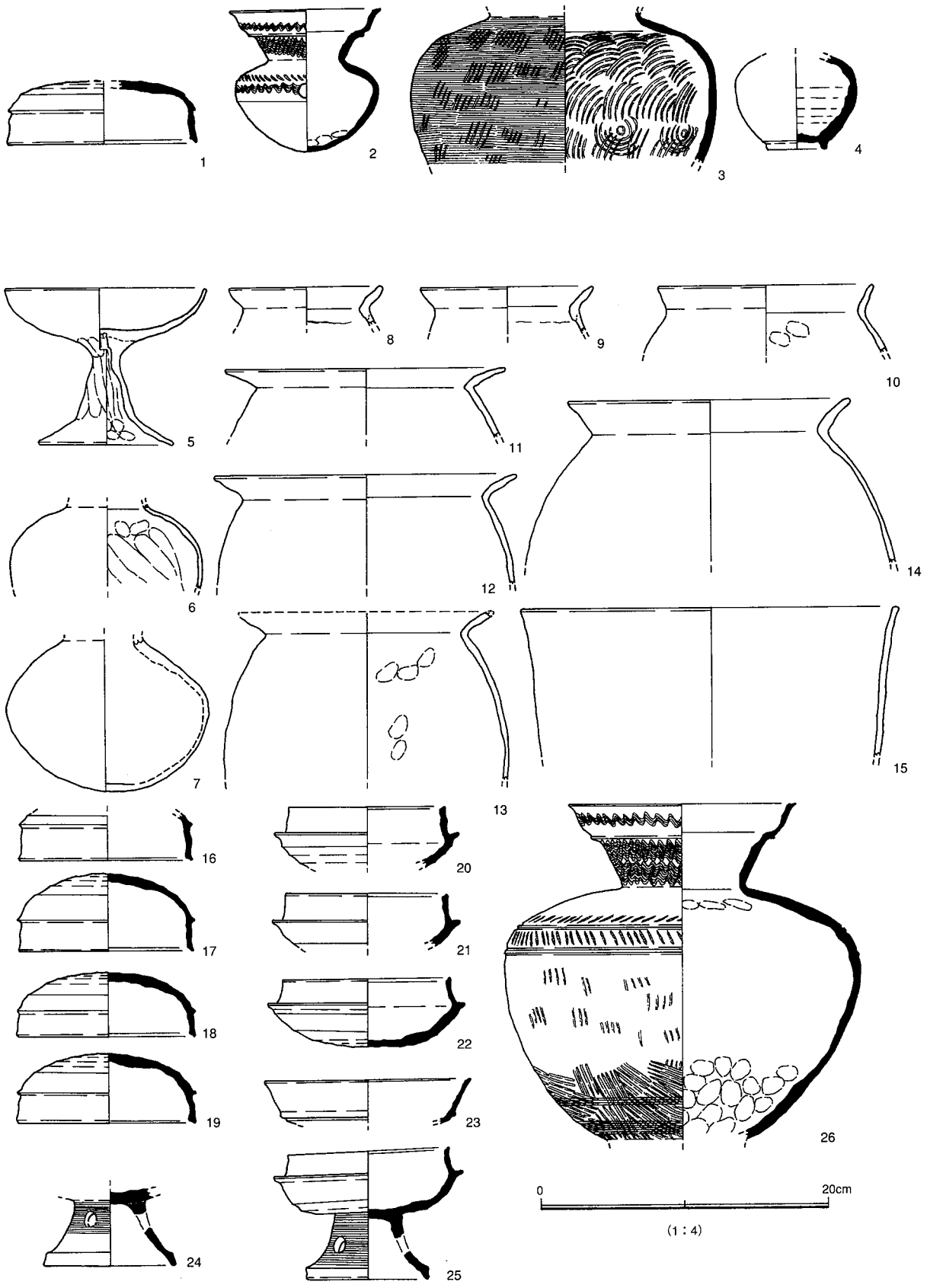


図23　郡戸東遺跡出土遺物実測図（一）

土器溜りから出土した遺物は、図23の５～15は土師器で16～30まで須恵器である。

５は、高杯である。器高14cm、杯部の口径14.0cm、脚部径10cmの法量をもつ。色調は橙色を呈する。

６は、直口壷で、体部下半部と口縁部が欠損する。７も直口壷で体部はほぼ完形に接合できた。肩部付近の内面は粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。

８～１４は、甕の口縁部で、口径で小型10cm、中型15cm、大型20cmの３つに分類できる。中型とした10は、残存率の高い頸部の復元径が14cmになることから大型甕に属する可能性もある。色調はにぶい橙色と橙色に別けられる。頸部断面が「く」の字を呈し、逆ハの字に外反する口縁部で端部は丸く仕上げる。体部は上半のみが遺存し、肩部を張る資料がないので最大胴径は中央にくる可能性が高い。復元した胴径は20cmから25cmで全体の形態は球形を呈するものと考えられる。

15は、甑の口縁部から体部中央あたりに至る破片である。内外面をナデ調整を施す。破片では把手は確認できない。

16以降は須恵器である。16から19は蓋杯。須恵器の身は20～22である。

23は、無蓋高杯の杯の口縁部である。復元した口径は14.2cmで、残存高は3.0cm。

24と25は、有蓋高杯である。24は杯部が欠損する。これに伴なう蓋は周辺から確認できなかった。

26は、形態的には大型ハソウに酷似するがハソウ特有の孔が見たらないのでここでは壷とした。口径16cmの口縁部をもつが、底部が欠損する。破損部分にタタキ痕があるので底部は円板であった可能性が高い。残存する器高は23.3cmを測る。

27は、遺存最大体径62.5cm、遺存する高さ23.5cmを測る甕の底部である。平底で、底径は8.5cmを測る。外面は、平行タタキを密に施し、部分的にカキメでタタキ痕を消している。内面は同心円文をかすかに残る程度の丁寧なナデ消しを施している。底部付近は指オサエが観察できる。法量的に30の大甕に近い。

28は、体部の肩部の近い位置に貼り付けの耳の痕跡が１ケ所確認されたが、全周の三分の一の破片からは耳の数は確定できない。復原し得た最大の胴径32cmで、底部は丸底風であった。残存する高さは19.5cmを測る。外面は、平行タタキを施したのちに部分的にカキメを施す。内面は底部付近に指オサエが観察できる。その他は撫でていた。

29は、尖り底に近い甕の下半部である。残存する体部の高さは17.5cmで、復原した胴径は最大で38cmを測る。外面は平行タタキを縦位に施されていた。部分的にカキメが見られる。内面は同心円文が見られた。底部内面は、当て具の凹凸が顕著に残る。

30は、最大胴径が80cmを超える大甕で、上部の半分以上が遺存する。肩部が張る体部に口径43.2cm、口縁部高15.8cm、頸部径35.2cmを測る口縁部が付く。口縁端面は肥厚して丸く、やや内傾気味である。体部の残存高は79.4cmで、胴径は中央で87.5cmを測る。この体部と類似する色調と焼成の破片が存在する。破片は平坦で、その形状から底部とも思える。図化はしなかったが底部であれば平底の大甕が復原できよう。

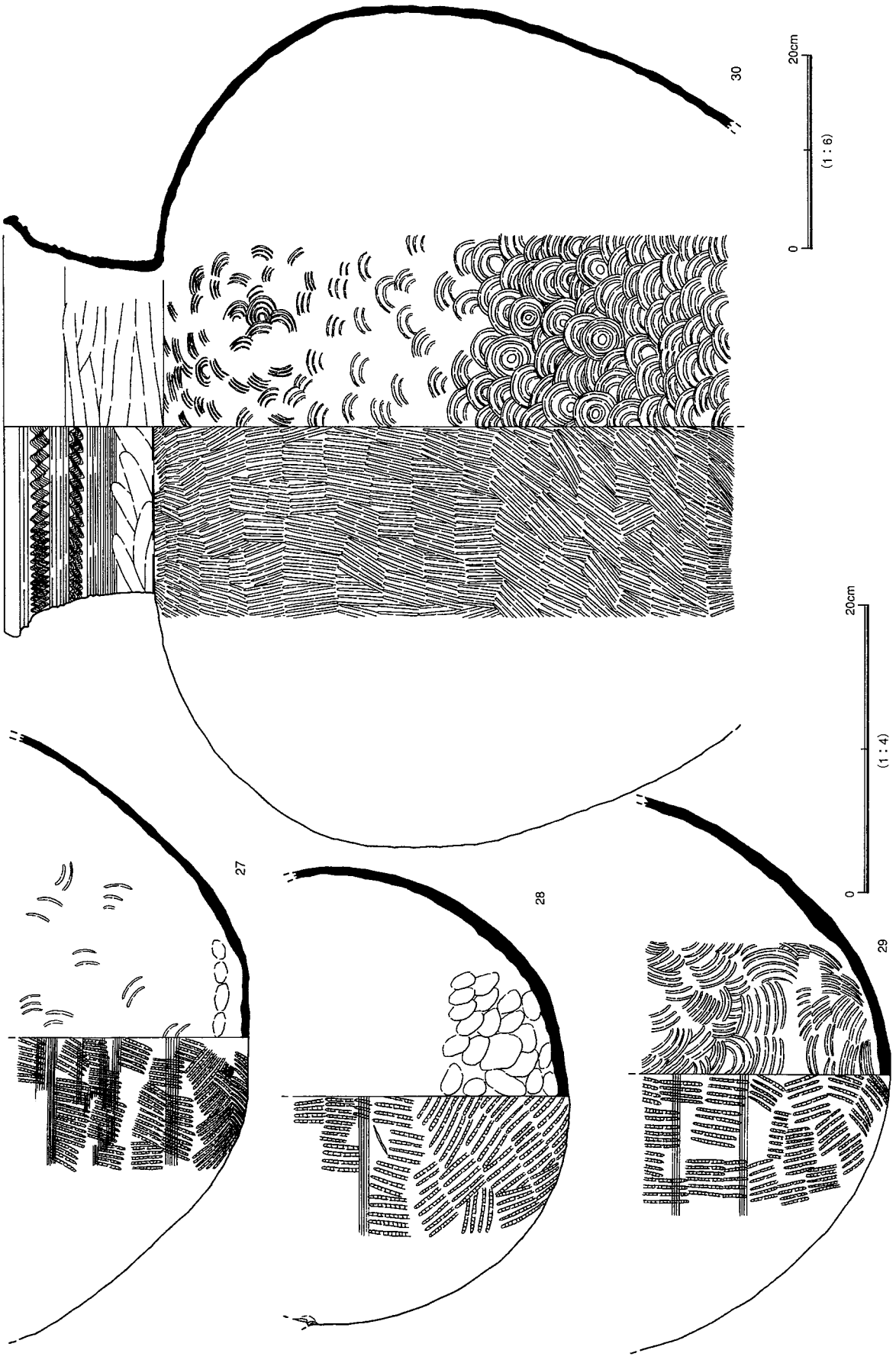


図24　郡戸東遺跡出土遺物実測図（二）

調査成果

今回の調査成果で特筆できたことは、中世の集落遺跡である郡戸東遺跡において、古墳時代から平安時代の遺構遺物を初めて確認したことである。このことにより東除川の西岸で古墳時代（5世紀中から6世紀）、古代後期、中世の3つの時代が断続して存在することになった。土器の様相から継続することなく集落が断続して営まれる様相が遺物から考えられる

参考文献

羽曳野市教育委員会1988「郡戸遺跡」『古市遺跡群Ⅸ』
羽曳野市教育委員会1991「郡戸東遺跡」『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成2年度－』
羽曳野市教育委員会2011「郡戸東遺跡」『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成20年度－』
羽曳野市教育委員会2011「郡戸東遺跡」『古市遺跡群ＸＸＸⅡ』

西浦十二遺跡

位置と環境

西浦十二遺跡は、平成22年７月に実施した試掘調査で遺跡の存在が確認された。現在のところ申請地の2998㎡が遺跡の範囲と周知している（図２の①）。

遺跡の立地は、『羽曳野市史別巻』によれば羽曳野市域地形分類図では氾濫原Ａに立地する。ここのある氾濫原とは、洪水の繰り返しよって形成された地形と定義されている。Ａ、Ｂの標記は、歴史時代を通して洪水の危険にさらされることがあまりなかったところＡに対して、しばしば洪水の被害をうけている氾濫原Ｂと二分している。なお、調査区の東200ｍに改修された大乗川が北流する。調査当時の現況は水田で、標高30ｍである。

周辺の遺跡は、西側に西浦ツヅミ田遺跡（平成11年新規発見）と蔵之内東遺跡（平成７年新規発見）が位置する。両遺跡とも羽曳野丘陵東斜面から派生する扇状地上に立地し、東西0.4km、南北１kmに渡る標高37ｍ付近である。西浦十二遺跡との比高は７ｍ程度低く、今回の調査区周辺でも遺跡の存在が確認できなかった地区でもある。

500ｍ南には尺度遺跡が存在するが、西浦十二遺跡と同じ地形分類であるから氾濫源にあっても微高地においては生活の痕跡が認められるようだ。このことはさらに標高28ｍ付近で発見された古市鳥飼遺跡でも同じことがいえる。

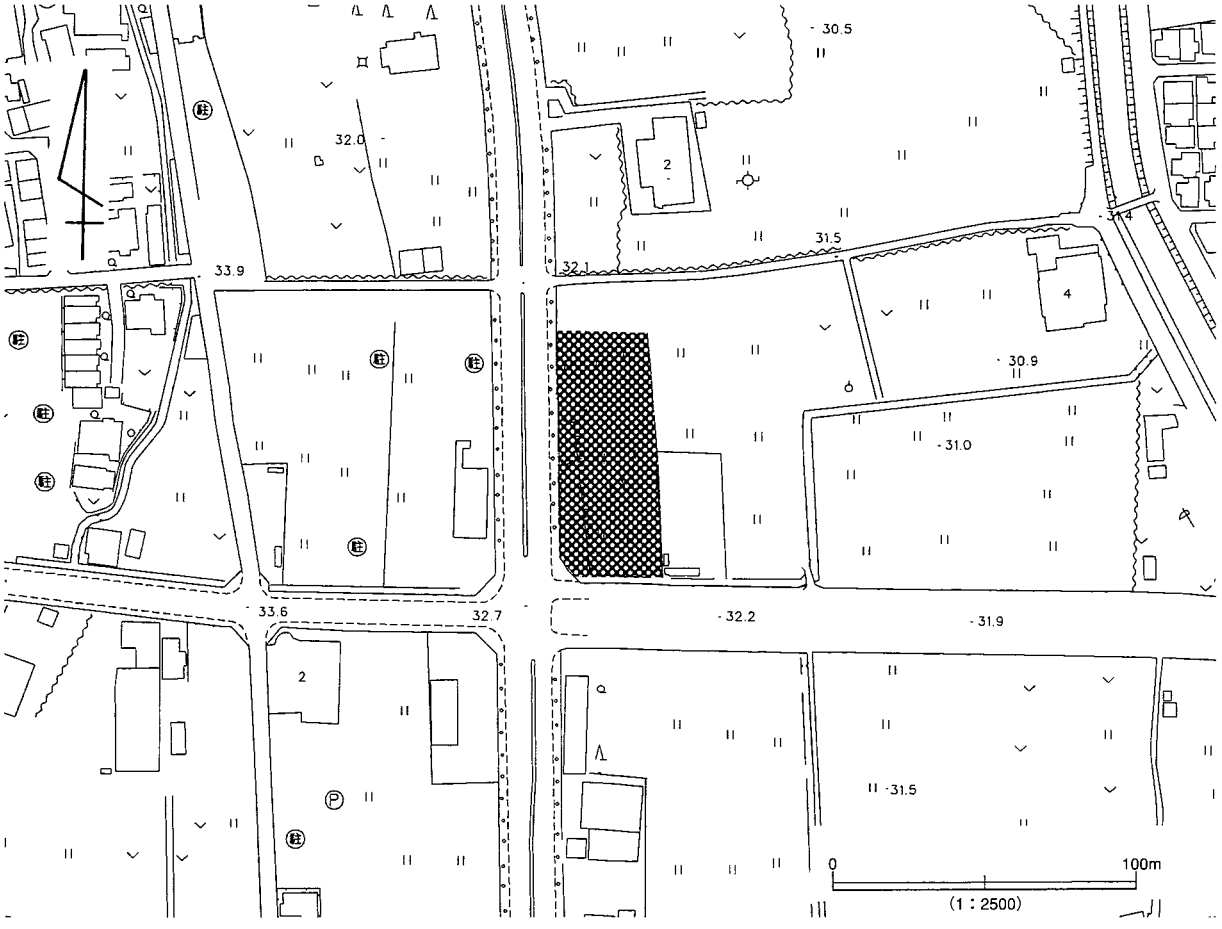


図25　西浦十二遺跡調査位置図

調査の契機と経過

図25の地形図にスクリーントーンを貼った部分、西浦２丁目1868、1869－１、1870－１、1872－１において「店舗新築の建設に係る試掘調査依頼書」が提出された。平成22年２月25日付けのことで、同日これを受理した（羽教生社第2430号）。

申請地は、文化財分布図では遺跡の範囲外である。先述したように当該地は、地形分類の氾濫原にあたり遺跡の存在が希薄な地域であると考えられた。しかし、開発の面積が広いこともあり試掘調査の実施方法について協議したところ、平成22年７月29日に試掘調査に着手することになった。

申請による造成工事は、現況の水田に盛土をするもので設計上は建物の基礎については工事による遺構の損壊の恐れは無かった。しかし、当地の状況確認のために今回最も掘削が深くなる浄化槽部分に調査区を設けることとした。さらに、包含層の範囲を確認するために申請地内の５ケ所に東西１m、南北２mのトレンチを設けた。図26に示した黒塗り部分が調査区に位置である。

試掘調査の結果、遺物量の多寡はあるものの各トレンチ内で遺物包含層を確認したことにより遺跡の存在を確定できる結果となった。

さらに数日後、申請地の南側にある水路の工事に際して立会を実施したところ、掘削した南側断面に遺構が露頭する状況に至った（図26のＡ－Ｂ）。このことにより土地所有者から文化庁あてに遺跡発見届出が提出された。

なお、一連の流れを覚書として列挙する。土地所有者からの遺跡発見の届け出（第96条１項）は平成22年８月24日付けで提出され、同日に収受した（第2289号）。羽曳野市教育委員会から大阪府教育委員会へ字名から名称を西浦十ニ遺跡（羽曳野市遺跡番号201）として新規の遺跡とした。平成22年９月２日に大阪府教育委員会から羽曳野市教育委員会へ「遺跡の発見について」通知（教委文第11－12号）、教育長から土地所有者へ「遺跡の発見について」伝達（羽教生社第2306号）を平成22年９月６日付けで伝達をおこなった。

基本層序と遺構

試掘調査で確認した本調査区の基本土層は、図26の右に提示した略図のとおりである。上から耕作土（20cm）、床土（３cm）、にぶい黄橙色砂質土（10YR７／２）（27cm）、褐灰色粘質土（５ＹＲ４／１）（10cm）である。地山は黄褐色粘質土であった（図26）。標高30.4m付近である。

浄化槽部分の調査では、耕作土から60cm下で地山である黄褐色粘質土を確認した。調査断面に弥生土器片が混入する浅い落ち込みを土層で確認した。その上に厚さ10cmの褐灰色粘質土（遺物包含層）確認している。落ち込みの性格は、今回の調査では判断できなかった。

落ち込み以外の遺構は、申請地の南端で検出した溝状遺構や柱穴が検出されているが、詳らかでない。

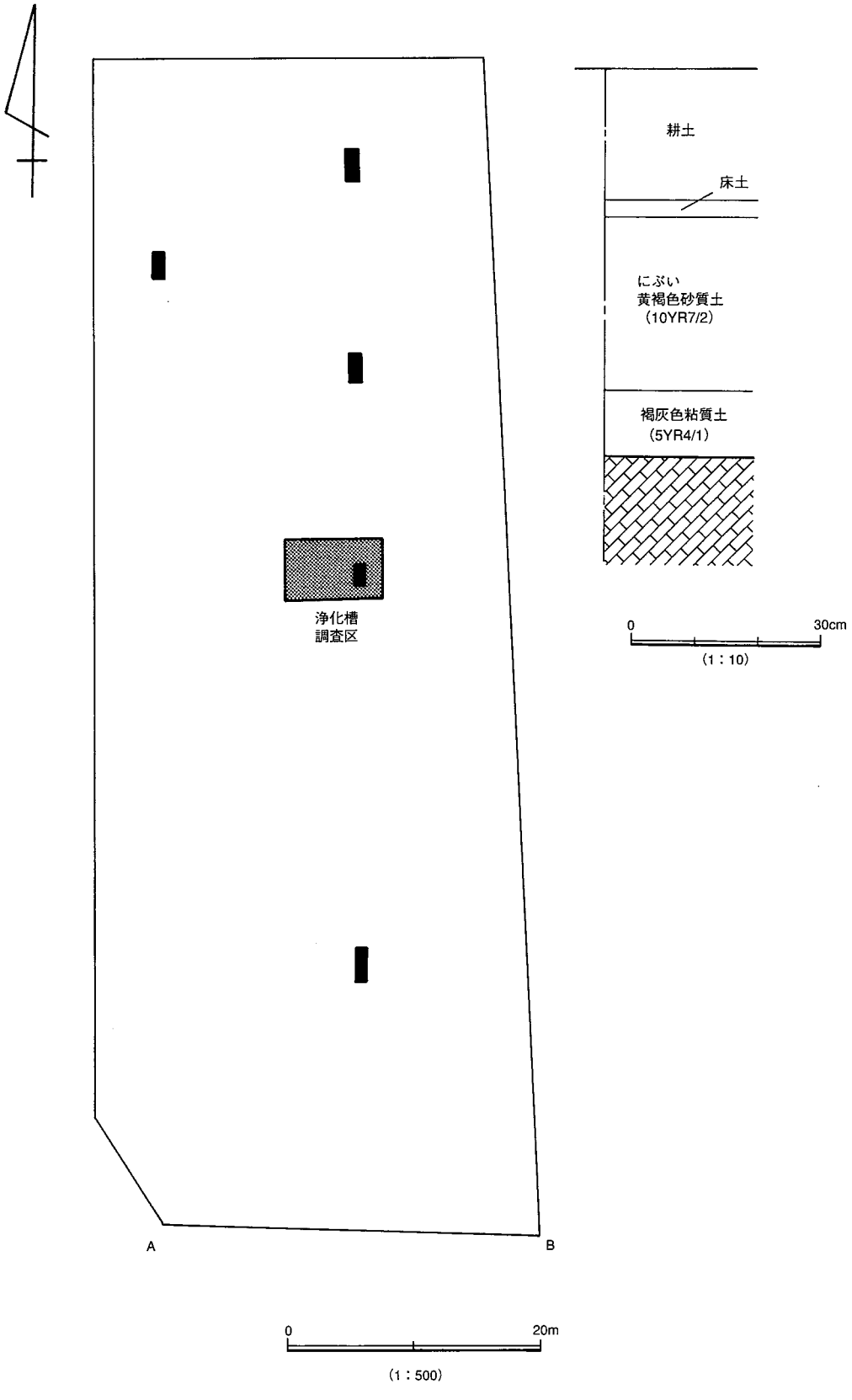


図26　西浦十二遺跡調査区配置図と土層断面

出土遺物

今回の調査では、弥生時代と飛鳥時代から奈良時代前半と考えられる須恵器や土師器、中世の土器が出土した。図化し、図27に提示した。

1は、弥生土器の甕で、底が遺存する。底径4.1cmを測る。Ⅴ様式か。

2は、弥生土器の高杯である。13.5cm。

3は、須恵器杯蓋。天井部のみ遺存する。丸味をもち、外面は部分的にヘラケズリを施す。6世紀中頃と考えられる。

4は土師皿である。法量は、口径10.6cm、器高1.8cmを測る。白色系の土師器で、口縁部に強いヨコナデを施す特徴を有する。

5は瓦質の甕で頚から肩部分にあたる。

6は平瓦片厚さ5cm、凸面ナデ。凹面は布目が確認されている。

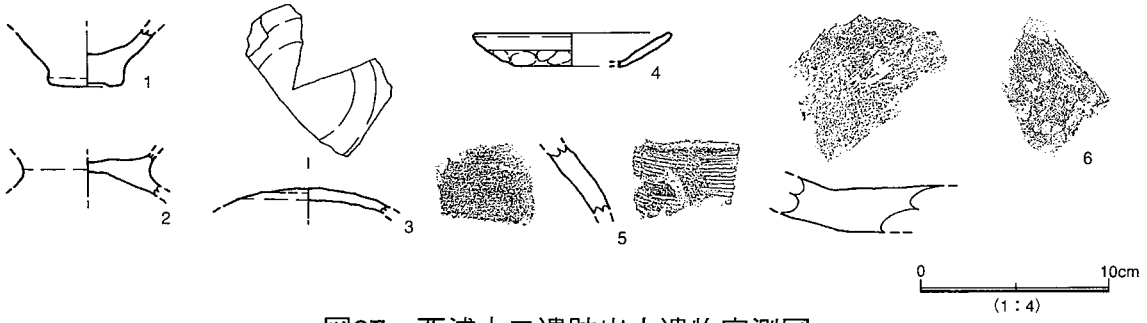


図27　西浦十二遺跡出土遺物実測図

まとめ

今回の調査成果は、以下の3点があげられよう。

①当該地置は石川の氾濫原に形成された微高地と考えられる。

②生活痕跡は弥生時代後期からであるが古墳時代後期まで空白期を迎える。

③瓦や土器などの中世遺物の存在は当該地が可耕地となった時期を示すのであろうか。

検出した遺構の時期や性格は今回の調査では明らかにできなかった。幸いにして申請地の部分は造成土の下で保存されている。今後、周辺の調査によって西浦十二遺跡の性格が明らかになることを期待している。

尺度満山散布地

尺度満山遺跡の発見の契機と経過

平成23年３月７日の12時過ぎに羽曳野市教育員委員会に訪ねて来られた市民に職員が対応したところ、所有する山林の開墾中に切り崩した崖面断面に瓦片がでたので遺跡がどうかの問い合わせであった。出土地点を遺跡地図で確認したところ、周知の包蔵地ではなかった。幸いにして出土した瓦片を持参しておられたので、現物を確認したころ古代の丸瓦（玉縁部分）であった。出土地点の確認と出土した状況を詳しく聴くため地権者立会のもと午後に現地で実施した。

出土地は道の駅の東側で、住所は羽曳野市尺度字満山地内である。出土した地点は東西方向の尾根の南斜面にあたる。開墾した畑の北側の崖面から瓦が出土した。精査したところ瓦が包蔵されていた層から古代の平瓦片や土器片、焼土が新たに出土した。土層断面の略図と写真撮影後に以下の件につ

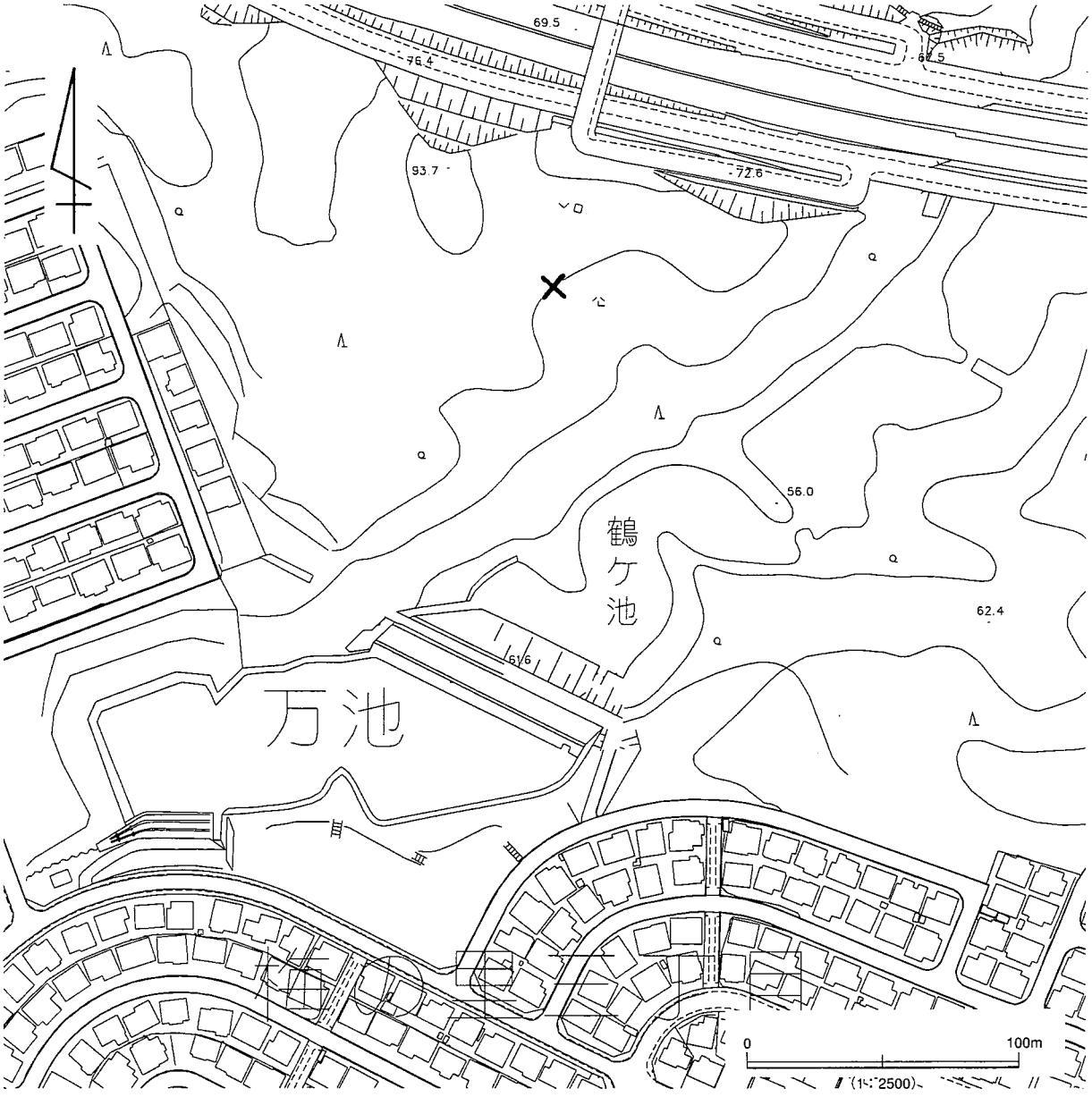


図28　尺度地内土器出土地点（×部分）

いて協議した。

①遺構が伴なわないため散布地として周知する。ついては遺跡発見届書の提出を願った。

②現状では文化財に対して損壊を生じることがないことを確認した。

③地権者が採集された瓦については同意のもと羽曳野市教育委員会で保管し、研究に活用させていただく。他の遺物と一括して埋蔵文化財保管書、埋蔵文化財発見届書を提出する。

平成23年３月15日付けで文化財保護法第96条１項の規定により遺跡の発見届け出が提出され、同日これを受理した（羽教生社第２５８６号）。尺度満山散布地（羽曳野市遺跡番号205）として新規の遺跡の届出を大阪府教育委員会に提出した。平成23年４月５日に大阪府教育委員会から遺跡の発見の通知があり（平成23年３月28日教委文第11－23号）、同日地権者に伝達した（羽教生社第18号）。

遺跡の地理的・歴史的環境

遺物が発見された地点は、東西の尾根の南斜面に位置し、標高80m付近である。南へ下降する地形は開析谷に至る。谷地形は北東方向に開放し、現在、鶴ケ池の溜池が存在する。

尾根の北側には平成16年（2004）に開通した南阪奈道路が横断する。道路開通にあたり事前の調査が大阪府文化財センターによって実施されているが遺跡の発見には至らなかった。高速道路開通後、道の駅や住宅開発により景観は大きく変わっている。現在、大阪府立食とみどりの総合技術センター農業大学校の敷地内は“農林センター散布地”で、昭和36年同センターの建設に先立って大阪大学国史研究室が試掘調査を実施している。弥生時代を中心とする遺物が報告されている。また、元興寺仏教民俗資料研究所の考古学研究室が昭和49年に試掘調査で竪穴式住居と考えられる遺構の一部が検出している。

写真4　尺度満山散布地立会風景

基本層序と遺構

開墾により、尾根南斜面に８ｍ程度の平坦面が造成され、尾根側に高さ１ｍばかりの切り通しができ、土層断面を観察することができた（写真１）。

基本層序は、表土（10cm）の下に、にぶい黄褐色土（10ＹＲ7／4）が厚さ６０cm、褐色砂（7.5ＹＲ4／3）が２０cm、黄褐色砂質土（10ＹＲ8／6）が２０cmの順でほぼ一定の厚さで堆積する。黄褐色砂質土の下が地山で、地山は浅黄橙色（7.5ＹＲ8／3）バイラン土であった。

遺物は地山より２層目上の褐色砂から出土している。同層には焼土塊も包含されていた。土器は、包蔵されている範囲が限定されていたし、出土量も多くない。断面観察では褐色砂の層以外での遺物は確認ができなかった。

造成された平坦面には遺構を見つけだすことができず、断面観察においても遺構は検出できなかった。焼土の面的な広がりも確認できなかった。

遺物

土師器と瓦が出土している。図26と図版５に提示した。以下、概要を記述する。なお、標記した番号は図と図版が共通する。

１は、土師器皿の口縁部片である。復原口径13.4cm、残高1.7cmの法量を呈する。口縁端部をヨコナデ、外面に指オサエを施す。色調は、橙色を呈する。

２は、土師器皿の口縁部片である。復原口径13.4cm、残存高1,3cmの法量を呈する。ヨコナデを施した口縁部のみ残存する。色調は橙色を呈する。

３は、土師器の杯である。残存率が２分の１の口径は9.4cm、器高2.3cmを測る。丸味をおびた形態を呈するが、内外面の調整は磨滅により観察できない。色調は、橙色を呈する。

４は、土師器の椀で、ほぼ完形となった。法量は、口径14.0cm、器高3.8cmである。高台をもつ。径6.5cm。口縁部をヨコナデし、端部を丸く仕上げ水平に広げる。色調は、にぶい橙色を呈する。

５は、玉縁は残存している丸瓦である。法量は、残存する長さは16.1cmで、玉縁の長さは5.6cmを測る。土師質で焼成はあまい。

６は、幅４cm、長13.3の大きさを計測する平瓦片で、縁は遺存しない。厚み２cm。凸面に縄目のタタキ痕が認められる。焼成は須恵質である。

７は、縁が遺存しない平瓦片である。幅６cm、長さ８cmの大きさである。厚さ1.8cm。凸面に縄目の叩き痕が観察される。須恵質である。

８は縁が遺存しない平瓦片である。幅５cm、長さ９cmの大きさである。厚さ1.8cm。凸面に縄目のタタキ痕が認められる。焼成は土師質である。

出土した土器は奈良時代の末から平安時代に属するものと理解して間違いはなかろう。瓦片は奈良時代に製作されたと考えられる。

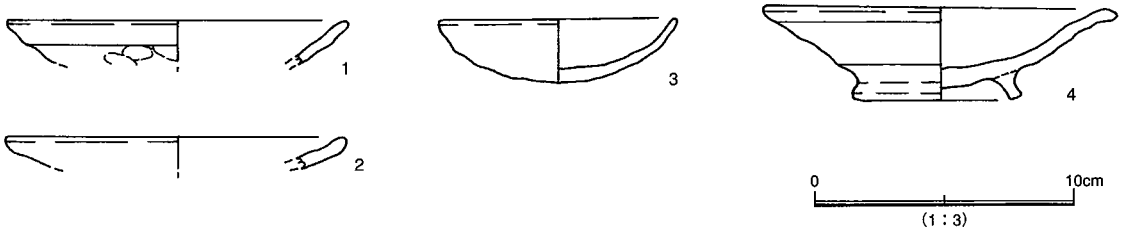


図29　尺度満山散布地出土遺物実測図

まとめ

今回の調査では、古代の遺物がわずかに出土したが、遺物が包含した層は尾根上からの流土と考えられる。したがって、尾根上に何らかの活動痕跡が存在する可能性が高い。遺物の組成から考えられる遺跡の性格は火葬墓が最も高く、蔵骨器に使用された容器の一部であったと思われる

土器と瓦の時期は、形態や調整方法から奈良時代末から平安時代の範疇に帰属する。この時期の火葬墓と考えられる遺跡が近隣では数カ所で確認されている。

No.	墓　名	所在地	外槨	骨蔵器	時期	備考
①	西浦古墓	西浦5丁目	なし	石製櫃	奈良	昭和24年
②	石曳遺跡	はびきの3丁目	なし	木製櫃	飛鳥～奈良	平成4年
③	蔵之内古墓	羽曳が丘7丁目	なし	石製櫃	奈良～平安	大正14年、昭和26年
④	はびきの古墓	はびきの3丁目	石囲い	土師器壷	奈良	昭和18年
⑤	悲田院古墓	高鷲	なし	須恵器壷	奈良	
⑥	飛鳥古墓	飛鳥	なし	石製櫃	奈良	

その他、野中寺境内から須恵器広口壺の蔵骨器が出土している。

参考文献

藤澤一夫1956「墳墓と墓誌」『日本考古学講座６』
羽曳野市教育委員会1981「終末期古墳から火葬墓へ」『羽曳野の終末期古墳』
大阪府教育委員会1993『石曳遺跡発掘調査概要Ⅱ』
北野耕平1994「西浦古墓群　蔵の内古墓」『羽曳野市史第三巻』

古市遺跡

古市遺跡の概略

古市遺跡は、昭和54年に上堂遺跡に周知されている分布範囲に含まれている古市小学校の調査成果から、現在の旧国道170号線を境にして北側を上堂遺跡、南側を古市遺跡と区別した。それは、旧国道170号線付近に大きな谷地形が存在し、谷を境に遺跡の立地や性格が異なるため呼び分けたことが最初である（羽曳野市教育委員会1979）。

古市遺跡の立地をみると、標高約27mの中位段丘に位置する。東側は石川の氾濫原が広がり、約３mの高低がある。

東西250m、南北500mの狭隘な段丘上には縄文時代から現在に渡る生活の営みが出土する遺物から見ることができる。

調査の契機と経過

遺跡名の改称の経緯となった羽曳野市古市１丁目２－５の古市小学校の校地（図30のトーン部分）内において校舎増築工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出が平成22年４月１日に申請があり、同日これを受理した（羽教生社2004号）。申請地（図31のトーン部分）の西隣は昭和61年の調査で中世の鍛冶関連、古墳時代の住居跡が確認されている。届出書に基づいて、平成22年４月19日からに東西12.2m×南北13.5mの調査区を設定し、発掘調査を実施した。重機による掘削後に人力で精査を行う方法で２面の遺構面を調査した。調査は６月11日までで、現場可動は29日であった。調査面積は165㎡をはかる。

調査中、教育の一環として古市小学校の小学１年生から小学６年生の生徒さんたちに現場を見学してもらい、発掘体験などにより調査に参加してもらった。

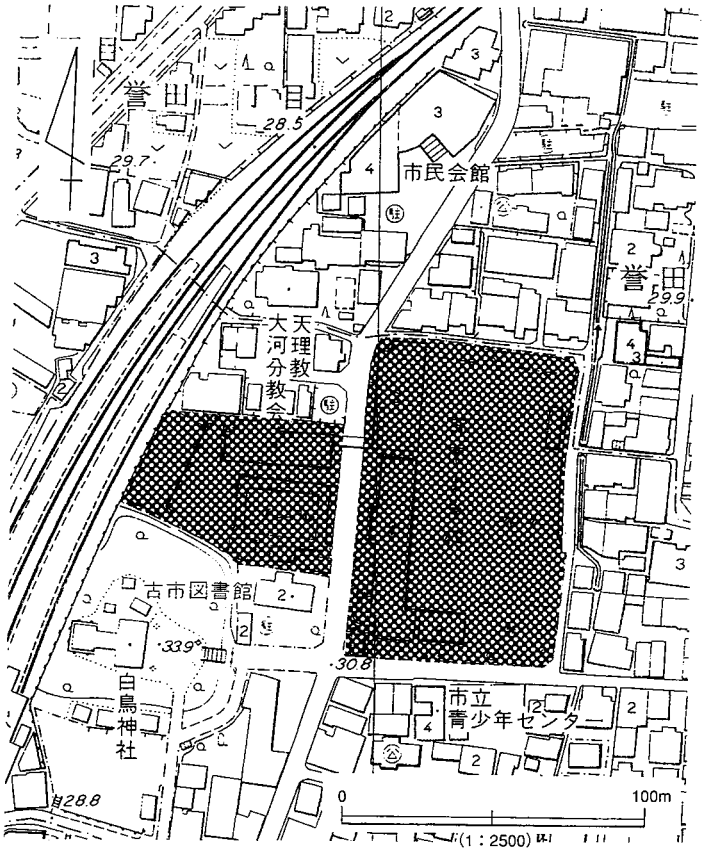


図30　古市遺跡調査位置図

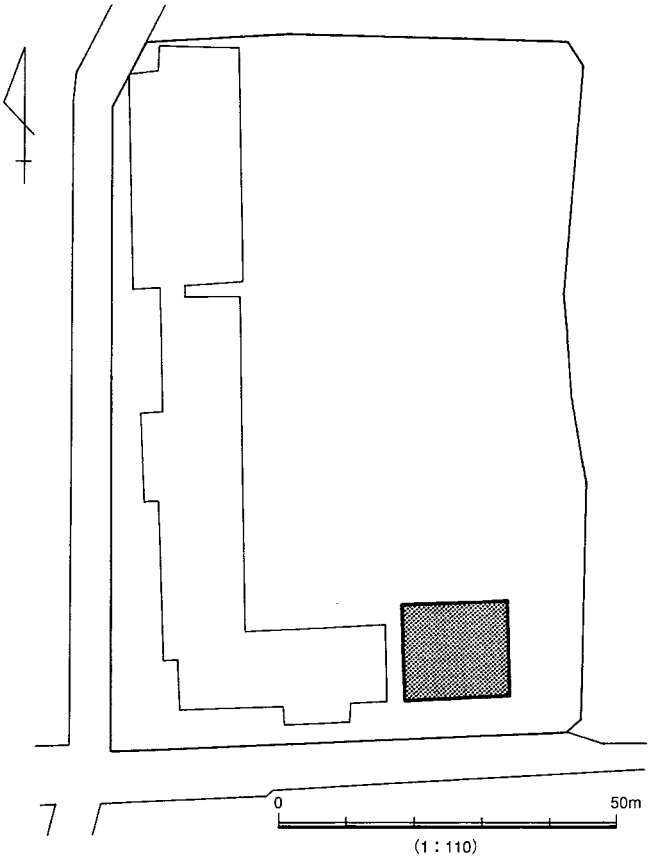
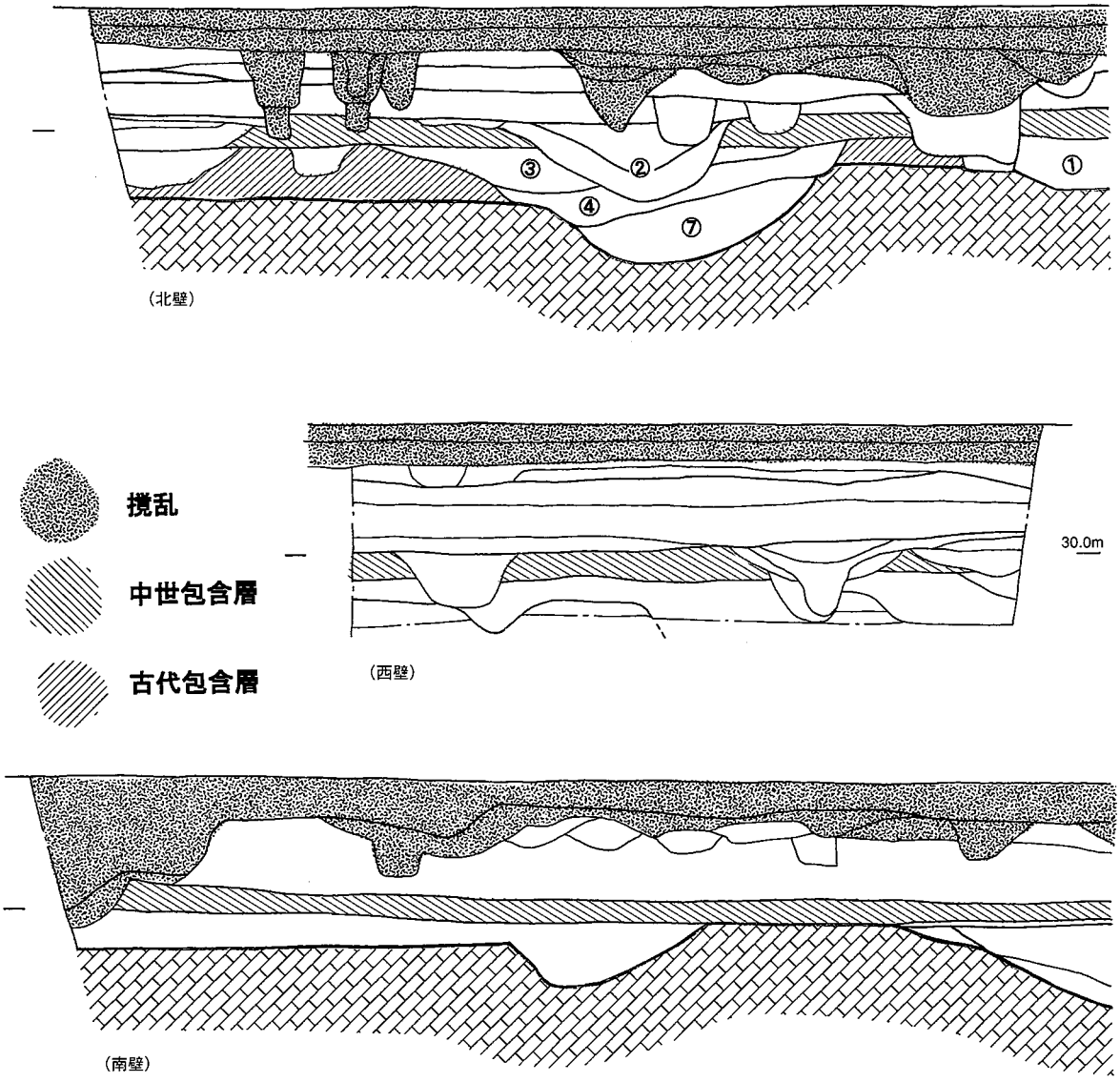


図31　古市遺跡調査区配置図

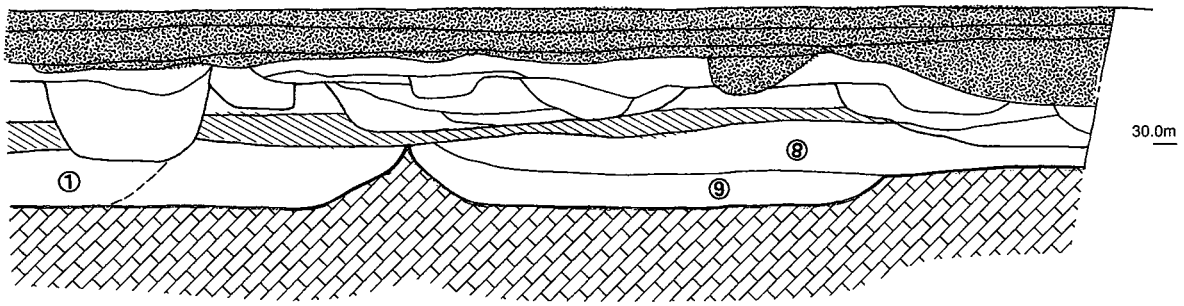


基本層序と遺構

調査前は駐車場として使用されていたため、調査区全体はアスファルトで覆われていた。重機で除去すると砕石の層があり、その下が古市小学校の旧校舎の面になる。砕石の厚さは20cm、その下の厚さ30cmの小学校の①造成土を除去すると②耕土である。かつて古市で多く見られた桃畑跡である。

旧の耕土（20cm）を除去すると中世を中心とする遺物が含まれる③褐灰色粘質土（15cm）、その下の④褐色砂質土（25cm）は奈良時代から古墳時代の遺物の包蔵層である。その下が地山面で⑤黄褐色粘質土である。北西隅で確認した地山は、現地表面から1.1m下で、標高29.6mである。

地山は、調査区の東側が高く、西側に緩やかに傾斜しており、その高低の差が20cmである。そのため、調査区の東半分は、④褐色砂質土が薄く中世と古代の遺構が同一面で検出する結果となった。南北方向については顕著な地形の落差がなかった。したがって、東に隣接する西琳寺跡が古市においては最も高所を選出して建立されたと思われる。



①ＳＤ０１　　にぶい黄褐色砂質土、灰色砂土
②ＳＤ０２－０　浅黄色砂質土、褐灰色砂質土
③ＳＤ０２－１　灰黄褐色粘質土
④ＳＤ０２－２　灰色粘質土
⑤ＳＤ０３　　暗褐色砂質土
⑥ＳＤ０４　　にぶい黄褐色砂質土
⑦ＳＤ０５　　オリーブ黒色粘質土
⑧ＳＫ０４　　浅黄色砂質土
⑨ＳＫ０８　　褐灰色砂質土

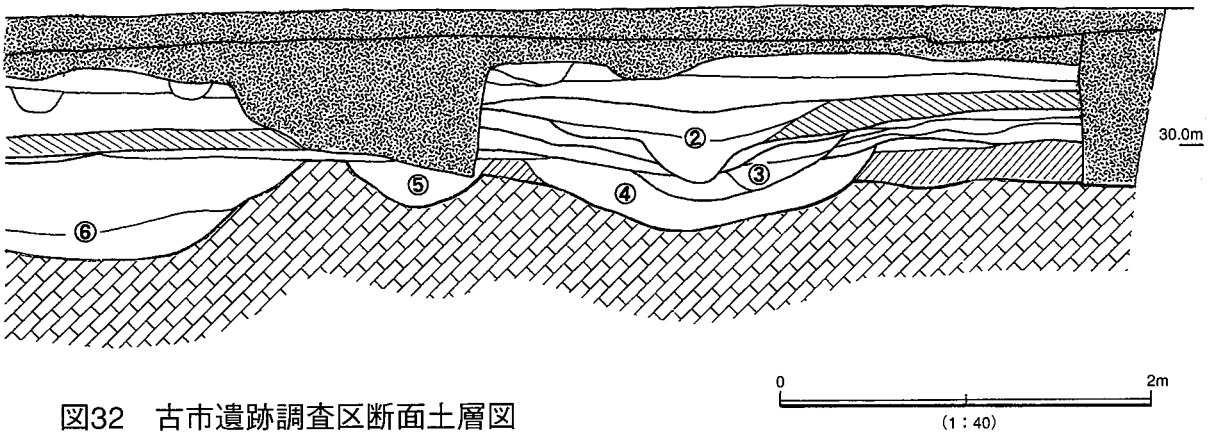


図32　古市遺跡調査区断面土層図

本調査区内での調査対象とした遺構面は、④褐色砂質土の上面（標高29.9m付近）と⑤地山（標高29.8～29.6m付近）の２面である。出土した遺物から前者は14世紀末から15世紀、後者は６世紀から９世紀の生活期間を考えている。

以上の調査成果より遺構の報告については、上面（中世）と下面（古代）に二別し、時代の新しい順から記述していくことにする。なお、ＳＤ０２の埋土を切る井戸状の円形土坑ＳＫ０１とＳＫ０２は、出土した遺物から近代に属するので報告書に記述はしていない。したがって、土坑の遺構番号ＳＫ０３から始まっていることを最初に御断りしておく。

上面の遺構は、区画溝や鋳造に関連する遺構、掘立柱建物や土坑がある。下面の遺構は、区画溝、土坑、掘立柱建物がある。今回に調査では、西琳寺の造成に係わる土地変革を詳細に読みとることができなかった。また、当該地において古墳時代を遡る遺構の検出はできなかった。

【上面】

ＳＤ０２

調査区の西寄りで検出した南北溝である。

遺構精査をした際に浅黄色砂が0.7～1.0ｍの幅で南北に検出された。その検出状況は、図35の上面遺構平面図に砂目のスクリーントーンを貼った部分である。図から見て取れるようにＳＤ０２とした溝のほぼ中央にあたるので、当初はＳＤ０２の埋土と考えた。ところが、調査区北壁や南壁断面、及びセクションの観察からこの砂層は中世期の溝埋土ではなく、中世の面より上の面（近世以降と考えられる遺構面）から掘削された溝の埋土でありＳＤ０２とした溝とは全く別の南北溝であることが判った。

溝は、56ページに記載した図32の土層図を見ると、標高30.2ｍ附近で一つの生活面が読み取れる。断面からの所見では、幅1.3ｍ、深さ0.43ｍ規模の南北溝を復原でき、図34にＳＤ０２－０として提示しておいた。この溝は、南北溝のＳＤ０２と平面が重なるが土層からは時期が異なる南北溝となるので、ＳＤ０２は近世になっても後続される南北溝と考えられ、東西を分断する区画溝の性格が高い。この区画溝は、古市小学校が造成される明治13年まで機能していたことが判る。残念ながら古市の村を描いた絵図に記載されていない。したがって村での流域を知ることができなかった。

ＳＤ０２は、セクションの観察や平面プランから大きく二時期であることがわかった。その変遷を図34の中央と右に提示した溝である。便宜上、古い溝をＳＤ０２－１、新しい溝をＳＤ０２－２とした。

ＳＤ０２－１は、1.8～2.0ｍの幅で、深さ40㎝の南北溝である。溝の一部は、人頭大から拳大の河原石を２段から３段に乱積みした石積で補強していた。石積みは護岸を目的にした遺構と考えられ、その箇所だけ幅員50㎝の水路を造る。積石による護岸が形成される地点は、溝の東側にＳＤ０２とＳＤ０４と隣接するところである。両溝との間隔が1.2ｍを測ることから東西４尺幅の通路としても機能していた推測も可能である。

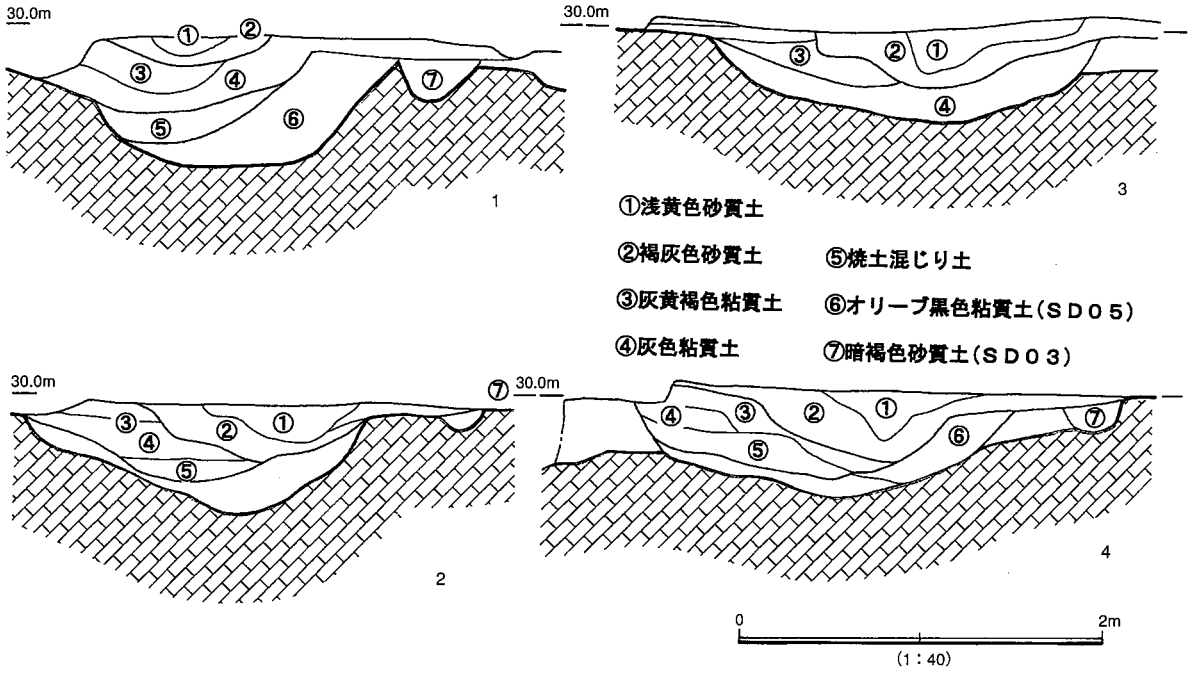


図33　古市遺跡ＳＤ０２土層断面図

溝の埋土は、焼土層と灰黄褐色粘質土である。焼土の堆積はＳＸ０１に隣接する長さ3.5mに渡る部分で確認され、焼土層からは炭や焼土とともに鞴の羽口片が出土した。焼土を土壌洗浄したところ鉄滓をはじめ鍛冶関連資料が採集できた。ＳＤ０２の土層断面から鍛冶関連の遺物物は、溝の西側からＳＸ０１側から投棄されたことが判った。

ＳＤ０２―２は、1.8～2.0mの幅をもつ南北溝である。深さ　mで、埋土は灰色粘質土の単層であった。溝底は緩やかなカーブを呈し、ところどころ粗砂が薄く堆積する箇所があることから一時的な水の流れが観察できる。粗砂は褐色を帯びて硬化しているので、普段は渇水している溝であった可能性が高い。

ＳＤ０２－２の溝東肩と平行するＳＤ０３があるが、両者の幅が40cm程度であった。先に見たＳＤ０２－１とＳＤ０１やＳＤ０４の溝間隔に比べると、その規模は両溝の間に人が通行できる空間ではないことが理解できる。したがってＳＤ０２－２の時期は街路としての整備は見られず、区画溝に接して東西の空間が構成されていたことになる。

以上、堆積状況と平面プランからＳＤ０２は、溝の掘り直しがなされことが判明した。この掘り直しは出土遺物からＳＤ０２－１が15世紀でＳＤ０２－２が14世紀後半と考えられる。遺物の時間幅からさほど開きがあると思えず、溝の開削の目的を集落構造の変化によるものと理解したい。その背景には、調査区の南に位置する高屋城の変革とリンクしているものと思えるが、今回の調査では指摘するのに留まったが今後資料の増大を待ちたい。

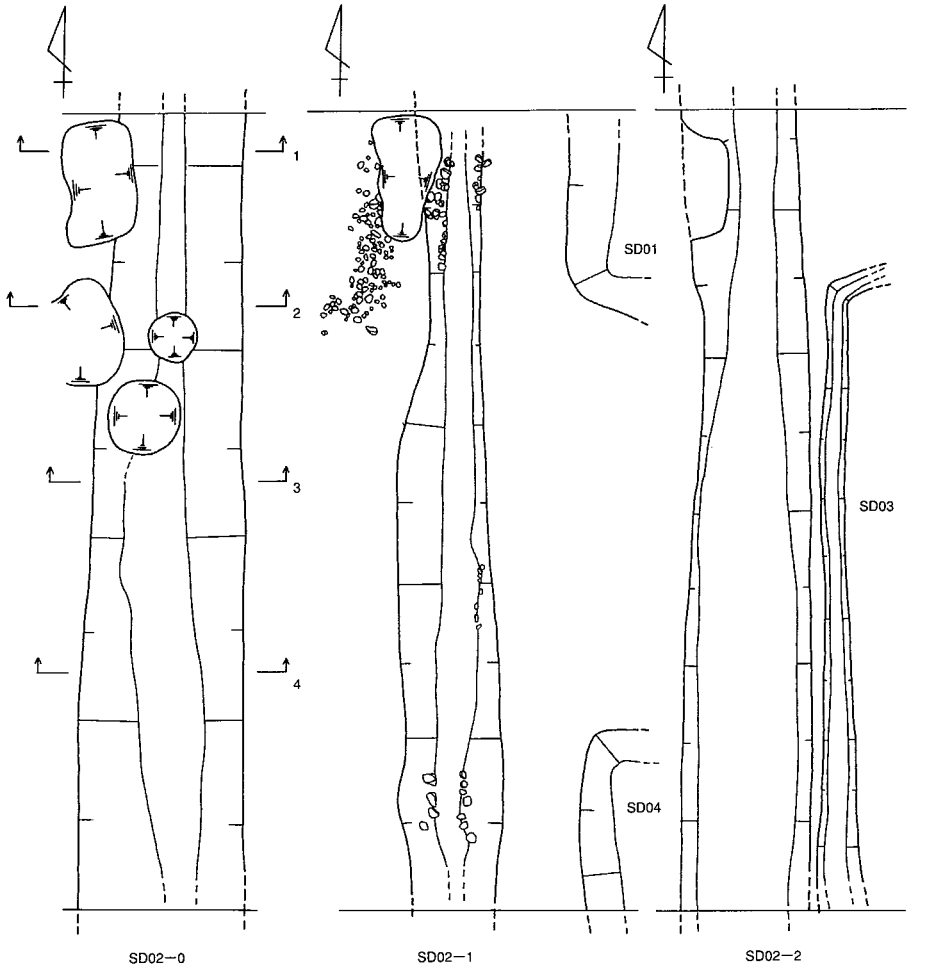


図34　古市遺跡ＳＤ０２変遷図

ＳＤ０１

ＳＤ０１は、調査区の北寄り、やや中央に位置する東西溝である。図35の遺構平面図にあるように南西角は直角に北に折れ、溝の検出平面はＬ字状を呈する。北西隅のコーナーは緩慢である。コーナーから北方に延びる溝は調査区の外へ広がる。ただし、平らである溝底が調査区の北壁の手前で立上る状況を確認していることから、溝はさほど北方に伸びないと考えている。

溝の幅は、検出面が1.4ｍで、深さは0.4ｍを測る。溝の断面形状は、南方が幅広の底で、東方は丸底に近い。溝の埋土は、上からにぶい黄褐色砂質土、灰色砂土の２層である。埋土には水が流れた痕跡は区画溝的な様相が見受けられる。(図36)

遺物の出土は下層に限られ、小片が多く含まれるなかに、図版十で見て判るように羽釜や甕が溝底で完形に近い状態で出土している。これらの土器の出土状況には、整然と並べられた様子は全く認められず、溝内に破棄されたとものと考えられる。

遺物の中心は、甕と羽釜の年代が14世紀前半に位置づけられる。

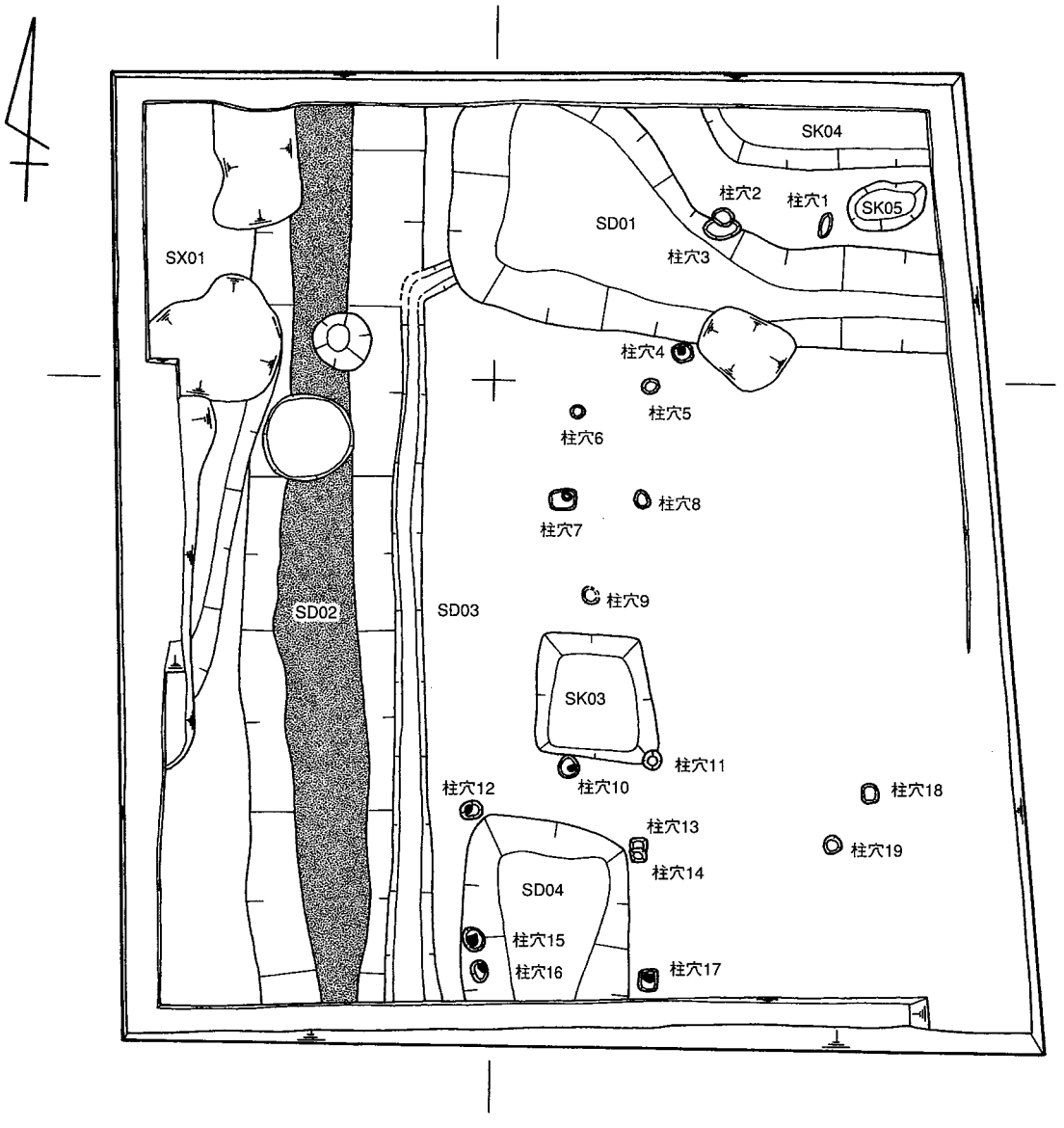


図35　古市遺跡上面遺構平面図

ＳＤ０４

調査区南側のほぼ中央で検出した南北方向の溝である。

図35の遺構平面図にあるようにＳＤ０４は、幅2.3mで、検出した長さ2.6mを測る。溝の東西断面は、図36の下段に提示した通り緩やかな溝肩をもち、深さは0.5mをはかる。土層の堆積状況からＳＤ０２の南端は、調査区の外へ延びると考えている。埋土は、にぶい黄褐色砂質土の単層であった。水が流れた痕跡は認められない。

ＳＤ０２－１と平行に掘削されている状況は、ＳＤ０１に類似していることから、ＳＤ０４の平面形態もＬ字状の溝になる可能性が十分にある。その考えが正しいとすれば、ＳＤ０１とＳＤ０４の南北間の距離が10m前後となる。この空間が一つの屋敷地と理解している。屋敷地が構成されていた年代は、遺物の出土量は極めて少ないがＳＤ０４の機能していた時期が15世紀と考えている。出土した瓦質の羽釜と備前焼の甕はＳＤ０１出土の土器と比べても齟齬は無い。

ＳＤ０３

ＳＤ０２の東側に位置するＳＤ０３は、ＳＤ０２と平行する南北溝である。

図35の遺構平面図にあるようにＳＤ０３は、調査区の北寄りで直角に折れ、ＳＤ０１によって切られている。溝幅は0.3～0.4m、深さ0.2mで溝の断面が半円形を呈する。埋土は、暗褐色砂質土の単層である。水が流れた痕跡はない。遺物に瓦器椀や土師皿が出土しているのでＳＤ０１やＳＤ０４より古い様相である。切り合い関係にも齟齬が無い。遺物から14世紀後半代の時期を考えている。

また、遺物の組成からＳＤ０２－２とＳＤ０３は、ほぼ同時期と考えられる。

ＳＸ０１

調査区の北西端に位置する。

平面プランは検出面で東西２m、南北９mで不定形を呈する。西側は調査区の外側に広がえい、隣接地の発掘調査で検出した土坑３に該当する。

埋土は、焼土と炭が混在する層で、深さは最大20cmを測る。

調査区の北西部では拳大の河原石の敷石が見られたが、平面的に広がるものではない。検出した範囲規は40cmから80cmである。石敷されていた河原石には一部黄色系の粘土を覆っていた箇所があった。粘土は焼けていなかった。また焼土面も確認できなかった。

隣接地の発掘調査は昭和61年に実施され、検出された土坑３は調査区の北西部で南北４m、東西0.6mで鉄滓や羽口片が出土した。

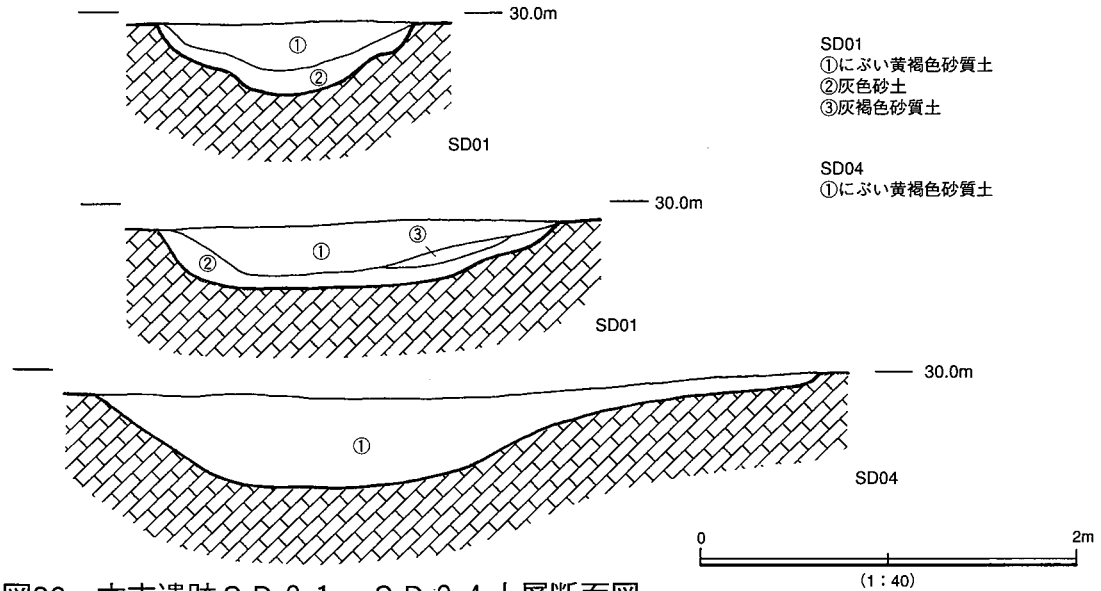


図36　古市遺跡ＳＤ０１・ＳＤ０４土層断面図

ＳＫ０３は、調査区中央やや南寄りで検出した。東西1.6m、南北1.7mの大きさを測る、平面形態はほぼ正方を呈する。深さは15cmで、底は平らであった。土坑に伴なう柱穴は確認できなかった。埋土は、褐灰色砂質土の単層であった。

ＳＫ０４は、調査区北東角に位置し、土坑の南西部を検出した。検出規模は、東西3.7m、南北1.3mの大きさの平面形態が楕円形と考えている。深さ0.13mで、埋土は浅黄色砂質土である。出土遺物はわずかに土師器片出土している。

ＳＫ０５は、ＳＫ０４の南で検出した、東西1.0m、南北０.7mの大きさを測る、平面形態が楕円形を呈する土坑である。深さは10cmで、底は平らであった。埋土は、灰褐色砂質土の単層であった。出土遺物に形象埴輪の破片があったが混入品と考えられる。

中世以降に該当する柱穴は、19基確認し表６にまとめた。柱穴跡は、柱を埋めるための掘方の形状が検出平面より①円形、②方形、③楕円形の三つに分類できる。その大きさは、①は直径30cm前後、②は一辺30cm前後、③は長軸35cmが超える数値におおむね収まる。柱が遺存している例は無かったが、柱穴の４、10、14、15の掘方の底に拳大の河原石を置いて柱が沈下しないように地業（根石）がされていた。

出土した遺物から柱穴は、ＳＤ０３に伴なうⅠ群とＳＤ、ＳＤに伴なうⅡ群に二別できる。そして、Ⅰ群は13世紀代、Ⅱ群は15世紀の時期と考えられる。

表6　古市遺跡中世柱穴一覧表

柱穴番号	掘り方形状（法量）	土　色（深さ）	根石	出土遺物	調査時No.
1	楕円形（長辺40cm）	茶褐色土（8.7cm）		土師皿	Pit19
2	円形（直径25cm）	茶褐色土（17.2cm）			
3	楕円形（長辺50cm）	茶褐色土（6.2cm）			
4	円形（直径25cm）	茶褐色土（8.3cm）	●		
5	円形（直径20cm）	茶褐色土（12cm）			
6	円形（直径20cm）	茶褐色土（8.4cm）			
7	隅丸方形（37cm×30cm）	茶褐色土（15.1cm）		瓦器・土師皿	Pit56
8	円形（直径25cm）	茶褐色土（9.2cm）			
9	円形（直径25cm）	茶褐色土（16.9cm）			
10	円形（直径30cm）	茶褐色土（6.6cm）			
11	円形（直径30cm）	茶褐色土（13.9cm）	●		
12	円形（直径30cm）	茶褐色土（21.0cm）		瓦器・土師皿	Pit03
13	方形（一辺20cm）	茶褐色土（20.1cm）			
14	方形（一辺20cm）	茶褐色土（27.0cm）	●		
15	楕円形（長辺40cm）	茶褐色土（17.6cm）	●		
16	楕円形（長辺30cm）	茶褐色土（14.6cm）		土師器小片	Pit02
17	方形（長辺30cm）	茶褐色土（11.1cm）			
18	方形（長辺25cm）	茶褐色土（9.5cm）		瓦器・土師皿	Pit10
19	円形（直径25cm）	茶褐色土（9.7cm）			

【下面遺構】

下面遺構の包含層である褐色砂質を人力で掘り下げていたところ、３箇所の地点において土器片がかたまった状況で出土した。結果的には遺構で無いことが判明したが、以下、土器群Ａ、土器群Ｂ、土器群Ｃとして遺物の構成、出土状況を報告する。

土器群Ａは、ＳＤ０３の東側の南寄りで出土した（写真５上）。土器は、須恵器の壷Ｂと甕がある。土師器片が多数あった。須恵器の甕は破片が面的に広がって出土したが、意識的に埋置したとは思えなかった。

土器群Ｂは、土器群Ａのやや北寄りで出土した。土師器片が集中し、大きな破片は見られず他の土器群の構成と少し違和感がある。

土器群Ｃは、調査区中心より西５ｍ地点で出土した（写真５下）。土器は、土師器の長頸壺、把手付きマリ、須恵器の甕である。長頸壺は完形で横位、マリは把手を欠くが正位であった。出土状況には規則性は感じられなかった。

以上、３箇所の土器群の周辺を精査したが遺構を検出するには至らなかった。土層や遺物の出土状況から褐色砂質層に混入した遺物であると判断した。一部ブロック状の土塊も確認したことから褐色砂質土の整地層として性格が考えられる。混入している土器は平安時代より新しい遺物が無いこと、整地土の上面で検出できた遺構は13世紀以降であることから整地は中世段階の造成と考えた。

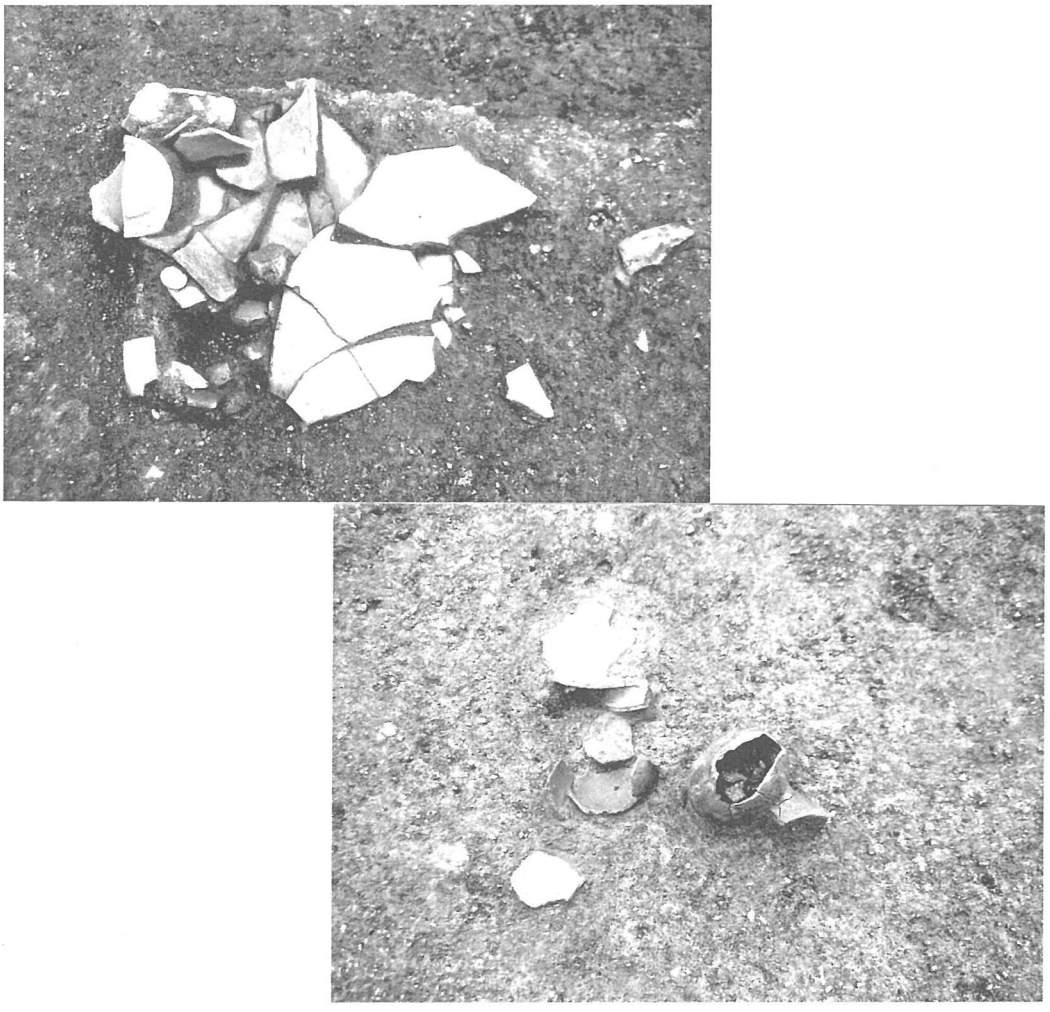


写真５　包含層遺物出土状況（上：土器群Ａ　下：土器群Ｃ）

下面遺構は、褐色砂質土層の下で確認した。遺構には、溝（ＳＤ０５）や土坑（ＳＫ０４～ＳＫ０６）、柱穴などがあり、すべて地山面で検出した。以下、遺構別に概述することにする。

ＳＤ０５は、図37の下面遺構平面図の北西に位置する逆Ｌ状に曲がる溝である。幅１～1.5m、深さ0.28～0.40mの逆蒲鉾形で、溝の埋土はオリーブ黒色粘質土の単層である。（褐灰色土５yr4・１）今回の調査区の西側は、昭和61年度（1986年５月15日～７月８日）に発掘調査を実施した調査区と重複する。したがって、ＳＤ０５の西側に延びた溝は、昭和61年度調査区に溝１につながる。すなわち昭和61年度調査区で検出した東西溝（ＳＤ０１）は本調査区で直角に曲がり北へ延びる南北溝（ＳＤ０５）となる。遺物の様相から水路的な機能と考えるよりは区画溝の可能性が高いと思われる。

遺物には、ハソウや蓋杯など完形に近い須恵器が目立ち、その他に滑石製品が出土している。滑石製品は、子持ち勾玉のほか勾玉、剣形がある。溝の埋土を持ち帰り洗浄したが期待していた臼玉や双孔円盤などの滑石製品は確認するには至らなかった。しかしながら、子持ち勾玉や他の滑石製品の資料からは溝によって区画された内側部分が祀り場の可能性は高いと指摘できよう。

ＳＫ０６は、調査区の南西で検出した土坑で、東側はＳＤ０２と切り合いがある。検出した東西は1.7m、南北は2.0mの大きさであることから、平面形態は正方形となる。深さ0.12mで、埋土は褐灰色の単層であった。出土遺物はわずかに須恵器の杯が出土している。

ＳＫ０７は、調査区の南西で検出した円形土坑である。土坑の西側が調査区外に広がり検出した東西は1.0mを測る。南北は1.2mを計測できるので直径1.2mの大きさとなろう。深さ0.1mで、埋土は褐灰色砂質土である。出土遺物は須恵器片が出土している。

ＳＫ０８は、ＳＫ０４に切られて検出した土坑である。埋土は褐灰色砂質土の単層で、遺物はまったく出土しなかった。

柱穴

古代に属する柱穴は、１１３基確認した。検出した柱穴は建物に構成されると思われるが、掘方の平面形態や掘方埋土の土色から大きく３つに分類ことが可能である。

Ⅰ群は、平面形が円形で直径15cm～25cmの大きさをもつ。掘方の埋土は、茶褐色粘質土である。柱穴69、柱穴75、柱穴85には黒色土器の破片が包蔵されていたことから柱穴の年代を決定する材料となろう。平安時代を中心とした掘立柱建物の存在が推測される。

Ⅱ群は、平面形態は一辺0.3～0.5mの方形の掘方をもち、色調は黒褐色粘土を基本とする。

柱穴61や柱穴88から古墳時代の遺物が出土している。掘方の向きがⅢ群の掘方とわずかに東に振っている。

掘方埋土が黒褐色粘土で、写真６のように古墳時代に帰属する土師器の広口鉢が柱穴75から出土している。柱穴75のような掘方平面形態が方形でなく、直径36cmを測る大きさは円形であるⅠ群には帰属しないのでⅡ－ｂ群として捉えておきたい。Ⅱ群は古墳時代後期、Ⅱ群－ｂは古墳時代の前期末から中期の時期にそれぞれ対応すると理解している。

Ⅲ群は、一辺0.7～1.0mの方形もしくは長方形で、埋土は黄褐色粘質土を呈する。柱穴は直径０．３mで、調査区の南東端で４基検出された。限られた柱穴の配置から北東にコーナーを有する南北方向の掘立柱建物と考えている。柱間は1.8mであった。一辺１mを超える掘方の存在は、構成する建物の考えられる性格は本調査区が西琳寺跡に近接していることに起因しているのかもしれない。西琳寺跡とは推定寺域の西端から西約108mにあたる。

今回残念ながら柱穴で構成される掘立柱建物を復原するには限界があった。唯一、復原した掘立柱建物も調査区の南東隅で検出されたため、建物の主軸も東西の可能性があるとしか現状では報告できない。今後、周辺の調査によって検討を待ちたい。

図37　古市遺跡下面遺構平面図

表7　古代柱穴一覧

柱穴番号	掘り方形状(法量)	土　色(深さ)	出土遺物	調査時No.
20	方形(一辺10cm)	(10cm)		
21	円形(直径25cm)	茶褐色粘質土(12cm)	土師器杯A	pit21
22	円形(直径25cm)	黒褐色粘土(15cm)	須恵器瑞	pit32
23	円形(直径20cm)	茶褐色粘質土(32cm)		
24	円形(直径20cm)	茶褐色粘質土(26cm)		
25	円形(直径20cm)	茶褐色粘質土(8.4cm)		
26	円形(直径40cm)	黒褐色粘土(19.5cm)	土師器片	pit35
27	円形(直径20cm)	茶褐色粘質土(7.9cm)		

28	円形(直径15cm)	茶褐色粘質土(2cm)		pit19
29	方形(一辺55cm)	黒褐色粘土(13.7cm)	須恵器・土師器	pit54
30	方形(一辺50cm)	黒褐色粘土(13.9cm)	須恵器杯・土師器甕	pit38
31	方形(一辺60cm)	黒褐色粘土(27cm)	須恵器杯・土師器高杯	pit37
32	円形(直径15cm)	茶褐色粘質土(10.2cm)		pit20
33	円形(直径15cm)	茶褐色粘質土(30.6cm)		
34	方形(一辺50cm強)	黒褐色粘土(14.3cm)	須恵器・土師器	pit39
35	円形(直径30cm)	黒褐色粘土(6.6cm)		
36	円形(直径30cm)	黒褐色粘土(18.5cm)	須恵器	pit36
37	円形(直径18cm)	黒褐色粘土(26.4cm)		
38	円形(直径24cm)	黒褐色粘土(5.4cm)	土師器	pit34
39	楕円形(長辺50cm)	黒褐色粘土(14.7cm)	須恵器	pit33
40	円形(直径25cm)	黒褐色粘土(17.9cm)		
41	円形(直径12cm)	茶褐色粘質土(8cm)		
42	円形(直径22cm)	黒褐色粘土(20.1cm)		
43	円形(直径15cm)	茶褐色粘質土(12.8cm)		
44	方形(一辺35cm)	黒褐色粘土(4cm)	須恵器杯・土師器	pit44
45	円形(直径15cm)	茶褐色粘質土(14.5cm)		
46	方形(一辺55cm)	黒褐色粘土(8.3cm)		
47	円形(直径30cm)	黒褐色粘土(10cm)		
48	円形(直径30cm)	-(32.3cm)	-	S61調査
49	円形(直径20cm)	茶褐色粘質土(6.3cm)		
50	円形(直径24cm)	茶褐色粘質土(20cm)		
51	円形(直径30cm)	茶褐色粘質土(7cm)		
52	円形(直径35cm)	黒褐色粘土(29.1cm)	土師器	pit31
53	方形(一辺30cm)	黒褐色粘土(9.6cm)	須恵器甕	pit30
54	方形(長辺30cm)	黒褐色粘土(5.7cm)		
55	円形(直径18cm)	茶褐色粘質土(2.6cm)		
56	方形(長辺30)	黒褐色粘土(2.2cm)		
57	円形(直径20cm)	茶褐色粘質土(7.0cm)	土師器片	pit57
58	方形(一辺25cm)	黒褐色粘土(7.0cm)		
59	方形(一辺50cm)	黒褐色粘土(13.4cm)		
60	円形(直径35cm)	黒褐色粘土(15.9cm)	土師器片	pit60
61	方形(一辺47cm)	黒褐色粘土(20.8cm)	土師器片	pit42
62	楕円形(長辺30cm)	茶褐色粘質土(10.4cm)	土師器片	pit40

63	円形(直径45cm)	黒褐色粘土(21cm)	須恵器甕	pit41
64	楕円径(長辺50cm)	茶褐色粘質土(12.2cm)		
65	円形(直径25cm)	茶褐色粘質土(19cm)		
66	円形(直径15cm)	茶褐色粘質土(20.5cm)	土師器片	pit55
67	方形(一辺100m)	黒褐色粘土(19.5cm)	須恵器高杯・甕	pit28
68	円形(直径12cm)	茶褐色粘質土(16.4cm)		
69	円形(直径24cm)	茶褐色粘質土(20cm)	黒色土器A	pit29
70	円形(直径24cm)	茶褐色粘質土(6.7cm)		
71	円形(直径18cm)	茶褐色粘質土(2.3cm)		
72	方形(一辺55cm)	黒褐色粘土(49.1cm)		
73	円形(直径36cm)	黒褐色粘土(21.5cm)	土師器片	pit14
74	方形(一辺46cm)	黒褐色粘土(12cm)		
75	円形(直径36cm)	黒褐色粘土(21.4cm)	土師器広口鉢	pit49
76	円形(直径30cm)	黒褐色粘土(6.2cm)	土師器片	pit13
77	方形(一辺55cm)	黒褐色粘土(23.4cm)	土師器・須恵器	pit12
78	円形(直径20cm)	茶褐色粘質土(9.5cm)	土師器片	pit11
79	円形(直径24cm)	茶褐色粘質土(9.9cm)		pit22
80	円形(直径15cm)	茶褐色粘質土(5.5cm)	土師器椀	Pit48
81	方形(一辺45cm)	黒褐色粘土(24.5cm)		
82	円形(直径18cm)	茶褐色粘質土(4.5cm)		
83	円形(直径30cm)	茶褐色粘質土(6.0cm)		
84	円形(直径27cm)	黒褐色粘土(3.6cm)	土師器片	pit23
85	円形(直径12cm)	茶褐色粘質土(16.1cm)	黒色土器A椀	pit18
86	円形(直径24cm)	茶褐色粘質土(21.7cm)		pit05
87	円形(直径25cm)	黒褐色粘土(8.4cm)	須恵器杯蓋	pit52
88	方形(一辺50cm)	黒褐色粘土(26cm)	須恵器・土師器	pit53
89	円形(直径18cm)	茶褐色粘質土(10.8cm)		
90	円形(直径45cm)	黒褐色粘土(32.8cm)	土師器杯	pit27
91	円形(直径27cm)	茶褐色粘質土(17.2cm)		
92	方形(長辺100cm)	黒褐色粘土(21.2cm)	須恵器蓋杯	pit26
93	方形(一辺45cm)	黒褐色粘土(52.7cm)	土師器片	pit25
94	円形(直径20cm)	茶褐色粘質土(26.7cm)		
95	円形(直径30cm)	黒褐色粘土(20.6cm)		
96	円形(直径18cm)	茶褐色粘質土(28.3cm)		
97	円形(直径50cm)	黒褐色粘土(44.4cm)	土師器・円筒埴輪	pit24

98	方形(一辺30cm)	黒褐色粘土(8.5cm)		
99	方形(一辺30cm)	黒褐色粘土(30.5cm)		pit23
100	円形(直径18cm)	茶褐色粘質土(14.5cm)		
101	円形(直径40cm)	黒褐色粘土(25.1cm)		
102	円形(直径30cm)	茶褐色粘質土(19.2cm)	土師器・製塩土器	pit51
103	円形(直径36cm)	黒褐色粘土(40.3cm)	土師器片	pit43
104	楕円形(長辺54cm)	黒褐色粘土(40.1cm)		
105	円形(直径25cm)	茶褐色粘質土(10.9cm)		
106	円形(直径35cm)	黒褐色粘土(30.2cm)	須恵器・土師器	pit45
107	方形(一辺60cm)	黄褐色粘質土(6.6cm)	土師器甕	pit50
108	方形(一辺80cm)	黄褐色粘質土(27.5cm)	土師器片	pit47
109	円形(直径30cm)	茶褐色粘質土(14cm)	土師器椀(平安)	pit46
110	方形(一辺70cm)	黄褐色粘質土(8.6cm)		
111	方形(長辺90cm)	黄褐色粘質土(14.6cm)	土師器	
112	方形(長辺100cm)	黄褐色粘質土(14.6cm)	須恵器杯	
113	方形(一辺80cm)	黄褐色粘質土(19.6cm)	須恵器蓋杯	

遺物

写真6　柱穴内遺物出土状況（柱穴75　西から）

今回調査した地点から出土した遺物は、古墳時代から江戸時代まで及ぶ遺物が確認されている。総数量は整理箱（0.03㎥）に52箱である。出土遺物から図化した資料を時代の新しいものから順次報告する。

まずは、ＳＸ０１・ＳＤ０２鍛冶関連遺物を取り上げることにする。

ＳＸ０１、ＳＤ０２の埋土に焼土が包蔵されている土壌を0.5㎜と1.2㎜の２種類の篩で水洗い選別した土砂を乾燥させた後、肉眼により土器以外を製鉄・鍛冶関連遺物として選別した。①羽口、②鉄床、③椀肩滓、④鍛造剥片、⑤流動滓等があった。なお砥石と被熱粘土塊は見いだすことができなかった。

羽口は、約4.2kgの破片が出土し、その中から遺存度の高い破片を選び図化した資料を図38の１～３に提示した。１は、外径7.0cm、内径2.3cm、装着角度25°を測る。外面はナデ調整を施している。２並びに図版十三の１は、外径7.1cm、内径2.8cm、装着角度７°を測る。色の変化の違いは、先端から順に炉壁内、炉壁中、炉壁外となるとみられる。３並びに図版十三の２は、外径7.6cm、内径3.3cm、装着角度６°を測る。

鉄床と考える石が第38図の４である。同石は、摺り面のある河原石で表面が火を受けている。当初砥石として使用していたのを鉄床として転用したものか。16.8cm×3.4cm大の三角形に近い。最大の厚みは8.4cmを計測できる。石質は砂岩に近い。

椀形滓である図版十三は、半円形の底部をもち、炉底で形成されるものであり、炉底の形状を写したものといえる。全体に木炭を噛み込んでおり、錆に覆われ極暗赤褐色～暗褐色を呈する。磁着するものとしないものもある。

鍛造剥片の図版十三の３は、鉄塊や鉄板を熱して鍛打する際に、鉄中の不純物が表面から酸化被膜として薄板状に剥がれ落ちたもので厚さは0.1㎜から２㎜程度で薄いものから肉厚のものまである。大きさについても１から３㎜角から10㎜角まである。色は青黒色から極暗赤褐色で、光沢のあるものと錆化したものがある。磁着する。

粒状滓の図版十三の４は、直径２～７㎜の大きさで粒状を呈する。中には中空のものもある。色は青黒色から暗赤褐色を呈し、磁着する。

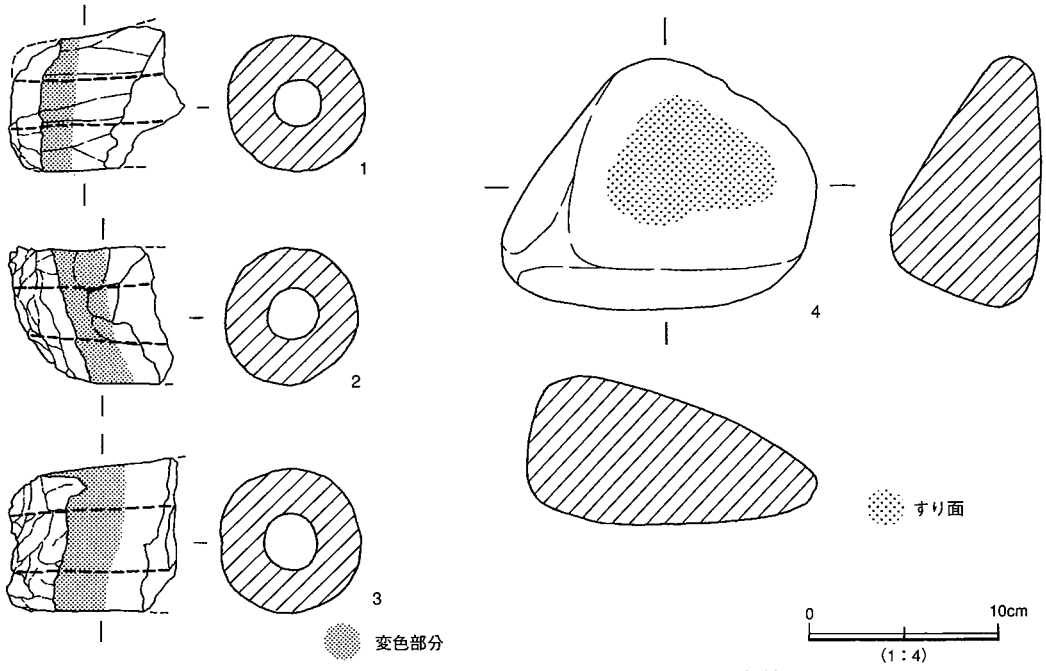


図38　古市遺跡ＳＤ０２鍛冶関連遺物

ＳＤ０２

次にＳＤ０２出土の土器類を概観しよう。

最も多くの破片が出土したのは土師皿である。代表的な資料を図化し、図40に提示した。土師皿は、計測した土器の色調、法量、外形から図41のとおり大きく４類に別けた。

Ⅰ類とした図40の５から８は、橙系の色調を持ち、口径7.5cm前後の平底の底部に外反の口縁を呈する。Ⅱ類とした図40の９から18は、浅黄橙系の色調を持ち、口径８～8.5cmの底部が小さい、あるいはへそ底を呈する。Ⅲ類とした図40の19から22は、灰白系の色調をもち、口径10～11.5cmの上げ底風の外反する口縁を呈する。Ⅳ類とした図40の23から25は、灰白系の色調をもち、口径13cm強の法量で明確な底は呈しない。

古市遺跡での土師皿の分類は、『古市遺跡群Ⅷ』の報告書で九型式、『古市遺跡群ＸＶ』の報告書で七型式に分類されている。今回の分類案は図39に提示した四型式とした。口径を横軸、器高を縦軸にしてドットを落とすと図39に示した表になり、四つの群が見いだせた。

瓦質土器は、形態が判る破片をできる限り図化し、図40並びに図版十四に提示した。

26と27は甕で、口縁断面形態から15世紀中葉と考えられる。両者とも外面はタタキが施されるが、内面は26がナデ調整、27がヨコハケ調整である。

28から30は、羽釜の口縁部から鍔部分である。形態から河内・和泉型の製品で、製作技法により14世紀後半から15世紀初めに位置付けられる。

31から34は擂鉢で、口縁端部付近の破片である。31の破片は、片口が認められる。外面はヘラケズリ、内面はナデかハケ目調整による。河内で見られる瓦質製品で、15世紀代に位置付けられる。

35から41は、風炉と呼ばれる湯沸かしの用具がある。形態から二つに分類される。

風炉Ⅰ類は、41が底部から脚部、35、39は口縁部である。風炉Ⅱ類と考えられる破片は、の口縁部、39は口縁部から肩部付近である。15世紀代に位置付けられる。

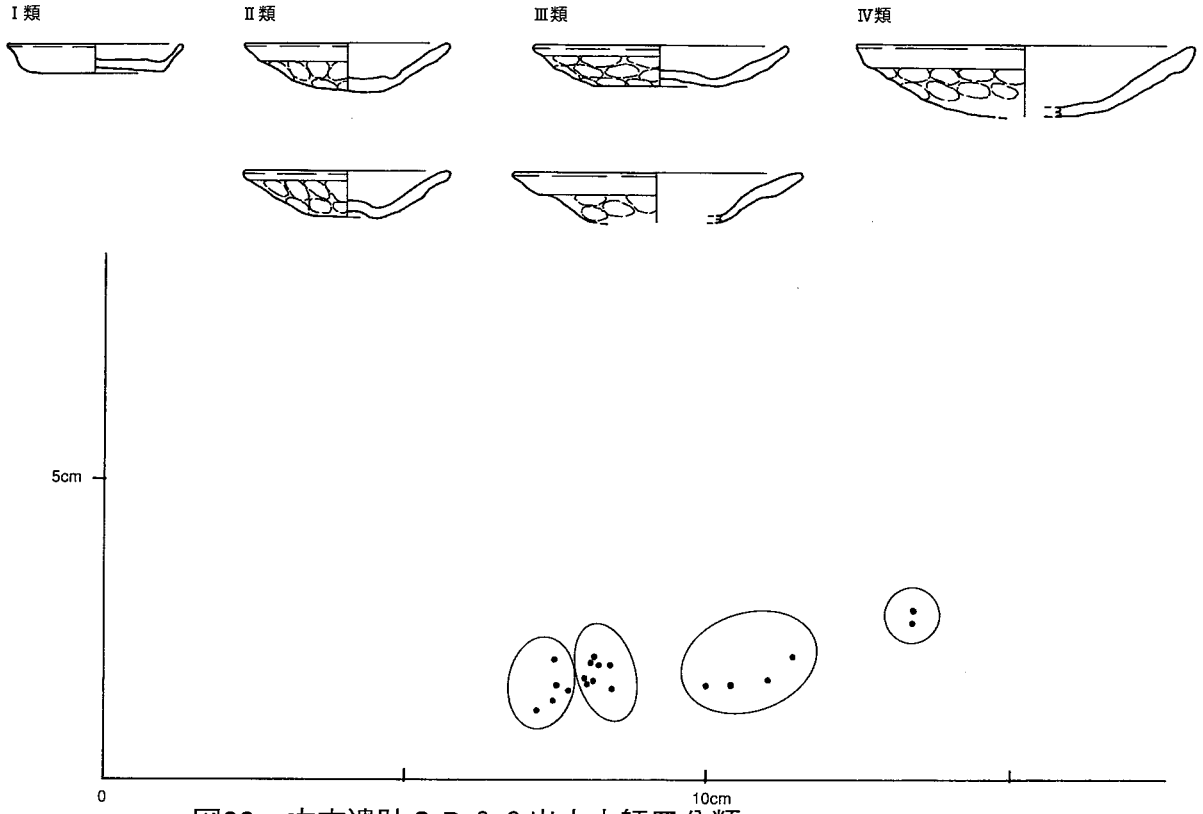


図39　古市遺跡ＳＤ０２出土土師皿分類

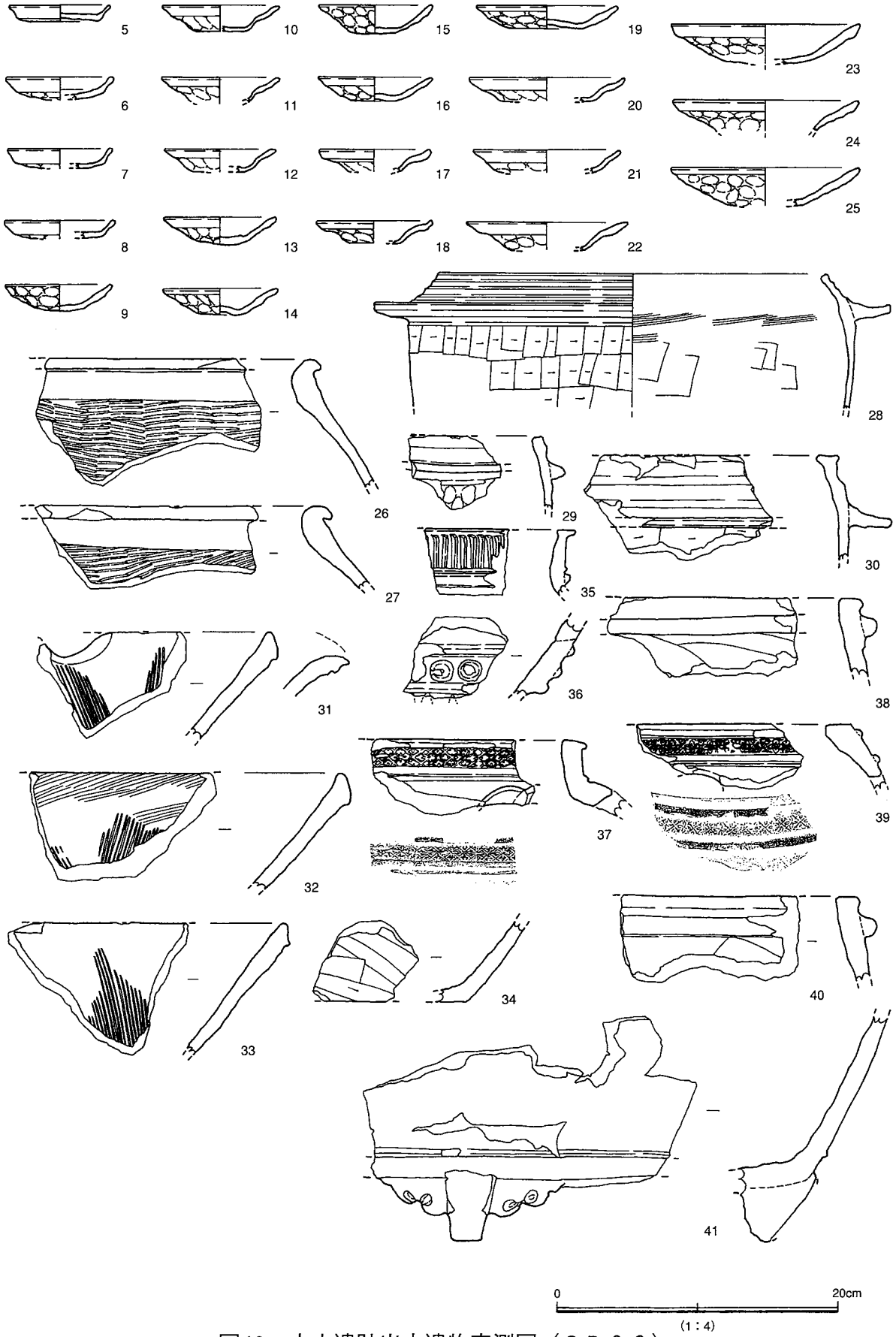


図40　古市遺跡出土遺物実測図（ＳＤ０２）

ＳＤ０２出土の陶磁器は、図41に図示した。陶器は国産の古瀬戸焼、常滑焼、備前焼があり、磁器は輸入品で白磁、青磁がある。初期貿易磁器や明時代の染付け等の破片は全く見られなかった。国産陶器から報告する。

42は、瀬戸焼の天目茶碗で、底部が欠損している。復原できた口径は12.4cmで、残存高は6.1cmを測る。

43は常滑焼の甕である。小片のため口径は復原できなかった。大きく外反する口縁部に、端面内面に凹線がめぐる口縁端部をもつ。12世紀の後半と考えられる。

44は、備前焼の壷の口縁部片である。小片のため口径は復原できなかった。端部の断面は、玉縁状を呈する。14世紀に位置付けられる。

45は、常滑の甕である。小片のため口径は復原できなかった。口縁部の断面がＬ字状を呈する受け口をもつ。13世紀後半の製品である。

以上、陶器は12世紀後半から14世紀代の製品に限定できる。次に図化できた輸入磁器と図化できなかった資料（図版十四－166～171）について報告する。

46は、青磁椀で内外面は無文である。復原した口径17.6cmで、残存高は6.7cmを測る。15世紀代であろう。

47と166（図版十四）は、龍泉窯系青磁椀で、47は小片のため口径は復原できなかった。47・166の外面には鎬蓮弁文を施す13世紀前半に属する。

48は、青磁椀の底部片である。小片のため高台の直径は復原できなかった。見込みには菊花状の陰刻が見られる。

49は、青磁椀の底部の破片である。高台径6.1cm。見込みには華文？状の陰刻がある。

50と51は、龍泉窯系の青磁椀である。外面は無文、内面には劃花文が見られる。両者は接合しないが同一個体の椀と考えられる。12世紀中葉～後葉に位置付けられる。

52は、青磁椀の底部片である。底部の厚さが２cmを超えて、重量感がある。見込み部分に花文が見られる。全面施釉後に高台内の釉を環状に削る。龍泉窯系の製品と考えられ、14世紀末から15世紀初頭に位置付けられる。

53・54の白磁は森田分類Ｄ類で、白色の陶器質の胎土に乳白色の釉をもち、体部下半部を露胎にした一群で、高台裏には三ケ所の抉りを入れている。15世紀の時期が与えられる。
高台内面に墨書が確認できるが、字として認識できない。

167（図版十四）は、稜花劃花文青磁皿の小片である。輪花口縁をもち、見込みから大きく口縁が外反する。器高は3.5cmである。

168・169・170（図版十四）は、無文青磁椀で、169と170は接合しないが同一個体で168は同形式であるが別個体と考えられる。口縁部片の168・169は、端部が外反する。内外面は無文である。椀の下半部である170は、高台付近に一条の圏線が確認できる。同安窯系の青磁椀と考えられ、12世紀後半頃か。

171（図版十四）は、青磁椀の底部片である。見込みの釉を環状に掻き取りが見られる。胎土も釉調も粗悪である。

ＳＤ０３

同溝からは遺物の出土量が少なく、わずかに土師皿と瓦器椀の２点が図化できた。いずれも三分の２が遺存する破片である。

55は、土師皿である。口径が11.1cmで、器高は2.0cmの法量を測る。扁平な底部に外方へ立ち上がる口縁をもつ。丸味を帯びた口縁端部が外側に広がる。底部外面に指オサエが顕著に見られる。色調は、

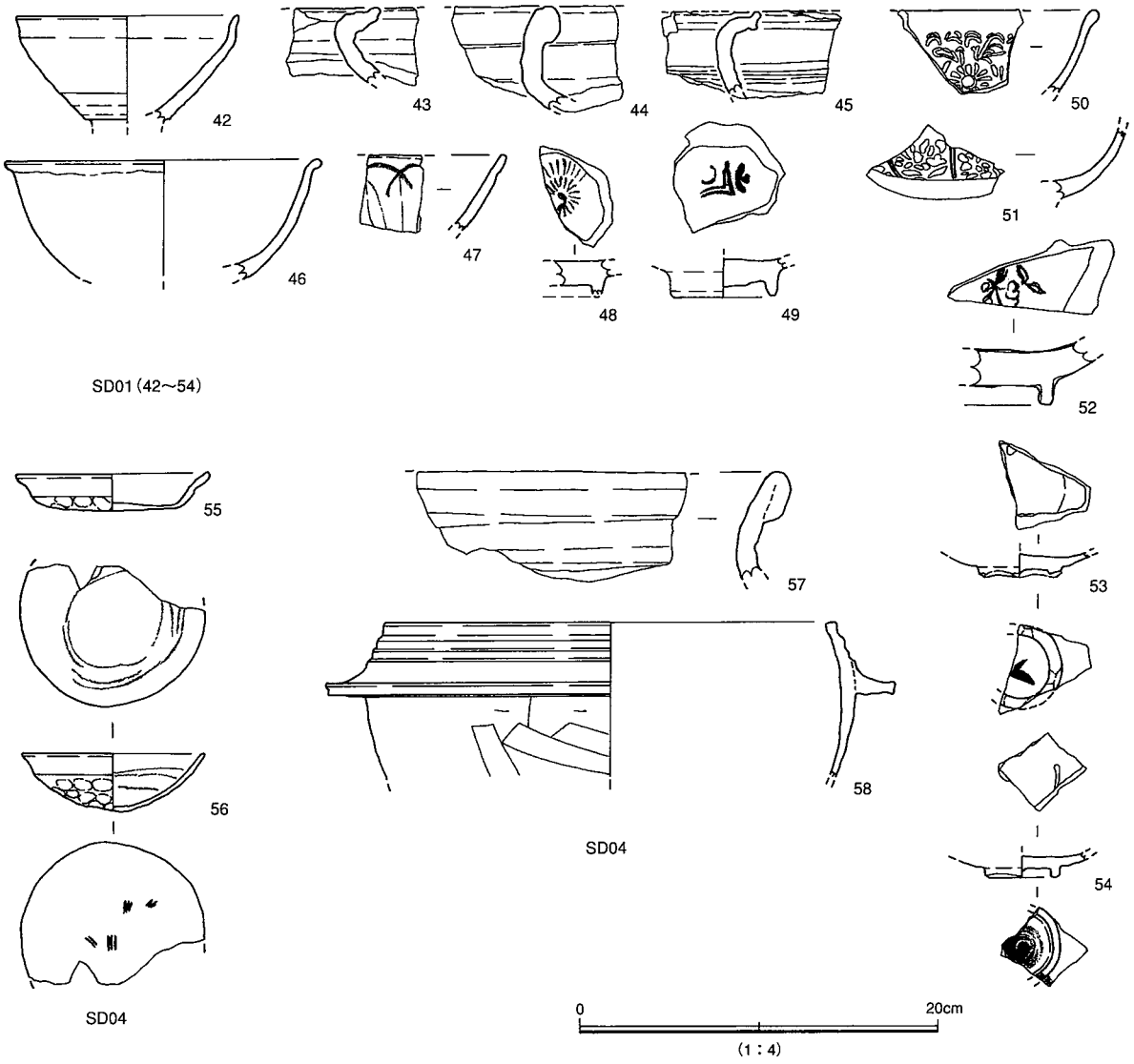


図41　古市遺跡ＳＤ０２（陶磁器）・ＳＤ０３、ＳＤ０４出土遺物実測図

灰褐色系である。製作時期は、14世紀である。

56は、和泉型の瓦器椀である。高台が消失し、底部に丸味をもつ椀形を呈する。口縁部をヨコナデし、外面は指オサエによる凹凸が顕著に観察できる。内面はナデ調整後に僅かであるが螺旋状に暗文を施している。法量は、口径10.4cm、器高3.3cmを測る。河内長野市金剛寺出土瓦器椀の編年の、Ⅳ－４に該当する、製作年代は、1320年頃である。よって、14世紀第２四半期の瓦器となる。

ＳＤ０４

57は、備前焼きの大甕口縁部片である。破片から口径が復原できなかった。観察できた破片の断面から外反する口縁部は折り返しによる。幅3.0cmの帯状口縁が廻る。残存する高さは6.2cmを測る。口縁部の形態から備前焼第、期、南北朝から室町時代後半にかけての時期と考えられる。

58は胎土が瓦質で、外面有段の内傾する口縁から河内・和泉型の瓦質の羽釜である。復原口径は25.6cmを測る。類似するＳＤ０１出土の羽釜の大型品と共通する。残存する器高は8.8cmを測る。底部付近が欠損する。

ＳＤ０１

ＳＤ０１出土遺物は図42に提示した。

59・60は土師皿で、色調が灰白色系である。口径7.5から7.8cm、器高1.4cmの法量をもつ。底部は上げ底で、いわゆる“へそ皿”である。口縁部を強いナデ調整を行う。

61～66は瓦質土器の羽釜である。口縁形態から河内・和泉型の羽釜に帰属する。法量で二分することが可能で、口径が20cm以下はⅠ類、口径が22cm以上はⅡ類とした。両者は水平に伸びる鍔部、内傾する口縁部の外形態は類似する。

Ⅰ類とした61は、完形である。法量は口径17.3cm、器高13.1cmをはかり、最も小型品である。外面体部の調整はタテ方向。過半部はヨコ方向で調整され、底面は丸い。内面は、横位の板ナデを施している。62は、体部外面はヘラケズリが施している。鍔下部は横方向、体部の下半から底部にかけてナナメ方向のヘラケズリが施されている。内面調整は、横方向のハケメが観察される。63は鍔直下に横方向のヘラケズリを施し、体部は縦方向のヘラケズリが認められる。内面調整は、斜め方向のナデが施される。Ⅰ類の内外面の調整に統一性は感じられなかった。

対して羽釜Ⅱ類とした64～66の資料には画一性の高い製作方法が観察できた。すなわち、すべての羽釜の体部外面にヘラケズリを施す。削る方向も鍔直下から下方へ40cmあたりまで横方向に幅広で施している。体部外面の下半部は斜め方向のヘラケズリが施されるが、底部については残存する資料がなく不明である。内面調整については、口縁部附近はヨコ方向にナデが施される。鍔が付く付近から内面は横方向のハケメを施す。底部附近は縦方向のナデ調整を施すようだ。形態や調整方法から製作年代を15世紀代と考える。

67は、瓦質の甕口縁の破片で、復原した口径は16.4cmを測る。体部の肩付近から下部が欠損する。最大胴径24.6cmで遺存高さは8.8cmを測る。器高はおおよそ20cmと推測される。製作年代は15世紀代か。

68も瓦質の甕であるが、縦33cm、左右は27cmの大きさの胴部の破片から全高が60cmを超える容量と推測される。破片の調整方法の違いから底部附近から体部中央附近と考えられ、甕の体部下半部片となる。平底で丸味を持たずに直立気味の体部と推定している。底部付近にはナデ調整を施し、体部はヨコ方向に平行タタキを施す。器壁は0.8～1.0cmで、巾２cmの粘土紐を積み上げている。製作年代は15世紀でよかろう。

69は、備前焼きの甕口縁片である。小片のため口径が復原できない。観察できた破片の断面から外反する口縁部は折り返しによる。幅2.4cmの帯状口縁が廻る。残存する高さは4.8cmを測る。口縁部の形態から備前焼第Ⅳ期、南北朝から室町時代後半にかけての時期と考えられる。

柱穴、包含層

掘立柱建物を構成していると考えられる柱穴から遺物が出土している。このうち図化できたのは、柱穴18、柱穴29、柱穴42、柱穴48、柱穴49、柱穴56の６点で図43に提示した。

70は、柱穴48から出土した土師器椀の口縁部である。端部を強くヨコナデし、外反気味に立ちあげる。76の土器と同形と考えられる。外面には指オサエ痕が顕著に残る。

71は、柱穴56から出土した土師器の皿である。外反する口縁部の端面は丸く仕上げる。外面に指オサエの痕跡が残る。

72は、柱穴42から出土した土師器の甕である。「く」の字の頸部をもち、外反する口縁部の端部は内面に肥厚する。形態から布留式甕になる。

73は、柱穴49から出土した土師器の広口壺である。口径12.0cm、器高5.9cmの法量をもつ。外反する短い口縁部で、低い胴部は平底である。底部外面にヘラケズリを施す。胴部内面は板ナデ、外面はナ

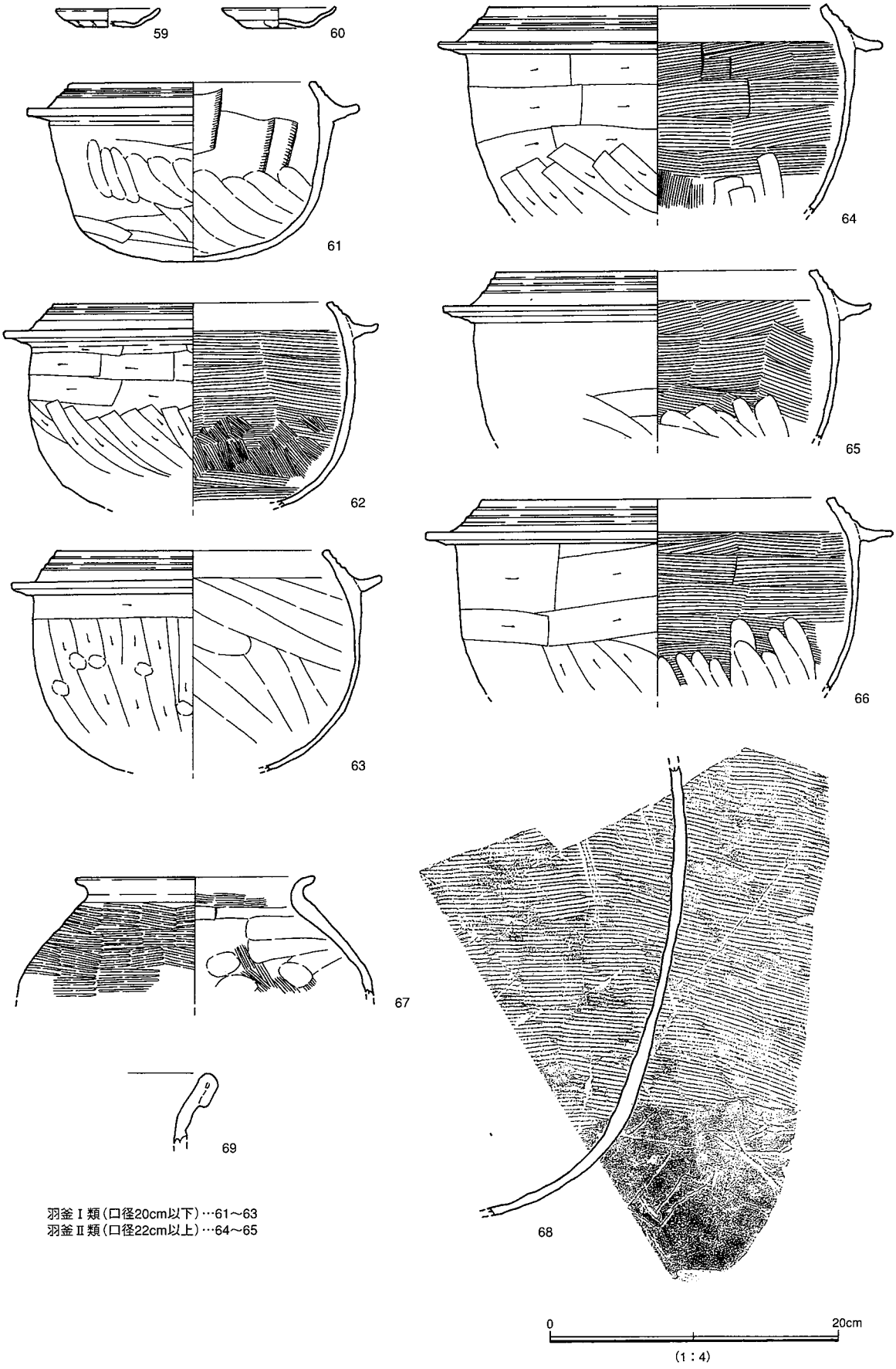


図42　古市遺跡ＳＤ０１出土遺物実測図

デ調整であった。

74は、柱穴18から出土した黒色土器Aの椀で、底部が欠損する。復原口径が17.1cm、残存器高6.0cmを測る。外面には丁寧にヘラミガキを施す。

75は、柱穴29から出土した黒色土器Aの椀Bで、高台が欠損する。口径15.4cm、高台を除く器高は6.3cmを測る。内外面に丁寧なヘラミガキを施す。

図43の76から91は包含層から出土した遺物の実測図である。

76は、土師器の椀Bである。口径13.7cm、器高3.4cmを測る。外反気味に立ち上がる口縁部は強いヨコナデを施す。外面に顕著な指オサエ痕が確認され、内面はナデ調整による。

77は、土師器の椀で、小片のため口径が復原できなかった。口縁端部は、ヨコナデで内傾気味である。下半分は指オサエによる。

78は、土師器の椀で、底部が欠損する。口径が15.6cm、残存する器高5.8cmであった。外面はヘラケズリを施していた。

79の土師皿は、いわゆる“へそ皿”で、口径7.2cm、器高1.3cmを測る。

80は、土師器の甕であるが、小片のため口径を復原できなかった。外反する口縁部を持つ。

81は、土師器の甑の底で、孔は円形を中心に周囲に細長の楕円形を配する。底厚の断面は1.0cm。

82は、土師器の甕である。「く」の字の頸部をもち、外反する口縁部。端部は内面に肥厚する。布留式甕の口縁部である。口径16.6cmで、残存する高さは5.7cmであった。

83は、弥生土器の甕底である。底径3.4cmで、内面には“クモ巣状文”が観察できる。外面のタタキ調整からⅤ様式に該当する。

84は、古式土師器の壷で体部下半部が遺存する。平底風の底部は直径4.0cmで、半球形の体部は高さ5.4cmまで遺存する。調整は、外面はミガキで、内面はヘラナデであった。布留期にあたる。

85は、平瓦を転用した土製円板である。直径6.2cm、厚さ1.7cmの法量を測る。南側側溝から出土している。転用されていた瓦は、古代末（奈良時代後半から平安時代）であった。

86は、土器群Aの須恵器の台付き壷の底部付近の破片である。残存している器高は、4.6cmであった。底部径9.4cmで、高台の高さは0.9cmで「ハ」の字状に高台は広がる。体部外面はヘラケズリ調整し、内面はロクロナデが観察できた。

87は、土器群Cの須恵器の壷で、下半部が欠損する。残存高は9.6cmを測り、丸味を帯びた肩部に外反する口縁部をもつ。口径16.7cmを測る口縁端部はヨコナデにより上面と側面に面を作る。体部外面はカキメによってタタキ痕を消している。内面は同心円文が観察された。

88は、土器群Aの須恵器甕の体部で、底部を含む下半部の破片である。尖り風の底部で、残存する体部の最大径は37.8cm、残存する器高は19.6cmを測る。外面は、丁寧にナデ調整を施し、わずかに格子タタキ痕が見られる。内面もナデにより調整し、当具痕は観察できなかった。5世紀初頭か。

89は、土器群Cの土師器のマリで、把手を欠損する。丸い体部に口径9.6cmの内傾する口縁をもち、丸みのある底部を呈する器高は8.2cmを測る。外面は、ハケメ調整を施し、内面もナデ調整である。色調は橙色を呈する。なお、内外面に煤が付着していた。

90は、土器群Cの土師器の長頸壷で、口縁部端を欠損する。残存高14.5cmを測り、元は15cm程度の器高と思われる。体部中央に最大胴径12.6cmをもつ。底部はヘラケズリに調整で平底風になっている。

91は、竈である。焚口の上部を欠損する。体部裾に脚を3つ貼り付けている。上部径が19.4cm、脚部を含めた器高26.7cm、裾廻り径は37.9cmを測る。内外面、指オサエの押えが顕著に目立つ。

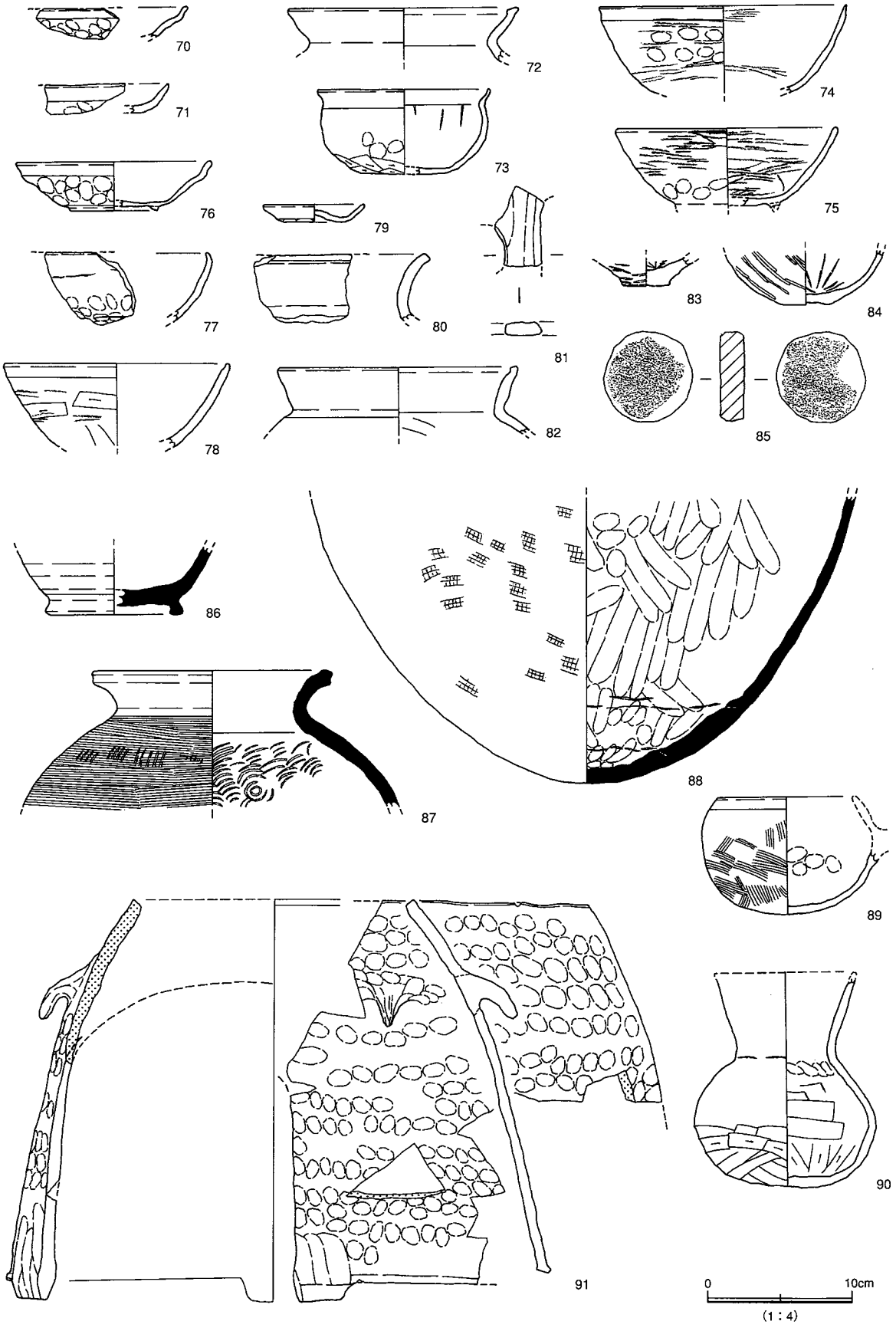


図43　古市遺跡　整地層内、柱穴出土遺物実測図

図44は、ＳＤ０５から出土した土器で、図化可能な遺物を選出し提示した。同溝からは数多くの須恵器、土師器が出土している。

92は、土師器の碗である。器高5.0cmで平底風のやや丸みのある体部である。外面には顕著な指頭痕が見られるに対して内面はナデで丁寧に調整している。口径9.4cmの口縁部はヨコナデにより内傾する。

93は、土師器の碗の口縁部である。底部が欠損するが残存高3.7cmの体部に直立気味の口縁部もつ。口径は13.6cmで、口縁端部はヨコナデにより上方に外反する。体部に指頭痕が観察された。

94は、土師器の碗である。口径11.7cm、器高5.1cmの半球状の体部を呈し、口縁部はヨコナデにより外反する。内外面の調整は磨滅により観察ができない状態にある。

95は、土師器の高杯の杯部と考えられる。口径13.6cmの口縁部は、端部をヨコナデし直立している。外面調整はハケメで、内面はヨコナデを施す。

96は、土師器の高杯で杯の体部から口縁部が欠損する。脚の高さは8.6cmで、裾は「八」の字状にひろがり直径10.7cmを測る。

97は、土師器の甕の口縁部で口径16.6cm、口縁部高2.2cmを測る。「く」の字状に折れる頸部が遺存し、全体で3.1cmを計測する。口縁端部はわずかに上方に肥厚する傾向が認められる。

98は、土師器の広口鉢の破片である。13cm×11cmの大きさで外反する口縁部が見られる。外面は磨滅しているが、ハケメが観察できる。

172（図版十七）の土師器は図化できなかった甕で、最大高14.3cm、遺存する幅は18.2cm大の破片である。器壁の厚さが５㎜程度を測る厚ぼったい感がある胴部は直線的で、長胴甕の様相を呈する。外面調整は丁寧なナデを施している。口縁部は欠損するが。「く」の字に折れ曲がる頸部が観察できる。口縁内面にハケメが残る。

99から105は、須恵器の杯蓋である。稜線が消失する104から105は新しい１群になる。

106から116は、須恵器の杯身である。口縁部内面に段のもつ106、108、は古い一群として捉えられる。

117は甕の口縁部片で、図面より口径は大きくなると思われる。工具小口で格子状に施圧し、カキメを施す。

118と119は、壺の口縁である。前者は、口径15.7cm、高さ4.8cmでカキメを施す。後者は、口径14.4cm、高さ3.0cmである。口縁部は無文である。

120は、有蓋高杯の杯部と脚部が少し遺存する。杯部の法量は、口径10.8cm、器高4.5cmを測る。短脚一段スカシが確認できる。

121は、高杯の脚部であるが、観察できるスカシ孔は大きい。ＴＫ216型式と考えられる。

122は、つまみ部が欠損する有蓋高杯の蓋である。口径11.8cm、器高3.6cmを測る。

123は、口径12.6cm、残存高4.2cmの無蓋高杯の杯部である。長脚部が欠損する。

124は、高杯の脚部で、長脚２段スカシ孔が見られる。杯の部分は欠損する。脚部の法量は、高さ12.9cmで、脚裾の直径が11.8cmを測る。

125は、須恵器の壺の脚である。脚裾の直径15.2cmで長方形のスカシ孔が見られる。

126から129までは、瑞である。126は破片のため瑞特有の胴部に孔が欠損している可能性があり、形態から瑞と判断した。体部は無文である。127は頸部から体部上半のみ。底部は欠損する。128は、瑞の口縁部で、口径12.4cm。129は口縁部が欠損。胴径9.4cm、器高8.2cm。口縁部に波状文を施す。

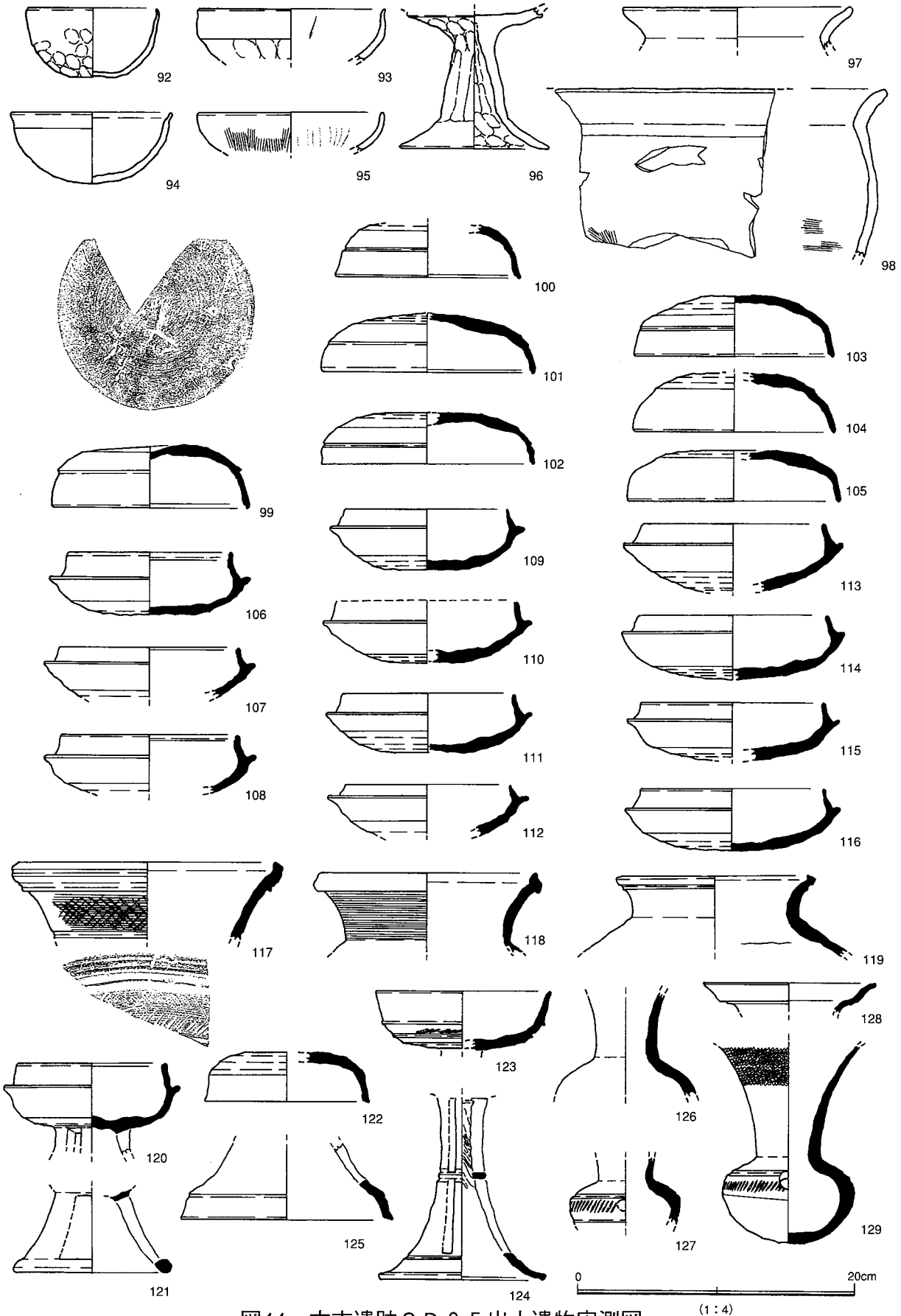


図44　古市遺跡ＳＤ０５出土遺物実測図

130は、ＳＤ５から出土した滑石製の子持ち勾玉である。

親玉の形状は、頭・尾部の両端が尖り、Ｃの字状を呈している。具体的な物に例えるとバナナの形に近い。断面の形態は楕円形である。

背部に４個、側面ａに10個、側面ｂに12個、腹部に１個の突起を有している。腹部と背部の子持ちは独立しているが、両側面の突起は完全な小勾玉状には仕上げてられていない。方形状の突起が表現されている。本来は２個で１つの子持ち勾玉であったのが退化したものと考えられる。背部の突起は長さ1.7cm、高さ0.8cm、厚さ0.8cmである。腹部の突起は長さ1.7cm以上、高さ2.0cm、厚さ1.1cm。

親玉の法量は、全長が11.8cmである。幅3.2cm。重さ206グラム。穿孔は両面からなされ、孔径は0.6cmである。全体的に丁寧なつくりとなっている。

大平茂氏の分類によればⅡ－１類に該当しよう。

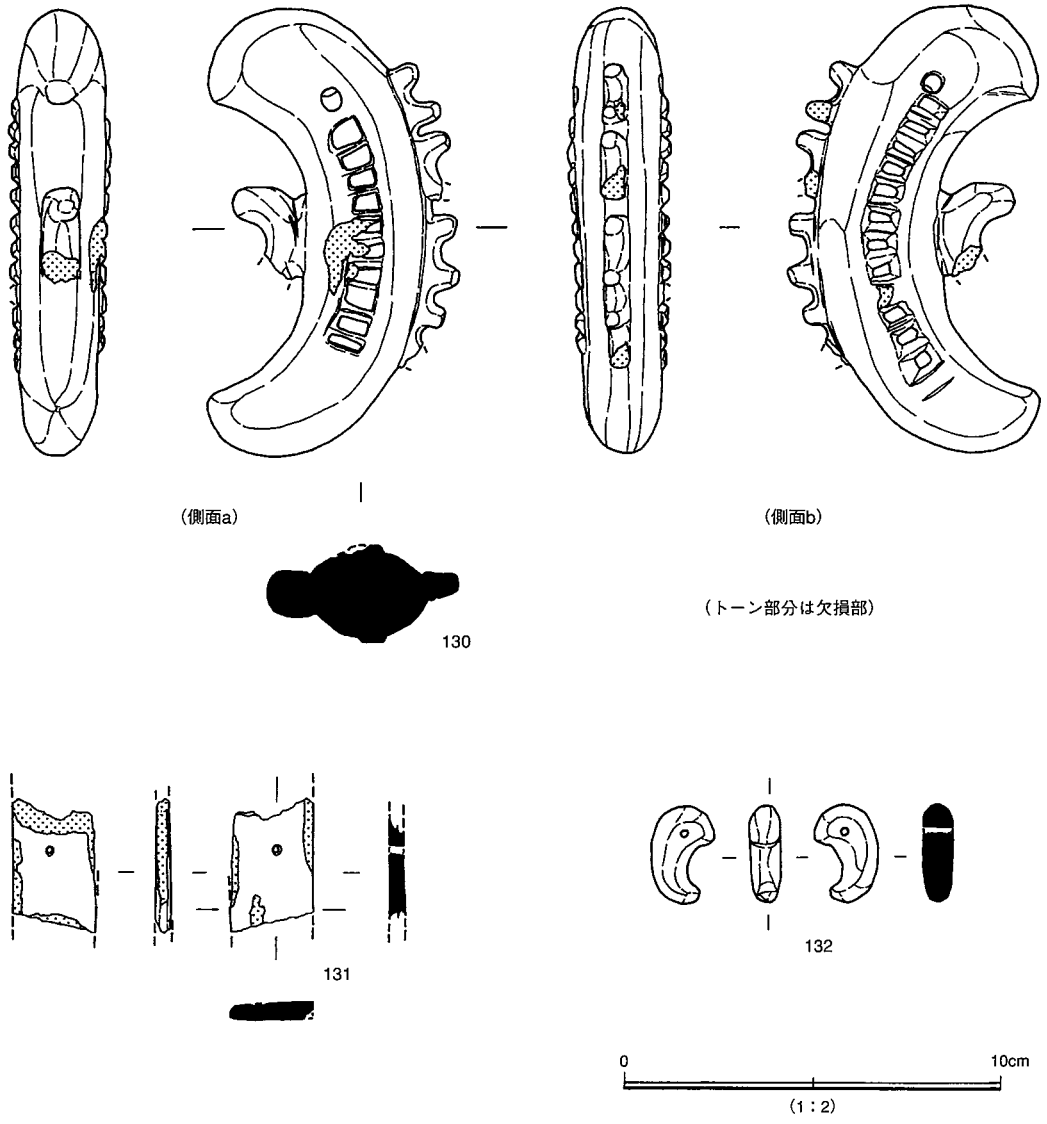


図45　古市遺跡ＳＤ０５出土子持勾玉・滑石製品実測図

新しい段階に資料であることに疑いは無い。

羽曳野市内において、子持ち勾玉の出土今回で5例目となる。他4点は、茶山遺跡、島泉北遺跡、河原城遺跡、そして平成元年に古市遺跡でも出土している。形態から茶山→島泉北遺跡→古市遺跡→河原城遺跡と変遷が考えられる。

131は、滑石製の剣形の石製模造品と考えている。上下端が欠損し、遺存する長さは3.5cmを測る。幅2.3cmで、厚み4㎜の法量を呈する。外面に削痕が顕著に見られる。横幅の中央に直径28㎜の孔が穿かれている。

132は、滑石製の勾玉である。全長は11.8cm。幅3.2cm。重さ9.8グラム。穿孔は両面からなされ、孔径は0.6cmである。全体的に丁寧なつくりとなっている。頭に厚みが見られるので古墳から出土する石製模造品とは形態がことなる。

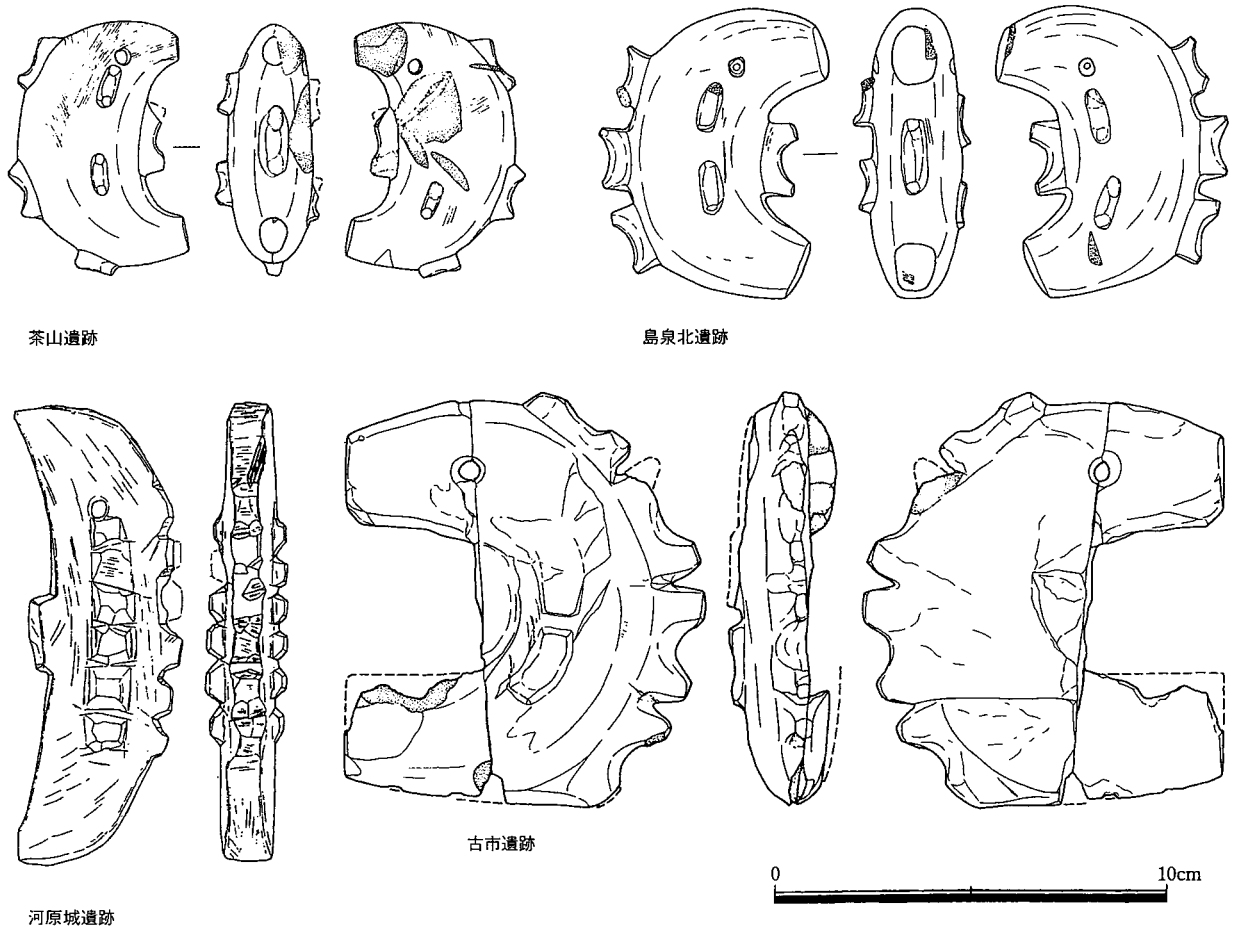


図46　羽曳野市内子持勾玉実測図

表8　大阪府内子持ち勾玉出土地名表

No.	遺跡名	所在地	遺跡性格	出土点数	出土状況	時期	背部	側面	全長
1	古市遺跡	羽曳野市古市1丁 羽曳野市古市2丁目	集落	2	溝 柱穴	6世紀 5世紀	4 4	5 2	12 10.5
2	茶山遺跡	羽曳野市誉田7丁目	生産	1	包含層	5世紀	3	2	6.6
3	島泉北遺跡	羽曳野市島泉5丁目	集落	1		5世紀	3	2	7.5
4	河原城遺跡	羽曳野市河原城	集落	1		6世紀	5	6	11.8
5	土師ノ里遺跡	藤井寺市道明寺	生産	4	包含層 包含層 包含層 包含層	5世紀	2	2以上	6 7.7 7 6.6
6	船橋遺跡	柏原市大井	集落	1		7世紀	3以上	3以上	
7	潮音寺北古墳	藤井寺市国府	古墳	3			2 2 2	2 2 8	
8	北岡遺跡	藤井寺市岡	集落	1					
9	小塩遺跡	河内長野市小塩	集落	1	包含層	7世紀	2	2	
10	大県遺跡	柏原市法善寺	生産	1	包含層	7世紀	4	5	10
11	恩智遺跡	八尾市恩智	集落	1	包含層		1以上	1以上	7.2
12	萱振遺跡	八尾市萱振	集落	1	包含層		8	5	12.3
13	池島福万寺遺跡	八尾市福万寺町	集落	4	井戸 包含層	6世紀 6世紀 6世紀	6以上 5 3 4以上	? 2 4 4以上	9.2 9.2 11.8 10.4
14	跡部遺跡	八尾市跡部本町	集落	1		5世紀	4	3･2	
15	友井東遺跡	東大阪市金物町	集落	1	自然流路		2	2	12.1
16	大賀世古墳	東大阪市横小路	古墳	1			3以上	4以上	12
17	えの木塚古墳	東大阪市南四条町	古墳	1	古墳		3	2	7.9
18	瓜生堂遺跡	東大阪市瓜生堂	集落	1	包含層		3	2	6.5
19	山畑22号墳	東大阪市上四条町	古墳	1	古墳		3以上	2以上	5.6
20	西ノ辻遺跡	東大阪市西ノ辻	遺跡	1		7世紀	1	3	
21	西堤遺跡	東大阪市西堤学園	遺跡	1			未製品		
22	寺川遺跡	大東市寺川5丁目	集落	1		6世紀			
23	私部南遺跡	交野市私部南	集落	3 3	柱穴 第3面	6世紀	2以上 3 3	3つか 2 2	8 5.5 6.7
24	太秦古墳群	寝屋川市太秦中町	古墳	2			3 7	2 5	7 7
25	長保寺遺跡	寝屋川市昭栄町	集落	1	包含層	5世紀	3	6	10.2

26	讃良郡条里遺跡	寝屋川市高宮	集落	1					
27	中野遺跡	四条畷市中野	集落						
28	今城塚	高槻市郡家新町	古墳	1		6世紀	4	5･4	9.4
29	郡遺跡	茨木市上穂積	集落	1	包含層		6	3?	11.5
30	島田遺跡	豊中市庄内栄町	集落	1	落込み	6世紀	3	2	7.3
31	大坂城跡	大阪市中央区	集落	2	自然流路		4 3	4 4	7.3 7.9
32	難波宮跡	大阪市中央区法円坂	集落	3	住居址 包含層 包含層	7世紀	0 0 3	0 0 3	6 5.1 11.2
33	長原遺跡	大阪市平野区	古墳	2					
34	桑津遺跡	大阪市東住吉区	集落	1		7世紀	0	0	
35	山之内遺跡	大阪市住吉区山之内	集落	1			5	5	9.6
36	観音寺遺跡※	松原市大堀	集落	1	土坑44		7以上	5	13.5
37	丹比柴籬宮跡※	松原市上田	集落	1					
38	黒姫山古墳※	堺市美原区	集落	1			4	2	8.2
39	カトンボ山古墳	堺市百舌鳥赤畑	主体部	4	主体部		1 4 2 4	0 0 0 3･4	5.5 6.8 8.7 10.5
40	土師遺跡	堺市百舌鳥陵南町	生産	2	土坑 住居址	6世紀 5世紀	12 3	4 3	7 6.7
41	深田遺跡	堺市大庭寺	生産	1	溝	5世紀	3	3	5.4
42	楢葉神社跡※	堺市中区楢葉	集落	1			3	2	6.8
43	山田北遺跡	堺市山田3丁目	集落	1	土坑?	6世紀	5	4	11.2
44	野々井9号墳	堺市野々井	古墳	1	周濠	6世紀	3	3	7.4
45	西浦橋遺跡	堺市菱木	集落	1		6世紀	4以上	3以上	6.6
46	七ノ坪遺跡	泉大津市北豊中町	集落	1	包含層	6世紀	−	−	5.4
47	大園遺跡	高石市西取石	集落	2	包含層	5世紀	0 3	0 2	6.1 8.4

1．茶山遺跡　『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成11年度』2002　図42　35　p64

2．島泉北遺跡　『古市遺跡群ＸＸⅨ』2008　　図14　130　p15

3．河原城遺跡　『河原城遺跡Ⅰ』

4．古市遺跡　『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成元年度』1990　　図25　p45

新海正博1994「３Ａ調査区出土の子持ち勾玉について」『大坂城跡の発掘調査４』

埴輪

埴輪には、円筒系（普通円筒形と朝顔形）と形象埴輪がある。総点数93点のうち前者が74点、後者が19点であった。総数93の中から18点を図化し、図47に提示した。円筒は焼成、突帯形状、外面調整からⅠ類からⅢ類の３つに分類した。

133～137がⅠ類である。Ⅰ類は黒斑をもつ、４世紀末～５世紀前葉の製作時期が与えられる。133の体部片には円形スカシ孔が観察される。136は鰭付円筒で、鰭を貼り付ける際の縦方向のキザミ目が観察できる。137は突出度の高い突帯をもつ破片は赤彩が確認できた。しっかりした台形の突帯をもつ135も赤彩であった。

以上Ⅰ類は、出土点数が５点で、川西編年のⅢ期の範疇に含まれる。

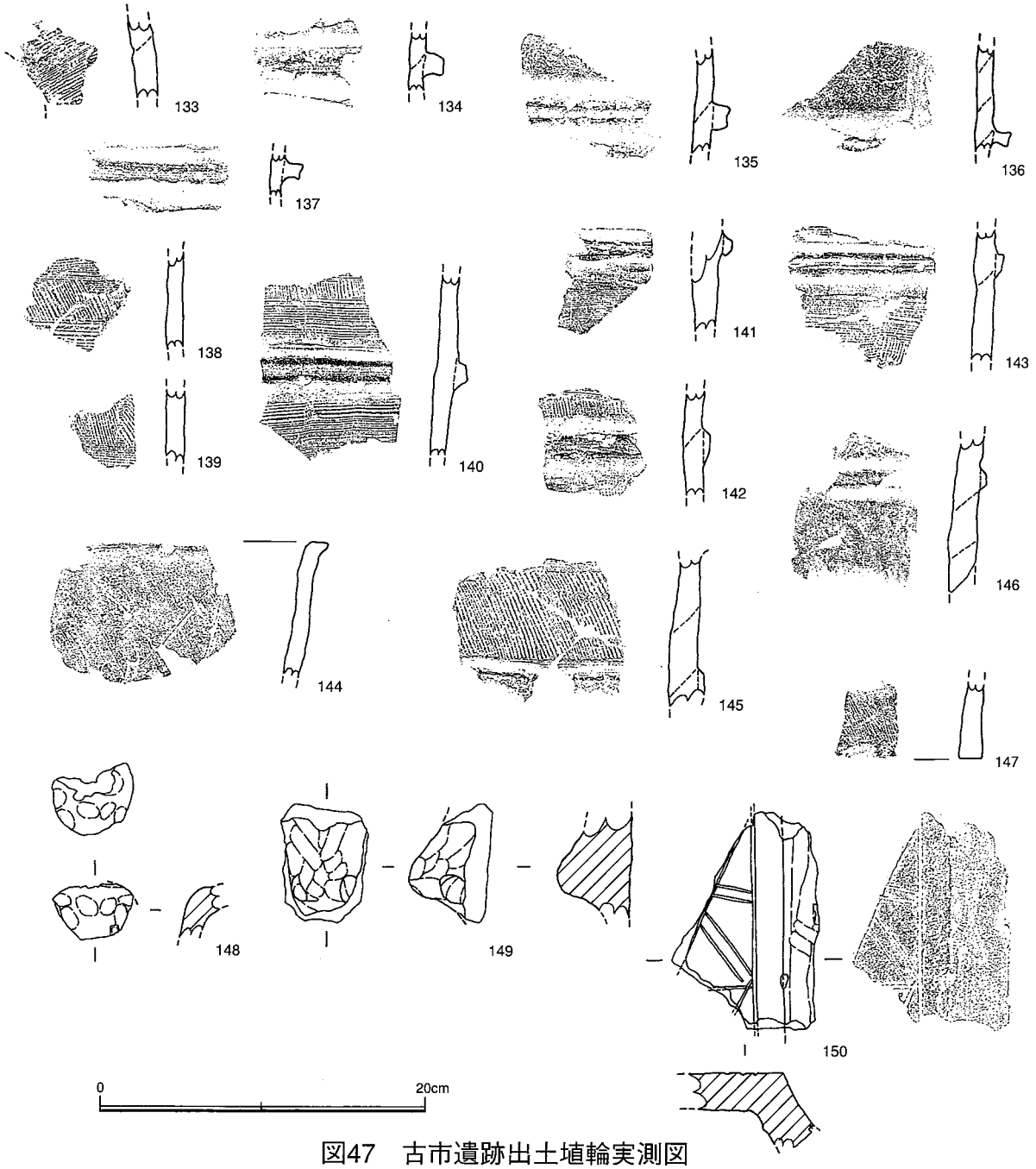


図47　古市遺跡出土埴輪実測図

Ⅱ類は、138から143の６点である。破片の外面には黒斑が認められず、140は須恵質の焼成であった。調整は、外面にＢ種ヨコハケが二次調整として施され、内面はナデ調整であった。突帯は台形を呈する。出土点数14点、川西編年のⅣ期にあたり、５世紀中葉に比定される。

Ⅲ類は出土した破片数は55点で最も多く、その中から４点を図化したのが144から147である。Ⅲ類も無黒斑である。外面調整が二次調整を欠き、ナナメハケのみで調整が終わる。突帯の断面は崩れた台形を呈する。144は口縁部で、端面をナデにより平坦にする。147は底部で、底部調整は確認できない。焼成や調整からⅢ類は、川西編年Ⅴ期(５世紀末葉)にあたる。

図47、並びに写真８の148から150は形象埴輪の破片である。

148は人物埴輪の前頭部から頭頂部にかけての破片と思われ、頭頂の剥離痕は巫女特有の島田髷の存在の可能性が高い。149は、横方向に二つ刺突がある突起を呈し、形状から鼻を表現している。同じような破片は、平成20年に発見された写真７の城不動坂古墳にも見ることができ、盾持ち人物と考えられる。大きな鼻が特徴とする盾持ち人物は、羽曳野市内では２例目となる。ただし両者の違いは、本調査区で出土の資料は鼻孔があるのに対し、城不動坂古墳の例はその表現が無い。顔の細かい特徴をリアルに製作した埴輪群といえる。古市古墳群に見られる形象埴輪において盾持ち人物埴輪は、城不動塚古墳の出土例から古市古墳群の中では新しい段階に出現する埴輪の一群といえる。

150は、形状と文様の構成から靱形埴輪と考えられる。施された文様から製作時期は５世紀代と考えられる。

その他の形象には、盾形、草摺形、石見型の埴輪片が認められた。

円筒埴輪や形象埴輪の出土は、周辺に製作工房の存在を考えるより古墳が削平された可能性が高いと思われる。今回、確認した溝(ＳＤ０５)は古墳の痕跡と考えるには根拠に乏しい。

本調査区から東へ200ｍには西琳寺跡が建立されているが、平成16年に調査した古市２丁目２番地からは小方墳の堀跡が確認されている。飛鳥時代に寺院造営時に削平されたと思われが、古墳の築造時期は出土した埴輪から６世紀代と考えられる。

本調査区では埴輪Ⅲ類に該当するので、同時期の古墳が複数基存在したと考えられる。

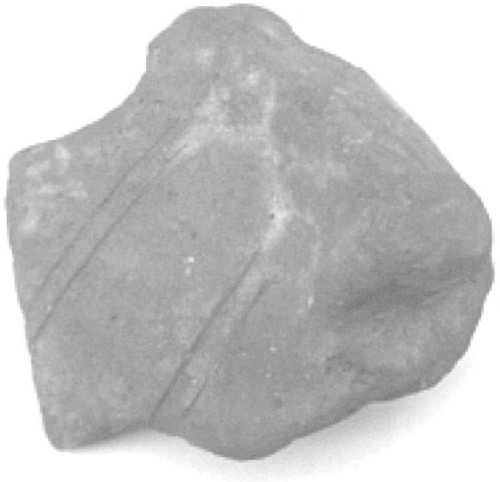


写真7　城不動坂古墳の盾持ち埴輪

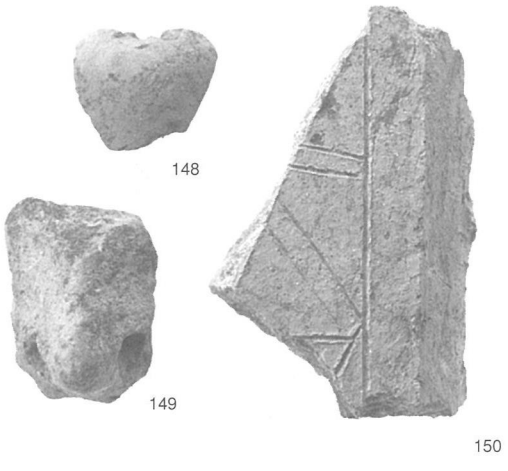


写真8　古市遺跡出土形象埴輪

出土瓦には２点の軒瓦のほか、平瓦、丸瓦、量は少ないものの道具瓦も含まれていた。この内丸瓦以外は代表的な資料を抽出し、図48に提示した。

151は、軒丸瓦で瓦当面の中央に梵字「ア」を配し、周囲に連珠文を回らす。古市遺跡では、平成22年の駅前整備の事前調査でも出土している。羽曳野市内では野中寺跡（塔跡）に同范例がある（写真９）。同瓦は、南河内周辺においては余部日置荘遺跡、観音寺遺跡、国府遺跡、四天王寺から出土の報告がある。

152は、軒平瓦で連珠文を配する。珠文の数は不明である。顎形態は曲顎である。

153から164までが平瓦の破片で全体を知ることができる資料は無い。そこで、凸面に施された調整痕跡からⅠ～Ⅴ類の五つに分類し、以下説明を加える。

Ⅰ類は平行タタキを施すものである。153～155は叩き板が広端部に平行、156は広端部に斜めに施す。Ⅱ類は板ナデ。157が該当し、凹面には模骨痕がある。8.4cm×10cmの大きさで1.6cmの厚みがある。ＳＤ０２から出土した。Ⅲ類は縄目タタキを施す158から160が該当する。広端部に直行する。厚みが1.0cmと2.0cmの二種類認められる。Ⅳ類は161から162は離れ砂が顕著に観察できる。厚さ2.0cm。Ⅴ類の163はコビキ痕が顕著に残る。厚さ2.0cmを測る。Ⅵ類の164は格子状刻印のタタキを施す。

分類した平瓦の製作時期は、Ⅰ類・Ⅱ類は飛鳥時代、Ⅲ類は奈良時代、Ⅳ類からⅥ類は鎌倉時代中期と考える。

165は鴟尾の鰭部片と思われろ。大きさは、12cm×14cmで、厚さが26cmである。緩やかな彎曲する破片外面の段差部分を脊稜の帯と考えている。

その他丸瓦については、細片であるため図化できる資料はなかった。また、製作時期を明らかにできる特徴も見出せなかった。

以上、瓦類の製作年代は軒丸瓦と軒平瓦は鎌倉時代中期と考えられ、同時期の平瓦はⅣ類からⅥ類が伴なうと思われる。

西琳寺から出土している梵字瓦の種子は「キリーク」で、今回古市遺跡で出土した「ア」梵字瓦と異なる。

写真9　野中寺出土梵字瓦

梵字瓦の分布が東高野街道に沿って認められることから四天王寺－高野山の往来に利用した堂宇の瓦と考えられている。羽曳野市内では野中寺、古市などの分布から東西往来にあたる寺院などに小堂が建てられたことが推測される。

古市遺跡では東高野街道より西側からの分布が認められるので、西琳寺境内地に造営したのではなく、野中寺の分布関係から竹内街道に面した地点、つまり白鳥神社の周辺に建てられていた可能性が高い。今後、周辺の調査で明らかされるであろう。

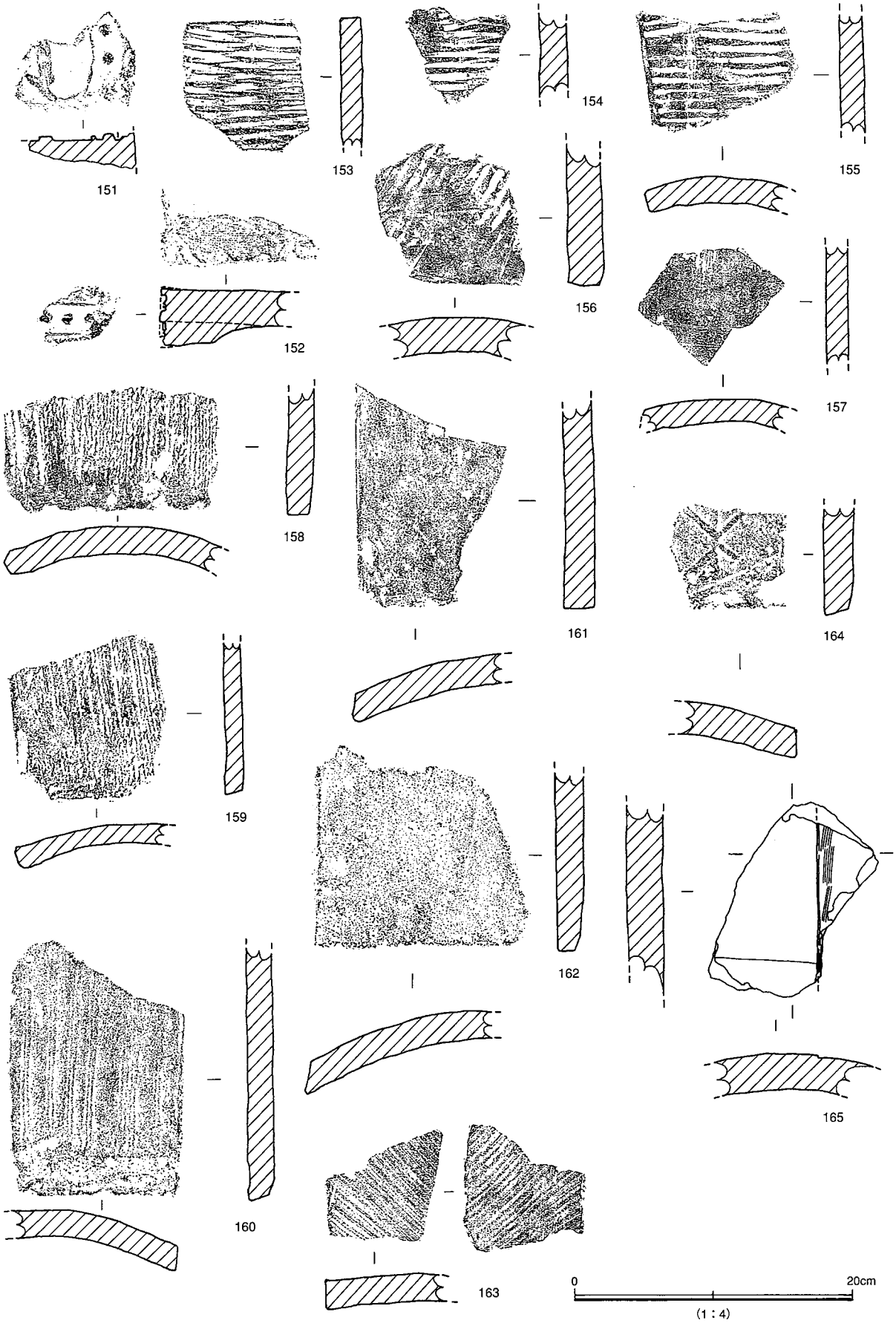


図48　古市遺跡出土瓦遺物実測図

まとめ

今回は、２面の遺構面の調査を実施した。遺物から５世紀から７世紀と考えられる下面と16世紀から18世紀と考えられる上面である。

下面で特筆できることは、コーナーをもつ溝が検出され昭和61年の調査成果と考えあわせると方形の区画の存在が推定される。溝の中から出土した須恵器、土師器などの土器は６世紀代で、古市古墳群の新しい一群の前方後円墳の造営時期と共通する。土器とともに子持ち勾玉などの滑石製品は、この区画の性格を提示しているのかもしれない。

周辺で検出されている住居跡から出土する遺物より新しい。埴輪片も出土しているので区画溝が古墳の周濠の可能性も考えられる。今のところ出土須恵器や滑石製品などから６世紀中葉以降の祭祀場の存在も可能性がある。平成16年度の調査で、西琳寺跡から小型方墳と考えられる周溝跡が発見されている。(2005『古市遺跡群ＸＸⅥ』)

そのほか、下面では５世紀中葉、５世紀前葉、７世紀～８世紀の柱穴や土器が出土する。
遺構に伴なわないが土師器の甕が出土している。口縁断面が「く」の字状を呈し、口縁端部が内面に肥厚する特徴的な布留式である。

平安時代を最後に、鎌倉時代でも新しい時期に整地が行われ区画溝で割りつけられた街並みが構築される。昭和61年の西側での調査成果を考えると、中世末に鍛冶関連の施設が区画溝によって構築されている。遺物からは高屋城が築かれた時期に合致することから従前から言われている古市が城下町的存在であったことが今回の調査で補強できたことになる。

今後、周辺の調査が継続されれば、①古市古墳群の時代、②西琳寺の時代、③高屋奥の院時代、④高屋城の時代の環境が明らかにされるであろう。

写真10　昭和61年調査上面（中世）遺構全景（西から）

古市遺跡・白鳥神社古墳

古市遺跡は羽曳野市の中央部に位置し、石川と旧大乗川に挟まれた南北１km、東西0.5kmほどの広がりをもった低位段丘上に築かれた、縄文時代から近世に至る複合遺跡である。遺跡の北には上堂遺跡、西には誉田白鳥遺跡、南には中世に築城された高屋城が隣接している。昭和54年に古市小学校建設工事に伴って古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物が発見されたことから、従来上堂遺跡として周知されていた遺跡を旧国道170号線に沿って北側を上堂遺跡、南側を古市遺跡として区別した。遺跡内には、チンチン山遺跡や西琳寺、白鳥神社などの遺跡や社寺が見られる。

潤沢な水に育まれたこの地域には、縄文・弥生時代ころにはすでに人が住んでいたことが出土遺物や遺構などから考えられ、古墳時代後半になると竪穴住居や掘立柱建物の集落遺構が見られる。建物遺構は続く飛鳥・奈良時代時代にかけてさらに増加するが、このころ難波と飛鳥をつなぐ丹比道が古市を横断するように築かれ、その街道に沿って渡来系氏族の西文氏によって西琳寺が創建されるなど古代文化の拠点として重要な役割を担ったと考えられる。中世になると古市庄として観心寺領や石清水八幡宮領となる。調査で鎌倉時代の井戸や建物跡などが広く見られることから在地の集落として発展を続けたと考えられるが、中国製磁器や備前焼・珠洲焼の出土から活発な交易が見られることや製鉄関係遺跡にも見られるように、この時代商業的にも発展を遂げたことが理解できる。その後南北朝時代には楠木方の要害を構え、応仁の乱では幕府軍（細川軍）と畠山義就軍との戦場となった。この戦乱後、畠山氏によって古市村の南側の独立丘陵に高屋城が築かれ、古市は城下町的な性格を担うようになった。中世後期には、浄土真宗の中心道場である石山本願寺の河内拠点の一つとして役割を果たした真連寺を中心に織田信長軍と戦闘を繰り広げたが、最後は信長軍に敗れ、高屋城と古市は灰燼に帰した。このときの痕跡が焼土層として地下に眠っている。江戸時代には、中世の城下町的要素や西琳寺の門前町的要素に加え、東高野街道と竹内街道の交会点として、また石川へ注ぐ大乗川の渡河点として奈良や京都、堺へと人々の往来が活発化し、銀屋にみる両替商や旅人の宿泊の場として盛況を迎え、農村部でありながら商業的な性格をもつ在郷町として発展を遂げていった。

白鳥神社古墳は、1922年（大正11）に発刊された「大阪府全志」にはじめて古墳として紹介された。1934年（昭和９年）の「大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第５輯」に前方後円墳として掲載されて以来、周知されることとなった。航空写真では、近鉄南大阪線古市駅よって前方部と後円部が大きく分断されている状況が確認でき、後円部にあたる部分には白鳥神社が鎮座しているためかろうじて残存している。一方前方部は、旧170号線や住宅開発が進み残りはよくない。これまで古墳周辺では、前方部と考えられる高まりの調査や後円部周辺の部分的な発掘調査が実施されているが、古墳であることを積極的に確証する遺構や遺物の出土はほとんど見られない。江戸時代の古市村を描いた絵図にも前方後円墳として表現されているものはなく、小高い丘の上に白鳥神社が描かれているに過ぎない。また旧大乗川が、白鳥神社のすぐ西側を流れていたことからも白鳥神社古墳を前方後円墳とするには躊躇せざるを得ない状況にあり、さらに一歩踏み込めば、古墳そのものであるかどうかも疑問視されている。徐々に周辺隣接地での調査が進んでおり、今後の調査の進展によって古墳の是非が解明されるであろう。

このように古市は長い間人々が生活を送ってきた場所であり、調査によって多くの遺構や遺物が発見され、重要な成果をもたらしている。今もなお人々が生活した多くの痕跡が古市の地下に眠っている。

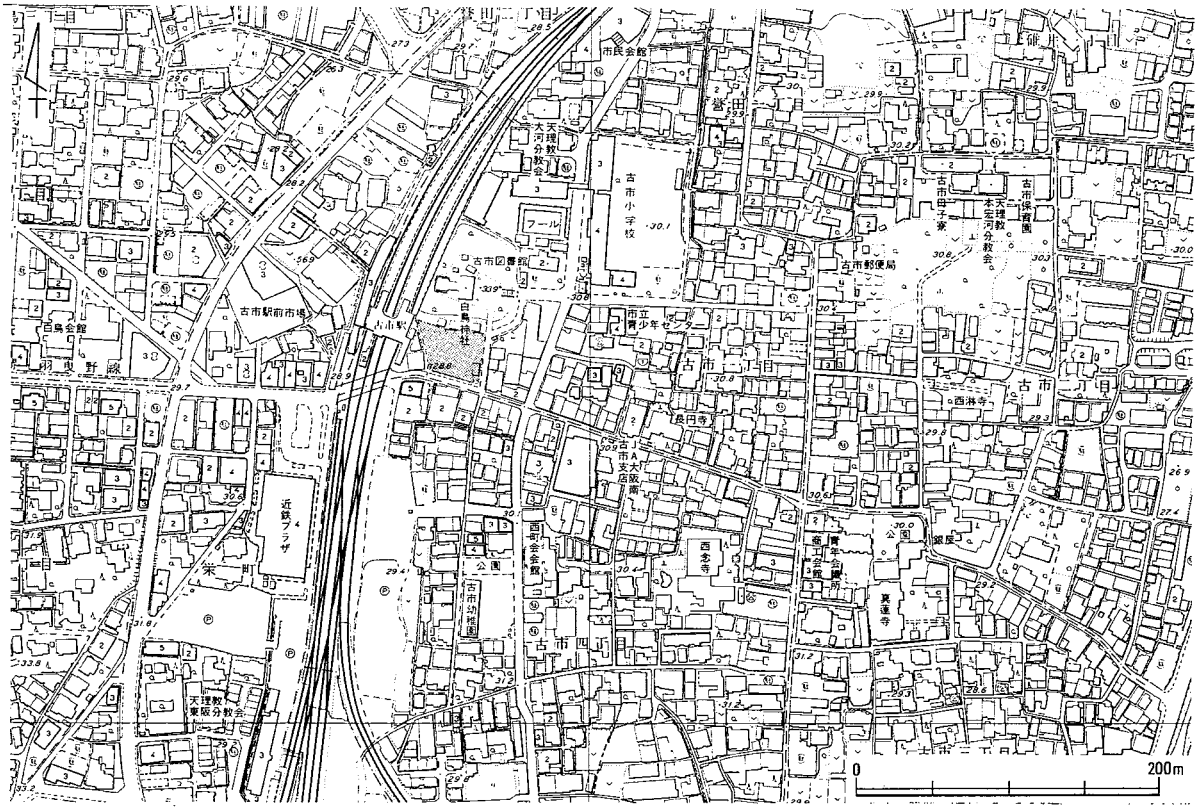


図49　遺跡内調査位置図

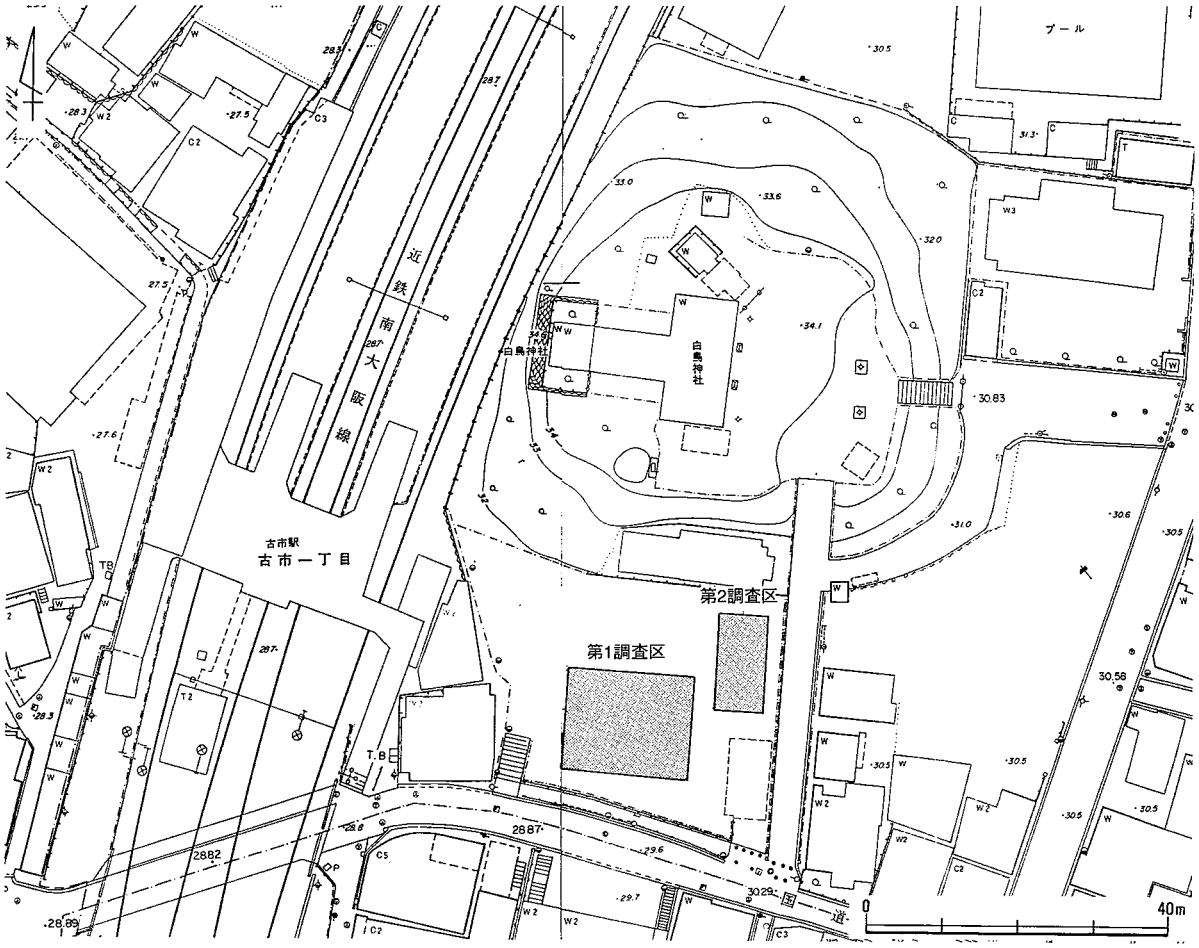


図50　調査位置図

09－01調査

当該地は白鳥神社の南側に隣接し、白鳥神社が古墳であるかどうか検証できる場所にある。これまで白鳥神社の北側では、古市小学校体育館建設などに伴って発掘調査が実施されており、結果、古墳を積極的に確証できる資料の発見には至っていない。

これらの調査で検出した遺構や出土した遺物の一部については、昨年に報告したが、整理の都合で井戸３の遺物については未報告であったため、今年度に報告を行う。井戸３以外の遺構や遺物の詳細、また白鳥神社古墳の概要については、前年度の報告書（羽曳野市内遺跡調査報告書－平成21年度－）を参照願いたい。

遺　物

第２調査区

井戸３（図51～図60）

今回の調査でコンテナ75箱ほどの遺物が出土したが、その約７割弱は井戸３からの出土遺物であった。出土遺物は、土師皿、瓦器小皿、瓦器椀、土師質羽釜で占められており、出土位置は、井戸検出面とその下層0.3～0.4mの間にまとまっており、井戸を埋め戻した最終段階で廃棄されたことが理解できる。また出土状態を観察すると、羽釜の中に瓦器椀等が詰め込まれたり各製品が大量に廃棄されたりしている状況であった。これは、前年度報告の井戸２の肩口でも羽釜のなかに土師皿や瓦器椀が入った状態で発見されていたことを考え合せると、井戸の埋め戻しに際して、その最終段階で何らかの祭祀が執り行われていた可能性が考えられる。また井戸３のこれらの遺物については、一括性の高い遺物群であると言える。

土師皿（図51～53）

井戸３から出土した遺物のなかで量的にもっとも多く出土した遺物である。全体的に細かく破片になっているものが多く、点数としてどれだけ出土しているかはわからない。しかし図化していないが、ある程度個体として認識できるものについては、大雑把ではあるがだいたい図化した土器の２～３倍以上はあるものと推測できる。ここでは比較的残りがよく、器形全体の形態が分かるものを取り上げて図化した。

製品の規格については、口径9.0cm前後の小型品（小皿）と15.0cm前後の大型品（大皿）に大きく分かれる。またそれぞれ、高台の付くものと付かないものに分けることができる。高台の付く製品は出土数がごくわずかで、数点を数えるに過ぎない。今回小型品98点（うち、高台のつくもの２点）、大型品68点（うち、高台の付くもの２点）を図化した。

小型品

１・２は小型品で高台が取り付くものである。１については、口径8.4cm、器高2.8cm、高台径3.8cmを測る。口縁部には幅の広いヨコナデが残り、杯底部にはユビオサエが明瞭に見られる。これは杯部の製作時の調整と脚部との接合時の調整とによるものである。色調は浅黄橙色を呈する。

２は口径9.3cm、器高2.6cm、高台径5.8cmを測る。杯部は浅く、高台の高さの半分くらいしかない。調整については１と変わりない。色調はにぶい黄橙色を呈する。

３～98は高台がつかないものである。法量については、口径8.4cm～9.8cm、平均口径9.0cm、器高1.3cm～2.0cm、平均器高1.6cmを測る。口縁部には幅の広く、強いヨコナデが施され、底部付近にはユビ

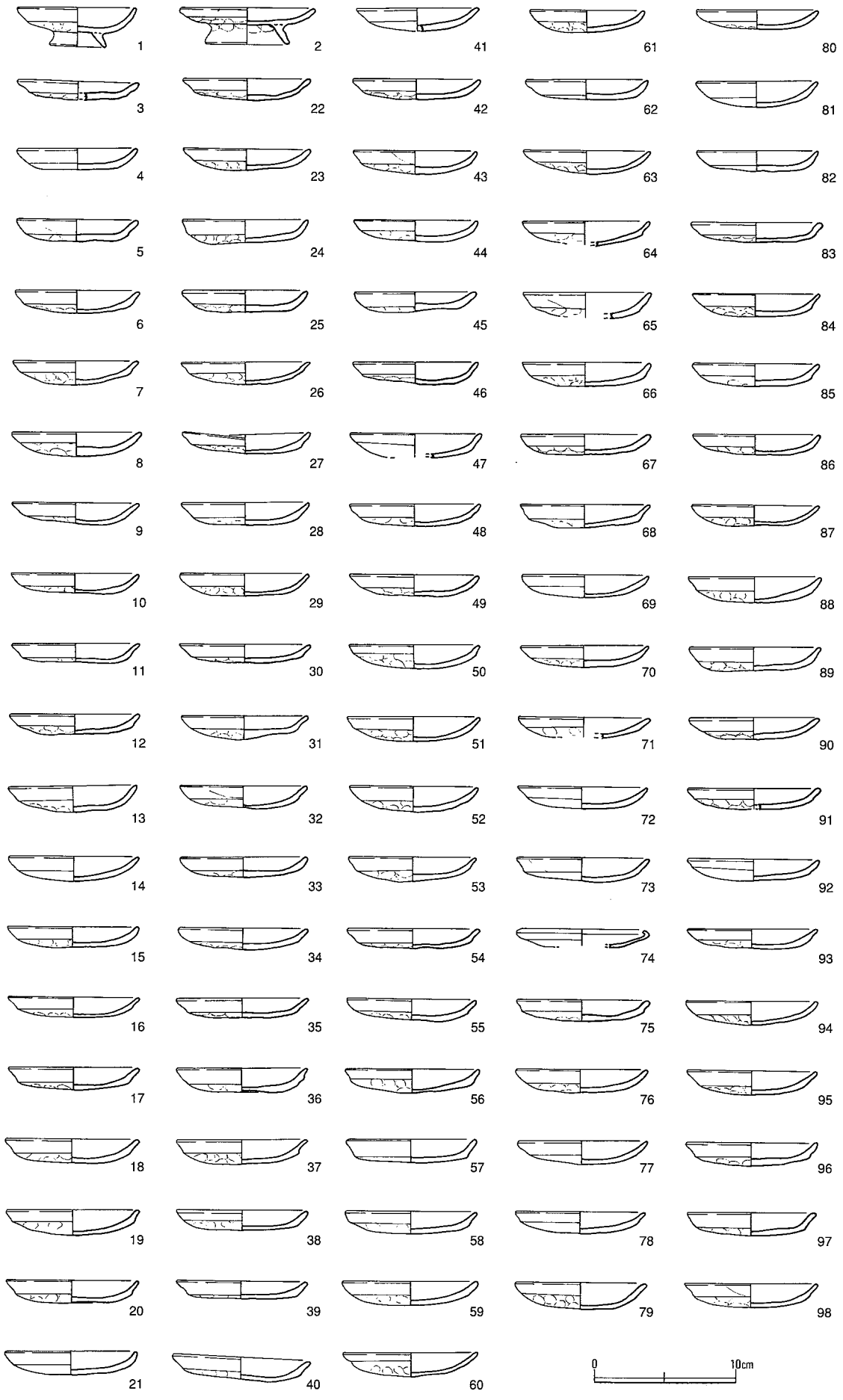

1
2
41
61
80
3
22
42
62
81
4
23
43
63
82
5
24
44
64
83
6
25
45
65
84
7
26
46
66
85
8
27
47
67
86
9
28
48
68
87
10
29
49
69
88
11
30
50
70
89
12
31
51
71
90
13
32
52
72
91
14
33
53
73
92
15
34
54
74
93
16
35
55
75
94
17
36
56
76
95
18
37
57
77
96
19
38
58
78
97
20
39
59
79
98
21
40
60
0
10cm

図51　出土遺物１

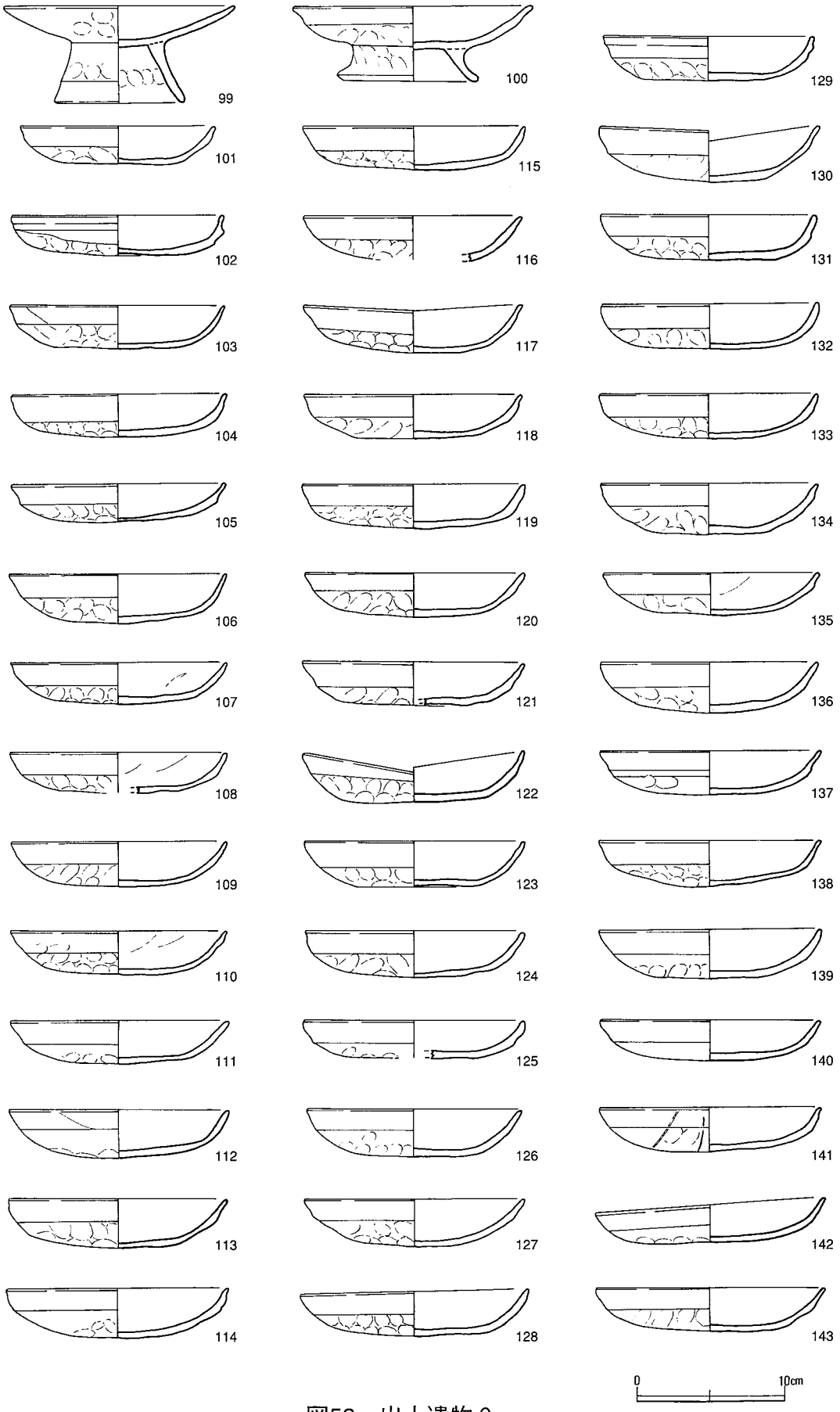

99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
0
10cm

図52　出土遺物 2

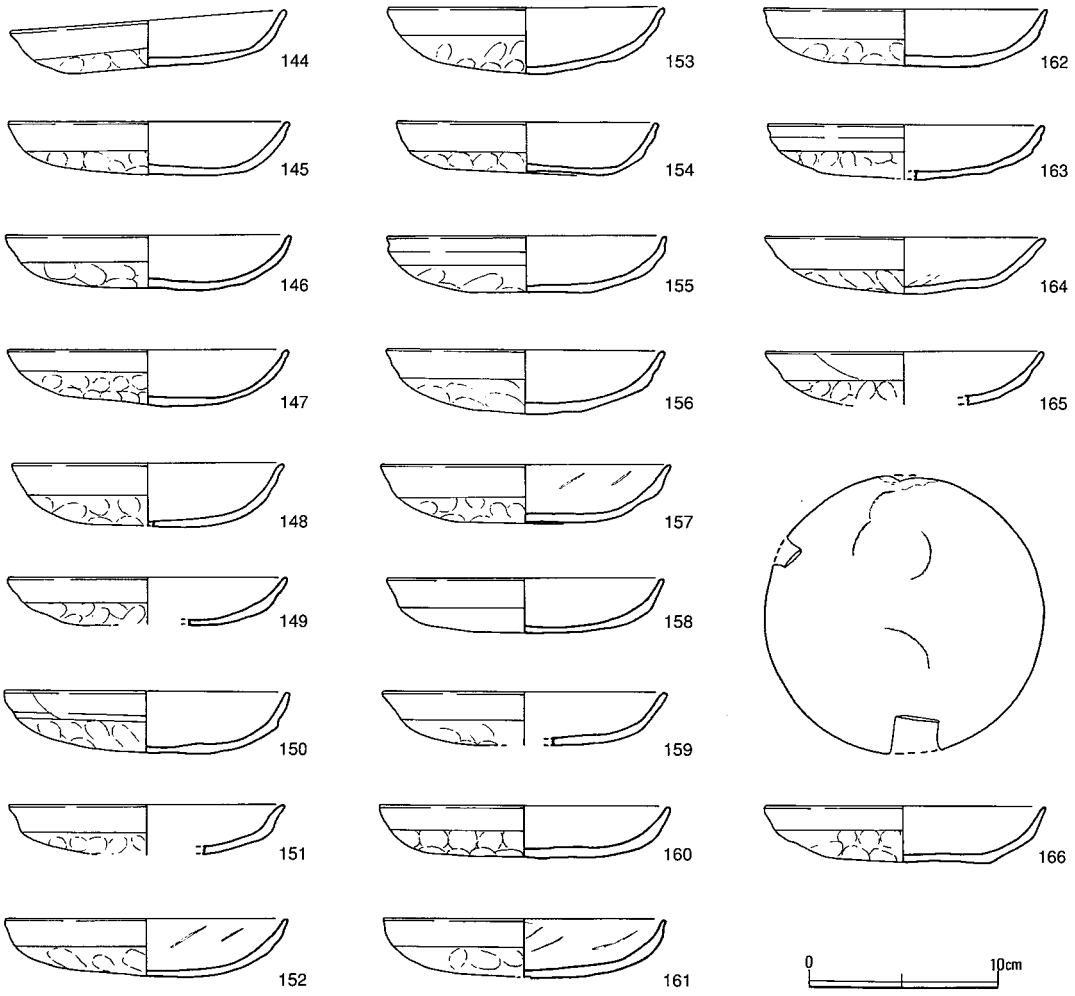


図53　出土遺物 3

オサエが残る。62や72のようにユビオサエの痕跡が認められないものも存在する。あるいは、ユビオサエをナデによって消している可能性も考えられる。口縁部は基本的に外反し、端部は丸くおさめる。ただし、74のように端部が内傾するものも存在する。色調は橙色かにぶい橙色を呈する。

大型品

99・100は大型品で高台が取り付くものである。前者は口径15.6cm、器高6.4cm、底径8.8cmを測る。杯部及び脚部の外面にはユビオサエ、脚部内面にもユビオサエが残る。その他はナデが見られる。後者は口径16.2cm、器高4.9cm、底径8.8cmを測る。杯部及び脚部の外面にはユビオサエ、その他はナデが施される。99に比べ脚部は短く、ハの字状に開く。色調はどちらもにぶい黄橙色を呈する。

101～166は高台がないものである。法量については、口径13.0cm～15.6cm、平均口径14.8cm、器高2.5cm～3.7cm、平均器高3.0cmを測る。基本的に小型品と形態及び調整方法は同じである。ただ口縁部のヨコナデが強いため、口縁端部外面には口縁部と体部との間で大きく段を形成しているものが多い。色調は橙色か浅黄橙色を呈する。

瓦器小皿（図54）

小皿の出土量は、破片などを考慮すると50枚ほどになるが、図化したのは30枚である。土師皿の小型品と近似した規格である。

法量については、口径8.4～9.4cm、平均口径9.0cm、器高1.7～2.4cm、平均器高2.1cmを測り、ほぼ同一規格で作成されていることが理解できる。

形態については、体部は逆ハの字状に緩やかにやや内湾しながら立ち上がり、全体的に丸味を感じさせる形態で、端部を丸くおさめるものが多い。口縁部外面には、幅1.0cmほどの強いヨコナデが施されているため、少しくぼんで段をもっている。このため口縁端部が外反するものも存在する。

調整については、外面は口縁部下半から底部にかけてユビオサエが密集し、明瞭に残る。一部に口縁部周辺にヘラミガキが残っているものも見られるが、ほぼ外面のヘラミガキは消失している。内面の口縁部付近にはヘラミガキが密に施されているものが多くみられ、見込み部分には平行線を重ねた格子状の暗文と平行線状の暗文の二種類が見られる。なかには177や178のように暗文幅が非常に太いものも存在する。全体的に暗文やヘラミガキが若干省略化されてきているが、外面については顕著である。調整の度合いについては、167のように密なものから189のように省略化されたもので幅広い。

焼成については、良好に焼成されているものが多く、色調は真っ黒に燻されたものから薄い灰色を呈するものまで濃淡の幅は広い。

瓦器椀（図55～57）

土師皿に続いて多く出土した器種である。復元すると比較的完形に近いものが多く、全体的な様相がわかる48点（197～244）を図化したが、その他、復元して個体が識別できる製品についても図化した製品と同量存在するため、本来の出土量は2倍以上あることが推測される。

法量については、口径14.3cm～16.1cm、平均15.0cm、器高5.0cm～5.9cm、平均5.5cm、底径4.0cm～6.1cm、平均5.2cmを測る。ほぼ同一の規格で製作されたことがうかがわれる。

形態については、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、全体的に丸味を感じさせる形態で、端部は丸くおさめるものが多い。口縁部外面には、幅1.0cmほどの強いヨコナデが施されているため、少しくぼんでおり段が生じている。高台についてはやや退化傾向にあるが、断面が三角形及び台形を呈しており、依然しっかりした感じをもたせる。

調整については、内面見込み部には平行線及び格子状の暗文が施されており、それ以外の部分には密に圏線のヘラミガキが施されているものが多い。この場合、必ず見込み部分の暗文がヘラミガキに先行して施されている。外面は全体にユビオサエによる痕跡が明瞭に残っており、口縁端部はヨコナデによってユビオサエの痕跡が消されている。一部にヘラミガキが残っているものが見られるが、上半部に集中して見られる。

色調については、燻銀状にしっかり燻されたものから、やや焼成が甘く灰白色を呈したものまで幅は広い。全体的に焼成は良好であると言える。

土師質羽釜（図58・59）

今回15点図化することができた。ただ口縁部付近は比較的残りが良かったが、体部まで復元できるものは少なかった。

法量については、口径18.6cm～32.4cm、鍔径24.8cm～40.0cmを測る。鍔は真っ直ぐに伸びるものが多く、248のようにやや下方に伸びるもの、250のように短く少し上を向くものが見られる。

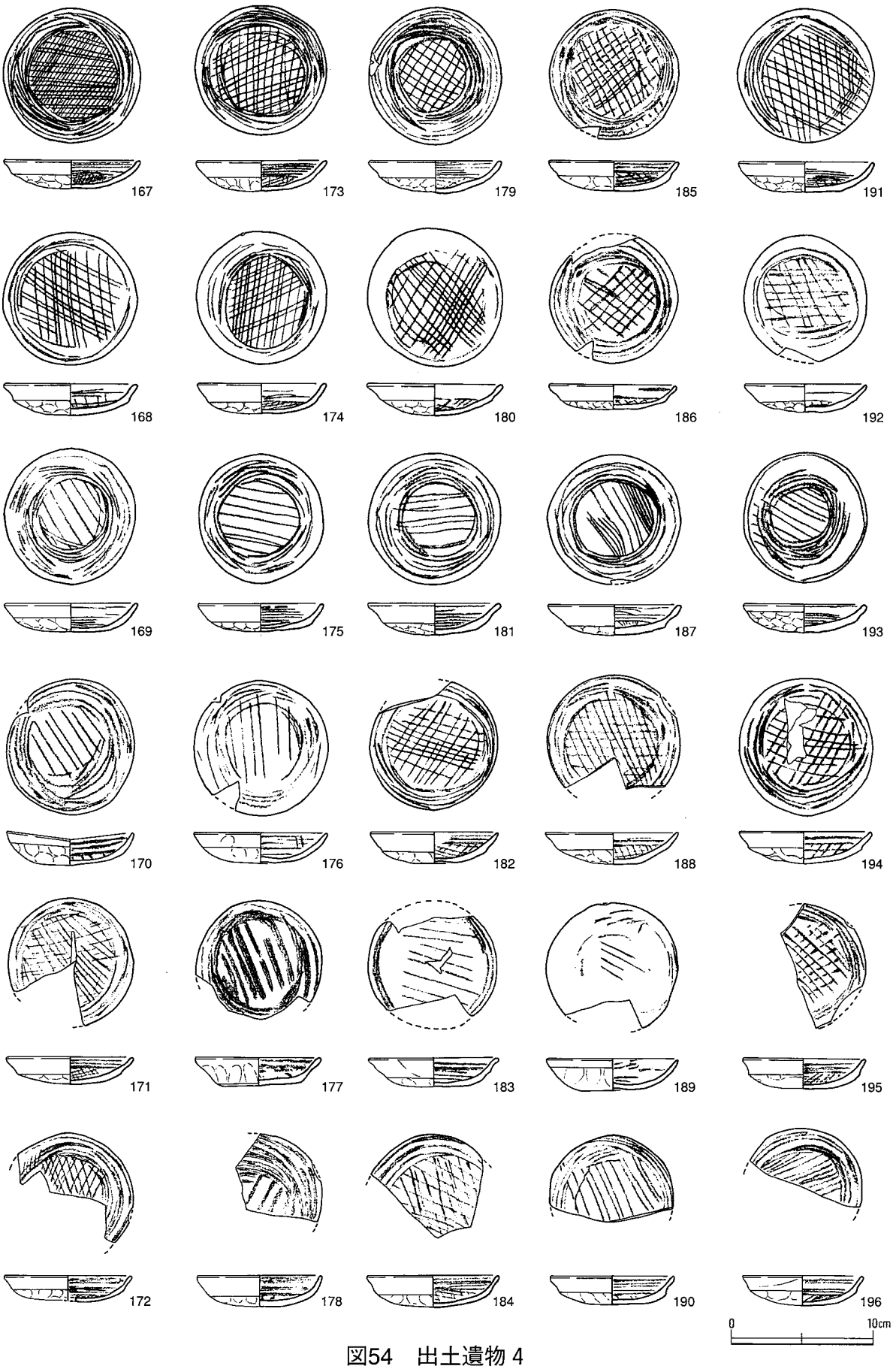

167
173
179
185
191
168
174
180
186
192
169
175
181
187
193
170
176
182
188
194
171
177
183
189
195
172
178
184
190
196
0
10cm

図54　出土遺物 4

形態については、口縁部が鍔から内傾して短く立ち上がり、端部は短く「く」の字状に外反するものが多い。なかには252のように鍔から外側にやや膨らみながら立ち上がるものや259のよう鍔と口縁部までがやや長めで真っ直ぐ立ち上がったあとに、端部付近で少し内傾するものも見られる。端部の形態については、245や249のように肥厚せず「く」の字状に外反するものや246や248のように「く」の字状に外反したあと肥厚するものとに分かれる。体部については、全体が分かるものが少ないが、247や250のように胴張り状の丸味をもつ、饅頭を逆さにしたような器形を呈するものと考えられる。

調整については、全体的にナデとヘラケズリによって仕上げられているが、外面はヘラケズリが主体で一部にナデによって仕上げられているのに対して、内面は工具によるナデまたはヨコナデが中心で、一部にヘラケズリ状の調整が見られる。色調は基本、橙色であり、外面体部は煤の付着により黒く変色している。

その他（図60）

260・261は土師器鉢である。前者は復元口径17.8cm、残存器高6.0 cmを測る。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁部外面にやや強いヨコナデが見られる。色調は浅黄橙色を呈する。後者は復元口径26.6cm、残存器高5.3cmを測る。外面の口縁部には強いヨコナデ、体部にはヘラミガキが施される。一方内面はヘラミガキののち、放射状暗文を施している。色調は浅黄橙色を呈する。

262は土師器高杯である。脚部のみ残存する。底径10.6cm、残存器高6.9cmを測る。調整は脚底部の内外面にハケが見られるが、その他は摩耗により観察できない。色調はにぶい橙色を呈する。

263・264・266は須恵器壺である。263は口縁部の一部のみ残存する。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、端部を肥厚させ、外下方に鋭角に張出す。口縁部の下部には幅７㎜のカキ目がめぐる。焼成は良好である。264は須恵器壺の口縁部か。端部は外側に肥厚する。外面にはカキ目風の調整が見られる。266は短頸壺である。体部から短く口縁が立ち上がり端部は丸くおさめる。口縁部から内面にかけては回転ナデ、外面の肩口から体部にかけてオリーブ色の釉がかかる。復元口径は11.0cm、残存器高3.8cmを測る。断面はセピア色を呈する。

265は須恵器甕である。復元口径19.8cm、残存器高4.5cmを測る。口縁部は短く外湾し、口縁端部から内面にかけては回転ナデ、外面頸部にはタタキののちカキ目が施されている。

267は土師質の土管と考えられる。復元口径は26.0cmを測る。外面はユビナデ、内面は工具によるナデ調整が施されている。焼成は堅緻で、色調は浅橙色を呈する。

268は移動式の竈の破片と考えられる。外面にはタテハケ、内面はナデを施すが、底部付近は強いユビオサエの痕跡が残る。色調は橙色を呈する。

269は中世陶器と考えられる。外面に格子状のタタキの痕跡が認められる。よく焼き締まっており、外面は薄い赤銅色、内面は灰黄色を呈する。

270・271は瓦質甕である。どちらも口縁部のみ残存する。復元口径23.0cmを測る。頸部外面にはタタキ痕が残る。色調は灰色を呈する。

272は緑釉陶器椀の底部と考えられる。高台は円盤状に削り出しており、緑釉が高台底部にまで及んでいる。京都産か。

273は灰釉陶器と考えられる。底部の一部のみ残存する。高台は円盤状に削り出され、一面に黄褐色の釉がかかる。

274は瀬戸系か。外面には黄褐色の釉薬がかかるが、底部周辺には見られない。高台は糸切りよる

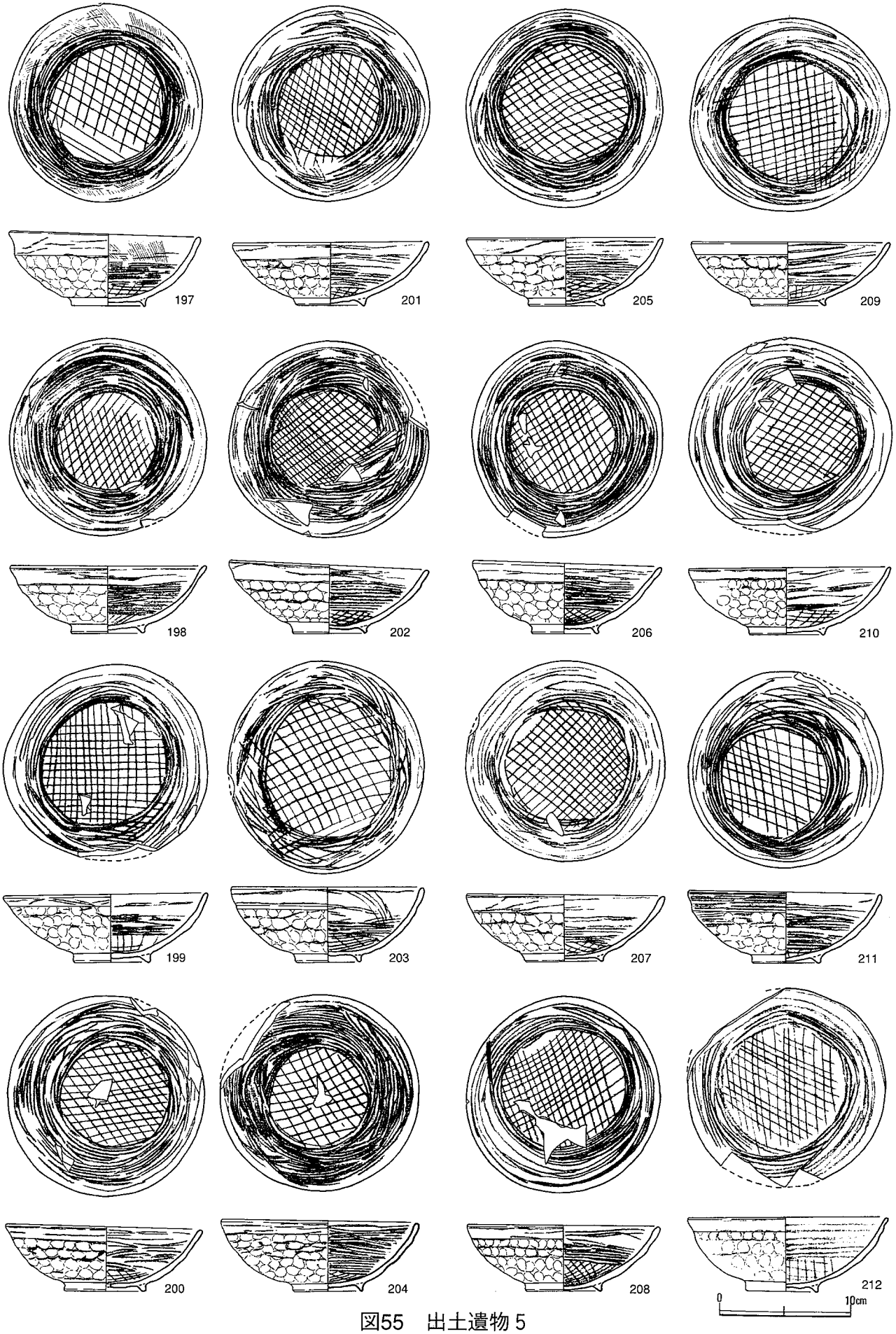

197
201
205
209
198
202
206
210
199
203
207
211
200
204
208
212
0
10cm

図55　出土遺物 5

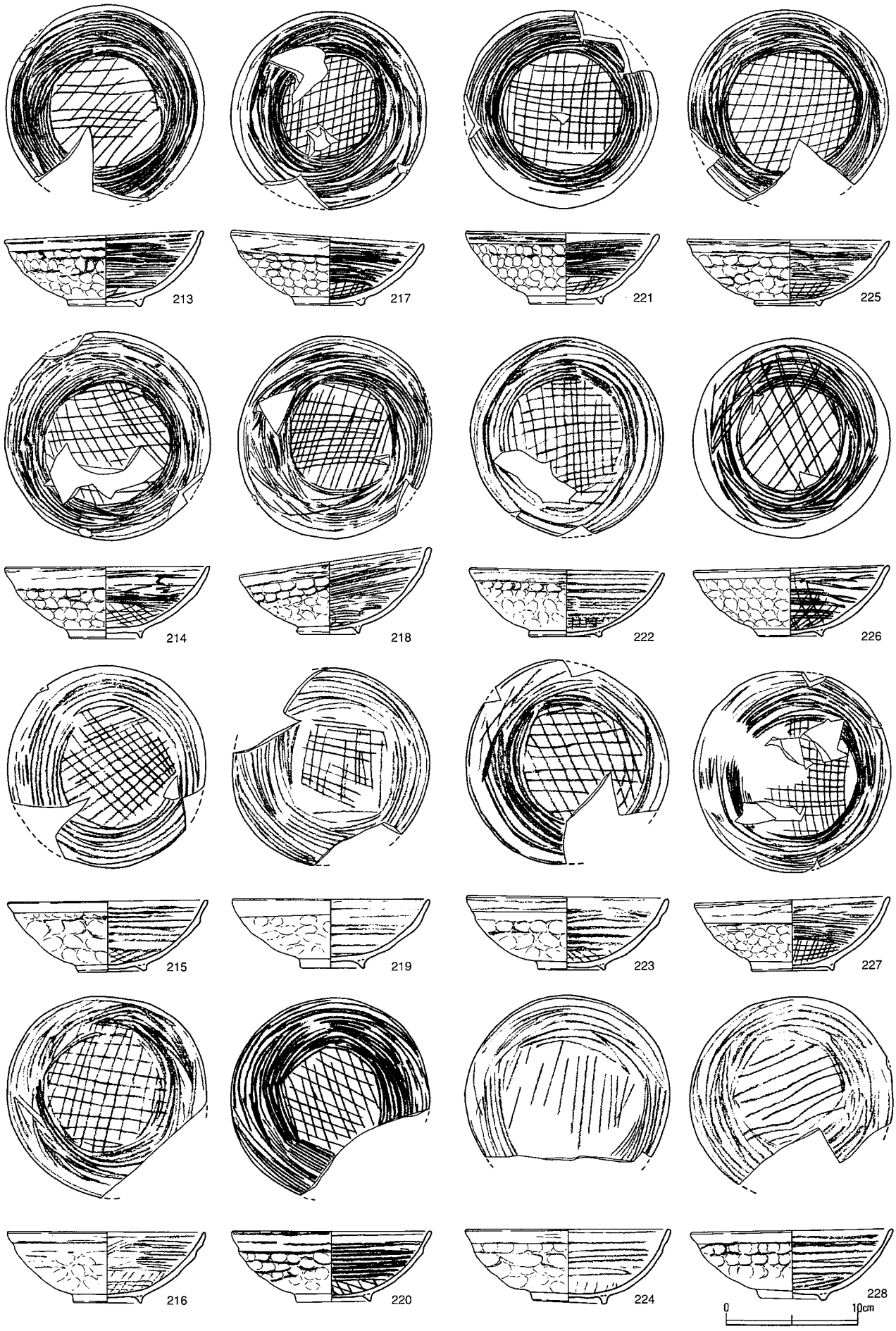

213
217
221
225
214
218
222
226
215
219
223
227
216
220
224
228
0
10cm

図56　出土遺物 6

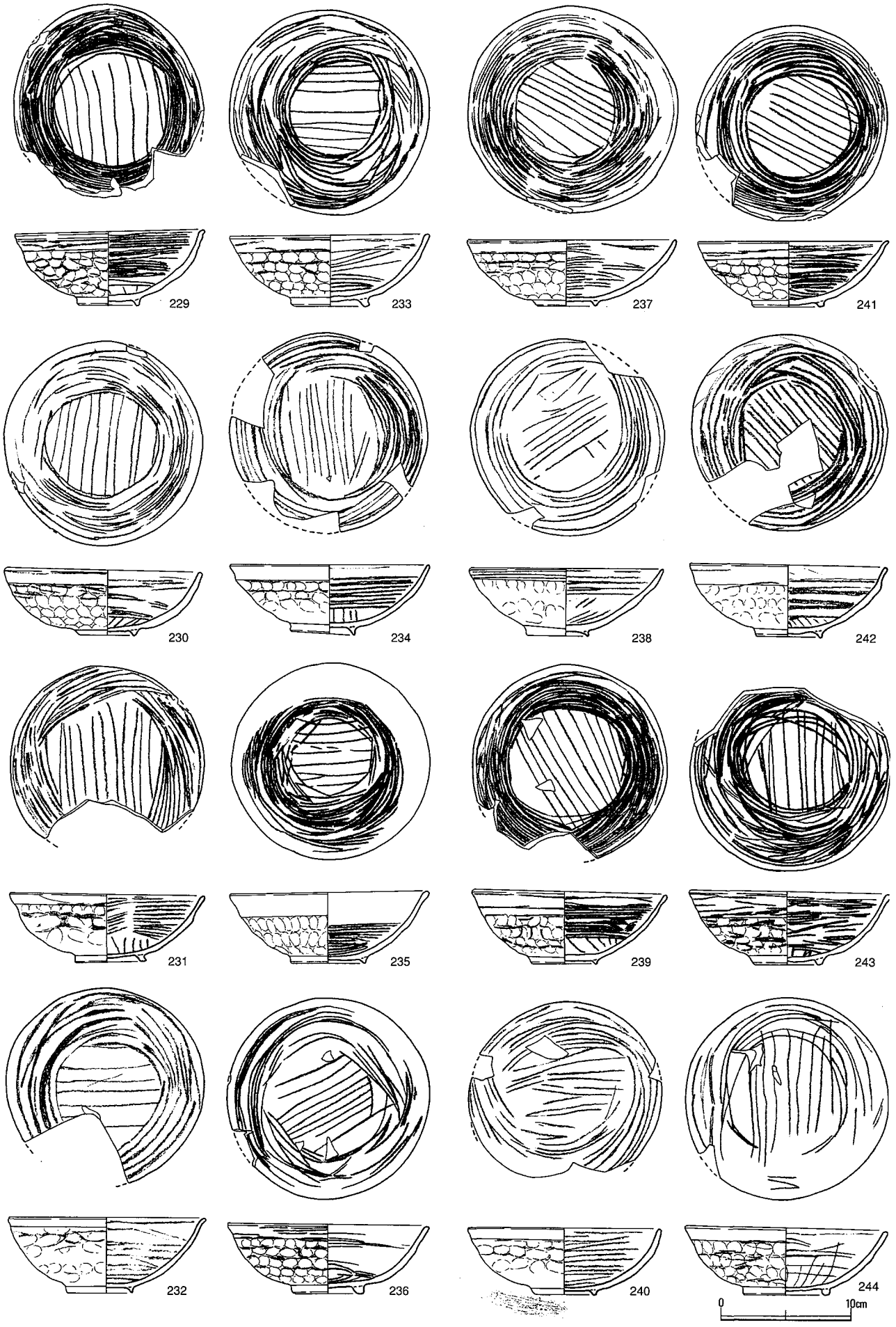

229
233
237
241
230
234
238
242
231
235
239
243
232
236
240
244
0
10cm

図57　出土遺物 7

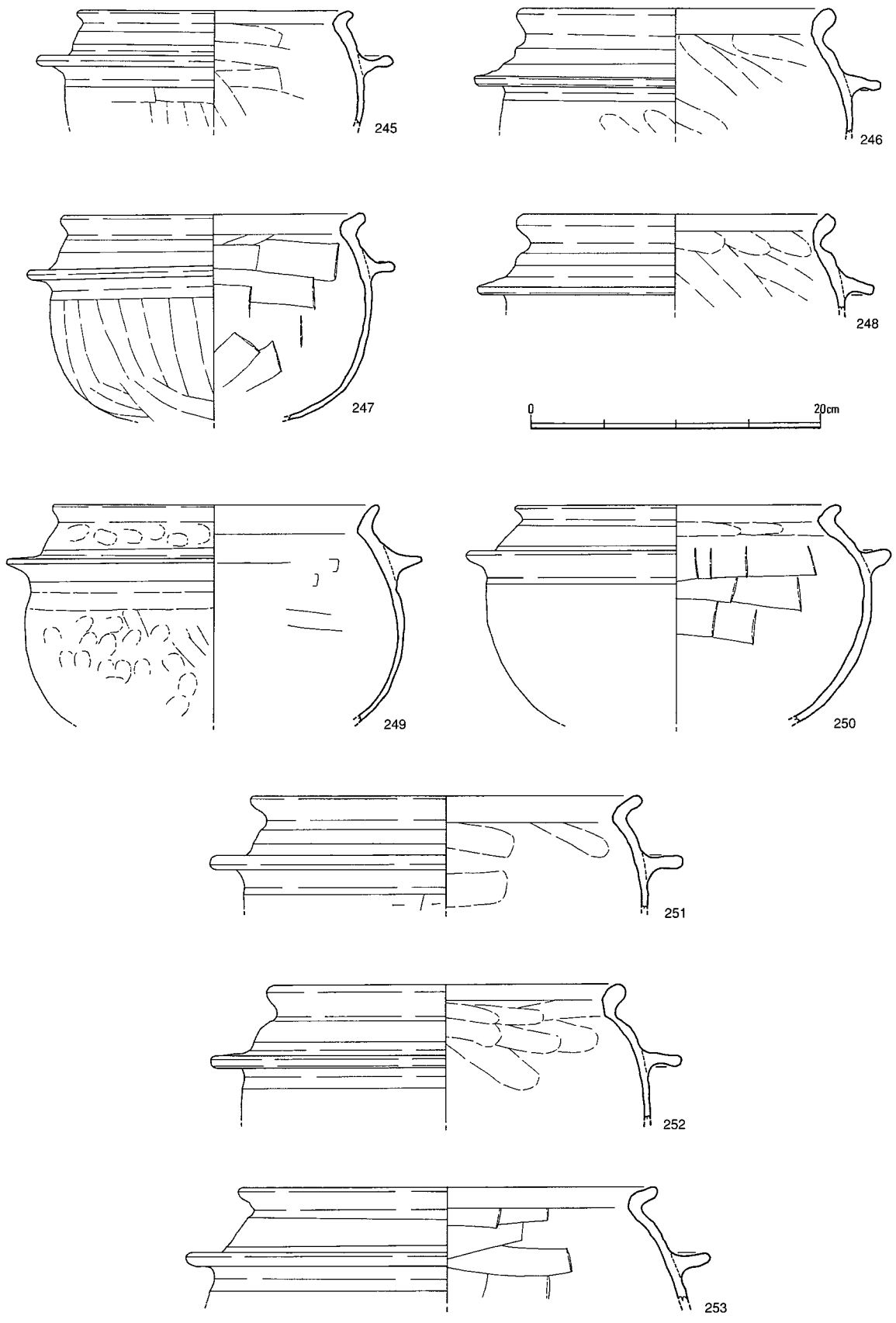


図58　出土遺物 8

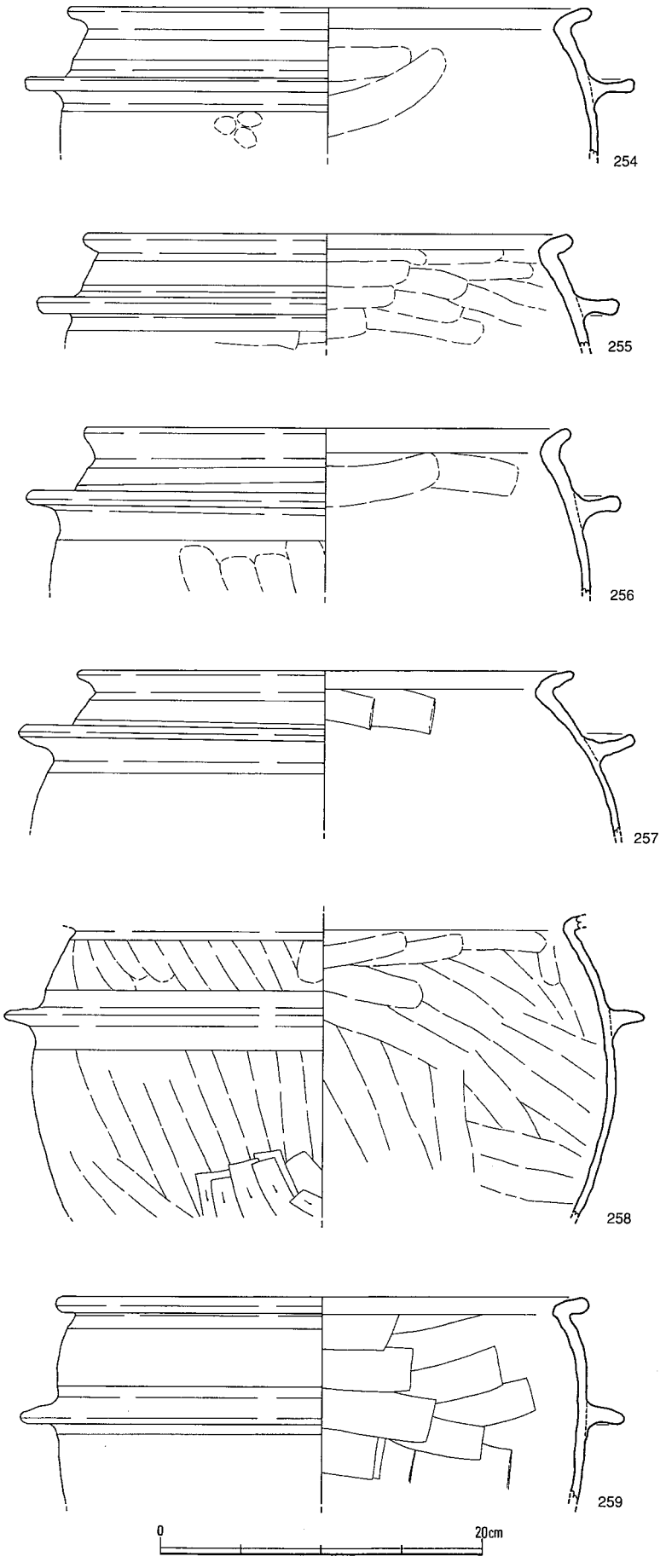


図59　出土遺物 9

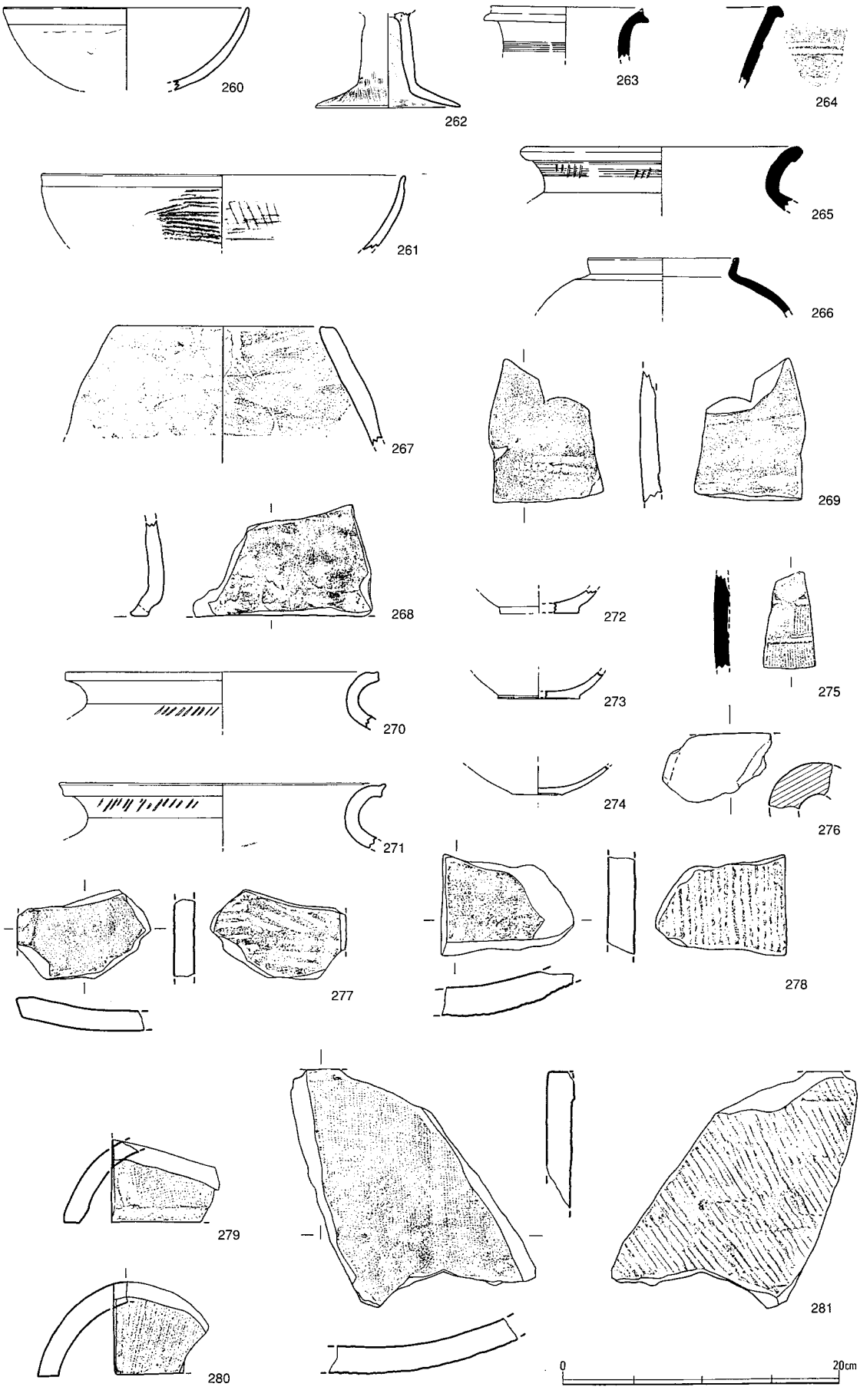

260
262
263
264
261
265
266
267
269
268
272
275
270
273
274
276
271
277
278
279
281
280
0
20cm

図60　出土遺物10

ものと考えられる。

275は須恵器であるが器種は不明。外面には2.5cmの間隔で沈線が入り、そのなかに縦方向のハケ状の文様が入る。色調は灰白色を呈する。

276は鞴の羽口である。小片のみ残存する。

277・278・281は平瓦である。277・278は小片のみ残存する。前者は凸面にタタキ痕、凹面には布目痕が残る。色調は灰白色を呈する。後者は凸面に縄目痕、凹面には布目痕が残る。色調は黒色を呈する。281は凸面に縦4.0cm幅の比較的細かなタタキ痕が見られる。凹面は布目痕が残る。

279・280は丸瓦である。小片のみ残存する。凹面には布目痕が残る。

まとめ

今回の出土品は一括性の高い遺物群であり、器種構成や出土状態から考えると、井戸の最終段階に祭祀が執り行われた可能性が考えられる。祭祀につては、井戸2で検出した肩口に羽釜を主体としてその中に土師皿や瓦器椀を入れる形態と井戸3のように大量の土器を用いて祭祀を行う場合とがあるようだ。その違いの意図するところは判然としないが、井戸を埋める際には必ず祭祀が行われていたことは間違いない。

埋め戻された時期については、瓦器椀の形態などから12世紀前半から中頃の平安時代末ごろと考えられる。井戸内から、特に井戸の底からは遺物がほとんど出土していないことから、井戸の埋め戻しが時間をかけずに行われていることが考えられる。

白鳥神社古墳周辺では、平安時代後期から鎌倉・室町時代にかけての遺構や遺物が顕著になってきている。文献上、目立った記録はないが、この時期の製鉄関係遺構や居住地に伴う井戸、建物などが発見されていることから、中世にも活発な開発が行われてきたことをうかがわせる。このことが江戸時代に入って在郷町を形成する下地になったことは間違いないであろう。

参考文献

1989　菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告　第19集』
国立歴史民俗博物館

1995　『概説　中世の土器』中世土器研究会編　真陽社

2012　「古市遺跡・白鳥神社古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成21年度－』
羽曳野市教育委員会

Ⅲ部

資料紹介

はびきの出土遺物の紹介　～羽曳野市在住　井上靖久氏からの寄贈品～

今回紹介する遺物は、羽曳野市在住の井上靖久氏から寄贈を受けた遺物である。氏から連絡を受け自宅を訪問すると、庭先にダンボール２箱分の遺物が置かれていた。大半が埴輪と瓦で占められていた。遺物を確認すると、須恵器２点、土師器３点、埴輪27点（円筒埴輪25点、朝顔形埴輪1点、形象埴輪1点）、瓦22点（軒丸瓦2点、軒平瓦１点、丸瓦７点、平瓦12点）の合計54点存在した。氏から遺物の所蔵の経緯を確認すると、約50年前に氏の父親が家を建て替えたときに庭から遺物が出土したとのことであった。また今回寄贈していただいた遺物の他にもダンボール1箱分ほどあったらしいが、整理できていないまま家のどこかに保管されているとのことであった。さらに鉄製品も保管していたということであったが、この遺物に関しては、時期は不明であるが大学関係者（羽曳野市周辺を調査フィールドとしていた考古学者）が見学に来られて、この遺物の調査をするために持ち帰ったと聞いているとお話しいただいた。

その後現地は、平成4年度に再度自宅の建て替えを行っているが、このときの事前調査では、現地表面から約0.5m掘り下げているが、遺構や遺物は確認されていない。調査記録によると、堆積層が地山か盛土かは確認できていない。すでに50年前の建て替えによって削平されている可能性も考えられるが、判然としない。

瓦類、土師器及び須恵器に関しては、付近に存在した善正寺跡に関係する遺物と考えられる。また埴輪については、黒斑をもつ古い埴輪であることから、近年調査された西山古墳をはじめ、これまでにも羽曳山周辺で古い埴輪の出土が続いていることから、この周辺にはかつて4世紀にさかのぼる前期古墳が点在していたと考えられ、この時期の古墳に関係する遺物の可能性も考えられる。

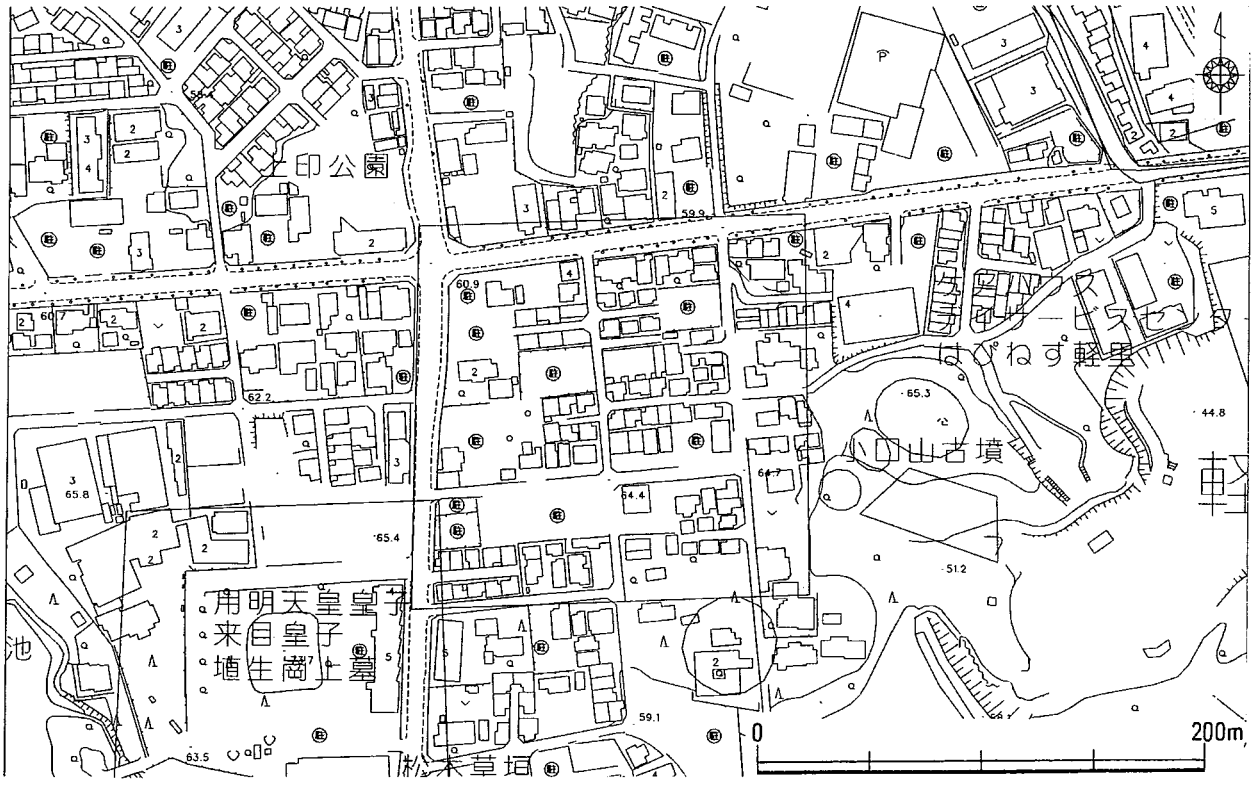


図61　善正寺跡周辺遺跡位置図

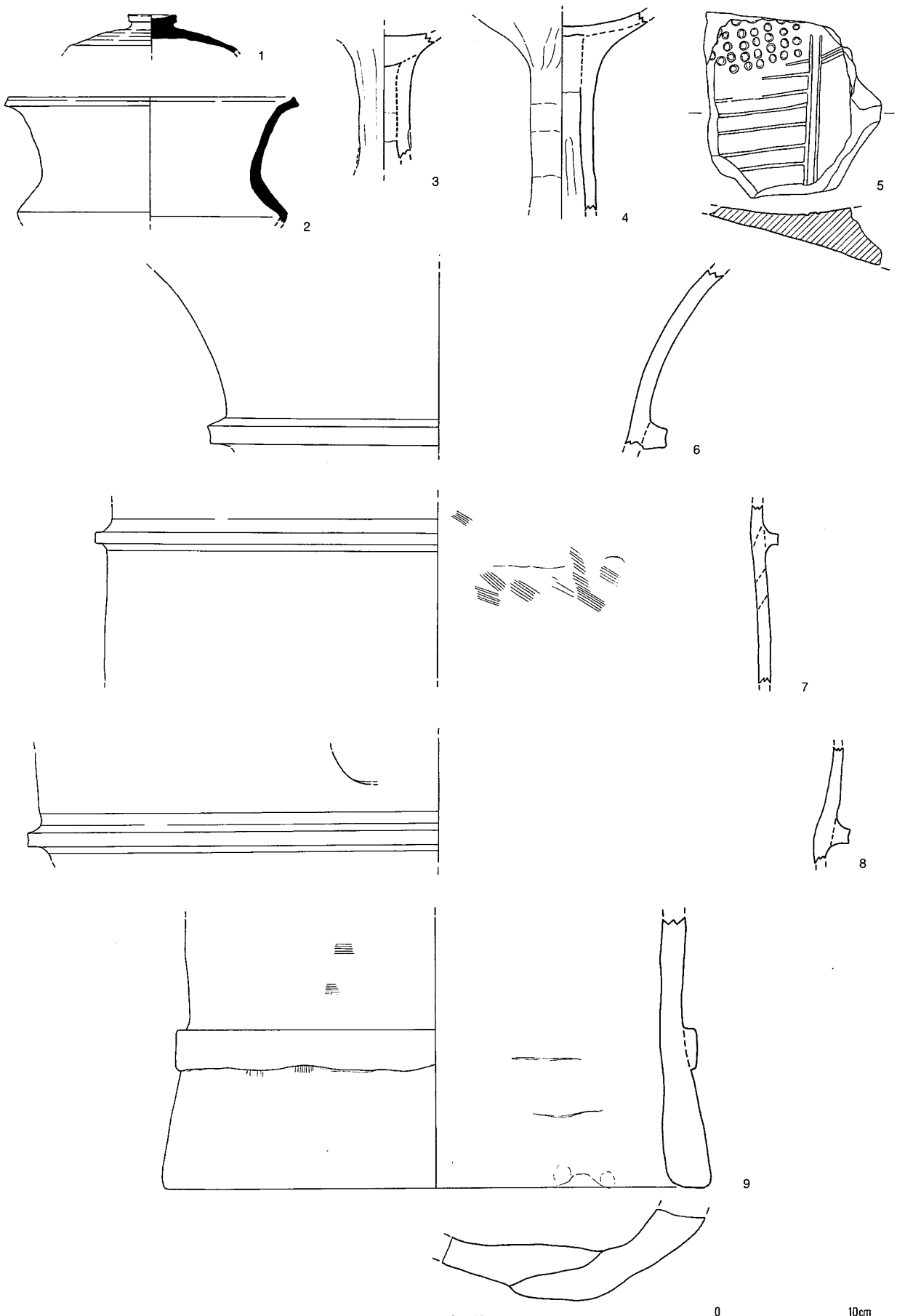


図62　寄贈品1

寄贈遺物

須恵器（図62-1、2）

1は杯蓋の一部である。つまみ部分を中心としておよそ1／3が残存しているが、口縁部は欠損している。またつまみの中心部はややくぼんでいる。つまみ径は3.4cm、残存高は2.7cmを測る。外面には回転ヘラケズリ調整、内面は回転ナデ調整が施されている。焼きは良好で、色調はやや濃い灰色を呈する。

2は広口壺である。復元口径は20.8cm、残存器高9.2cm、胴部径19.6cmを測る。口縁部が胴部よりやや広くなっている。口縁部は緩やかに外反し、端部は外に張り出し、やや段をなす。焼成時に焼き歪みができたようで、形態がかなり歪んでいる。内外面とも回転ナデ調整が施されている。色調は、灰白色を呈する。

土師器（図62-3、4）

3は高杯の脚部の一部が残存する。4に比べやや小ぶりで残存高9.8cmを測る。外面には明瞭なヘラケズリ痕があり面をもつ。全体的にかなり摩耗及び剥離がひどく、その他の調整は観察できない。色調は薄い橙色を呈する。

4も高杯の脚部の一部のみ残存する。残存高14.4cmを測る。調整については、脚部と杯部との接合時に施されたと考えられる指ナデ調整がかすかに見られる。色調は明赤褐色を呈する。

埴輪（図62-5～9）

5は、形象埴輪で盾の一部と考えられる。盾面の右端には縦方向に2本平行に線刻が施され、その内側の下部に確認できる範囲で、その線刻から直角に伸びる7条の線刻が施されているが、上2本は途中で線刻が止まっている。さらにその上方では、一つ一つ先が丸い工具によって刺突された6列4段以上の列点状の文様が入る、非常に珍しい構成をもつ。破片であるため時期は明確にはわからないが、焼成具合から4世紀後半ごろまでさかのぼる埴輪ではないかと考えられる。色調は灰黄褐色を呈する。

6は、朝顔形埴輪の口縁部の一部である。口縁端部は欠損している。頸部には断面が台形状の大きく突出した突帯が巡る。突帯径33.8cmを測る。内外面とも摩耗及び剥離が進み、調整等は観察できない。

7は円筒埴輪で体部の一部のみ残存する。復元体部径44.0cmほどあるが、復元のため若干の誤差をもつものと考えられる。体部には細く高い突出した突帯をもつ。内面には横方向のハケメ痕がかすかに確認できる。全体的に摩耗及び剥離が激しく、その他の調整は観察できない。色調は明黄褐色を呈する。

8も円筒埴輪で体部の一部のみ残存する。タガは太く、断面が台形を呈する。内外面とも剥離が激しく、調整等は観察できない。円形のスカシが認められる。色調は明黄褐色を呈する。

9は円筒埴輪の底部である。復元底径およそ40.0cmを測る。底には粘土紐を繋ぎ合せた痕跡が明瞭に残存しており、このため厚いところで4.0cmもの幅をもつ。外面にはかすかにヨコハケが見られ、幅3.0cm前後の広く平べったい突帯を貼り付けている。内面は粘土紐を巻き上げた痕跡が残るが、摩耗によりその他の調整は観察できない。色調は橙色を呈する。

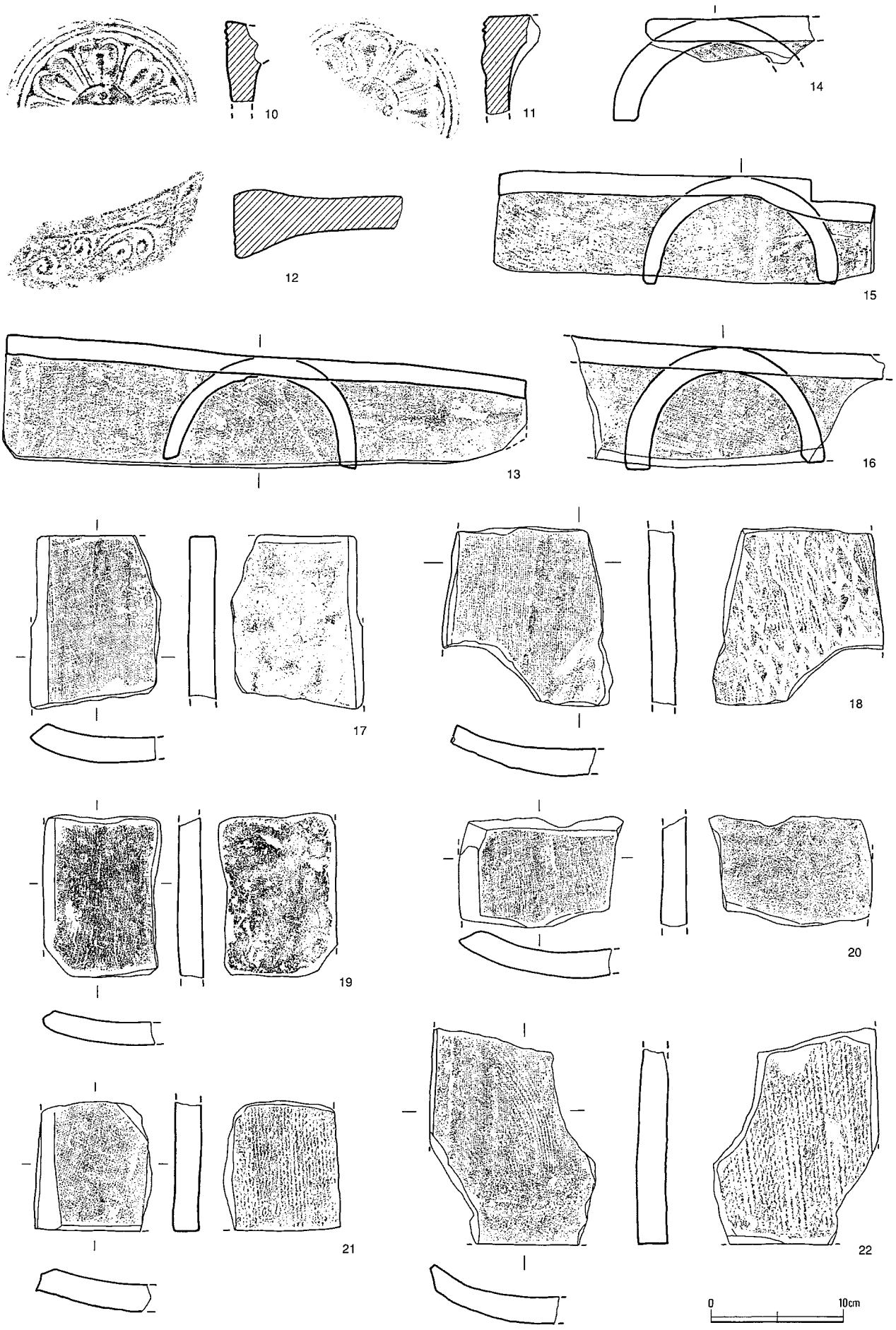


図63　寄贈品 2

瓦（図63-10～22）

10・11は軒丸瓦である。どちらも瓦当面の半分ほど残存している。瓦当径は15.0cm前後に復元できる。瓦当中心にやや大きめの中房をもつが、中心に配されている蓮子は摩耗により見づらい。さらに周囲には幅の広い単弁の花弁をもつが、おそらく復元すると八葉になるものと考えられる。また周縁には重圏文をめぐらす。一見すると複弁のように見える特徴ある図柄は、善正寺式と呼ばれる形式の軒丸瓦であり、その中でも善正寺式Cに該当するものと思われる。善正寺式の軒丸瓦は、この寺で主として使用された形式の軒丸瓦である。

12は軒平瓦である。瓦当面の１／３ほど残存している。上外区には連珠文がかすかに見られるが、脇区には連珠文はない。下外区は欠損しているため不明である。内区には唐草文が配されている。顎部は斜め45度に直線的になり、段は持たない。先の軒丸瓦と対となる軒平瓦であると考えられる。全体的に摩耗が激しく、調整は観察しづらいが、凸面にタタキ痕がわずかに残る。色調は黄橙色を呈する。

13は行基式の丸瓦である。一部欠損しているが、ほぼ完形に近い。長さ39.2cm、最大幅14.5cmを測る。凸面は剝離及び摩耗が激しく、調整等は観察できない。端部は丁寧に面取りが行われている。凹面には当て布の痕跡が明瞭に残り、さらに縦方向に一直線にくぼんだ痕跡が残るが、これは作業効率を上げるために縦方向に布を縫い合せたためと考えられる。しかしながら同じような痕跡が近接してやや方向を違えながら存在する。同布に何箇所か縫いつけた痕跡であろうか。不明である。

14は１／５ほど残存する。凸面は剝離が激しく調整等は観察できない。凹面には布目痕が残るが、その後に施したと考えられる斜め方向に伸びるコビキ状の線が見られる。また布を模骨に留めた波状の痕跡も観察できる。側面及び凹面側縁は面取りしている。色調は明黄褐色を呈する。

15は玉縁式丸瓦で、唯一完存している製品である。長さ28.2cm、最大径14.8cmを測る。ただ、凸面では剥離が及び摩耗が激しく調整は観察できない。凹面も同様に摩耗が進んでいるが、かすかに布目痕が観察できる。また筋状の縦線が見られるが、型に粘土板を貼り合せた痕跡の可能性が考えられる。色調は黄橙色を呈する。

16は丸瓦で広端部及び狭端部が欠損している。凸面は半分が剥離によって調整は観察できないが、確認できる部分では、横方向の板ナデによる痕跡が見られ、部分的に不正方向の指ナデが残る。側面は面取り調整が施されるが、やや粗い。焼成は良好で、淡黄色を呈する。

17～22は平瓦である。17は全体の１／４ほど残存する。凸面はタタキ痕を横方向の丁寧に指ナデによって消している。凹面には布目痕が明瞭に残り、幅約2.5cmの模骨痕が見られる。側面及び凸面側縁は丁寧に面取り調整が施されている。色調は凹凸面とも灰白色、断面は橙色を呈する。

18もほぼ全体の１／４ほど残存する。凸面には縄目タタキのあとに、再度長細い菱形の斜格子状の工具でタタキ締めが行われており、その痕跡が明瞭に残る。凹面には布目痕と幅約2.0cmの模骨痕が残る。焼成は良好で、色調は凹凸面が灰色、断面が浅黄橙色を呈する。

19もほぼ全体の１／４ほど残存する。凹凸面とも摩耗や剥離が全体的に見られるため、調整は観察しにくい。特に凸面は顕著である。凹面も若干摩耗しているが、一部に布目痕が観察できる。焼成はやや不良で、色調は明黄褐色を呈する。

20は全体の１／８ほど残存する。凸面はタタキののち丁寧にナデ消していると思われるが、全体的に摩耗しており観察しづらい。凹面もやや摩耗しているが、布目痕は観察できる。側面及び凸面側縁には面取り調整が施される。色調は浅黄橙色を呈する。

21は全体の１／６ほど残存する。凸面には明瞭に縄目タタキの痕跡が残り、部分的にナデを施して

いる。凹面には布目痕が残り、一部に布を紐で合わせた痕跡も見られる。側面及び端面は丁寧に面取り調整が施され、さらに凹面側縁にも面取りが見られる。焼成は良好で焼き締まっており、色調は灰白色を呈する。

22は全体の1/3～1/4ほど残存する。凸面には明瞭に縄目タタキの痕跡が残る。凹面には布目痕が残るが、端面付近では横方向のナデ調整が見られる。また放射状にコビキ痕が残る。側面及び端面には面取り調整が行われているが、粗雑である。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

まとめ

今回寄贈された遺物を観察すると、古墳に伴うと考えられる遺物と寺院に関係する遺物とに大きく分かれる。前者は埴輪群であり、図62－9のように時期が新しいものも存在するが、ほぼ円筒埴輪編年Ⅱ期（古墳時代前期：4世紀後半頃）におさまると考えられる遺物である。

平成12年度から始まった「峰塚公園」整備にあたって、峯ヶ塚古墳周辺（小口山古墳が所在する雑木林）の確認調査がはじまり、平成13年度の確認調査で小口山古墳の北側のもっとも標高の高い地点で盾や草摺などの形象埴輪が出土し、さらに平成20年度の調査では埋葬施設（埴輪棺）が発見され、周辺の調査から4世紀後半に築造された墳丘長約40mの前方後円墳に復元され、「西山古墳」と命名された。

このことからも寄贈された遺物は、この古墳に伴う遺物か、あるいは周辺に4世紀後半代の古墳が他にも存在し、その古墳から出土した可能性も考えられ、石川左岸の前期古墳の様相を解明する手がかりになるものと言える。

一方後者については、かつて羽曳野丘陵の北東端の台地上に存在した善正寺跡の遺物と考えられる。善正寺は7世紀後半に創建された南北一町半、東西一町の寺域を測り、薬師寺式の伽藍配置をもつ寺院である。戦後の開発によって消滅した寺院である。

今回の遺物の中に軒丸瓦2点、軒平瓦1点が含まれており、その特徴から善正寺に使用された瓦であることがわかった。発見された場所は、現在善正寺跡として指定されている遺跡範囲の外に当たることから、本来寺域はもう少し西に広い範囲であった可能性を示唆するものであると言える。

おわりに

今回貴重な遺物を寄贈して下さった井上氏には、そのご厚意に対し深く感謝の意を表す次第である。これらの資料は、羽曳野丘陵の前期古墳を考えるに上でも、また善正寺の全体像を復元するに際しても貴重な資料であると考えられることから、今後大切に保存・保管し、活用していくよう努めたい。

参考文献

1994　北野耕平「善正寺跡」『羽曳野市史　第三巻　史料編1』羽曳野市史編纂委員会
2005　「鬼ヶ池南古墳とその周辺」『羽曳野市内調査報告書　平成14年度』羽曳野市教育委員会
2009　「西山古墳」『古市古墳群ＸＸＸ』羽曳野市教育委員会

誉田御廟山古墳出土の笠形木製品と蓋形埴輪 —『古墳墓及び掘器物図』の紹介—

1．はじめに

羽曳野市誉田の所在する誉田御廟山古墳（応神天皇陵）から出土した笠形木製品が東京国立博物館に所蔵されている。同資料は平成５年に羽曳野市史編纂の事業において、考古編に記載する新たな資料を作成のために同博物館へ出向いて実測、撮影のための調査を実施している。

上記笠形木製品は、『東京国立博物館収蔵目録』に「木片」と記載があり、調査は木片五点のうち三点観察することができた。ほぼ全周が遺存する一点を除き、ほか観察した三点は二分の１が残存する状況であった（羽曳野市史編纂委員会1994）。

誉田御廟山古墳からは東京国立博物館所蔵品以外に、誉田八幡宮の所蔵品（誉田八幡宮1977、土生田純之1988）、若林勝邦氏の報告（若林勝邦1897）、昭和63年に大阪府教育委員会が実施した発掘調査で出土した笠形木製品（大阪府教育委員会1989）がある。

東京国立博物館所蔵の笠形木製品については、平成18年、平成19年に同博物館が三次元形状計測技術を応用した記録作業を実施してされている。その成果は、平成21年に東京国立博物館研究誌『ＭＵＳＥＵＭ』』622で報告され、緻密な実測図とともに笠形木製品についても詳細な検討が行われている。また、木製品の出土位置については前方部北側の内濠であることを報告されている。（鈴木裕明他2009）。

最近になって東京国立博物館資料館に『古墳墓及び掘器物図』という公文書が所蔵されていることを知った。同文書の内容は『明治十四年度埋蔵物録』と同じではあるが、誉田御廟山古墳に関連する文献として内容を紹介しておく。

2．『古墳墓及び掘器物図』の記述

『古墳墓及び掘器物図』の文書名は「大阪府下古市郡誉田村応神天皇御陵環隍中ヨリ露出ノ古器物始末方同府知事ヨリ伺出ニ付キ書類宮内省へ転送ノ件（三月）」で、内容は明治十四年（1881年）三月八日大阪府知事の建野郷之から内務卿松方正義、宮内卿徳大寺実則あてに「御陵隍ヨリ露出物品之義伺」が提出した書類である。

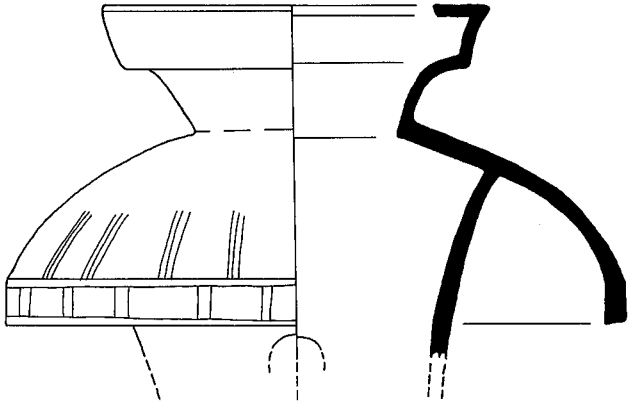
その内容は長くなるが以下引用すると、

「当府下　河内国古市郡誉田村

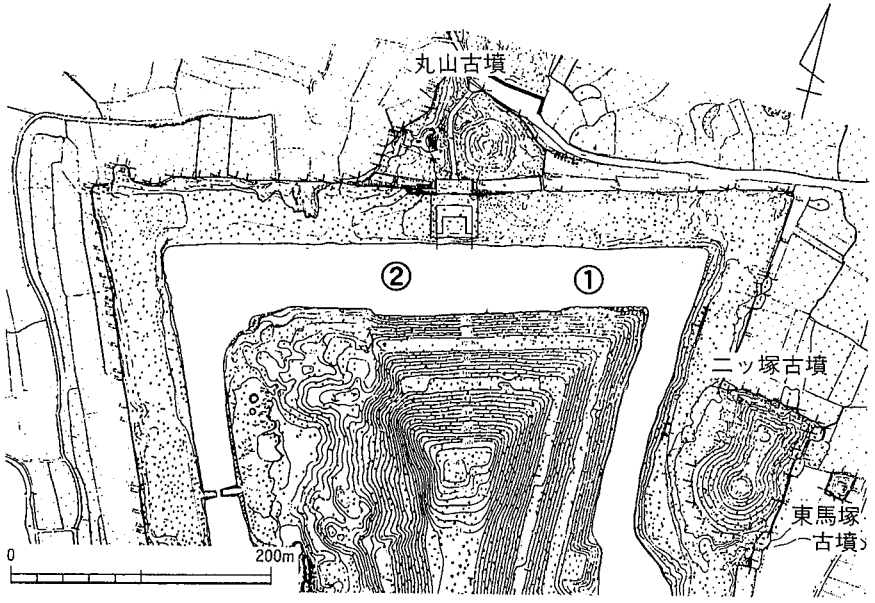
応神天皇御陵環隍之義は年久敷土砂流込自然と埋り追々葭蘋小生茂り腐敗致し自然不潔に有之候処昨年五月該御陵接近古室村沢田村林村之人民農間を以て先御陵前隍堀浚掃除等致度〇申上候間取締相立着手為致候処古隍中より別紙粗図面之通物品ニ種露出候ニ付不取敢旧堺県庁為差出置取調中之趣ヲ以て今般引渡相成候右者如何取計可然●御指揮有之度此段相伺候也」

とある。以上の報告文は、明治13年（1880）に応神天皇陵内濠を浚渫掃除中に二種類の遺物が出土した報告である。二種類の遺物とは笠形木製品のほか形象埴輪であり、両者の出土位置も確定できた。

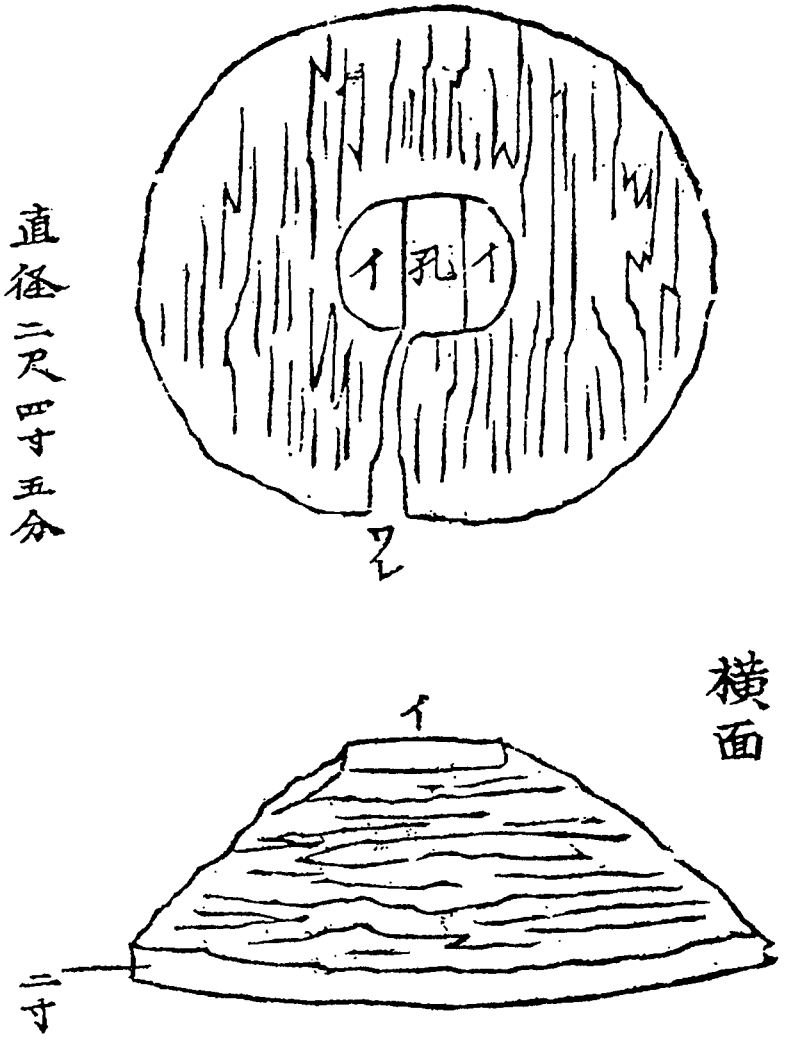
同じ内容の文書は、『埋蔵物録』のほかに、「應神天皇惠我藻崗陵隍ヨリ露出物保存方　明治十四年四月十一日」『帝室例規類纂』陵墓門　明治45年巻五二　山陵一（書陵部保存文書）にもあり、添付図にある蓋形埴輪は、立飾りをもたないタイプであることがすでに『ＭＵＳＥＵＭ』』622の中で指摘されている（鈴木裕明他2009）。



②蓋形埴輪復元図（約 10 分の一）



誉田御廟山古墳内濠遺物出土位置



①蓋形木製品略図（約 10 分の一）

図64　誉田御廟山古墳内濠出土遺物

3．蓋形埴輪について

『古墳墓及び掘器物図』に納められた笠形木製品は『考古学会雑誌』で若林勝邦氏が報告している挿図と同じで、平面図と側面図が描かれている。図64の①のように、平面は円形で中央に方形の孔があり、笠の一部が欠損する。図には２尺４寸５分の法量が記述され、メートルに換算すれば直径74.24cmになる。この木製品は、現在行方不明であるという（鈴木裕明他2009）。

図64の②が蓋形埴輪である。『古墳墓及び掘器物図』に添付図には円形陶物と記され「欠損し全体を辨（わきま）せず」とあり、具体的な名称が書かれておらず、器物のスケッチが提示さている。図は蓋形埴輪を天地逆に示されたものであり、今回正位に復原した。

上端が断面コ字形に屈曲し、笠縁先端が下方に折れる形態である。田中秀和氏によって無立飾式蓋形と分類された資料に該当する。この埴輪は現在、東京国立博物館に所蔵されていない。宮内庁にも所蔵されていないが、同じタイプの資料の破片が所蔵されているので復原するにあたって参考とした（宮内庁書陵部1989、羽曳野市史編纂委員会1994）。

出土地点については、添付図に「木製品が拝所より五十間（90m）東の濠のなか、陶器は二間（3.6m）西の濠のなか」とある。図64の墳丘測量図の①が木製品、②が蓋形埴輪の出土地である。

4．まとめにかえて

誉田御廟山古墳の笠形木製品の出土位置は、若林報告や『埋蔵物録』、宮内庁書陵部保存文書等の記録、さらに『古墳墓及び堀器物図』なる史料から前方部前面東寄りの濠中から出土ことが判る。

明治になって誉田御廟山古墳の周濠は度々浚渫されるが、その都度遺物が出土していることも史料から窺い知ることができる。例えば、東京国立博物館に所蔵されている水鳥形埴輪も明治22年に内濠浚渫工事に出土したことが報告されている（黒川真道1896）。また、羽曳野吉村家文書に『御陵沿革取調書』明治40年10月２日にも、明治22年に浚渫の記載がある（羽曳野市史編纂委員会1985）。

さらに、明治25年の濠修理の際にクジラやタコなどの土製品が出土したと伝えられ、その土製品の写真が残されている（大阪府1934）。現物は散逸し詳細は不明であるが、梅原末治著の「上代文化研究上の二三の新資料」には土製品についての記述があり、クジラが３寸６分（約11cm）、魚が２寸８分弱（約８cm）、魚（イルカ）が２寸９分（8.7cm）とそれぞれの大きさが判った（梅原末治1925）。

以上、応神天皇陵の内濠からは古墳時代の遺物が浚渫工事に際に出土している。下表にまとめたとおり遺物の種類や出土位置にきっと法則性があると思われるが、今後の検討が必要になってくるであろう。

浚渫工事年	工事内容	出土遺物	出土地点	出　典
①明治13年	内濠の浚渫	笠形木製品1、蓋形埴輪1	前方部北側	考古学会雑誌、帝室例規類纂、埋蔵物録、古墳墓及び掘器物図
②明治22年	内濠の浚渫	鳥形埴輪7	前方部東側	諸陵寮出張所考證録
③明治23年	内濠の浚渫	－	－	帝室例規類纂(陵墓門)
④明治24年	内濠の浚渫	笠形木製品4	前方部北側	諸陵寮出張所考證録
⑤明治25年	周濠修理	土製品5、小型壺2	－	鑑鏡の研究

註

黒川真道1896「応神天皇御陵の隍中より出たる鳥形埴輪につきて」『考古学会雑誌』第１号
若林勝邦1897「古墳より発見せる木製品に就て」『考古学会雑誌』第11号
梅原末治1925「上代文化研究上の二三の新資料」『鑑鏡の研究』大岡山書店（昭和50年臨川書店から復刻）
大阪府1934『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第５輯
誉田八幡宮1977『誉田八幡宮』
羽曳野市史編纂委員会1985「御陵沿革取調書」『羽曳野市史』第６巻　史料編４
土生田純之1988「誉田八幡宮所蔵の有孔木製品」『網干善教先生華甲記念考古學論集』
田中秀和1988「畿内における蓋形埴輪の検討」『ヒストリア』第118号
大阪府教育委員会1989『大水川改修にともなう発掘調査概要・Ⅵ』
宮内庁書陵部1989『出土品展示目録埴輪Ⅰ』
羽曳野市史編纂委員会1994「誉田御廟山古墳」『羽曳野市史』第３巻
羽曳野市教育委員会2001『羽曳野市内遺跡調査報告書―平成４年度―』
河内一浩2002「埴輪にみる鳥形・水鳥形埴輪を中心に・」『古墳の木製祭具』（栗東歴史民俗博物館）
小浜　成2006「応神陵古墳の年代観と被葬者像・出土水鳥形埴輪から考える・」『応神大王の時代』
小栗明彦2007「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考Ⅰ』（大阪大谷大学博物館）
鈴木裕明他2009「東京国立博物館所蔵笠形木製品の研究」『ＭＵＳＥＵＭ』№622

図　　版

図版一　塚穴古墳

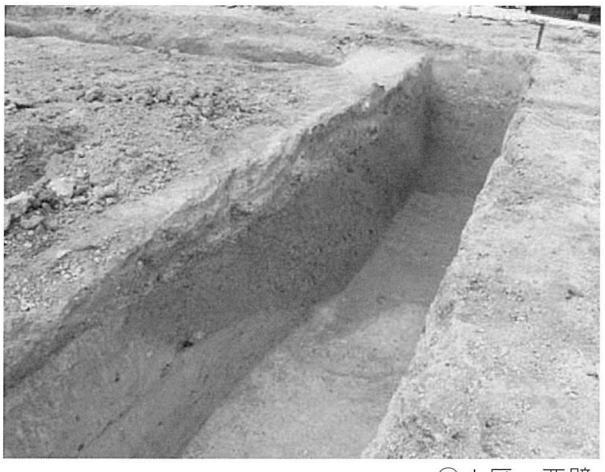
①ⅡB区　北から

④Ⅰ区　北から

②ⅡB区　西壁

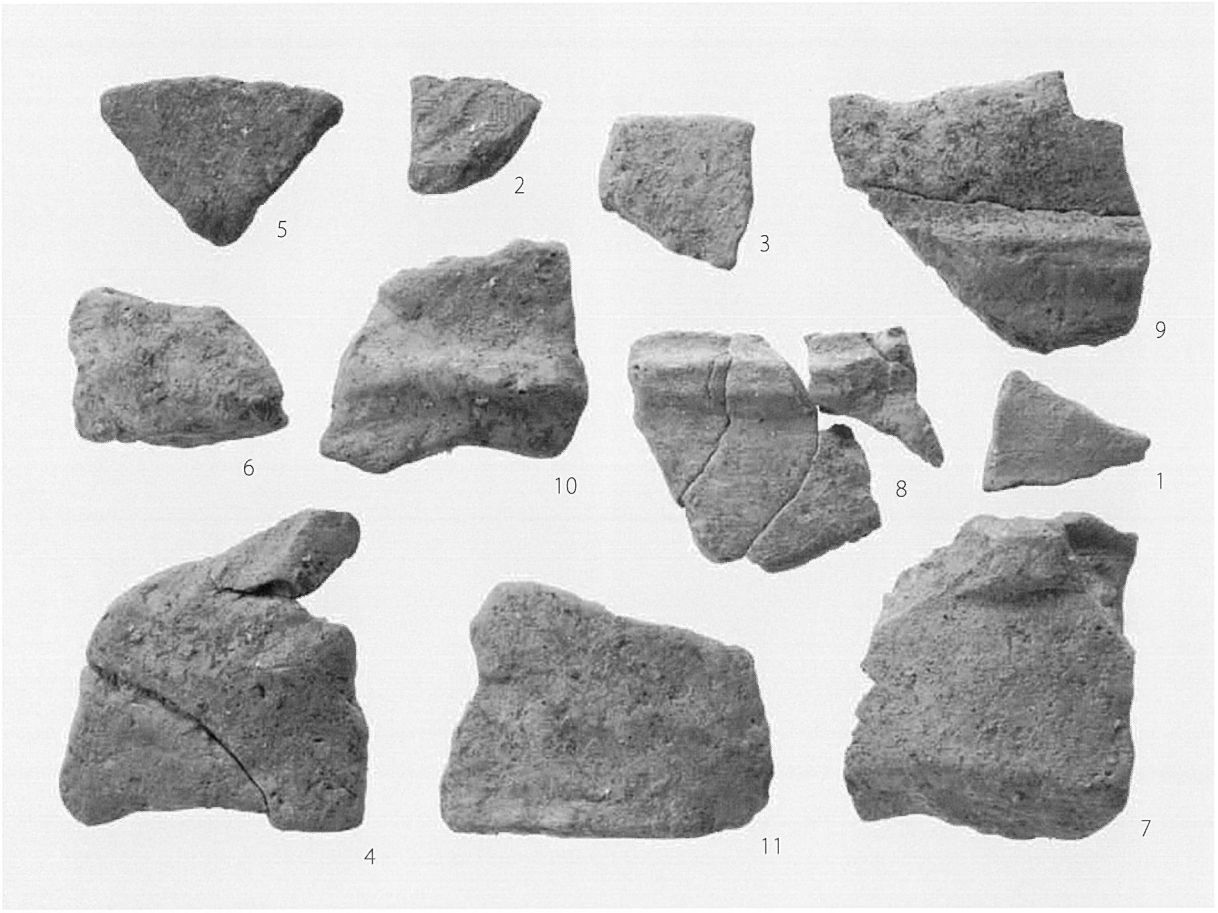
⑤Ⅰ区　南から

③ⅡA区　北壁

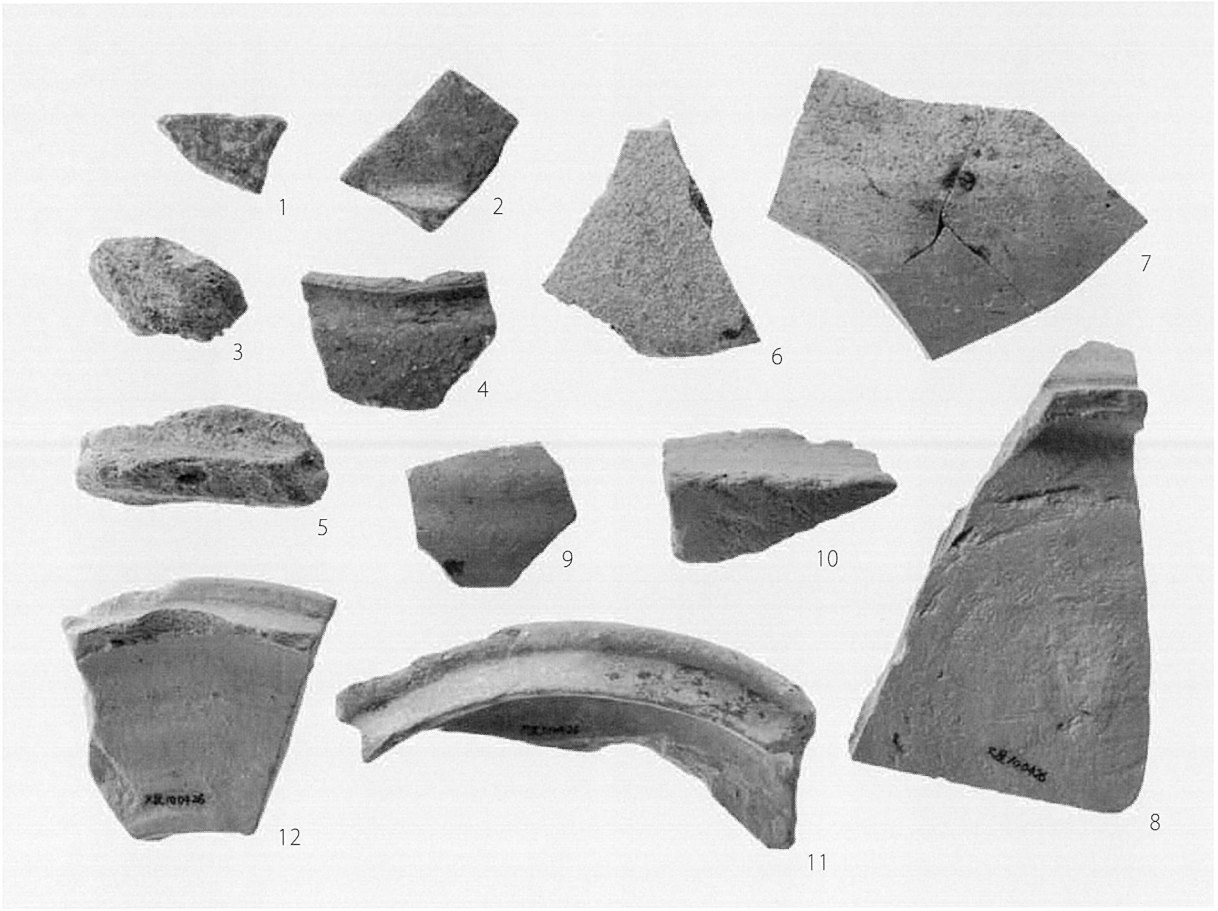


⑥Ⅰ区　西壁

図版二　誉田白鳥遺跡 出土遺物・尺度遺跡 出土遺物



誉田白鳥遺跡出土円筒埴輪



尺度遺跡出土土器

図版三　栄町遺跡　検出遺構

栄町遺跡Ⅰ区

栄町遺跡Ⅱ区

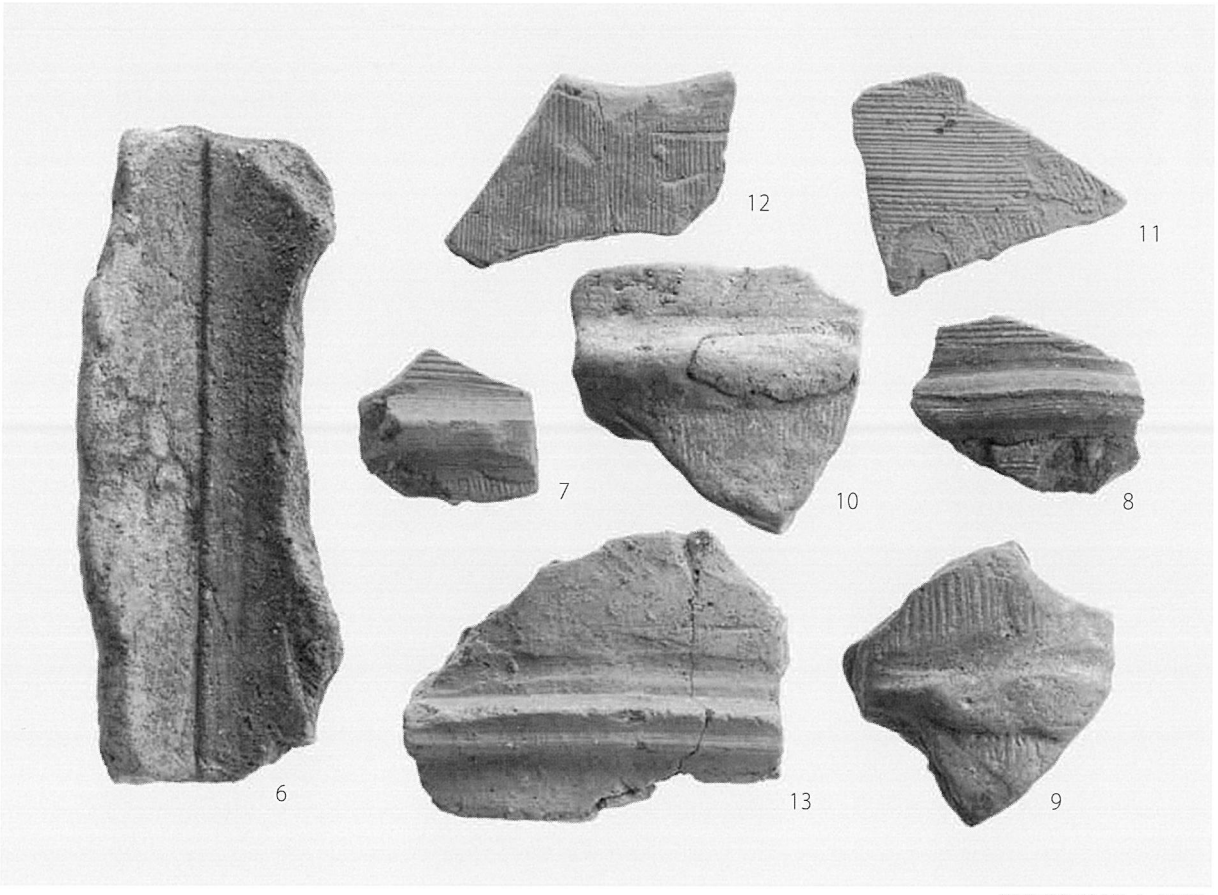
図版四　栄町遺跡出土遺物

1

2

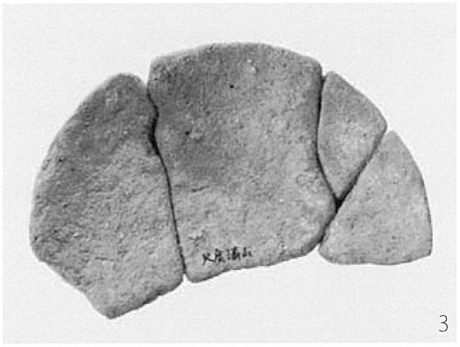
5

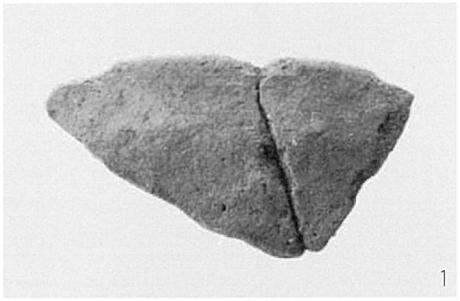
4

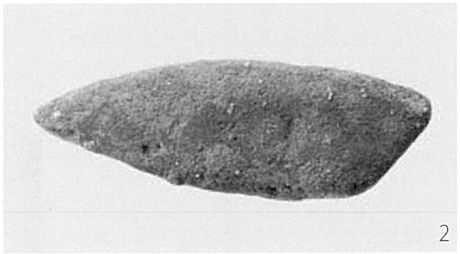


栄町遺跡出土埴輪

図版五　尺度満山散布地出土遺物







土師器

丸瓦・平瓦

図版六　郡戸東遺跡　遺構

調査区全景（北から）

調査区北側近景（南から）

図版七　郡戸東遺跡　出土遺物（一）

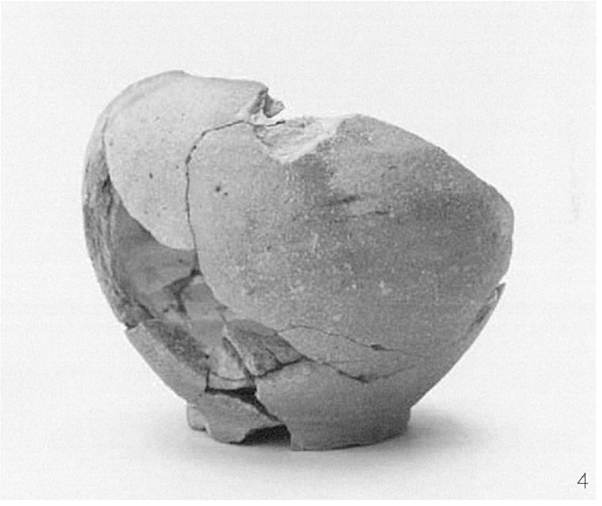
1

18

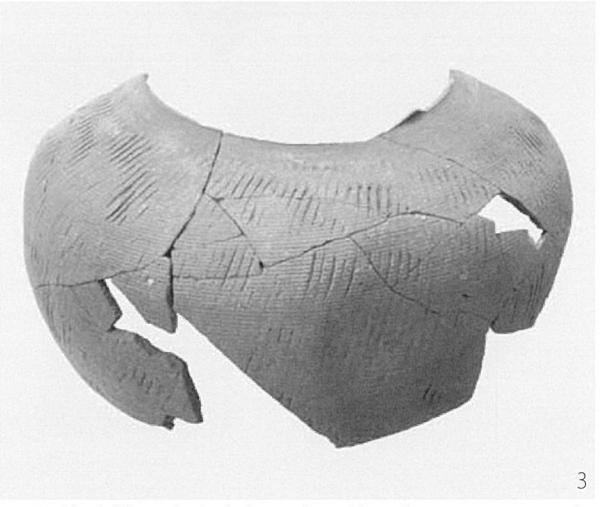
17

19

22


4

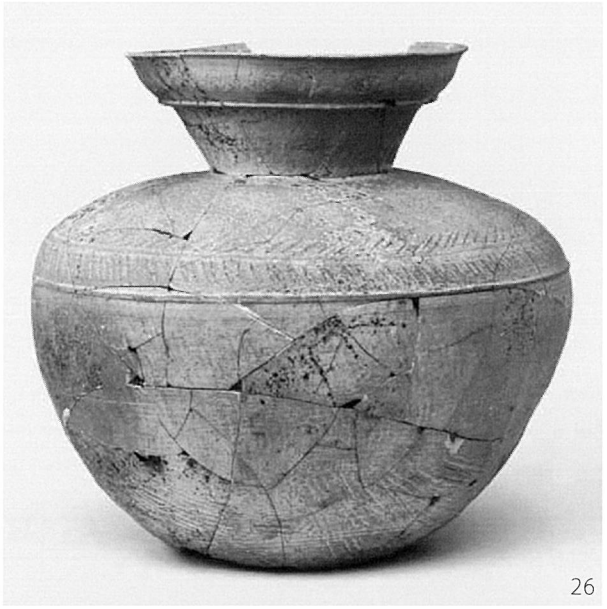
2

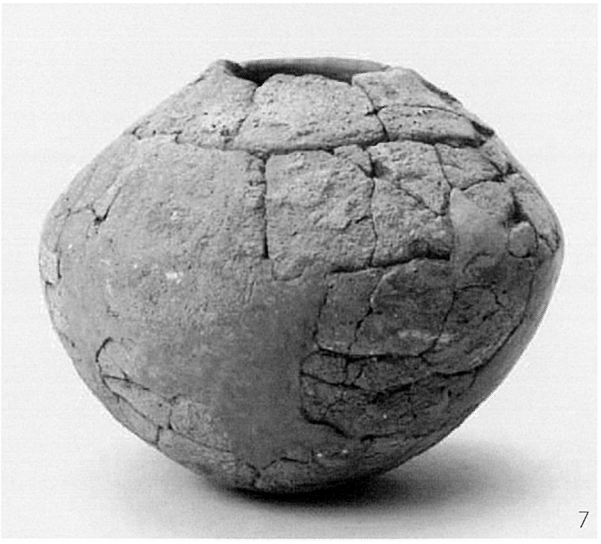

3

SD01（1・2），SK01（3），調査区北端遺構面直上（4），土器溜り（17・18・19・22）

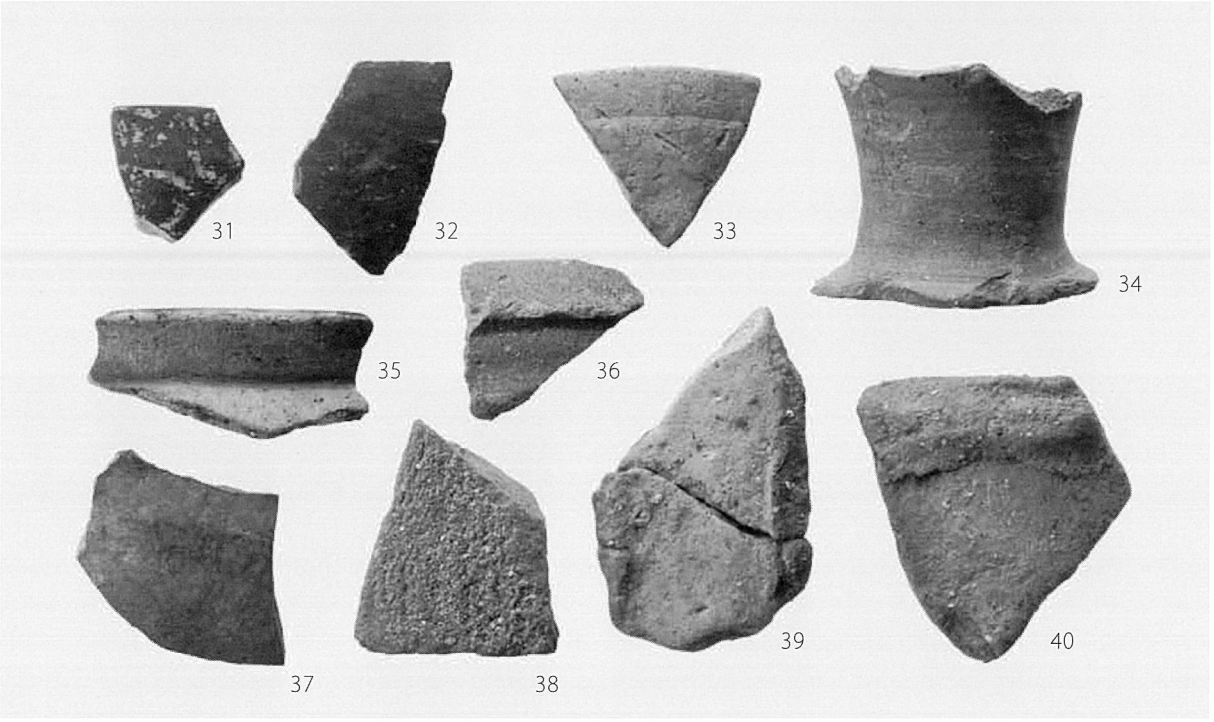
図版八　郡戸東遺跡 出土遺物（二）

25


26

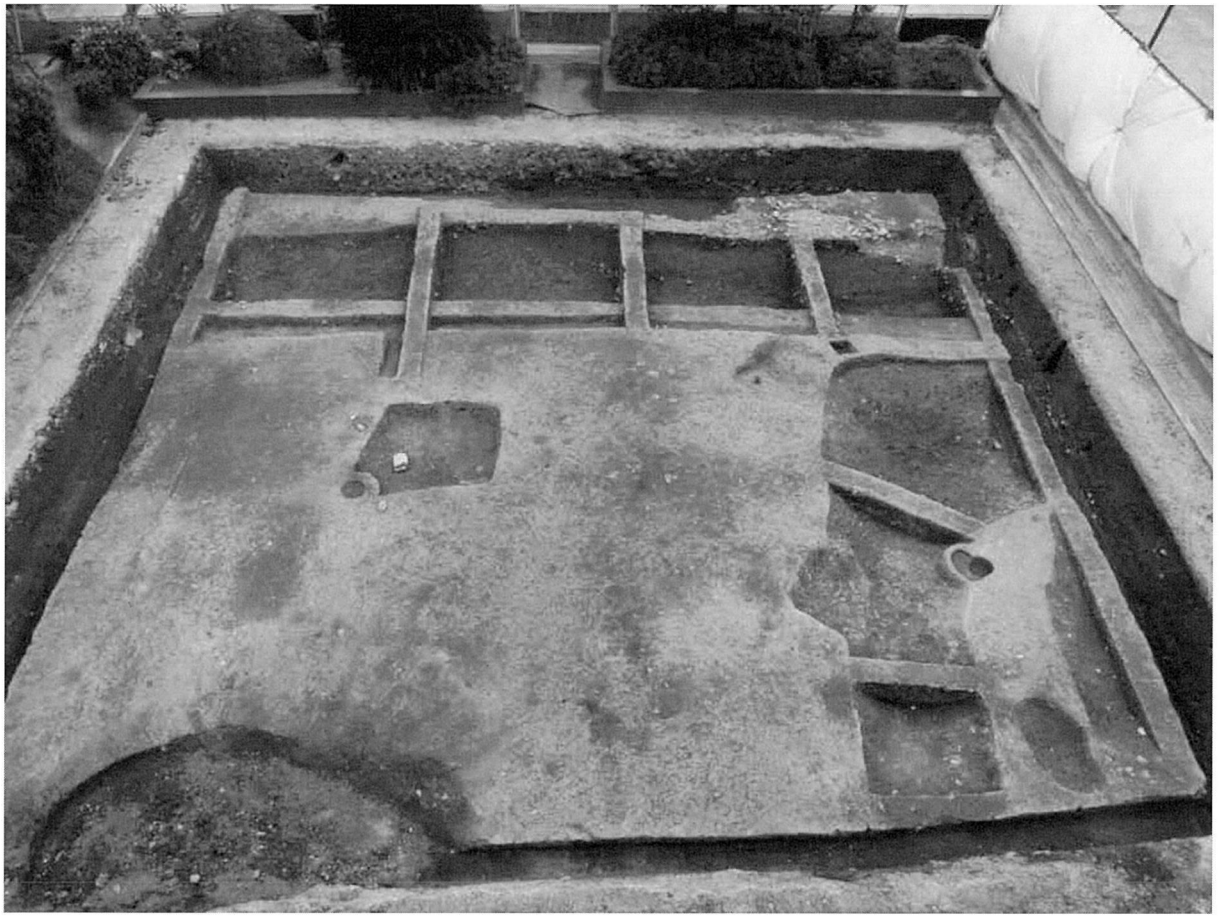

7

5



土器溜り（5・7・25・26），柱穴14（32），土坑？（31），包含層（33～40）

図版九　古市遺跡　上面遺構（一）



上面遺構全景（東から）

SD02全景（南から）

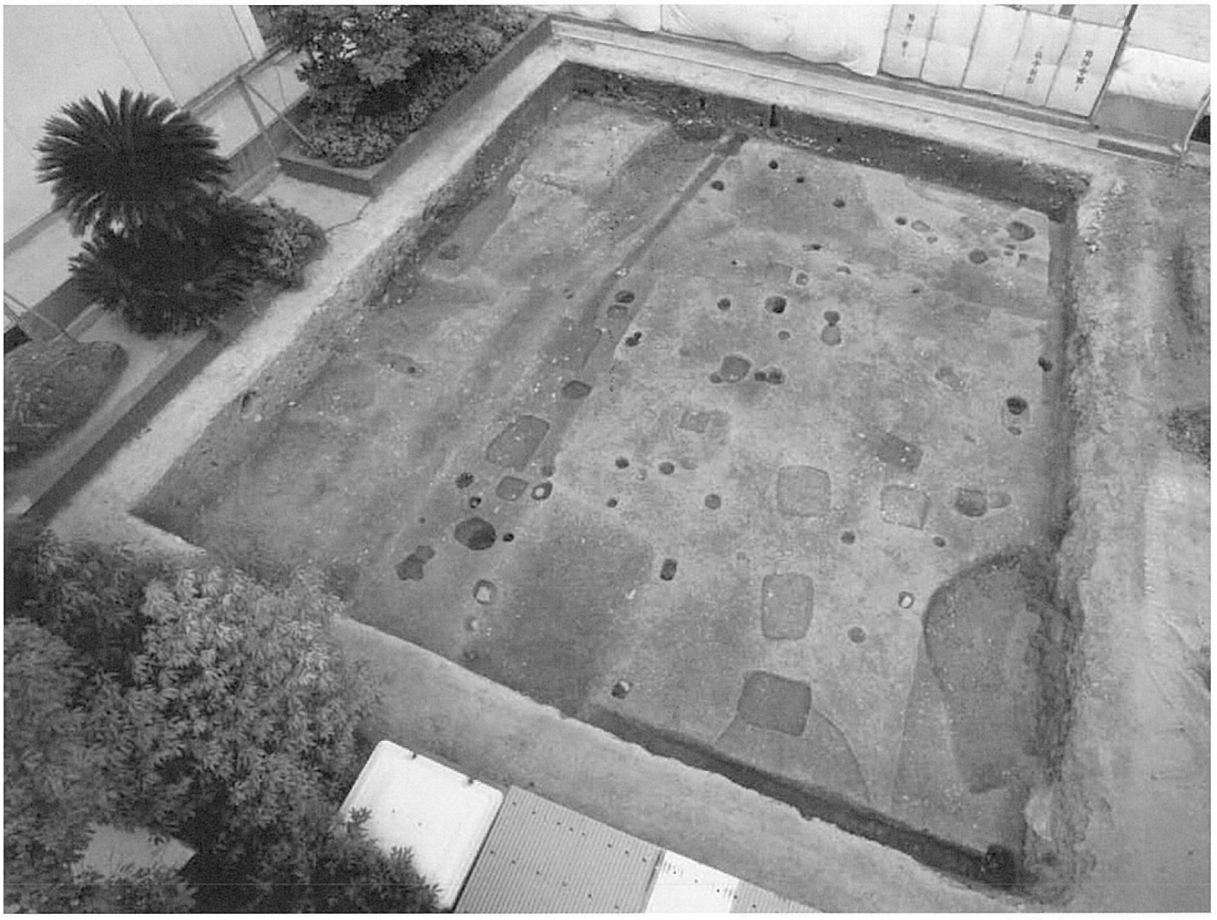
図版十　古市遺跡　上面遺構（二）

上面遺構北端近景（西から）

SD01 遺物出土状況

SD01 遺物出土状況

図版十一　古市遺跡 下面遺構（一）



下面遺構全景（南から）

下面遺構全景（東から）

図版十二　古市遺跡 下面遺構（二）

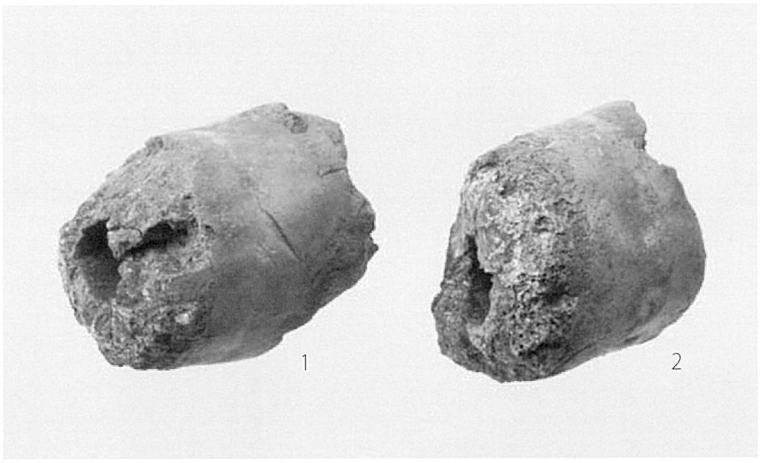
SD05 近景（南から）

SD05 子持勾玉出土状況

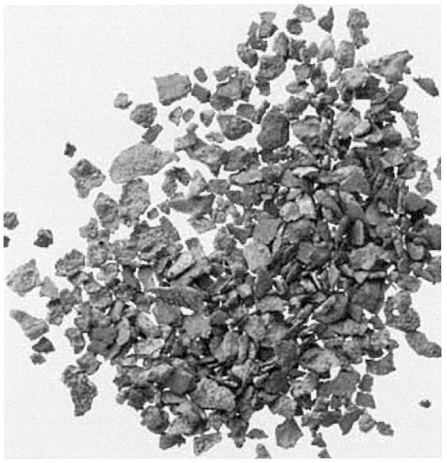
SD05 滑石製勾玉出土状況

SD05 馬の歯出土状況

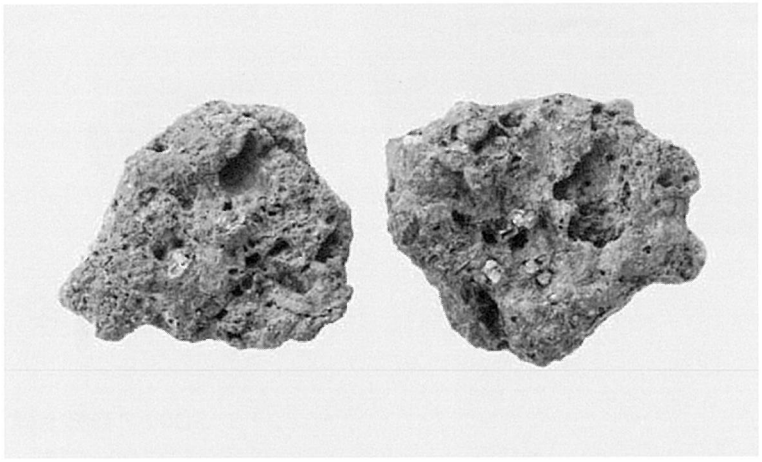
図版 十三　古市遺跡 出土遺物（一）



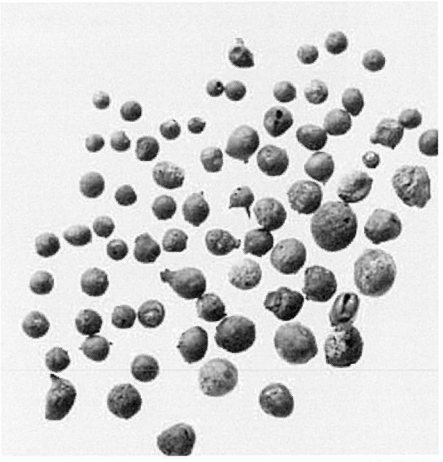
鞴の羽口



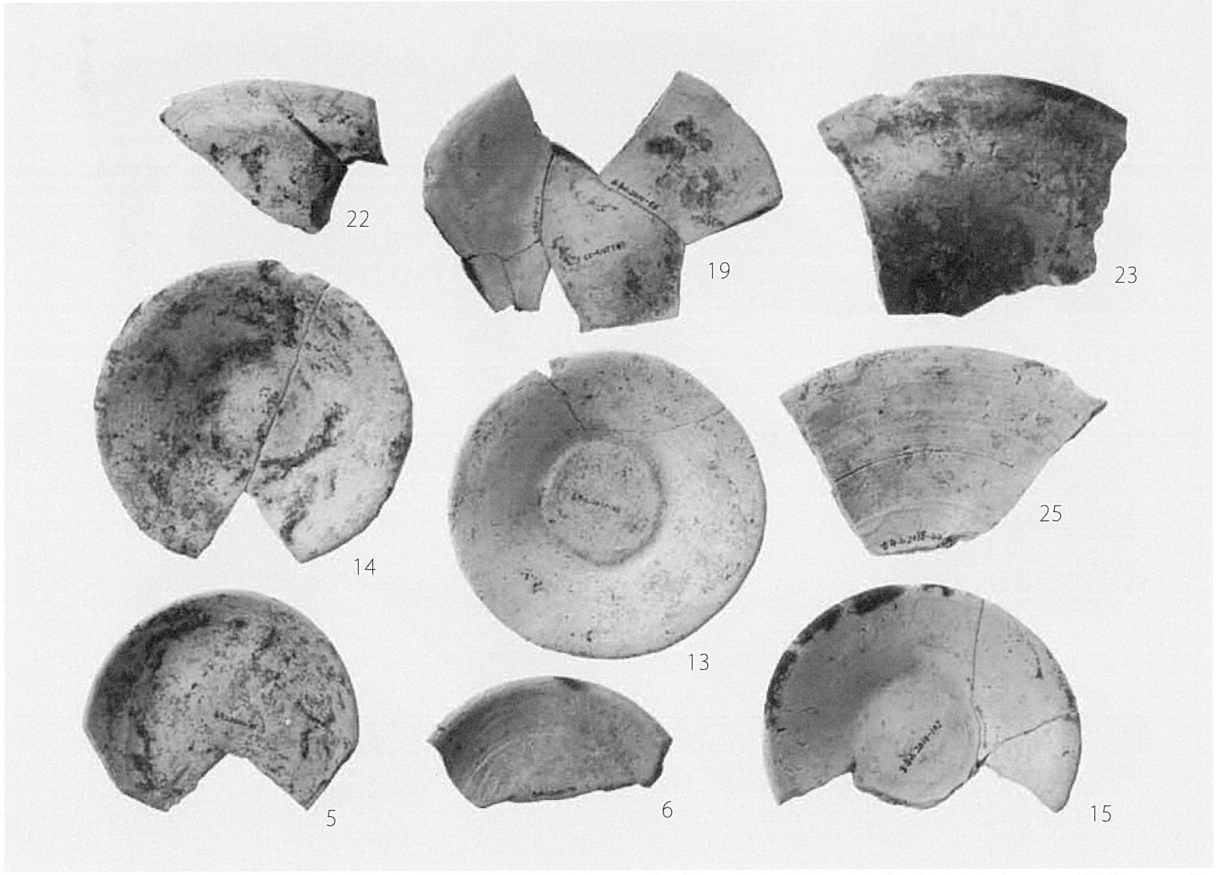
鍛造剥片



椀形滓

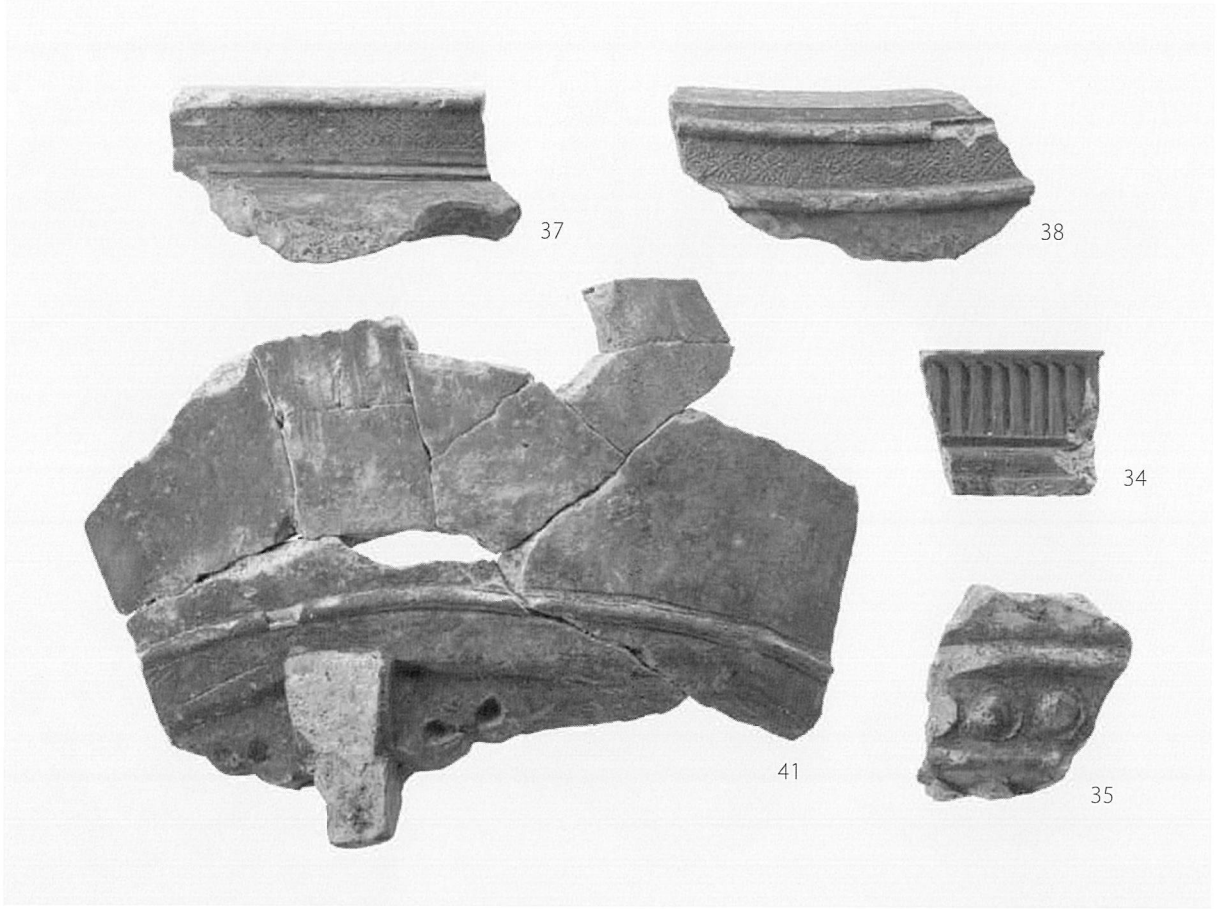


流動滓

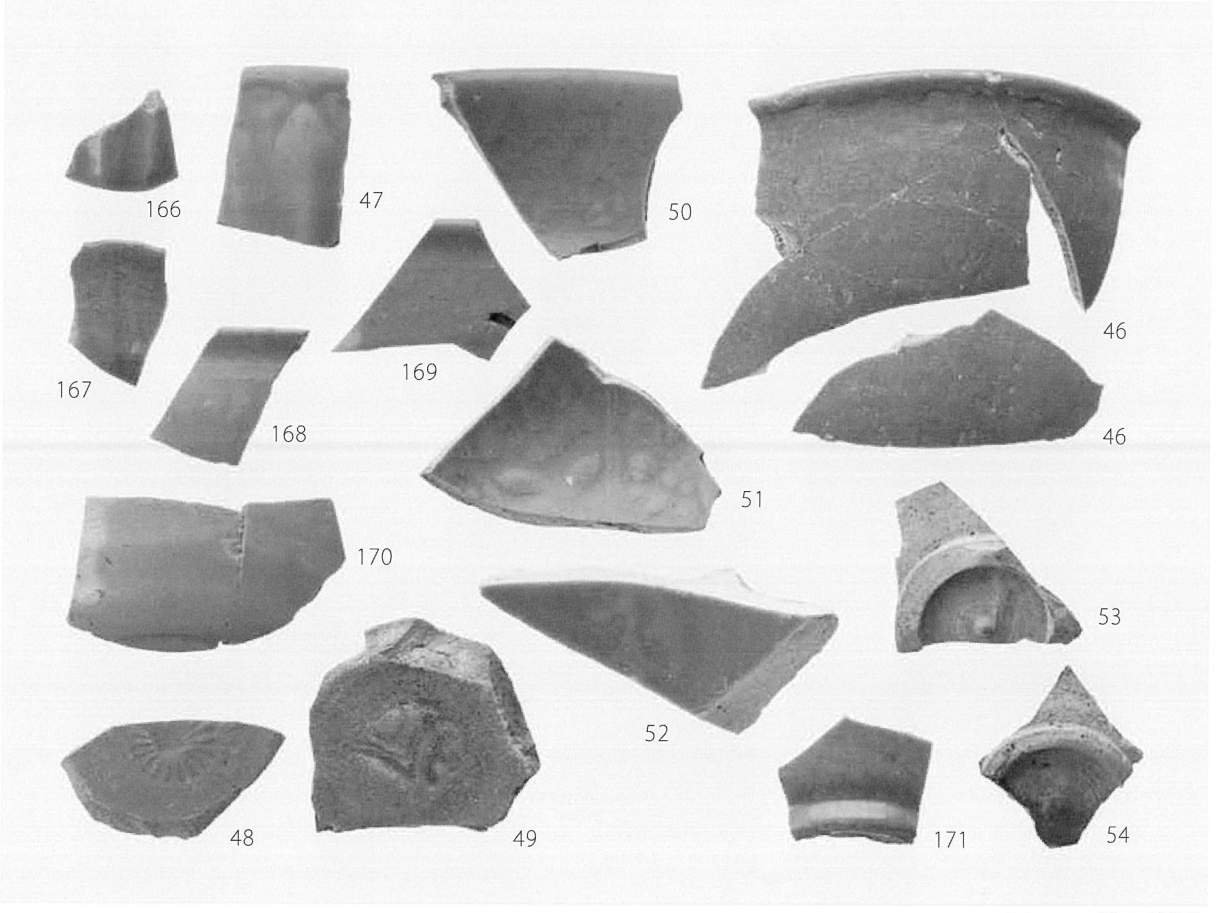


SD02 土師皿　Ⅰ類（5・6），Ⅱ類（13・14・15），Ⅲ類（19・22），Ⅳ類（23・25）

図版 十四　古市遺跡 出土遺物（二）



SD02　瓦質土器



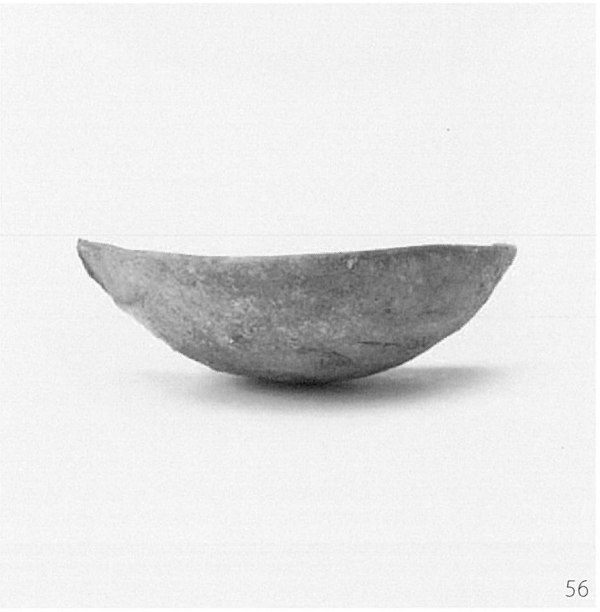
SD02　輸入磁器

図版 十五　古市遺跡 出土遺物（三）

61

63

55


56

152

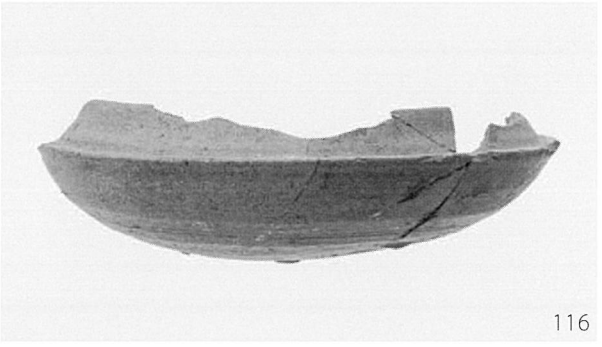
151

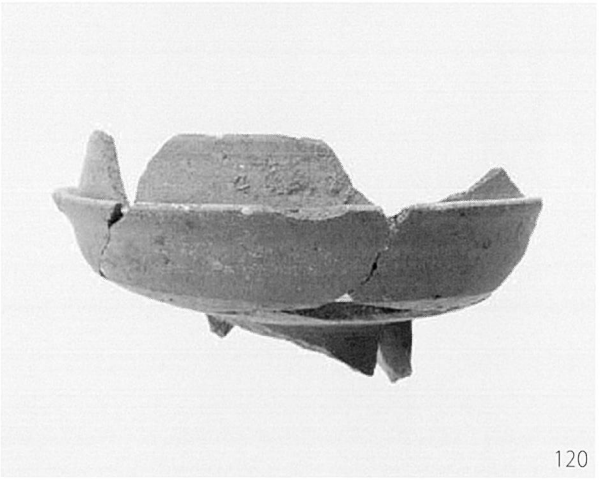
SD01 羽釜（61・63），　SD03 土師皿（55）瓦器椀（56）

図版 十六　古市遺跡 出土遺物（四）

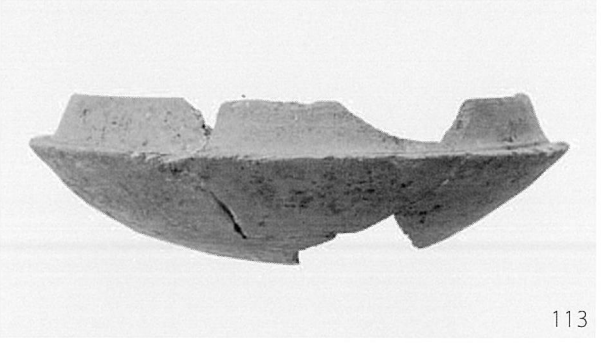
99

103


116


120

114


113

106

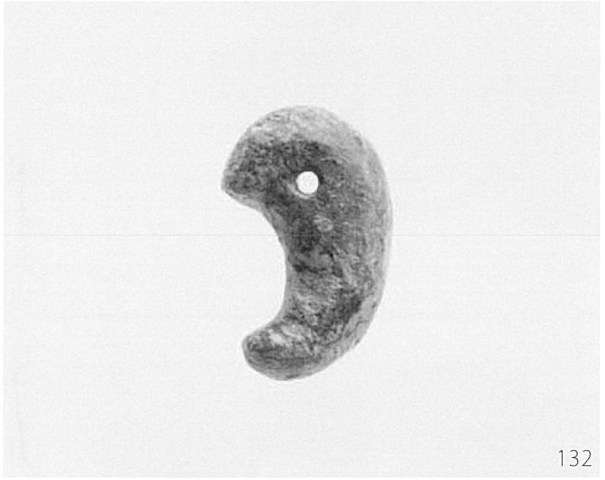
129

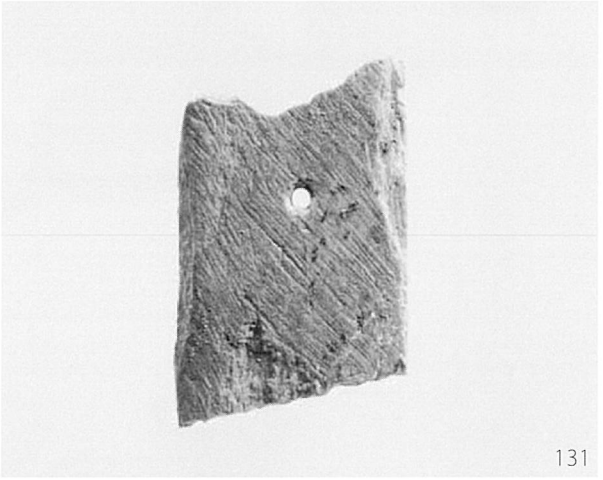
SD05　須恵器

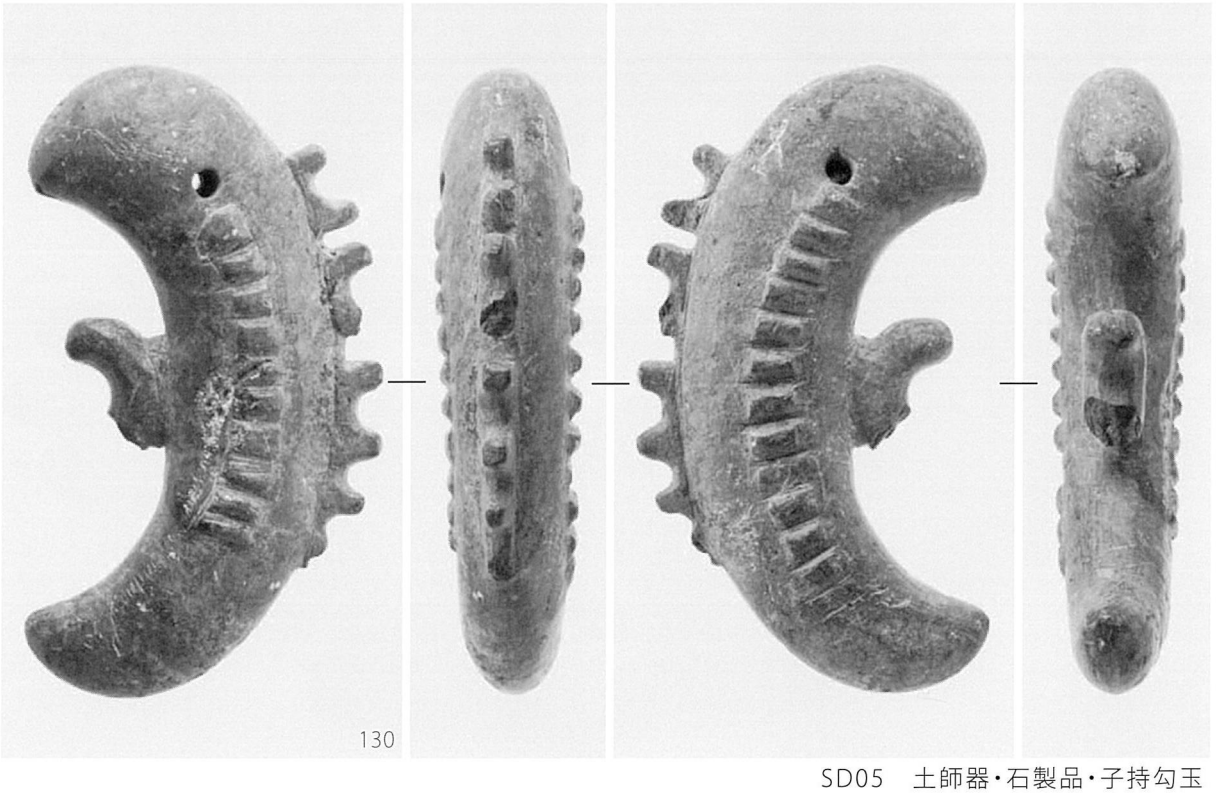
図版 十七　古市遺跡 出土遺物（五）

172

96


132


131


130

SD05　土師器・石製品・子持勾玉

図版 十八　古市遺跡・白鳥神社古墳　井戸３　出土遺物（一）

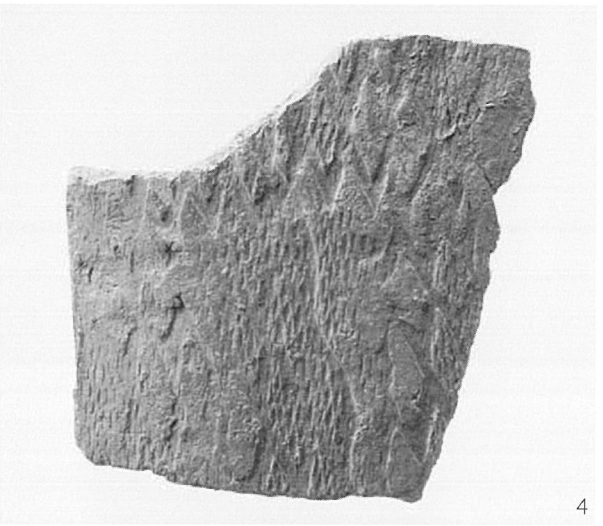
図版 十九　古市遺跡・白鳥神社古墳　井戸３　出土遺物（二）

図版二十　はびき山出土遺物（寄贈品）

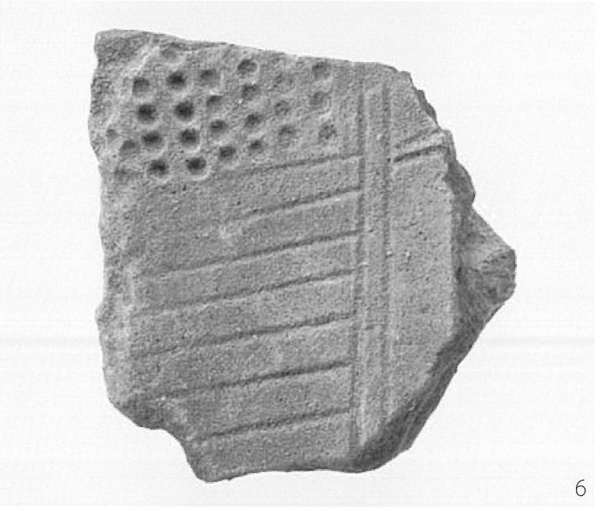
1

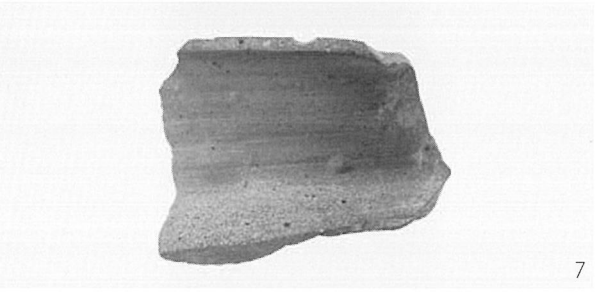
2

3


4

5


6


7

報　告　書　抄　録

ふりがな	はびきのしないいせきちょうさほうこくしょ－へいせいにじゅうにねんど－
書　名	羽曳野市内遺跡調査報告書－平成22年度－
副書名	
巻　次	
シリーズ名	羽曳野市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	72
編著者名	河内一浩
編集機関	羽曳野市教育委員会
所在地	〒583－8585　羽曳野市誉田４丁目１－１
発行年月日	西暦2013年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
塚穴古墳（つかあなこふん）	羽曳野市はびきの3丁目296-3	27222	16	34°32′54″	135°35′39″	2010.10.5 ～2010.10.18	50	古墳
誉田白鳥遺跡（こんだはくちょういせき）	羽曳野市白鳥3丁目241-1	27222	27	34°33′09″	135°36′35″	2010.4.30	6	集落跡
五十村古墳群（いぶらこふんぐん）	羽曳野市誉田1801	27222	78	33°33′00″	135°38′12″	2010.10.28	16	群集墳
尺度遺跡（しゃくどいせき）	羽曳野市尺度190	27222	60	34°31′39″	135°36′22″	2010.4.23 ～2010.4.27	15.8	集落跡
平下遺跡（ひらしたいせき）	羽曳野市はびきの5丁目428他	27222	126	34°33′02″	135°35′11″	2010.5.25 ～2010.5.28	50	集落跡
栄町遺跡（さかえまちいせき）	羽曳野市栄町691-1	27222	146	34°32′50″	135°36′33″	2010.12.7 ～2010.12.15	58	集落跡
郡戸東遺跡（こうずひがしいせき）	羽曳野市郡戸339-1	27222	176	34°33′01″	135°34′48″	2010.6.7 ～2010.6.9	86	集落跡
西浦十二遺跡（にしうらじゅうにいせき）	羽曳野市西浦2丁目1868他	27222	201	34°32′19″	135°36′28″	2010.7.29 ～2010.7.30	10	集落跡
尺度満山散布地（しゃくどみつやまさんぷち）	羽曳野市尺度字満山	27222	205	34°31″41″	135°35′39″	2011.3.30	——	散布地
古市遺跡（ふるいちいせき）	羽曳野市古市1丁目2-5	27222	145	34°33′02″	135°36′48″	2010.4.19 ～2010.6.23	156	集落跡

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
塚穴古墳	宗教施設	古墳時代	なし	須恵器
誉田白鳥遺跡	共同住宅	古墳時代	溝	円筒埴輪
五十村古墳群	電話通信	古墳時代	なし	なし
尺度遺跡	店舗	古墳時代	溝・土坑	土師器・須恵器・瓦器
平下遺跡	宅地造成	古墳時代	なし	須恵器
栄町遺跡	店舗	古墳時代	溝・土坑	土師器・須恵器・埴輪
郡戸東遺跡	宅地造成	奈良時代	溝・柱穴	土師器・須恵器・黒色土器・埴輪
西浦十二遺跡	店舗	弥生時代～鎌倉時代	溝・土坑	弥生土器・須恵器・土師皿
尺度満山散布地	開墾	奈良時代	なし	土師器・瓦
古市遺跡	学校	古墳時代～室町時代	溝・土坑・柱穴"	土師器・須恵器・黒色土器・埴輪・瓦・子持勾玉

要　約	

羽曳野市内遺跡調査報告書
－平成22年度－

発行　羽曳野市教育委員会
生涯学習室　社会教育課
歴史文化推進室
羽曳野市誉田１丁目１－１
072-958-1111
2013年３月29日発行
印刷　敷島印刷株式会社